

タルコット・パーソンズのシステム論における  
相互交換メディアの特性と機能  
——シンボリック・メディアと後期論考に注目して——

江川 直子

タルコット・パーソンズのシステム論における相互交換メディアの特性と機能  
——シンボリック・メディアと後期論考に注目して——

目 次		頁
序章	論文の目的と構成	1
第1節	論文の目的	
第2節	パーソンズの略歴と業績の足跡	
(1)	略歴	
(2)	業績の足跡	
第3節	パーソンズ理論に対する捉え方の動向	
第4節	交換メディア、特にシンボリック・メディアに関する先行研究	
第5節	論文の構成	
第1部 社会システムにおけるシンボリック・メディア		
第1章	シンボリック・メディアの性質—バウムのメディア論への発展	17
第1節	はじめに	
第2節	パーソンズのシンボリック・メディア論	
(1)	シンボリック・メディアの性質	
(2)	メディアのインフレーション、デフレーション	
第3節	バウムのメディア論	
(1)	メディアの特徴	
(2)	メディアのコンフレーション	
(3)	「理想的な社会」について	
第4節	結び—残された課題	
第2章	貨幣メディア・権力メディアのマクロ的分析	32
第1節	はじめに	
第2節	貨幣メディア、権力メディアの概念	
第3節	グールドによるシステムのインプット	
(1)	生産物インプット—経済の場合	
(2)	要素インプット—経済の場合	
(3)	生産物インプット—政治の場合	
(4)	要素インプット—政治の場合	

- 第4節 シンボリック・メディアのインフレ・ギャップ、デフレ・ギャップ
- 第5節 貨幣メディアのシンボルとしての特徴、相互交換過程
  - (1) シンボルとしての貨幣
  - (2) 貨幣メディアのもつ自由
  - (3) 財とサービス
  - (4) 貨幣メディアの相互交換過程
- 第6節 結び

### 第3章 権力メディアの特徴と問題点

55

- 第1節 はじめに
- 第2節 権力メディアの特徴
  - (1) 権力の概念
  - (2) 権力は強制か、合意かの問題
  - (3) 権力のゼロサム問題
- 第3節 権力メディアの相互交換過程、権力メディアの役割
  - (1) シンボリック・メディアの導かれる過程
  - (2) 権力メディアの相互交換過程
  - (3) 権力メディアの役割
- 第4節 権力メディアの問題点と検討
  - (1) ゼロサム問題
  - (2) 信頼
  - (3) 循環
  - (4) 委託の一般化
- 第5節 結び

### 第4章 影響力メディアの概念とマクロ的分析

74

- 第1節 はじめに
- 第2節 影響力メディアの概念
  - (1) 影響力の概念
  - (2) 影響力の型
- 第3節 影響力メディアのマクロ的分析
  - (1) 影響力メディアのインフレーション、デフレーション
  - (2) 影響力メディアのインフレ・ギャップ、デフレ・ギャップ
- 第4節 影響力メディアの意味、相互交換過程、機能
  - (1) 影響力メディアの意味
  - (2) 影響力メディアの相互交換過程

- (3) 影響力メディアの機能
- 第5節 結び

第5章 価値コミットメント・メディアの性質と動態分析	94
第1節 はじめに	
第2節 四機能図式と価値コミットメント・メディア	
第3節 価値コミットメント・メディアの性質	
第4節 価値コミットメント・メディアの意味、相互交換過程、機能	
(1) 価値コミットメント・メディアの意味	
(2) 価値コミットメント・メディアの相互交換過程	
(3) 価値コミットメント・メディアの機能	
第5節 価値コミットメント・メディアのインフレーション、デフレーション	
第6節 結び	

## 第2部 一般行為システム、システムとしての人間的条件における相互交換メディア

第6章 一般行為システムにおけるシンボリック・メディア	107
第1節 はじめに	
第2節 一般行為システムの構造	
第3節 一般行為システムにおけるメディアの導出	
第4節 一般行為システムにおけるメディアの性質	
第5節 知性メディアの特徴、感情メディアの特徴	
第6節 結び	
第7章 パーソンズによるパレート理論の把握	129
第1節 はじめに	
第2節 パレート社会学の主な諸概念	
(1) 社会システム	
(2) 社会均衡	
(3) 論理—実証的方法	
(4) 論理的行為と非論理的行為	
(5) 残基と派生	
(6) 社会的異質性とエリートの周流	
(7) 社会的効用	
第3節 パーソンズによるパレート理論の把握	
(1) 方法論	

(2) 儀礼的行為	
(3) 残基と派生について	
(4) 非論理的行為の二つの構造的側面について	
第5節 結び	
第8章 システムとしての人間的条件のメディア	148
第1節 はじめに	
第2節 システムとしての人間的条件でメディアが生み出された背景	
第3節 システムとしての人間的条件におけるメディアの相互交換過程	
第4節 システムとしての人間的条件におけるメディアの性質	
(1) 各メディアの性質	
(2) シンボリックな意味メディアのインフレ、デフレ	
第5節 結び	
第9章 人間的条件のパラダイムについての検討—その 1—	162
第1節 はじめに	
第2節 人間的条件のパラダイムへの導入	
第3節 人間的条件のパラダイムの概略	
第4節 結び	
第10章 人間的条件のパラダイムについての検討—その 2—	174
第1節 はじめに	
第2節 メタ理論の枠組み[I]	
(1) 行為システムと他の 3 つのシステムとの関連	
(2) 言語についての考察	
(3) 認識的志向様式とフロイト	
第3節 メタ理論の枠組み[II]	
(1) テリック・システムに関する考察	
(2) 物理的—化学的システム、有機体システム、テリック・システムの 3 つの相互関係	
第4節 結び	
第11章 人間的条件のパラダイムについての検討—その 3—	191
第1節 はじめに	
第2節 ウィーナーとヘンダーソンの学説の物理的—化学的システムへの適用	

第3節	フロイトとパーソナリティ・システム	
第4節	ウィナー・カテゴリーの行為レベルへの適用	
第5節	結び	
終章	パーソンズ理論におけるメディアの重要性と問題点	201
第1節	本論文で明らかにした諸点	
第2節	相互交換メディア、特にシンボリック・メディアの重要性	
第3節	シンボリック・メディアの問題点	
第4節	従来のパーソンズ研究に対する本論文の貢献	
第5節	残された課題	
引用・参考文献		225

\* 本論文各章の初出などは、次の通りである。

序章：未公刊

第1部

第1章：[江川 1985] を修正した。

第2章：[江川 1987] を修正した。

第3章：[江川 1988a] を修正した。

第4章：[江川 1988b] を修正した。

第5章：[江川 1989a] を修正した。

第2部

第6章：[江川 1989b] を修正した。

第7章：[江川 2004a] を修正した。

第8章：[江川 1990] を修正した。

第9章：未公刊

第10章：未公刊

第11章：未公刊

終章：未公刊

## 序章 論文の目的と構成

### 第1節 論文の目的

タルコット・パーソンズが 1979 年に亡くなって、2013 年の今年で 34 年になる。その間、時代は変わりパーソンズ理論はもはや古典となりつつある。パーソンズについて行為理論家、社会システム論者、構造機能主義者、相互作用論者と呼ばれる一方、解釈の妥当性、システムの整合性、一貫性が問われる等、さまざまな議論をひき起こしてきた。パーソンズは自分のあみ出した AGIL 図式に基づいて理論を発展させる一方、専門職、高等教育、人種、性、親族、医療、宗教、経済、法律、政治、社会心理といった経験的（実証的）な領域の問題も扱っていった。アメリカの価値システムについても分析し、近代の行く末を見つめている。

しかし、パーソンズの理論は初期、中期までは比較的広く解明されているが、後期、晩期になると未解明の部分も多く、特に人間的条件、一般化されたシンボリック・メディアの部分は、いわゆるブラック・ボックスのままになっている。本論文は、シンボリック・メディアと後期論考に着目して、これらの解明に光をあてたものである。

筆者がシンボリック・メディアの研究を行うようになったのは、修士論文でパーソンズの『アメリカの大学』（1973）を読み、強い関心をいただいたことによる。そこでは知性メディアと大学の組織、大学の成員との関係、他に一般行為システムの遂行能力メディア、感情メディア、状況規定メディアなどについて記されていた。このときの研究成果を、筆者は修士論文「大学の危機の性質—パーソンズ理論を中心に—」としてまとめた。

大学院の後期課程から、シンボリック・メディアについての本格的研究を開始した。まず社会システムにおけるシンボリック・メディアの検討から始まり、一般行為システム、システムとしての人間的条件へと進んでいった。当時は新明正道監訳の『政治と社会構造』（上、下、1973、1974 年）が出ているだけで、それを読んでもなかなか意味がわからず、パーソンズの本に当たって内容を捉えようとした。それらの成果を、1985 年から 1990 年にかけて論文として発表した。

この度、博士学位請求論文を提出するにあたり、シンボリック・メディアの重要性をより明らかにすべく、シンボリック・メディアの性質、役割、重要性について再度学び直した。その際に、1992 年に出版された田野崎昭夫監訳『社会体系と行為理論の展開』を読み直し、特に社会システムのシンボリック・メディアを中心に、その重要性を再検討した。

本論文では、社会システムのシンボリック・メディア（貨幣、権力、影響力、価値コミットメント）、一般行為システムのシンボリック・メディア（知性、遂行能力、感情、状況規定）の性質、それらのメディア間の相互交換過程、役割、重要性を明らかにすることを目的としている。また、システムとしての人間的条件のメディア（経験的秩序、健康、シンボリックな意味、超越的秩序）の性質や相互交換過程を検討することを目的としている。さらに、

人間的条件のパラダイムにおける諸交換メディアについてはいまだ十分には論究されていないので、それらを検討し、理解を深めるとともに他の(シンボリック)メディアとの相違や関係について検討することを目的としている。

本論文におけるもう一つの特徴は、上述のように晩期のパーソンズ理論を射程に取り込んで解明しようとする点である。今までパーソンズ理論の研究については、初期と中期までの研究がほとんどで、後期の研究も多いとは言えず、晩期についてはほとんど未解明のままである。近年、人間的条件に関する論文が発表されているが、一般化された交換メディアおよびシンボリック・メディアについての論文は少ない。本論文は、パーソンズ理論の晩期に展開されている諸メディアについても、より深く考察しようとするものである。

## 第2節 パーソンズの略歴、業績の足跡

### (1) 略歴

タルコット・パーソンズは1902年12月13日にアメリカ合衆国の西部コロラド州のコロラドスプリングス市で生まれた。父エドワードは英語の学者でミルトン研究者であり、社会福音派プロテスタントの牧師でもあった。母メアリーは婦人参政権論者であり、タルコットは5人きょうだいの5番目であった。彼はニューヨーク市にあるホレスマン高校を卒業後、1920年にアマースト大学に入学している。アマースト大学では生物学や哲学を勉強していたが、次第に経済学と社会学に彼の関心は移っていった。

パーソンズは1924年に経済学部を卒業後、一年間ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)に留学した。LSEではホブハウス、モーリスギンスバーク、マリノフスキーの教えを受けるが、とくに人類学者マリノフスキーの機能主義の考え方がパーソンズに大きな影響を与えたといわれている。続いて1925年に、パーソンズはドイツのハイデルベルグ大学で特別奨学金給費生として一年間学んでいる。ハイデルベルグ大学には、マックス・ウェーバーの4歳ちがいの弟であるアルフレッド・ウェーバーが教授としており、他にヤスパース、マンハイムなどがいて、パーソンズは彼らに学んでいる。マックス・ウェーバーは1920年に逝去しているが、パーソンズは、この地でウェーバーの著作物に出会い強く影響を受けている。ドイツにおいてパーソンズの研究関心は、経済学と社会学の関係にますます強まっていった。イギリス、ドイツと二年間の留学を終え、パーソンズは1926年に母校アマースト大学の経済学講師となり、翌1927年にハーバード大学の経済学講師になっている。

1927年に彼は「最近のドイツの文献における資本主義—ゾンバルドとウェーバー」の論文でハイデルベルグ大学より博士の学位を授与されている。そして1930年にパーソンズは、ウェーバーの論文「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」を英訳している。また1931年に彼はハーバード大学社会学科の講師になり、1944年に教授になっている。彼



は1927年から1972年まで45年間ハーバード大学で研究と教育にあたった。その間1949年には、アメリカ社会学会長に就いている。退職後も研究にいそしみ、晩年には行為を人間的条件の立場にたって考察している。1978年10月末から12月まで、関西学院大学に客員教授として招かれ、大学院で集中講義を行なっている。

1979年5月に、パーソンズは学位取得50周年記念でハイデルベルク大学より招待されて式典に出席し講演を行なった。その後、彼はウェーバーが1917年と1919年に招聘されて講演を行なったミュンヘン大学に招かれて向かった。5月8日ミュンヘン大学で講演の後、パーソンズは夜半に心臓発作のため急逝した。

## (2) 業績の足跡

パーソンズ理論の時代区分は研究者によっていろいろに行なわれているが、本稿では次のように区分する<sup>2)</sup>。

### ①初期(1928~1937)：主意主義的行為理論の発見・提示期。

パーソンズの研究の出発点は、博士論文である「最近のドイツの文献における資本主義—ゾンバルドとウェーバー」に始まるが、その後「マーシャルにおける欲求と活動」(1931)「社会学理論における究極的価値の位置」(1935)「パレートの中心的な分析図式」(1936)などを経て、主著の一つである『社会的行為の構造』(1937)を出版している。この著書の中で、パーソンズはマーシャル、パレート、デュルケム、ウェーバーの学説研究を通して主意主義的行為理論(voluntaristic theory of action)を提示している。

### ②中期(1938~1953)：パターン変数、AGIL図式の創出期。

この時期にパーソンズは「社会学における体系的理論の現状と将来」(1945)を記し、『行為の一般理論をめざして』(パーソンズ、シルズ 1951)のなかで、パターン変数を初めて提示している。『社会システム』(1951)においてもパターン変数を示し、行為というミクロ的なことの上に、システム概念を取り入れて「社会システム」というマクロ的な概念を創りだした。また『行為理論の作業論集』(パーソンズ、ベイルズ、シルズ、1953)のなかで4機能パラダイム、いわゆるAGIL図式を創出している。

### ③後期(1955~1967)：AGIL図式の確立、応用期。

この時期には『家族、社会化、相互行為過程』(パーソンズ、ベイルズ、1955)、『経済と社会』(パーソンズ、スメルサー、1956)が著されている。さらに『近代社会の構造と過程』(1960)、『社会構造とパーソナリティ』(1964)、『諸社会—進化的および比較的観点』(1966)、『社会学理論と近代社会』(1967)などが出版されている。

#### ④晩期(1969~1978)ー社会進化論、シンボリック・メディア論、人間的条件

この時期には『政治と社会構造』(1969)、『近代諸社会のシステム』(1971)、『アメリカの大学』(パーソンズ、プラット、1973)、『社会システムと行為理論の進化』(1977)、『行為理論と人間的条件』(1978)などが刊行されている。

パーソンズは生物学、経済学、生理学、心理学、精神分析学、物理学、化学、哲学、数学等、あらゆる分野から知識を吸収して独自の理論を創り、その理論は晩期になるほど哲学的になっていく。その姿勢は、パーソンズがアマーフト大学に入った当初に生物学や哲学を主に学んでいたことと関係しており、パーソンズの研究生活の生涯にわたって通底している。

### 第3節 パーソンズ理論に対する捉え方の動向

パーソンズは『社会的行為の構造』(1937)を発表して以降、1960年代まで構造機能分析を標榜した人として、世界中にその影響力は大きかった。このような時に、パーソンズ理論に対する痛烈な批判を展開した人に、チャールズ・ライト・ミルズ(Charles Wright Mills)がいる。ミルズは『社会学的想像力』(1959)を著し、そのなかの第2章でパーソンズの『社会システム』(1951)を例にとりパーソンズ社会学に対する激しい批判を行なった。ミルズはパーソンズの理論を誇大理論(*grand theory*)と呼び、「誇大理論は単に混乱した冗語にすぎないのか、それともやはり何ものかを含んでいるのか」と問いかけて、「たしかに、深く埋もれてはいるが何ものかは存在する。何かが語られていることは確かだ。」と述べている(Mills 1959, 鈴木訳[初版1965]1995:36)。そして『社会システム』のなかから文章を取り出してミルズ流に解釈し訳したように書き直して、その訳文について考察している。

ミルズは『社会システム』におけるパーソンズは、かれが構成した社会秩序の一つのモデルが普遍的に妥当するものだという観念にとらわれており、事実上、概念の物神化におちいっていたために、社会科学の実質的な作業に手をつけることができなかった。(同前:63)と見ている。そして『社会システム』について、約50%が言葉の羅列、40%は誰でも知っている教養課程の社会学である。残る10%は「あいまいながらもイデオロギー的に利用される可能性をもつ。」(同前:66)として、パーソンズ理論に非常に厳しい評価を行なっている。

ミルズがパーソンズの中期の書物『社会システム』を取りあげて『社会学的想像力』を書いたのは、1959年である。ミルズのいうパーソンズ理論に存在する深く埋もれている何ものかというのは、パーソンズが晩期に繰り広げていく人間的条件や生命システムの概念につながっているものと筆者は考えている。

次にパーソンズ理論に対して強烈な批判を行なった人に、アルヴィン・グールドナー(Alvin W. Gouldner)がいる。グールドナーは、ミルズの系譜をくみ社会学のラディカルな

変革と再生をめざして『迫りくる西洋社会学の危機』(1970)を著している。グールドナーは、そのなかで「パーソンズに着目するのは、それがもつ強い影響力のためだけではなくて、パーソンズ理論の理論としての内在的な重要性があったればこそである。というのは、今日の講談社会学者によって行なわれた仕事のうちで、パーソンズの仕事だけが、どんな重要な理論的問題点にも関連性をもっているからである。」(Gouldner1970, 矢沢・矢沢訳 1975:5)と記し、パーソンズの重要性を認めてはいる。この点について、パーソンズの晩期に展開される人間的条件、生命システムにつながる考え方をグールドナーは嗅ぎとっていたと感ぜられる。しかし、それとパーソンズが正しいということとは、まったく別の事柄であるとして彼はパーソンズに対して批判を展開している。そしてグールドナーは、「パーソンズの理論は時代に合わなくなってしまった」(同前:218)と述べている。

彼はⅡ部「タルコット・パーソンズの世界」において、初期のパーソンズ、世界の全体化/体系分析家としてのパーソンズ、パーソンズの道徳学/宗教、富と権力について考察している。グールドナーにとって社会学とは日常的な実践活動であり、彼は抽象性の高いパーソンズ理論を厳しく批判している。『迫りくる西洋社会学の危機』の本が出版されたのは1970年であり、グールドナーは晩期のパーソンズ理論には触れていない。

1979年にパーソンズがミュンヘンで客死した後、パーソンズを批判的に継承して、あるいは批判的に摂取して自らの理論を展開した人たちが現れた。代表としてルーマンとハーバーマスを挙げることができる。ニクラス・ルーマン(Niklas Luhmann)は1960年から1961年にかけてハーバード大学に留学し、パーソンズのもとで学んでいる。ルーマンは「パーソンズの全著作は、一つの命題に対するいわば終わりのない注釈である」と見なしており、「その命題とは、“行為はシステムである(Action is system)”というものである」(Luhmann 2002, 土方他訳 2007:20)と強調している。パーソンズは行為を系統的に機能分析している。ルーマンはパーソンズのもとで学んでいた時に、パーソンズが口頭で述べた上記の言葉を鮮烈に覚えており、それがパーソンズの奥深い重要な事柄であるとしている。ルーマンはパーソンズのシステム論を批判的に継承しながら、パーソンズの行為システム論にはない生活世界の概念とコミュニケーションの概念を取り入れて、独自のシステム論を打ち立てている。

ユルゲン・ハーバーマス(Jurgen Habermas)はルーマンと1971年にシステムと生活世界の関係について論争を起こしたことで知られているが、現在においても活躍中である。ハーバーマスは『コミュニケーション的行為の理論』(1981)を著し、そのなかの第7章「タルコット・パーソンズ—社会理論の構成問題—」で、パーソンズを取りあげている。ハーバーマスは、パーソンズについて「同時代人の中で、パーソンズの理論に匹敵する複合性をもった社会理論を展開した人は誰もいなかった。」としている。そして「抽象性と分節性、個別的な研究分野の文献に同時に目配りすることと結びついた社会理論のもつ視野の広さと体系性、この点に関して、パーソンズの残した業績に匹敵するものはない。たしかに、60年代の中頃からこの理論への関心は衰え、その上、パーソンズの晩年の業績は解釈学的、

また批判的研究傾向によって一時的に圧倒された。しかし今日、パーソンズの理論となんらかの関係をもたない社会理論をまじめにとることはできない。」(Harbermas 1981,丸山他訳 1987:130-131)と記して、ハーバーマスはパーソンズ理論のもつ広さと深さを認めてはいる。しかし、パーソンズ概念を共有する必要はないとして、ハーバーマスは固有の理論を展開している。

ハーバーマスは、この第7章においてパーソンズの理論を第1節 規範主義的行為論から社会のシステム論へ、第2節 システム論の展開、第3節 近代論と3つの視点から考察している。このなかのシステム論の展開において、パーソンズの晩年の人間学的後期哲学の特徴をシステム論と行為論の妥協から成るもろさを持っていると主張している。

ハーバーマスによれば、パーソンズの後期哲学について行為論がシステム論へとあいまいに同化させられているがゆえに、パーソンズ社会理論は成り立っているという。そして、この争いの源に『社会的行為の構造』において展開された行為理論の枠組みを物象化するところにあるとしている(Harbermas 1981, 丸山他訳 1987:214)。ハーバーマスはパーソンズの「人間的条件」を人間の基本構成システムと捉えている。パーソンズがその究極目的構造に超越的な位置値を与えたことは、人間の基本構成システムのなかに行為論的意味が紛れこむとハーバーマスは言う。

行為システムについて、パーソンズが念頭にうかべていたモデルは、カントを手本とする認識する主体という認識論的モデルである。これに対してハーバーマスは、行為システムについて認識論的主体よりも言語能力と行為能力をもつコミュニケーション的モデルの方が、より適していると主張する(同前:215)。そして、人間的条件の目的システムについて、認識における主体 - 客体モデルの超越的観点を、言語能力と行為能力をもつ主体同士の相互了解へと読みかえる方法のみが、理論的に擁護可能で経験的に認証可能な意味を与えることができる、とハーバーマスは主張している(同前:217)。

「人間的条件」について、パーソンズは人間の存在を根源から問い、宇宙の中の人間としてシステムの的に分析している。これに対して、ハーバーマスは人間的条件を人間の基本構成に関するシステムと解釈して、地上の人間だけを問題にしていると思われる。ハーバーマスは機能主義を理性的に批判して、パーソンズからウェーバーを超えてマルクスへと批判的に摂取して、生活世界の概念を背景に独自のコミュニケーション的行為の理論を創っている。

つぎに出てくるのがパーソンズを肯定的に評価し、新機能主義(neo-functionalism)を唱えたジェフリー・アレグザンダー(Jeffrey C. Alexander)である。アレグザンダーは『社会学の理論的論理』(1982-1983)を出版し、その第4巻でパーソンズを取り上げている。アレグザンダーは1950~60年代の機能主義的立場を基本としながら、それに対立する1960~70年代の闘争理論、現象学的社会学等の諸理論を多次元的アプローチによって総合することを目指して新機能主義を展開している。とくに彼はミクロとマクロの連結、新しい変動論、文化や意味等を扱っている。アレグザンダーは、パーソンズ理論の初期を行為理論、中期

を社会システム理論、後期を AGIL 図式以降と区分している。そして、彼はパーソンズ中期のパターン変数図式を取り入れて、アメリカ市民社会論に応用している。

しかし、アレグザンダーはパーソンズ晩期の「人間的条件」については評価してなく、まったく触れていない。このことはルーマン、ハーバーマスがパーソンズの晩期の理論に少しでも向き合ったこととは対照的である。ここに、アレグザンダーのパーソンズ理論に対する理解には限界があると思われる。

1990年代に入り、パーソンズ再評価の機運が高まりだした。ローランド・ロバートソンと(Roland Robertson)とブライアン・ターナー(Bryan S. Turner)編による『タルコット・パーソンズ—近代の理論家—』(1991)が刊行された。パーソンズは彼の世代の最も影響力のある社会学者であるばかりでなく、20世紀の鍵を握る一人でもあるとされ、逆に彼は社会科学において最も批判され、拒絶された人物の一人でもあったとされている。しかし1979年のパーソンズの死後以来、世界中にパーソンズ学派社会学に対して関心が高まり、ルネサンス(復興)が生じつつあるとしてこの本は出版されている。ロバートソン、ターナーの他、ヴィクター・リッツ(Victor M. Lidz)、ハロルド・バーシャディ(Harold J. Bershady)、マーク・グールド(Mark Gould)らの著者たちは近代、近代以後、グローバリゼーションについて議論の中心にパーソンズの著書をおいている。パーソンズの論文「アメリカの価値についての試験的な概略」も収められており、近代化に関する彼の分析の理解にとって、アメリカの価値は中心となるものであるとされている。この本には、グローバルな規模で近代化にいたる社会過程の初期の理論家としてパーソンズに独創性があるとして、パーソンズ社会理論に対する評価を組み入れながら各論文が書かれている。

2000年代に入り、刊行された書物にレニー・フォックス、ヴィクター・リッツ、ハロルド・バーシャディ編(Renee C. Fox, Victor M. Lidz, Harold J. Bershady, eds.)『パーソンズ以後—21世紀にとっての社会的行為の理論』(2005)がある。この本は、パーソンズの生誕100年記念行事として、2002年12月6、7日にニューヨークで開催された会議の時の報告をもとに15人の著者によって書かれている。内容は経済社会学、社会秩序、社会的共同体、文化、近代と多方面からパーソンズ理論について考察されているが、晩期の理論について載っているのはフォックスのアメリカの生命倫理、医療、最先端とパーソンズ理論との関連について、ティラキアン(A. Tiryakian)「パーソンズと人間的条件」、リッツ「人間的-条件の観点からみた“社会進化”」の3つである。シンボリック・メディアに関する論文は掲載されていない。

#### 第4節 交換メディア、特にシンボリック・メディアに関する先行研究

パーソンズの業績に対する研究関心と焦点は、上記のように変遷してきた。そして近年新たに関心も高まっていると言える。しかしながら、諸交換メディア、特にシンボリック・メディアについての詳細な研究は、未だ十分にはなされていない。近年の主要な成果は、以

下の通りである。

ドイツの女性社会学者であるウタ・ゲルハルト(Uta Gerhardt)は『タルコット・パーソンズ—知識人の伝記—』(2002)を出版した。ゲルハルトによれば、パーソンズは尊敬しているマックス・ウェーバーを少なくとも 2 つの点で見なっていたという。すなわち、ウェーバーが一学者として価値自由(科学的専門主義)を実践し、政治的活動家として民主主義の維持と拡大のために働いたと、パーソンズはいう。ゲルハルトはこの二重の委託を跡づけ、パーソンズの著作から彼の理論の政治的側面を明らかにしている。

この本の第4章「市民権についての新しい課題：パーソンズの理論と1960年代のアメリカ社会」の中で、ゲルハルトは“一般化されたシンボリック・メディアと社会の理論”と題して、シンボリック・メディアについて記している。ゲルハルトは、民主主義を説明する理論的なモデルという視点から、権力をはじめとするシンボリック・メディアを取り上げている。このなかでゲルハルトは<階層のメディア理論>について述べている。ゲルハルトは、シンボリック・メディアが1960年代における同時代の機会を分析するために概念的な枠組みを提供しているのは明らかであるとして、その分析の一つの焦点に社会階層(social stratification)をあげている(Gerhardt 2002:216)。

ゲルハルトによると、パーソンズは“現代社会の平等と不平等”について、理解を助けているメディアの概念の方法を明らかにし、相互行為を取り次いでいる4つの分野において、不平等が平等と深く関連していることを、現代の“脱産業社会”において明らかにした。すなわち、彼は属性主義に関連して不平等に4つの焦点があったという。民族、宗教、地域的な場所、そして社会階層がそれである。しかし社会階層だけは、1960年代の終わりのアメリカにおいて、まだ明らかに不平等の一つの源(sources)であったという(Parsons (1970) republished 1977:333, Gerhardt, op.cit., 217)。

ゲルハルトによれば、家族の背景が業績のための能力を高めているように、不平等の型において、機会の平等の優位によって部分的にアメリカにおける普遍主義の達成が無効になっている。したがってパーソンズは、“その平等対不平等、属性主義対業績主義は、独立して変数として取り扱われるべきである”(ibid.)と結論づけた。そこから生じる新しい見方によって、社会システムにおける4つの一般化されたメディアを明らかにしていったと、ゲルハルトは言う。

ゲルハルトは要点として4つの一般化されたシンボリック・メディアの領域のすべてにおいて、機会の平等を前提としている制度化だけが—貨幣(雇用分野における平等な機会)、政治的権力(投票機会等)、影響力(市民権を通して等)、価値コミットメント(文化的な仕事を通して等)—不平等論を展開していくであろうと主張する(op.cit., 218)。

また彼女は、パーソンズの述べた次のことを取り上げている。サイバネティックの秩序において、“階層化の文脈でみられる影響力の主要な機能は、不平等に関して機能的に必要な形態を正当化することであった。”言い換えるならば、業績を基礎づけている構造の優秀さは影響力の余剰を説明し、正しいとすることであった。実際、そのような正当化は、”能

力のギャップ(competence gap)”を適法と認めることができたという。例として、現代社会における医者と患者の間に、医療の実践の有効性に対する状況をあげている(Parsons, op.cit., 343, Gerhardt, op.cit., 219)。

ゲルハルトは、パーソンズの述べた社会階層分析にシンボリック・メディアは有効であるという主張を受けて、社会システムにおける影響力メディアについて述べている。しかし、一般行為システムのメディアについては触れていない。

ゲルハルトは階層とシンボリック・メディアについて、影響力メディアについてだけ主な機能を述べているが、なぜ影響力が効力を持つのかについては述べていない。本論文では、階層と影響力メディアとの関係、影響力メディアの持つ効力をもう少し詳しく見ていきたい。また一般行為システムのメディアについても取り上げていきたい。

高城和義は1986年に『パーソンズの理論体系』を著し、その中の第5章「象徴的メディア」としての権力と「政治の世界」—パーソンズにおける「秩序の問題」の解決—において、権力メディアについて詳しく検討している。

高城は、政治についてのパーソンズの主張に注目する。「政治の目標は集合的目標を達成する能力を最大にするということである。われわれはこの能力を、富から区別した権力 power と定義する。」(Parsons, N.J. Smelser, 1956:47-48, 富永訳 1958:74-75)(高城 1986:223)。高城によれば、パーソンズにおいて、社会は多種多様な集合体から構成されており、人は複数の集合体に所属し、おのおのの集合体構成員としての役割遂行を通して社会に貢献するもの、とイメージされているという(同前:225)。パーソンズの政治は、社会の公共的な目標達成機能に限定された世界なのであるとして、権力もまた機能的に限定されたメカニズムと考えられていることを、高城は指摘した(同前:228)。そしてパーソンズの権力概念が「かなりよく統合された組織的集合体システムの内部における、そしてその環境との制度化された相互交換における、意思決定やその実施権限の使用に限定されていること」のを確認している(同前:238)。

高城は、G-A, G-I, G-L の相互交換過程についても検討している。例えば G-I 交換について、すなわち政治(G)と社会的共同体(I)の相互交換過程は、<政治的支持システム>として構想されているが、物々交換のような直接取引ではなく、一般化されたメディアを媒介とするコントロール関係にあると、高城は主張する(同前:264)。

サイバネティック関係から見れば、もっともエネルギーが低く情報量の多いものから順に、「究極的リアリティ」、文化システム、社会システム、パーソナリティ・システム、行動システム、物理的・有機体的環境というコントロールのヒエラルヒーが想定される。逆に、条件づけのヒエラルヒーが——つまり経済が基底にあって政治を条件づけ、政治が国民の連帯を条件づけ、国民的共同態(社会的共同体)が価値パターンの維持を条件づけるという序列が——存在するというのである(同前:278)。このように高城は、コントロールと条件づけ関係を媒介するものとしてシンボリック・メディアを捉えている。

さらに政治との関わりからみた権力メディアについても、高城は論及しているが、その

他のシンボリック・メディアについては言及していない。そして、シンボリック・メディアの機能を社会秩序の解決にあるとしている。

高城によれば、多人種社会であるアメリカ社会の秩序は、共通の理念を形成しこれに依存するしかない。パーソンズのいうパラダイムは、このような特殊アメリカ的現実の要請に応えようとするものであった。実体的要素ではなく、理念的要素によって国民的統合をはからなければならないという要請は、今や全世界的な課題である、と高城は述べている。

さらに彼はいう。人類全体が破滅の危機をまぬがれるためには、地球共同体として「共通の理念」を形成し、それをテコとして新たな秩序を形成、維持し、国民的・地球的規模での統合をはからなければならないであろう。理念による統合がアメリカ合衆国だけではなく、世界的にも求められている(同前:283)。パーソンズの理想主義的統合モデルは、アメリカと現代世界との現実を正確に写し取ったものではない。パーソンズ・モデルの究極の支点は、キリスト教的イデー(理念)であり、アメリカン・デモクラシーにはほかならなかった。パーソンズは、そうしたノーマルな機能作用＝安定の条件を提示していたはずである(同前:284)。

高城はアメリカ社会の秩序を保つには、共通の価値システムという理念が必要であるとして、パーソンズの権力メディアもそういう働きを提示しているはずである、と主張する。そしてパーソンズの社会秩序を理念として捉えている。

確かにそういう見方もあるが、本論文ではもう一步踏み込んで、社会秩序を構成している諸側面には教育や職業があることをふまえて、これらの面からシンボリック・メディアの役割について考察していきたい。また権力メディアだけではなく、他のシンボリック・メディアの重要性についても検討していきたい。

次に、シンボリック・メディアについて論じている主要な論文の論点を概観しておく。

インゴ・シュルツ・シェーファー(Ingo Schulz-Schaeffer)は、「状況的な関与から一般化されたメディアへ：独立した実在物間にみられる調整の手段について」(2005)を寄稿し、次のような問題意識のもとで、パーソンズの一般化されたメディアを取り上げている。

あらかじめ確立された調整の構造がないときに、一つの独立した実在物(entity)は——すなわち、その可能な諸行為と対外的に支配されることのないものとの間で、それ自身が選択しているものを実在物という——他の独立した実在物の調整を呼び起こすために、何をすることができるだろうか？(Schulz-Schaeffer 2005:218)

この論文では、条件付きの自己-関与(self-commitment)を動機づけているものが、この種類の調整問題を解決するために基本的なメカニズムとして考えられている。そのような関与がますます一般化され、制度化されたものになるように、本来備わっている傾向のあることが論じられている。一般化されたシンボリック・メディアの社会学的な概念は、この点に焦点を合わせた一つ概念として再解釈されていると、彼はいう(ibid.)。ここでは、一般化されたシンボリック・メディアが自己-関与を動機づけていることに作用して、一つの



実在物と他の実在物の間を調整する基本的なメカニズムであること、そして、それは制度化されたものになるように生来存在している傾向があると捉えられている。そして考察から生み出される概念的枠組みは、開かれた多数の行為主体となるシステムにおいて人工的な行為主体の間で調整問題に適用できるのと同じように、人間行為者の間で調整問題として適用できるのものであると、シュルツ-シェーファーは主張している。

シュルツ-シェーファーは、実在物間の調整問題を解決するメカニズムを構成しているものに社会システムのシンボリック・メディア(貨幣、権力、影響力、価値コミットメント)を挙げている。これらのメカニズムは、アプローチや示唆等に対して、他の行為者の反応を取り出すことによって結果をもたらす為に、意図的な試みを構成している方法である。貨幣の場合、それはつけ値(*offers*)のことである。権力の場合、それは義務を活性化するために伝達している諸決定のことである。影響力の場合、それは行為の示唆されている線にそって理由あるいは‘正当化’を与えることである(*op.cit.*, 225)と彼は述べているが、これはパーソンズの述べたことと共通している。

またシュルツ-シェーファーは、ルーマンのいうメディアについても次のように論じている。ルーマンは、相互行為の一般化されたシンボリック・メディアのパーソンズ概念から出発して、コミュニケーションのシンボリックに一般化されたメディアの概念を展開している。パーソンズとルーマンは貨幣と権力が一般化されたシンボリック・メディアであることで一致している。しかし、残るメディアについては不一致である。パーソンズによれば、これらは影響力と価値コミットメントである。一方、ルーマンは真理と愛をあげている。さらにルーマンは、宗教的な信仰、芸術、そして基本的な形であるべく基礎的な市民の価値について考えている (Luhmann 1975: 176-179, 1984: 222, 1997: 332-358) (*op.cit.*,226)という。そしてシュルツ-シェーファーは、役割を考慮してメディアは行為者の選択を調整するためのメカニズムとして演じている(Luhmann1997:320)というルーマンの意見を取り入れ、さらに、一般化されたメディアに関するルーマンの見解がパーソンズの展望に似ているとして、メディアは動機づけの一手段として作用しているというルーマンの意見(Luhmann 1984:222)を支持している。

一般化されたメディアの言及について、より多くの一般的な問題の例のなかに、特定の調整問題に変換する効果をもっていると、シュルツ-シェーファーはいう(*op.cit.*,232)。特定の社会的文脈と共存という制限により、課された制約を克服する為に援助することによって、メディアは生じることが可能な全部の見知らぬ人との間に、協力さえもつくる調整の力強い諸手段であると、彼は主張する。

以上のように、シュルツ-シェーファーは社会システムのメディアについて言及している。しかし、一般行為システムのメディアについては触れていない。本論文では、社会システムから生み出されるメディアの他に、一般行為システム、システムとしての人間的条件から生み出されているメディアの性質、役割等についても論じていきたい。

ダニエル・チェルニコ(Daniel Chernilo)は「差異化された社会の社会的協調に関する理

論化：パーソンズ、ルーマンとハーバーマスの一般化されたシンボリック・メディアの理論」(2002)を記している。チェルニコは現代において違いの出た社会の協調をはかるために、パーソンズの社会システムにおけるシンボリック・メディアを基礎に、ルーマンやハーバーマスの理論を取り入れて実証への理論化を試みている。

ルーマンとハーバーマスは、パーソンズの相互交換のメディアの理論を発展させて修正してきた。ルーマンは、パーソンズのシンボリック・メディアの相互交換の考えを拒否して、コミュニケーションの利用を提案している。ハーバーマスは、人との関係を操作することとコミュニケーションの間を区別している。三者の理論の焦点は、差異化された社会の社会的協調に必要な最強の活動力を特徴化することに関するものである、とチェルニコはいう(Chernilo:431)。

具体的に、彼はメディアの理論の実証に着手するに際して、メタ言語をおこすハーバーマスの議論を取り入れ、メディアの理論に従った過程の直接の結果として、ルーマンの愛の概念を取り入れている(op.cit., 447)。

チェルニコは、パーソンズの社会システムのシンボリック・メディアの概念をもとにして、ルーマンとハーバーマスを関連させることによって現代の討論のなかに差異化の問題を持ち込んでいる。しかし、彼は一般行為システムのシンボリック・メディアについては触れていない。本論文では、一般行為システムのシンボリック・メディアの性質や特徴について言及していきたい。そして社会システムと一般行為システムのメディアが関連していることにも究明していきたい。

ホン ファイ チャン(Hon-Fai Chen)は、「自己・準拠、相互的な同一性そして感情——秩序再考に関するパーソンズの問題——」(2004)を著している。チャンはこの論文の中で、パーソンズの後期の著書の中に、秩序の問題に対する彼の規範的な解釈にとって暗示的な選択すべき手段があるということを論じている。そして感情(affect)に着目している。

まずルーマンの自己・準拠の理論とピツォルノ(Alessandro Pizzorno)の相互的な同一性の概念が、'脱・規範的な'観点において検討されている。社会的連帯性、儀式そして神話に関するパーソンズの後期理論の基礎に関して、チャンは次のことを提案している。つまり感情に関するシンボリックなコミュニケーションのパーソンズの問題は、諸個人が互いに認めることを通した過程を描いており、それゆえ社会秩序を構成していると考えられることを提案している。シンボルで媒介されているもの、それは人間的条件に根拠をもち、感情のコミュニケーションは、社会秩序の可能性の条件であるべき価値の制度化に置き換えられるかもしれない、とチャンはいう。さらにチャンは、感情の重要性は中国の伝統である儒教によって共有されたテーマであることを論証している。それはパーソンズ理論の人間性研究の意図を洗練する為に導入されている、と述べている(Chen2004:259)。

チャンは、パーソンズのいう感情(affect)をシンボリックなメディアというよりも、シンボリックなコミュニケーションの概念として捉えて、論を展開している。そして、個人を互いに認める感情が社会秩序を構成していくと、チャンは主張している。

チャンは感情について独自の視点で論じている。しかし、他のシンボリック・メディアについて触れてはいない。本論文では、パーソンズのいうシンボリック・メディアと相互交換メディアの各々に焦点をあてて、それらが導かれる過程や役割、シンボリック・メディアのもつ重要性について考察していきたい。

油井清光は「身体と社会システムの間で相互交換するシンボリック・メディアとしての健康」(Yui,2004)を著している。ここで油井は、題にシンボリック・メディアとしての健康と記しているが、「パーソンズから『身体社会学』へ」(2005)において「“行為システム”と他の三つのシステムとの関係については“象徴”とはいえないので、たんに(交換)メディアとされる。その一つが“健康”というメディアである」と記している(油井 2005:24)。

これは重要な指摘である。パーソンズは「社会システム」と「一般行為システム」から導かれるメディアは、一般化されたシンボリック・メディアであるとしている。ところが「システムとしての人間的条件」から導かれるメディアになると、社会システムや一般行為システムで用いたのと同じような分析枠組みで分析する、シンボリック性を認めているのはシンボリックな意味のメディアだけであり、他の経験的秩序、健康、超越的秩序のメディアにはシンボリック性を認めていない。それゆえ、健康メディアは非シンボリックな相互交換メディアであるといえる。この点について、筆者が本論文を執筆するにあたり理解を深めたところである。

油井は 2004 年の論文で、次のように論じる。「一度 “健康”のメディアがインプットされると、社会的レベルにおける上述の 4 メディアは、そのインプットに対応して、新しい社会的制度を作り出す為に前面に出てくる。これは、身体という、社会システムにとって条件づけの要素からのインプットによって、新しい社会的諸制度を生み出す一つの変容過程である。その過程のなかで、これら 4 つのシンボリック・メディアの介入を通して、選択、排除、そして革新の過程が生じる」(Yui,2004:2)。

油井によれば、深層構造と表層構造、あるいは潜在構造と顕在構造との間に、(パーソンズ自身の用語を用いれば) “接合”(articulation)の中に彼の理論化の中心があるという。そして以下のように記している。「潜在構造の中に、異なった理論的源から引き出された二つの要素がある。一つはデュルケームの伝統から生じた“構成的シンボリズム”である。他はテリック・システムで、ウェーバーの宗教の社会学からのものである。他の要素を、彼は生理学からとっている。例えば遺伝子型に関する議論のように、情報としての DNA、コードとプログラム(計画)といったものが、そうである。そこに構造言語学の変形生成過程が表示され深層、潜在構造から表層、顕在構造へ変換される」(op.cit., 3)。

ここで油井は、潜在構造をなす二つの要素のうちの一つに、デュルケームとウェーバーを挙げているが、『社会的行為の構造』の前半に出てくるパレートには触れていない。潜在構造に関して、パレートにも論及するが極めて重要であると筆者は考える。

さらに、次の記述が続く。「顕在構造と潜在構造の二重の方向の過程の中に、介入する遂行体(intervene agencies)がある。パーソンズによれば、これらは “一般化されたシンボリ

ック・メディア”である。換言すれば、これらは“媒介する遂行体”(mediating agencies)を構成しており、それは創造したり、選択したり、組み合わせたり、そして革新するために、この変換(制度化)の過程において介在している。パーソンズによれば、変換の過程は、いつも革新と創造を含んでいる。要するに社会変動を含んでいる。制度化の過程は、パーソンズにとって社会進化のような社会変動である」(ibid.)。つまり、一般化されたシンボリック・メディアの働きについて、制度化に介在しており、その過程は社会変動を含んでいるという。

メディアとしての健康についても、次のように記している。「テリックから社会へというベクトルにそって、問題は“価値・圧力”(value-pressure)である。その上、条件づきの要素(身体)から社会へというベクトルに対して、問題の一つは“健康”であるだろう。メディアとしての“貨幣”の場合に「貧しい」あるいは「お金持ち」の両方が測定可能であるように、健康はまさに積極的、すなわち身体の良い状態ばかりでなく、消極的、すなわち人間の身体の悪い状態、たとえば病気もまた一つの尺度である。換言すれば、考え(idea)は健康について話をするを可能にしたり、あるいは「健康」のメディアを通して病気を意識するようになる」(ibid.)。

油井はこの論文の中で、パーソンズ流の法の社会学において、全体として社会における法の位置づけについて考察していく。油井は法(Law)を「連帯性と道理にかなった社会変動に対する一つの道筋としての法」として捉え、社会的共同体の領域に置くことを提案する。そして、四つの分野の間に相互交換している一般化されたシンボリック・メディアの新しい考え方を、社会的共同体に位置づけた法と組み合わせることが出来るという。

そして油井は、シンボリック・メディアと法を組み合わせ、法の社会的機能を以下のように要約している。

- (1) 法の最も重要な焦点は、“社会的共同体”(T分野)に繋留されるはずである。
- (2) しかし、同時に“一般化されたシンボリック・メディア”の用語の中に、社会の他の分野、すなわち政治、経済、そして価値(文化)とともに深い相互交換過程があるはずである。
- (3) 基本的に、法は以前の状態に対して適応に対する装置、回復に対する装置であるばかりでなく、社会変動に対する道筋にとっての装置でもある。まさにパーソンズが「精神の病気と現代社会」の中にそれを置いたように、精神の病気をうまく処理しながら逸脱、カリスマ、規範は二重の意味を持ち、そして革命的(創造的)な社会変動を導き、社会秩序の防御(防衛)として役立つよう機能している(op.cit., 6)。

油井は健康メディアについて、2005年の論文では次のように記している。

健康メディアは、自然界と「行為システム」(象徴界)とを接合するべく交換されるメディアであった。この場合、「健康」は概念の内包として身体の「機能」に生物有機体としての或る状態に、第一次的に言及している。しかし、それは同時に「健康」ということばである。そして油井は、パーソンズ自身が出している「健康権」という例にも触れている(油井

2005:25-26)。

パーソンズがシステムとしての人間的条件で析出した健康メディアは、概念である。すなわち言語に表現され、その意味として存在するものである。それゆえ、メディアとしての健康は、言語、ことばで表現されているが、それを具体的に広げることができると考えられる。

また油井は、パーソンズが晩年に展開した「社会進化論」と「人間的条件システムのパラダイム」が何を意味しているのかについて、「ノイラートの船」<sup>3)</sup>という言葉を用いて表現しているが、はっきりしていない。筆者はここにおいて、パレート理論の重要性を感じている。

油井はメディアとしての健康について論述しているが、他のメディアについては言及していない。本論文では、社会システム、一般行為システム、システムとしての人間的条件システムから導かれている、それぞれのメディアの特性と機能について検討していきたい。またパーソンズがパレートから学んだことについても考察していきたい。

## 第5節 論文の構成

以上のような問題意識から、本論文は次の2部からなっている。まず第1部(第1章～第5章)においては、社会システムのシンボリック・メディアの特質や動態分析、各メディアの相互交換過程、役割や機能を検討する。第2部(第6章～第11章)においては、一般行為システムのシンボリック・メディア、システムとしての人間的条件のメディアについて言及し、各メディアの特質を検討する。さらにシステムとしての人間的条件のパラダイムについて検討する。

第1部では、社会システムの貨幣、権力、影響力、価値コミットメントの各シンボリック・メディアについて検討する。パーソンズは、社会をシステムとして捉えるようになってから、経済の領域から貨幣を、政治の領域から権力を、社会的共同体の領域から影響力を、信託システムから価値コミットメントのシンボリック・メディアを抽出した。第1部では社会システムにおける上記の各メディアの性質、特徴、問題点、相互交換過程、重要性を明らかにする。

第2部においては、一般行為、人間的条件のそれぞれ各段階のメディアを検討する。パーソンズは、一般行為システムを行動有機体<sup>4)</sup>、パーソナリティ・システム、社会システム、文化システムに四分割し、システムとしての人間的条件を物理的-化学的システム、人間有機体システム、行為システム、目的システムに四分割してそれぞれの相互交換過程からメディアを抽出している。第2部では、それぞれのメディアが生み出された背景、メディアの特徴、性質を論じる。また、初期から晩期までパーソンズ理論に大きな作用を及ぼしているパレートについて論じる。後半では、人間の存在する条件をより広くパラダイム(理

論的枠組み)として捉えていく過程を跡づけ、人間的条件が自然界と結びついていることを検証している。

終章においては、これまでの議論をまとめて明らかになったこと、シンボリック・メディアを中心に、相互交換メディアの重要性と問題点について検討する。そして従来のパーソンズ研究に対する本論文の貢献を考察して、残された課題を整理する。

#### 注

- 1) エドワード・A・ティラキアン「パーソンズと人間的条件」、ヴィクター・M・リッツ「人間的 - 条件パラダイムの観点からの“社会進化”」:Renee C. Fox, Victor M. Lidz, Harold J. Bershad, eds.(2005) 所収。
- 2) 大黒正伸(2009:15-16)を参考にした
- 3) オットー・ノイラート(Otto Neurath)が『アンチ・シュペングラー』(1921)の中で用いた比喩。油井の論文では以下のように記述されている。「われわれが、港(目的地)も分からないまま、海上に浮かぶ船に乗り込んでいる船乗りのようなもので、その船に自らが乗っているという状態のまま海原のただなかでなんとかその船を修理しつつ航行をつづけており、したがって、その状態では船はけっして一から作り直すことはできない」(油井 2005:24)。すなわち、知識の総体を港の見えない海上に浮かぶ船として、われわれは、そのような状態の船に乗って修理しながら航行を続けていかなければならない、という例えである。
- 4) 後にパーソンズは『行為理論と人間的条件』(1978)において、行動システムと修正している。

## 第1部

社会システムにおけるシンボリック・メディア

## 第1章 シンボリック・メディアの性質 —バウムのメディア論への発展—

### 第1節 はじめに

パーソンズ(Talcott Parsons)は社会の本質を秩序や統合と結びつけた制度化にあるとみなし、制度をつくる人間の価値観について分析を行っている。彼の理論は、初期においては社会システムの均衡を重視した社会構造および機能の分化の究明という静態的な面におかれていたが、中期にいたって『経済と社会』(Economy and Society,1956)の中で貨幣(money)をメディア(media)としてとらえて以来、社会システムの動態についても着目していくようになる。

メディアについて、パーソンズは正式的には「一般化されたシンボリック・メディア」(generalized symbolic media)と呼び、メディアとは行為者間の相互行為を促進したり規制するメカニズムに作用するものとしている。そしてメディアの働きとして、情報を伝達し相互行為における「生産物」(products)や「要素」(factors)の配合や結合を制御する点をあげている。すなわちメディアは社会システムの機能に深くかかわっている。

パーソンズはいわゆる AGIL 図式を用いて、一般行為システムを行動有機体、パーソナリティ・システム、社会システム、文化システムに分割し、社会システムをさらに経済、政治、社会的共同体、信託システムに分割した。メディアについては、経済の中で働いているメディアとしての貨幣の発見にはじまっていることから、まず社会システムのそれぞれの交換過程から「貨幣」(money)「権力」(power)「影響力」(influence)「価値コミットメント」(value-commitment)を見出し、つぎに人間の内面に迫って一般行為システムの相互交換過程から「知性」(intelligence)「遂行能力」(performance capacity)「感情」(affect)「状況規定」(definition of the situation)の4つを見出している(Parsons and Platt 1973: 432,439)。

後に彼は非公式ではあるが、一般行為システムのシンボリック・メディアについて、デュルケームの考えを取り入れ「知性」「自我の能力」「集合感情」「集合表象」と訂正を唱えている(Parsons, 倉田編訳,1984:35)。ここで言われているメディアはシンボリックなものであり、具体的にどういうものがあてはまるか、については論じられていないが、前者すなわち知性、遂行能力、感情、状況規定の方がとらえやすいように思える。

パーソンズのシンボリック・メディア論についての本格的な論文は、「政治権力の概念について」(On the Concept of Political Power,1963)「影響力の概念について」(On the Concept of Influence,1963)「価値コミットメントの概念について」(On the Concept of a Value-Commitments,1968)にみられ、いずれも『政治と社会構造』(Politics and Social Structure,1969)におさめられている。そこでは社会システムについてのシンボリック・メディアが検討されている。後期に至り、社会システムからさらに一般行為システムへとメ



ディア論を拡大している。

パーソンズは、1973年『アメリカの大学』(The American University)の中で、貨幣のインフレーション、デフレーションという経済的概念を、社会システム、一般行為システムの各メディアに適用し、メディアの性質について述べている。しかしそれはあくまでも定量的にではなく、定性的にのべられており、経済学の場合とちがって人間の相互行為から生ずるシンボリックなメディアの場合、完成されたものではない。

またバウム(Baum, R.)は、パーソンズのメディア論を補い、より精微化する方向へと進んでいる。彼はパーソンズのいうメディアのインフレーションとデフレーションの混在した状態をコンフレーション(conflation)と名づけ、社会システムの混乱と秩序について考察している。さらに、構造的側面から価値の優先性に基づいて「理想的な社会」(good society)の類型化を試み、社会的メディアとの動的な関連も分析している。

第1章では、パーソンズのいうシンボリック・メディアの性質、メディアのインフレーション、デフレーションについて、バウムのいうメディアのコンフレーション、「理想的な社会」のあり方について理解を深める。すなわち社会現象の分析に重要な機能をつかさどるメディアの性質について検討することを目的としている。

## 第1節 パーソンズのシンボリック・メディア論

### (1) シンボリック・メディアの性質

本節ではパーソンズのいうシンボリック・メディアそのものの特質、社会システム、一般行為システムの各メディアの性質について述べてみたい。

パーソンズは、古典派経済学者達による貨幣の3つの機能——1.交換価値、2.価値尺度、3.貯蔵手段——を考慮に入れて、メディアの特質をとらえた。まずメディアについての基本的な基準として、シンボリック(symbolic)な特徴をあげている。これは、貨幣には交換価値があるが、純粋なタイプの場合、使用価値はないという命題に相当するものである。このシンボリックという一般的な見出しのもとで、さらにメディアについての4つの性質があげられている。

第1の性質は、制度化(institutionalization)である。これは、貨幣が国家を通して政府当局によって、法貨として後援されていることに相当するもので、我々はメディアを通して制度化の状態になるとされている。

第2の性質は、評価と相互交換の両方における意味と有効さの特質性(specificity)である。これは、特定のメディアだけでは人間の相互交換関係のすべてを媒介できないというものである。

第3の性質は、循環性(circulability)である。これは、メディアがある種の相互行為を媒介する際、1つの行為単位から他の行為単位へ統制を移すことを意味している。

そして第4の性質に、メディアがゼロ・サム的性質だけでなく、「信用創造」(credit creation)によって付加価値が認められている点があげられている(Parsons 1975:95-96)。

第1節において、社会システムは経済(A),政治(G),社会的共同体(I)信託システム(L)に分類されていると述べたが、4つのシステム間にはさらに資源の可動化システム(resource mobilization system)、政治的支持のシステム(political support system)、忠誠・連帯性・コミットメントシステム(loyalty-solidarity commitment system)、労働・消費市場システム(labor consumption market system)、適法化のシステム(legitimation system)、配分基準のシステム(allocative standard system)という6つの二次的な下位システムが生じている(Parsons 1973:426)。

この6つの二重の相互交換から、パーソンズは社会システムのA体系に係留するのは貨幣、G体系には権力、I体系には影響力、L体系には価値コミットメントの各メディアが対応すると述べている。各メディアは、機能上定義された制度的複合体の中で連結している。社会システムのメディアの性質について、彼はメディアのコード②を「制度的コード」「価値原理」(value principle)「調整基準」(coordination standard)に分け、制度的文脈における貨幣を財産制度に、権力を権限に、影響力を威信に、そして価値コミットメントを道徳的権威によるものとしている。さらに価値原理において、貨幣には効用、権力には有効性、影響力には連帯性、価値コミットメントには保全をあて、調整基準(「満足出来る遂行基準」)にそれぞれ支払能力、成功(または統治権)、合意、型の一致性を該当させている。

「影響力の概念について」の論文の中で、彼は高度な社会システムでは各メディアが特定のメッセージを伝えるだけでなく、共通の命令法をもち、効果を求める手段であると主張している。このことから、メディアは行為者に対してある種の「裁定」(sanction)を行うとしている。裁定の様式には、誘因、抑止、説得、コミットメントの活性化があげられている。

また、各メディアの根源的な基礎として保障基盤を設け、金、物理的強制力、一種の知識あるいは情報をあげている。また「価値コミットメントの概念について」の論文の中で、彼は、価値コミットメントに対する保障基盤に忠告または道徳的否認をあげている。以上のことをまとめたのが表1である。

表1 社会システムの一般化されたシンボリック・メディアの構成要素

メディア	係留部門	コードの種類			保障基盤	裁定の様式
		価値原理	調整基準	制度的		
価値-委託	価値の型の維持(L)	保全	型の一致性	道徳的権威	忠告ないし道徳的否認	委託の活性化
影響力	統合(I)	連帯性	合意	威信	一種の知識	説得
権力	政治(G)	有効性	成功ないし統治権	権限	ないし情報	抑止
貨幣	経済(A)	効用	支払能力	財産制度	物理的強制力	誘因
					金	

(出所) 松本和良著『組織体系の理論』学文社、1981年 p.30.

パーソンズは、サイバネティックス的制御の観点からその階統制(hierarchy)において、社会システムの各メディアの中で「価値コミットメント」のメディアを最高の階位にあるものと位置づけている(同前:31)。サイバネティックスの原理とは、簡潔にいうならば、ある適当な条件下では高位情報—低位エネルギーのシステムが低位情報—高位エネルギーのシステムを制御できるというシステムである。

このサイバネティックスの原理を用いると、「貨幣」のメディアが一番低位となり、貨幣の信用創造には権力の投入が必要となる。同様に、権力の信用創造には影響力が、影響力の信用創造には価値コミットメントの投入が必要になり、そして価値コミットメントの信用創造には「道徳的指導性」(moral leadership)の投入が必要となってくる。

さて、その後パーソンズは、社会システムのシンボリック・メディアが複雑で常に発展している社会でうまく流通しているのは、人間の行為システムにより根源的なものが存在しているからに違いないと考えた。本来ならば、人間の一般行為システムのシンボリック・メディアから社会システムレベルへと究明されるはずであるが、むしろ逆の順序で研究が行われた。

一般行為システムのシンボリック・メディアは、社会システムのそれに比べると、人間の本質すなわち人間の存在条件に関係したメディアであるといえる。

サイバネティックスな階統制の下で、一般行為システムは行動有機体(A)、パーソナリティ・システム(G)、社会システム(I)、文化システム(L)に分割された。そして4つの下位システムの間、遂行システムの組織(organization of performance system)、動機づけの統合システム(motivational integration system)、道徳秩序の根拠づけ(grounding of moral order)、認識的複合体(cognitive complex)、報酬配分のシステム(reward allocation system)、表現的基準のシステム(expressive standard system)という6つの二重の相互交換が生じ、お互いに命令を伝えている。ここに一般行為システムのA, G, I, L に対応するシンボリック・メディアとして、知性、遂行能力、感情、状況規定が生み出される(同前:435)。

つぎに、各メディアの性質を見てみよう。一般行為システムのシンボリック・メディアの場合、コードの種類は意味の型と価値基準に分けられている。社会システムの調整基準に相当するものとして、価値基準にはそれぞれ、認識的合理性、目的合理性、同一性の調和、価値合理性がおかれている。

また、価値基準より一歩ふみ込んだものとして、つまり価値に対する認識的客観性と関係したものとして、意味の型をおいている。ここでいう意味とは、人間の行為志向と、経験の規範的な秩序の両方にかかわったものとして、究極的には人間性と結びつけて考えられる。意味の型には、それぞれ妥当性と意義の認識の基礎、パーソナリティに関連した意味の内面化、社会に関連した意味の制度化、人間的存在条件の意味の本質的基礎がおかれている。

一般行為システムのシンボリック・メディアについては、理論的に未完成の領域が多いのであるが、つぎに筆者は、社会システムメディアの構成要素の表1に対応させて、一般

行為システムメディアの構成要素について試論として表を作成してみた。表 2 の太枠の部分である。

表 2 一般行為システムのシンボリック・メディアの構成要素 (試論)

メディア	係留部門	コードの種類			保障基盤	裁定の様式
		意味の型	価値基準	制度的		
状況規定	文化システム (L)	人間的存在条件の意味の本質的基礎	道徳的権威に基礎づけられる価値合理性	分別	心の調和	エクセントリック (eccentric)
感情	社会システム (I)	社会に関連した意味の制度化	社会的命令に基礎づけられる同一性の調和	仁愛	カセクシス	排斥
遂行能力	パーソナリティ・システム (G)	パーソナリティに関連した意味の内面化	実際性に基礎づけられる目的合理性	勇気	制御	蔑視
知性	行動有機体 (A)	妥当性と意義の認識の基礎	認識的基準に基礎づけられる認識的合理性	知力	知識	損失

コードの種類「制度的」カテゴリーには状況規定に対応するものとして、分別をおいてみた。人間の状況規定は、明確になるにしたがって、認識的基準にもとづいた宗教的判断が要求され、制度的に人物評価にかかわるものとして「分別」をおいたのである。また「分別ある人間」がパーソンズのいう状況規定を正しく判断するのではないだろうか。同様にして、感情に仁愛を、遂行能力に勇気を、知性に知力を対応するものと考えた。これらは東洋的な思想の知・勇・仁を参考にしている。

また、保障基盤とは、メディアの円滑な流通を保障するもので、一定の人間を魅了する力が必要である。そこで L、I、G、A 機構部門のメディアに対応させて、心の調和、カセクシス(cathexis)、制御、知識をおいてみた。また、メディアが要求されたときに、使わないうで起こる結果を表す裁定の様式には、それぞれエクセントリック (eccentric, 常軌を逸した、変人)、排斥、蔑視、損失を対応させてみた。これらは、試論の域を出ないのでより検討される必要がある。

## (2) メディアのインフレーション、デフレーション

パーソンズは、経済学で用いられているインフレーション、デフレーションの概念<sup>3)</sup>をシンボリック・メディアに適用している。それは、現代社会において社会的統合が難しくなっている、あるいは大学等の組織体で機能が十分に働かなくなってきた点に着目し、原因を究明しようとした結果である。本節では、メディアのインフレーション、デフレーションについて、社会システム、一般行為システムのレベルごとに考察してみたい。

まず定義ではあるが、メディアのインフレーション(inflation)とは、信用を拡張する結

果、交換する価値目的に関係して、メディアが価値を低下させることをいう。メディアのデフレーション(deflation)とは、信用を縮小する結果、交換する価値目的に関係して、メディアが価値を上昇させることをいう(同前:315)。すなわち、人間の相互行為において、行為者間同士の信用あるいは信頼が増すと行き交う情報量が増え、それがあまりに度を過ぎるとシステムの均衡がくずれる。その状態をメディアのインフレ状態という。逆に行為者間相互の間に、信用あるいは信頼が減少すると情報量が減り、極端な場合には情報の交換がほとんど行われなくなる。するとシステムの機能を遂行する際に支障が生じる、その状態をメディアのデフレ状態という。それゆえメディアの場合、行為者相互間の信用、あるいは信頼に係るインフレーション、デフレーションということができる。

また、貨幣が信用創造(credit creation)によって価値増殖を行うように、メディアについてもそれが指摘されている(同前:325)。つまり貨幣の場合、銀行に預けると信用創造の働きで利潤が生み、貨幣量が増大する。メディアの場合、システムを通して信用創造が行われると、流通するメディアの量が増大し、信用が信用を生む状態になる。逆の場合は、不信が不信を生む状態となる。

次に一般行為システム、社会システムのレベル別にインフレ、デフレを見てみよう。

パーソンズはメディアのインフレ、デフレの生ずる過程を6つの分野のレベルで扱っている。それを図示したのが、図1である。まずメディアのインフレーションを生ずる過程をみると、社会システムよりも一般行為システムの方がレベルの上位におかれている。これは、メディアが本来人間に直接関係しているからと考えられる。

#### i) <文化システムレベル>でのインフレ、デフレ

レベル1には、サイバネティックな階級制で上位にある文化システムがおかれている。文化システムレベルは、認識的シンボル化、表現的シンボル化、道徳的シンボル化、構成的シンボル化に4分割され、Lの構成的象シンボル化とは究極的に宗教的なシンボルをさしている。

レベル1の認識的シンボル化は、合理性や科学に対する関心に関係しており、物事に対する疑いをもった時、その疑いがこのシステムのインフレーションを支えていくとされている。合理性や科学を支えているものに道徳性(moral)があげられ、その意味でAとIが強調されている。

#### ii) <一般行為レベル>でのインフレ、デフレ

レベル2においては、最初にAとLの間で、つぎにAとGの間でインフレが生じるとされている。すなわち、認識的なものが成長し、強調されることによって、長期的にみるとパーソナリティ・システム、社会システム、行動有機体間の関心のバランスがくずれることを意味している。知識に関する知性の価格が急速にかりたてられて、知性のインフレーションが生じる。知性量が増大すると、状況規定に作用し、文化システムにおける文化的相続財産が増えていく。次に知性量の増大は、遂行能力を高めていく。

図1 インフレーション、デフレーションの生じるレベル



レベル 3 では、A と G、A と I のインフレ、デフレが扱われている。知性のインフレが生じると遂行能力が高まる。しかし知性は行為する際の一つの構成要素にすぎず、より意味深い遂行は感情との相互交換を含んでいるとされている。逆に集合体に一致するような感情のインプットは、表現を豊かにしてパーソナリティを向上させるようにバランス化される。そしてこの次元のインフレーションは、パーソナリティへの関心以上に能力を高める状態を重視する。このレベルでは、知性と感情との均衡が重要視される。

iii) <社会システムレベル>でのインフレ、デフレ

レベル 4 ではL と I のインフレ、デフレが扱われている。すなわち価値コミットメントと影響力で、このレベルでのインフレは信頼、説得に関係している。行為者相互間に情報の形態や能力に差があり緊張状態が続いている時、それを破るのは影響力であるとされている。

レベル 5 では影響力のインフレ、デフレである。影響力は社会化が行われる際に重要な働きをし、それは感情の配分や交換にも関係してくる。

レベル 6 では A と G のインフレ、デフレが扱われている。すなわち権力と貨幣で、政

治的経済的側面と関係している。例えば経済的にインフレになると、政治機構を通して財政状態が悪くなる。

以上レベル別にインフレ、デフレの状態について要点をあげてきたが、インフレが起こるとレベル 1,2,……,6 の順に事態が深刻であるといえる。また、デフレの場合、その結果はレベル 5,4,……,1 の階統的な順序で起こるとされている。パーソンズは、経済成長にとっておだやかなインフレ的傾向が望ましいように、メディアにとってもおだやかなインフレ的傾向が望ましいかもしれないと述べている。現段階において、メディアのインフレ、デフレの均衡点を求めることは定かではなく、あくまでも事態が生じた時の状態だけが述べられている。

### 第3節 バウムのメディア論

#### (1) メディアの特徴

パーソンズのシンボリック・メディア論を補足し理論的に一層の展開をはかろうとした人に、バウム(Baum, R.)がいる。パーソンズが提唱したメディアのインフレ、デフレ論を更に発展させて、バウムは両方が混在している状態をコンフレーション(conflation)と名づけ、社会的機能におけるコード混乱の説明を行っている。経済学におけるスタグフレーション(stagflation)<sup>4)</sup>に相当する現象を、バウムは社会学的にコンフレーションと名づけているが、本節ではバウムのコンフレ論を中心に、機能的な優先順位から見た「理想的な社会」(good society)について検討してみたい。

まず、バウムとパーソンズのシンボリック・メディアの扱い方であるが、両者ともメディアの生じるインフレ、デフレ、およびコンフレ状態を社会システムが進化していく際の一過程とみなし、メディアもそれに準じて扱っている点で共通している。

しかし詳細にみるならば、価値の役割に関して次の2点でパーソンズの初期の見解とは異なっている。第一に、パーソンズは、社会的レベルで分析的に相互交換する時に、文化についての境界線上で出会うものと推定して価値を扱っているが、バウムは、制度上の相互行為の中により直接に含まれているものとして、価値を扱っている点である。第二に、パーソンズは、適切な動機づけの維持に主としてふさわしいものとして、価値を扱っているが、バウムは、状況規定において新しい方法で、価値をその役割に向かって移動しているとして扱っている点がそれである(Baum 1976:579)。

#### (2) メディアのコンフレーション

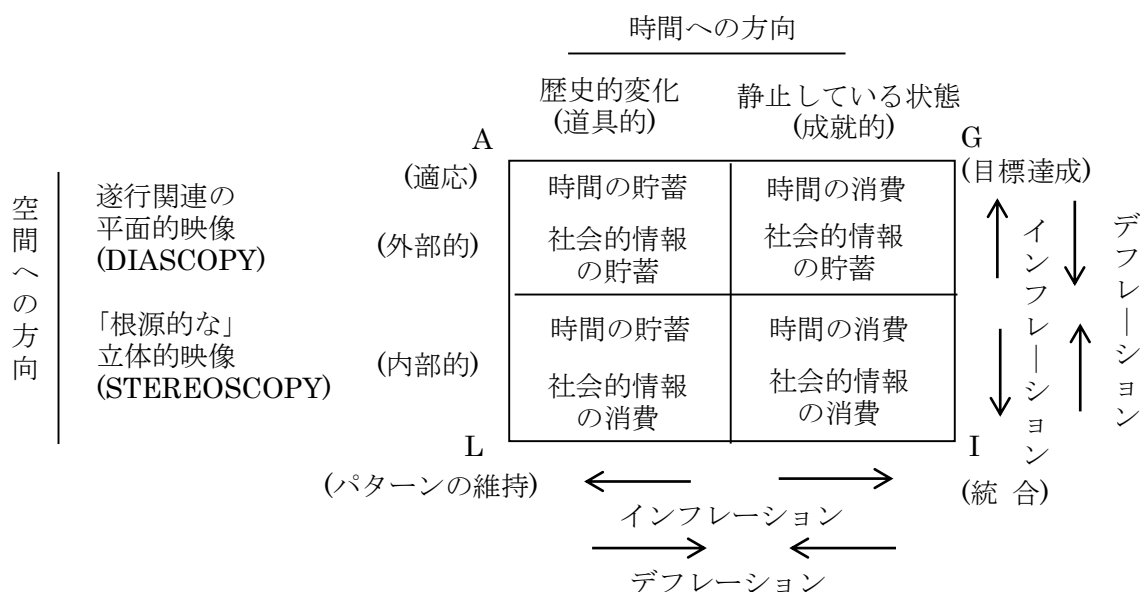
では、バウムのいうメディアのコンフレーションとはどのようなものであろうか。バウムは、社会的行為を生産物として考え、その生産要因として、(1) 価値(パターン化された望ましい概念)、(2) 規範(どのような価値が相互作用を通して実行されうるかを特定づける、規則的なルール)、(3) 役割(組織の中の任務)、(4) 便役(手段) の4つをあげている(同

前:579)。社会的行為は4つの要素が組み合わさって生じるものであるが、これらの諸要素をよりシンボリックに表すとコードとメッセージをもったメディアとなる。

バウムの定義によると、メディアのコンプレッションとは、ひとつのメディアあるいはすべてのメディアを信頼することによって、不確実性という危険を複雑な分化から得られる利益以上に増加させたり、減少させたりする相互依存性の状態になる。その状態の中でシンボリック・メディアを利用する相互交換が変化する過程をいう。すなわち社会的行為の生産過程で、価値、規範、役割、便益という生産要素間に弛みや引き締めが生じ、システムが機能的に混乱する状態をいう。メディアのコンプレ現象とは、メディアのインフレ、デフレが混在している状態で、各メディアは(1) 情報制御の階統制において、上下の方向に進む点、(2) メディアと実在物(real entities)の間に量的な変更を含んでいる点、さらに(3) コードの側面として、ある実在物から他の実在物へメディアの命令が行われる時、コードはお互いに妨害しあう点が指摘されている(同前:582-583)。

バウムは、A, G, I, Lの4機能パラダイムに社会的な時間と空間を取り入れて、社会的行為における機能の混乱の説明を試みている。図2において、社会的空間を行為システムの外部的一内部的な分割に関係づけ、平面的映像(DIASCOPYY)と立体的映像(STEREOCOPYY)に、すなわち二次元と三次元の空間に分けている。また社会的時間を道具的一成就的の分割に関係づけ、動的に歴史的に変化する状態と静止している状態に分けている。たとえば道具的一外部的な枠組、つまり歴史的な変化と遂行に関連している適応的な行為システム(A機能)では、時間と社会的情報の両方の貯蓄が必要になると解釈できる。

図2 社会的な時間／空間と機能的に特定化された社会行為



R.C.Baum, "On Societal Media Dynamics," in J.Loubser, R.Baum, A.Effrat and V.Lidz(eds.), *Explorations in General Theory in Social Science*, 1976 : 587.



G・I・L 機能の働く各システムについても同様である。そしてインフレーションの矢印 ( ← → ) は、各機能が時間的空間的に影響しあうことを意味し、メディアを使用することによって時間と情報が節約されることを意味している。逆にデフレーションの矢印 ( → ← ) は、各機能が収縮しあい、メディアを使用しても時間の浪費と情報の不収集につながることを意味している。

図 2 の分析から、社会のメディアのコンフレーションのもつ特徴として、次の点をあげることができる。

第一に、行為の自律性、依存性は偶然に起き、下位システム間に同様に働いている点である。それゆえ、インフレ、デフレ現象が生じると下位システム間に偶然に起きる自律性、依存性が否定される行為の型となる。

第二に、インフレ、デフレ現象の圧力が左右の方向に生じるという点に加えて、「上方へ」「下方へ」という方向においても生じるとし、2 つの異なった方向を同一視している点である。それゆえ、道具的・一成就的な分割から、「道具的な」成就と「成就的な」道具 という行為の可能性を生み出している。また、外部的・内部的な分割から、「外部化された」内部的問題、「内部化された」外部的問題の解決の可能性をもたらしている。

第三に、社会的時間や空間を使用することによって、機能上不適当な方向にインフレ現象を生じ、混乱を生じている点である。メディアのインフレはコードの拡大を含み、デフレはコードの縮小を含んでいる。コンフレの場合、メディアと実在物との対応関係において機能の混乱を起こしているが、その時コードは相互侵食を引き起こしている。また一般に、機能上不適当な行動は、究極的には時間と社会的情報を過剰に貯蓄したり、不完全に消費することに基づいている。

第四に、社会における純粋なコンフレーションは、4 機能の重要性の順序に混在している点である。これは社会の価値体系の側面である。もし 4 機能の重視が対角線上になされた場合 (  $A \rightleftharpoons I, G \rightleftharpoons L$  )、その時には コンフレーションに対して最大の安定性を示す。なぜなら、時間と情報の利用に対して、正確に「方向を示す」ことに対する流通力によって、コンフレーションの圧力が相対的に相殺されるからである(同前:587-588)。

以上が、バウムの分析した社会的メディアのコンフレーションの特徴である。

### (3) 「理想的な社会」について

バウムは、全体社会のコンフレーション現象を追求していく中で、究極的には社会の価値システムの機能上の類型の必要性を痛感し、機能の優先順位に基づいて「理想的な社会」(good society)の類型論を展開した。本節では「理想的な社会」についての検討と社会的メディアとの動的な関連分析を主な目的としている。

まず社会の諸価値が評価の基準になっているのは、相対的に発展している社会の特徴であるとされている。そして社会の価値が評価の目的となるならば、市民は社会的事実に対する責任をもっているとして、このような社会では(1) 人々が自らの社会を創り出そうとす

る理念を認識し、受け入れ姿勢をもっている。(2) すべてのものをかえるのではなく、可能な二者択一の多数の項目の中に、人々が現在の社会的調整を変えることのできる概念がある、という2つの新年を含んでいるとしている(同前:594)。つまり高度に内的分化をとげた社会で、価値を評価の対象としているのである。

このような社会で4機能の優先的な順位は、構造的な側面から考えられる。それは、パーソンズがメディアとして価値コミットメントの概念を導入した時、社会構造の最も安定した側面として価値を強調したことと関連している。バウムは、4機能の優先順位を下からA,G,I,Lとし、それに対応する「理想的な社会」を考えた。すなわち、その社会が評価する第一に優先される機能だけを取り上げて、基本的な4類型を生み出したのである。

表3では、縦軸に機能の優先順位をとり、横軸に信託システムのイメージにとって正当性をもつ諸信念をとっている。横軸のI欄には、各機能に繋留するメディアに結びつけて、威信配分の基礎がおかれ、それらは適応に対する効用、目標達成に対する有効性、統合に対する連帯性、パターンの維持に対する保全によって支配されている。L欄では、個人と集団に付帯される道具的および成就的な意義をとりあげている。G欄には、個人主義、主意主義という社会のイメージをもつアソシエーションを取り上げ、その主要目的をおいている。

表3 社会的イメージから見た4類型の構成要素

構造的側面 (機能の 優先順位)	「理想的な社会」 の類型	L		I	G	A	
		付帯的意義		威信配分の基礎	アソシエーションの 主要目的	正当性のモード(原則上)	
		個人	集団			変化	安定
L	機械的ブント	道具的	道具的	文化的理想のシンボル化 「価値-コミットメント」	道具的達成の探索	イデオロギー	日常化されたカリスマ
I	団結的 ゲマインシャフト	成就的	成就的	調和への貢献 「影響力」	分配的正義の探索	攪乱された公平	既得権
G	団結的 ゲゼルシャフト	道具的	成就的	社会に対するサービス 「権力」	国家的有効性の探索	団結的競争	既得利益
A	有機的 アソシエーション	成就的	道具的	社会における効用 「貨幣」	有益な機会の探求	進歩	利害の行き詰まり状態

R.C. Baum, op.cit.,598.

A欄には、原則上正当性をもつ変化と安定の論理的根拠がおかれている。それは、現代社会が制度化されたパターンの中にあり、それに抵抗する変化や安定を求める諸力によって特徴づけられるという考えに基づいている。

以上の枠組みから、それぞれに理想的な社会のイメージを対応させている。

バウムは、A機能を第一の優先とし、個人に付帯される意義は成就的であるが、集団に付帯されるそれは道具的である。また威信配分の基礎は貨幣であり、アソシエーションの

主要目的は有益な機会の探索にあり、変化に対する正当性のモードは進歩で、安定に対するそれは、利害の行き詰まり状態である。そのような理想的な社会のイメージを「有機的アソシエーション」(Organic association)と呼んだ。

つまり、有機的アソシエーションとは、適応的機能が第一におかれると、個人主義、主意主義から成るアソシエーションの社会的イメージは、道具的な型になる傾向がある。この社会的イメージの構成要素がインフレートすると、統合に支障をきたすようになる。そのような理想的な社会のイメージをいう。

次に、G 機能を第一に優先し、個人に付帯される意義は道具的であるが、集団に付帯されるそれは成就的である。そして、威信配分の基礎は権力であり、アソシエーションの主要目的は国家的有効性の探索にある。さらに変化に対する正当性のモードは団結的競争であり、安定のそれは既得利益である。そのような理想的な社会のイメージをバウムは「団結的ゲゼルシャフト」(Corporate Gesellschaft)と呼んだ。

つまり、目標達成を構造的側面の第一の機能におくと、アソシエーションの仮定される目的は、組織の有効性を証明する傾向がある。このような社会では、組織の権力的立場は、成功の尺度となる傾向があり、指導的立場と服従的立場、権限と従順が、人々の関係の中心になり、軍国主義的で階層的な集合体が社会的にイメージされる。団結的ゲゼルシャフトとは、以上のような理想的な社会の類型をいう。

三番目に、個人に付帯される意義は成就的であるが、集団に付帯されるそれも成就的、威信配分の基礎は影響力であり、アソシエーションの主要目的は分配的正義の探索にある。そして変化の正当性のモードは、攪乱された公平であり、安定のそれは、既得権である。そのような理想的な社会のイメージをバウムは「団結的ゲマインシャフト」と呼んだ。

つまり、統合の機能が構造的側面で首位におかれると、アソシエーションにおいて社会的調和が指導理念になる傾向がある。団結的ゲマインシャフトとは、このような理想社会のイメージをいう。団結的ゲマインシャフトにおいては、均衡のとれた調和が理念となり、個人と集団の分離は認められない。

最後に、個人および集団に付帯される意義はともに道具的であり、威信配分の基礎は価値コミットメントであり、アソシエーションの主要目的は道具的達成の探索にある。そして、変化の正当性のモードはイデオロギーにあり、安定のそれは日常化されたカリスマにある。そのような理想的な社会のイメージをバウムは「機械的ブント」(Mechanical Bund)と呼んだ。

つまり、社会的行為を通して、価値の型の一致やコミットメントが機能上首位におかれる社会では、アソシエーションの主要な目的は、究極的理想を実現する関心へと向いていく。このような社会においては、組織は、いわば人生の真正なあり方に関する究極的な文化的理念に一致するように、社会と人間を変化させるとみなされる。そして、この人生の真正なあり方が、より広く社会に実現されようとするところでは、真の信者と神に見放された者という二つに分かれたイメージが広がる傾向がある。機械的ブントとは、以上のよ

うな理想的な社会のイメージをいう(同前:595-598)。

バウムは機械の優先順位と、パーソンズの唱えたメディアを組み合わせ、理想的な社会の類型を展開した。それは、サイバネティックな階統制に基づいており、システムが進化していくうえでのモデルと考えることができる。バウムは、アメリカの社会はその価値システムから、A-I タイプであるとし、ナチスドイツは G-I タイプであったと指摘している。各国、各社会で歴史的な変遷からタイプ別に分けてみると、興味ある結果が出ている。

バウムは、更に表 3 の 4 類型に関連づけて、コンプレッションの方向と限界、その安定性に関して考察を行っている。

第一に、コンプレッションの方向についてである。コンプレッションは、コードを縮小したり拡大して生じる。デフレッションによる行為の拘束は、A→G→I→L の方向で生じ、インフレーションによる行為の拡大は、L→I→G→A の方向で生じると指摘されている。なぜなら、これらの型は経験と行為の間隔に対して、A,G,I,L の順に寛大さをもって順序づけられているからである。

第二に、コンプレッションの限界についてである。表 3 において、左側に行くほど、また上に行くほど価値の階統性が高い。それゆえ、具体的なアソシエーションが、「下」の列や「右側」の欄に移動していく時には、インフレーションの圧力が発揮される。逆に「上」や「左側」に移動していく時には、デフレッションの圧力が発揮される。このことから、社会システムのインフレーションの下限は、有機的アソシエーションのレベルであり、デフレッションの上限は、機械的ブントのレベルであるといえる。それ以上のインフレ化、デフレ化は、それぞれ人格システムや文化システムの領域に移行することになる。

第三に、コンプレッションの安定性についてである。社会の価値システムが、4 機能パラダイムにおいて、対角線上に第一義的および第二義的機能をおく時、メディアの動態は最も安定する。つまり A-I、I-A、G-L、L-G の価値システムの型が、機能上最も安定性をもつ。なぜなら、これらの型はインフレ、デフレが生じた時、相互依存的に修正する固有の力をもっているからである(同前:599-601)。

以上、バウムのメディアに関する動態分析について述べてきた。機能の動態は、静態とちがって方向と大きさをもったベクトルのように考えられると思う。バウムは、メディアについて、あくまでも定性的にとらえているので、大きさについては述べていない。検討の余地があるかもしれない。

#### 第 4 節 結び

—— 残された課題 ——

行為システムの価値分析から、シンボリック・メディアに焦点をあて、パーソンズとバウムの説を検討してきた。パーソンズのメディアの発見は、『経済と社会』(1956)の中でメ

ディアとしての貨幣を発見したことに始まるが、社会システムから一般行為システムへ係留するメディアを次々に見出し、詳しくは『アメリカの大学』(1973)で論じられている。『アメリカの大学』では1960年代に起こった大学紛争の原因を探るために、潜在的な理論の枠組の重要性を提唱し、経済学における貨幣のインフレ、デフレ・モデルを、社会学のメディアに適用したのである。

パーソンズのシンボリック・メディア論は、完成されたものではなく、まだ理論の展開の途中である。一般行為システムにおけるメディアの性質において、また、インフレ、デフレ現象においてそうである。

バウムは、パーソンズのシンボリック・メディア論を踏襲し、特にメディアのインフレ、デフレ現象がともに存在する状態をコンフレーションと名づけて、その分析をおこなった。それゆえ、バウムのメディア論は、パーソンズのそれと比較して行われたのではなく、パーソンズのメディア論の延長線上で展開されたといえる。

パーソンズは、主に社会システム、一般行為システムのレベル別にメディアを発見し、その性質について究明した。一方バウムは、パーソンズのメディアのインフレ、デフレ論に、時間と空間の概念をとり入れて、両者が同時に存在する状態について検討したのである。そして、社会構造の側面で機能的な優先順位に対応させて、理想的な社会を検討している。それは社会が進化していく上での、一つのモデルを提示している。

パーソンズとバウムのシンボリック・メディア論に共通して言えることであるが、シンボリック・メディアとは一体具体的にどういうものであるか、という問題である。非常に抽象的なので、具体的に表現することは難しい。バウム自身も、「X線が放射線学となったように、メディアの発見は、社会にとってX線のもののようなものである」と記述している(Baum 1976:593)。このことから、シンボリック・メディアの量的な把握の困難性という問題がある。パーソンズとバウムの二人とも、定性的に検討しており、定量的な面については検討していない。

## 注

- 1) パーソンズは、社会システム、一般行為システムのレベルごとにそれぞれメディアを抽出し、呼び方は「一般化されたシンボリック・メディア」であり社会的メディアという語を用いてはいない。バウムは、パーソンズのメディア論を踏襲し、レベルごとではなく一括して「社会的メディア」(societal media)という語を用いている。
- 2) 社会の規範にもられた権利・義務の根拠としての原理で、社会の構成員(member)に受容される条件に係っている。規典とも訳される。
- 3) 経済学でインフレーションとは、社会の流通貨幣量、総需要、総所得のいずれかが、実質総生産あるいは総供給に比べて相対的に急速に膨張することによって生じる貨幣価値の下落と、それに伴う物価騰貴を総称していう。デフレーションとは、インフレーション

ョンと同質的な現象とみるかぎり、貨幣通過量等の収縮による貨幣価値の上昇とそれに伴う物価下落である。しかし通貨収縮に着目すれば、インフレーションとは非対称的な過程をとり、異質的な現象となる。(J. M. Keynes, *The General Theory of Employment, Interest and Money*, Macmillan, 1936. 塩野谷九十九訳, ケインズ 『雇用・利子および貨幣の一般理論』 東洋経済新報社, 1941, pp.228-230)

- 4) インフレと不況が共存する状態で、スタグネーション(stagnation, 不況)とインフレーション(inflation, 物価高騰)との合成語。1970年代に入ってから先進国で生じるようになった。

## 第2章 貨幣メディア・権力メディアのマクロ的分析

### 第1節 はじめに

社会的行為の一般化されたシンボリック・メディアについて、タルコットパーソンズは次のように定義している。「メディアとは、行為者間の相互行為を促進したり規制するメカニズムに作用するもの」で、メディアの働きとして、情報を伝達し相互行為における生産物や要素の配分や結合を制御する点をあげている。すなわちメディアとは、パーソンズによって四分割された下位システム間の相互交換から考え出されたもので、社会の機能を円滑に運ぶための各システム間の投入(input)と産出(output)の関係を媒介するものと考えられる。

パーソンズは、経済学における貨幣のインフレーション、デフレーション概念を、社会学のシンボリック・メディアにも適用し、メディアの価値が低下し各システム間の情報量が増えすぎて、システムの均衡がくずれる状態をメディアのインフレーション、メディアの価値が上昇し各システム間の情報量が減り、極端な場合には情報の交換がほとんど行われぬ、その状態をメディアのデフレーションと名づけた。そして、その状態をパターン化した。

マーク・グールド(Mark Gould)は、パーソンズのメディア論をさらにマクロ経済理論の金融モデルを使って、マクロ社会学を対象に深化させている。すなわち、メディアのインフレーション、デフレーションがシステム間の均衡が保たれている点からどのような時にギャップを生じるのかを、図示している。それは経済学の金融モデルをメディアにも適用したもので、インフレーション・ギャップ、デフレーション・ギャップとよばれている。

第2章では貨幣メディア、権力メディアの導かれる過程、経済と政治の各下位システムにおけるインプット・フロー、メディアのインフレ・ギャップ、デフレ・ギャップ、そして貨幣メディアのシンボルとしての特徴、相互交換過程、役割を検討することを目的としている。

以上のことを通して、システム分析および社会的行為の一般化されたシンボリック・メディアについて理論的展開を深めたい。

### 貨幣メディア、権力メディアの概念

では、シンボリック・メディアとは具体的にどういうものをさしているのだろうか。パーソンズは、メディアについて正式には「一般化されたシンボリック・メディア(generalized symbolic media)」と呼び、社会システムの相互交換体系から「貨幣(money)」「権力(power)」「影響力(influence)」「価値コミットメント(value-commitment)」をあげ、一般行為システムの相互交換過程から「知性(intelligence)」「遂行能力(performance capacity)」

「感情(affect)」「状況規定(definition of the situation)」をあげている。

このうち、社会システムの貨幣と権力の分析が進んでいるのであるが、ではパーソンズはメディアとしての貨幣、メディアとしての権力をどのようにとらえているのであろうか。『経済と社会』(Economy and Society,1956)の中で社会システムを4つの下位システムに分け、社会の適応機能を第一次的に担っている下位システムとして「経済」を、社会の目標達成を受け持つ下位システムとして「政治」をあげている。そして経済学者は経済の目標を「効用(utility)」の生産にあるとしているが、パーソンズとスメルサーは社会学における経済の目標を個人の効用にではなく、社会の効用にある点を主張している。それは次の文章から理解できる。

「欲求を充足させる効用は、『個人』に即して規定されてはならず、社会に関して(社会の価値システムとの関連で)規定されなければならない」。

政治についてはその究極的な価値原理を「有効性(effectiveness)」においているがそれは集合体における有効性と解釈できる(Parsons 1969,新明監訳 1974:67)。

パーソンズにおいて経済、政治の分野は社会の他の下位システム同様に、具体的経験的な集合体としてではなく、抽象的分析的に折出されたシステムととらえられている。

パーソンズは「経済学理論は、社会の他の下位システムから分化した一つの下位システムたる「経済」の典型的な過程についての理論とみなされなくてはならない」とし、「社会システムの理論の中でとくに経済的側面に関するものは社会システムの一般理論の特殊ケースだということになる」としている。すなわち、経済は分化した社会の下位システムであって、全体としての社会の適応機能へのレファレンスが優位にたっている」としている(Parsons, Smelser,1956,富永訳,1958:62,11,32)。

政治については「政治とは、集合的目標の集合的追及という機能に関連するすべての行為の側面として分析的に考えられたものである」としている(Parsons,1964,新明訳,1974:10)。すなわち、パーソンズにあって政治は「集合的目標達成」であり、それは集合体成員に共通の価値を実現する過程である。言い換えるとパーソンズにあって政治とは、公共的な価値実現の過程そのものといえる。

パーソンズは、社会の下位システムにおいて、境界の相互交換、すなわち投入(input)と産出(output)を考え出した。これによると、各下位システムは「生産」諸要素を他の下位システムから投入(input)し、それをシステム内で変換して「生産物」とする。それを産出(output)として他の下位システムへ送り出し、再び「生産」の為に用いられる投入(input)と交換されるとしている。

「システムとしての経済の機能分化」図式に生産の4要素、所得の範疇とを対応させている。すなわち、A下位システムには資本と利子、G下位システムには労働と賃金(=消費者所得)、I下位システムには組織(または企業職能)と利潤、L下位システムには「土地」複合体と地代といった具合である(同前:41,43)。

そしてAg-Lgの交換、(すなわち、適応の分野と潜在的パターン維持の分野における目



標達成機能の交換)は、ケインズ経済学で中軸的位置を占めており、Aを企業、Lを家計ととらえている。そしてそれぞれの市場を労働市場、消費者市場ととらえ、二重の相互交換を考えている。これを媒介するものが貨幣、すなわち「一般化された購買力を示すシンボル」とされ、すべての相互交換の原型とされている(同前:83-86,108-110)。ここにシンボリック・メディアとしての貨幣が誕生する。

次に $A_A-G_A$ 交換についてである。システムとしての経済の適応機能は、生産を維持拡大するための便益=資本資金を確保することにあるとしているが、資本の経済外的源泉は政治にあるとしている。中央銀行・市中銀行・保険会社・投資会社等の金融機関はすべて通常の理解とは異なり、政治的機能をもっているとみなされる。 $A_A$ と $G_A$ は二重の相互交換をし、資本資金市場と生産力市場を構成する(同前:86-92, 110-118)。ここに媒介過程として、シンボリック・メディアとしての権力が生じる。

## 第1節 グールドによるシステムのインプット

グールド(Mark Gould)は、パーソンズのシンボリック・メディアに経済学の金融モデルを適用し、理論的深化をはかっている。本節では、非常に抽象的ではあるが各下位システムの生産物と要素のインプット、アウトプットから導かれるモデルを理解することを目的としている。

グールドは、パーソンズの提示した四機能図式に多少の変更は主張しているが、大体のあらすじについては認め、各下位システムについてサイバネティックな階統制を支持している。外部の交換についてはA,G,I,Lの順に機能するとし、内部の交換については、例えば、 $I_I$ のうえに $I_L$ 、 $I_L$ のうえに $L_I$ 、 $L_I$ のうえに $L_L$ の機能が秩序づけられ、 $A_A$ のうえに $A_G, A_G$ のうえに $G_A, G_A$ のうえに $G_G$ が秩序づけられている(Gould 1976:476)。シンボリック・メディアについても貨幣、権力、影響力、価値コミットメント間にサイバネティックな勢力を認めている。

グールドの関心は経済と政治にあるので、本節の分析も貨幣メディアと権力メディアに焦点づけられる。

### (1) 生産物インプット—経済の場合

各システムに対して提供されているメディア・インプットのレベルは、現在の消費者の支持から抑制されているメディアの量C(S)と、投資された量(I)に依存しているとされ、下位システム生産物(アウトプット、Y)と所得(Y)から引き出された消費の過程との関係をグールドは明らかにしていく。

経済を独立した部門としてではなく、社会システムの中の一つの下位システムとしてとらえていくパーソンズと同じくグールドもその考えに沿っているが、メディア理論の展開に際して経済学の考えを十分に適用している。

グールドは、消費者は個人的な生産的もくろみにとって支持を提供しているということ

から、消費インプットを消費者支持とよび、それは諸資源、所得、生産物を再生させるための機会を与えるとしている(同前:479)。

まず経済の分野において、貯蓄は下位システムの中の利用されていない所得の尺度であるとされ、投資は所得のうち、まだ消費されていないものの利用であるとされている。つまり投資は、生産された「資本」の価値に対して付加の方向へ、メディア諸資源の配分(「支持」の形態)を含んでいとされている。それゆえ、投資は下位システム生産物の総価値マイナス消費された生産物に等しい( $I=Y-C$ )。同様に、下位システムアウトプットの価値が、下位システム所得に等しいので( $S=Y-C$ )、現実の投資は現実の貯蓄に等しくなる ( $I=S$ )。言い換えると、貯蓄プラス消費は下位システムから引き出される所得に等しい。

以上のことをふまえて、社会的下位システムの経済に対して、生産物インプットを包含している一般性のレベルで議論が進められていく。

以下、経済的下位システムにおける消費という意味で経済的消費( $C_a$ )、同様に経済的投資( $I_a$ )、経済的貯蓄( $S_a$ )という用語が用いられており、これらは各下位システムの相互交換と密接に関係している。

経済的消費( $C_a$ )は、L と A の相互交換で貨幣の生産物インプットに関連し、経済的投資( $I_a$ )は、政治システムから経済システム(G と A の相互交換)のなかで「流動的な諸資源の配分、財源の配分」と名づけて言及されている。経済的貯蓄( $S_a$ )は次の 2 つの概念で支えられている。第一に、消費に配分された貨幣と現在の消費から引き上げられた貨幣との間の「要求の順序づけ」に言及され、投資の目的にたいして有効であるという点。第二に、経済的貯蓄は投資市場のなかで現実的に有効であるという点がそれである。機能上、第一番目は A に対する生産物インプットとして I と A の相互交換の境界を横切って生じ、第二番目は、G に対する要素インプットとして G と A の相互交換の境界を横切って生じるとされている。そして経済的貯蓄は、余剰価格の配分、余剰生産物とよばれている。

このように経済的総生産物は A から L と A から G の流れにおいて、実物(非貨幣的)生産物の合計であるとされ、同じ境界を横切る要素(貨幣的)アウトプットである。A から I への要素アウトプットは合理的、非合理的および資金に対する要求の非合理的主張に関係しているとされている。

下位システムで貯蓄を送り出しているレベルの輪郭を描いている生産物インプット(例えば  $I-[生産物] \rightarrow A$ , また  $A-[生産物] \rightarrow G$ )は、つねに配分的である。具体的にみると、A に対する G 生産物アウトプットは、生産物とサービス( $S_g$ )の統制と引替えに流動的な所資源の配分に関係している。ここで経済(A)は経済(G)から配分的な生産物をうけとる。また経済から戻る生産物は、政治的諸資源の可動化に関して配分的である。つまり、政治的下位システムに固有な権力の履行が、「現実の経済的生産物」の利用価値に関係しているといえる。

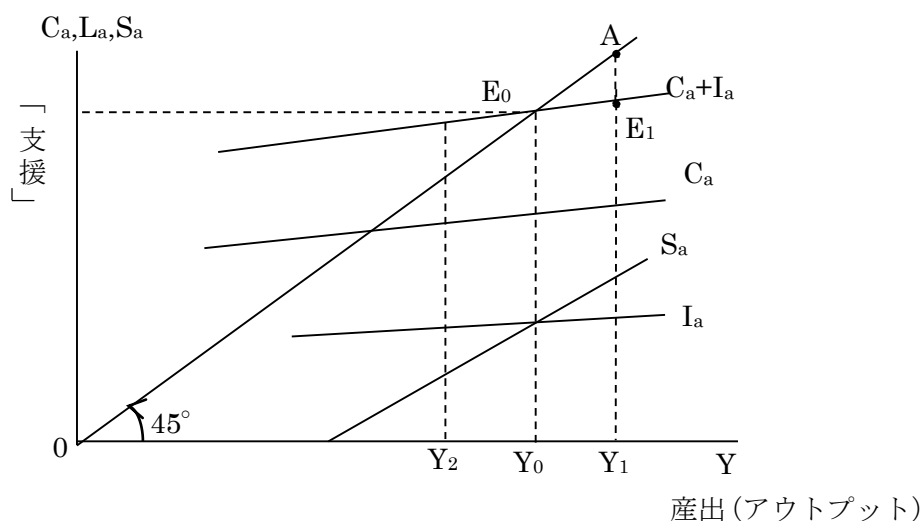


図1 総産出均衡の決定

Mark Gould, System Analysis, Macrosociology, and the generalized media of social action; J. Lonbser, R. Baum, A. Effrat and V. Lidz (eds.), Exploration in General Theory in Social: Essays in Honor of Talcott Parsons, 1976, p.481.

一方、IとAの相互交換の境界では 経済と統合的生産物両方の配分を扱っている。

経済的アウトプットは、消費プラス投資、または消費プラス貯蓄という形で総所得の価値に等しいといえる。このようなモデルの文脈の中で、IとAの相互交換の境界を横切って、所得は定義されている。AとLの相互交換の境界を横切って生じている消費に対して有効なものとして、(A—[要素]→L—[生産物]→A)あるいはGとAの相互交換の境界の貯蓄 (A—[要素]→G+貯蓄) に対して有効なものとして定義されている。

最も単純な例をあげると、あらゆる余剰は投資目的のために配分される。このように、余剰価値は投資された価値に等しく、貯蓄された価値に等しくなるといえる。

以上のような貯蓄、投資の概念のもとで、所得決定モデルについて考察してみよう。

いま 図1において、横軸には産出としての所得(「アウトプット」)、縦軸には投資、消費、貯蓄(「支援」)をとるものとする。C<sub>a</sub>線、I<sub>a</sub>線がそれぞれ消費、投資の所得に対する関係を表すものとすれば、C<sub>a</sub>+I<sub>a</sub>線は総需要と所得の関係を示す。C<sub>a</sub>+I<sub>a</sub>線と45°線との交点をE<sub>0</sub>とすれば、E<sub>0</sub>における総需要と総供給は等しくなる。すなわち、E<sub>0</sub>において全体の所得(アウトプット)の均衡水準Y<sub>0</sub>が決定されることになる。

ところでS<sub>a</sub>線は貯蓄線であるが、これは前述したことにより(I=Y-C, S=Y-C, ∴ I=S) 図1のように描かれ、E<sub>0</sub>においてS<sub>a</sub>=I<sub>a</sub>となる。

いま、実際のアウトプットがY<sub>1</sub>であったとすると、貯蓄は投資を上回り、他方AE<sub>1</sub>だけの超過供給が生じる。それは、ある企業が産出した財を販売しえないことを意味し、在庫品として蓄積し、次期において生産を切りつめることになる。Y<sub>2</sub>の場合には逆となり、いずれにしてもアウトプットはY<sub>0</sub>に収斂していく。このような均衡は安定的であるといわ

れるが、それは  $C_a + I_a$  線が  $45^\circ$  線を左から右に切っているからであり、限界消費性向が 1 より小さい正の定数という仮定に基づいている。

ここで限界消費性向とは、アウトプットが 1 単位増加した時の消費の増加分を示し、アウトプットとの関係を式で表すとつぎのようになる。

アウトプットにおける変化

$$\begin{aligned} &= \frac{1}{MPS_a} \times \text{投資における変化} \\ &= \frac{1}{1 - MPC_a} \times \text{投資における変化} \end{aligned}$$

( $MPS_a$  とは、アウトプットが 1 単位増加した時の貯蓄の増加分を示す限界貯蓄性向で、限界消費性向は  $MPC_a$  と表されている。 $MPS_a + MPC_a = 1$ )

## (2) 要素インプット—経済の場合

各下位システムの要素インプットには意図の明確化、諸資源の定義、機会の定義の 3 つが含まれ、最初の意図の明確化には構成要素として労働、利子需要そして政策決定が含まれている。労働に関する一定の形態が、利子需要と政策決定を伴って所得を支配しているように、3 つの構成要素は同一の性質をもっているのではない。

第二の要素インプットは、下位システムの中で現実に役立てうる配分可能なメディア諸資源の定義に関係している、それは「メディアに対する需要」のひとつの構成要素を定義している。ここで「メディアに対する需要」とは、システムという受け入れ可能な機会を持つ様々なレベルの文脈において保たれうる量をいう。「流動性の優先権」に関する他の構成要素はメディアが中心的に位置を定めているといえるが、それは下位システムによって一般化された投資と所得のレベルに依存しているといえる。

最後の要素インプットは、受け入れ可能な機会の利用価値に関係している。機会の多様性についての指標は下位システムの準処枠に基づいているが、それぞれ異なっている。しかしあらゆるものは、下位システムの中で生産の方向に働き下位システムに対するメディアの期待された回帰に関係している。そして、どのようなメディアの量をも釣り合わせることに役立っている。

経済システムにおける機会について、グールドは、次の三点をあげている。第一に、機会に関するひとつの指標が利子率に含まれている。第二に、機会は有利な投資の可能性に関してある尺度を含んでいなければならない。第三に、機会のレベルは、投資に対して政

治的な刺激に関係のある問題を包含することができる。以上の 3 つである。以下、分析を進めるにあたり、利子率 ( $r_a$ )の増大は生産のための投資、利潤のための投資 ( $O_a$ )に対する機会の減少を意味するということから、利子率 ( $r_a$ )を取り扱っている。以下、利子率 ( $r_a$ )の決定について考察してみよう。

貨幣の需要者は企業と家計であるが、一般に貨幣需要 ( $M_d$ )は利子率を  $r_a$ , 所得を  $Y_a$  とすると次のように表される。

$$M_d = M_d(r_a, Y_a) \quad \dots\dots(1)$$

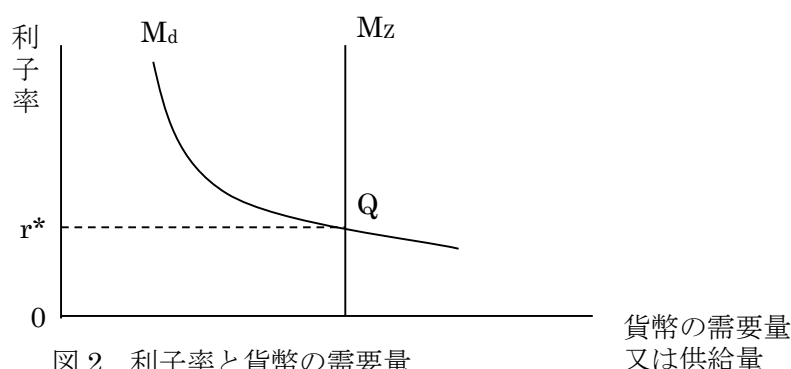


図2 利子率と貨幣の需要量  
Mark Gould, ibid., p.485 を参照

この式の右辺の  $M_d$  は関数関係にあることを示し、利子率が高まると貨幣需要が減少し、所得が高まると貨幣需要は増大するということを意味している。

貨幣を需要する企業と家計は、流動性の最も高い貨幣を手元に保有しようとするが、利子はこの流動性を手離して、より流動性の低い債権その他の資産に代えることに対する代償であるとみなされる。それゆえ利子率が高いほど、企業も家計も貨幣に代えて他の資産を持つとする。逆に利子率が低いほど、流動性の高い貨幣を需要することになる。いま利子率を縦軸、貨幣需要を横軸にとると図2の  $M_d$  曲線のようになる。この  $M_d$  曲線は、全体の所得が一定の場合には企業と家計の流動性選考の程度によって決まる。流動性選考が高いほどこの線は上方に位置することになる。また貨幣需要は、全体の所得の増加関数でもあるから、全体の所得が増大すれば  $M_d$  曲線は上方に移動する。

他方、貨幣の供給は主に政府によってなされ、利子率とは一応独立しているものであるから  $M_z$  線のように描ける。このように、利子率は貨幣需要と貨幣供給の等しくなる  $Q$  点に対応する  $r^*$  の大きさになる。

利子率は、以上のように貨幣の需要関係によって決まるところが大きいといえるが、しかし貯蓄と投資の関係も利子率と密接に関係があるといえる。投資は明らかに利子率の減少関数であり、同時に実質的な全体の所得の増加関数とみなしうる。また貯蓄は、主として実質的な全体の所得の増加関数であるといえるが、利子率の増加関数でもあるとみなすことができる。以上を式で表すと、次のようになる。

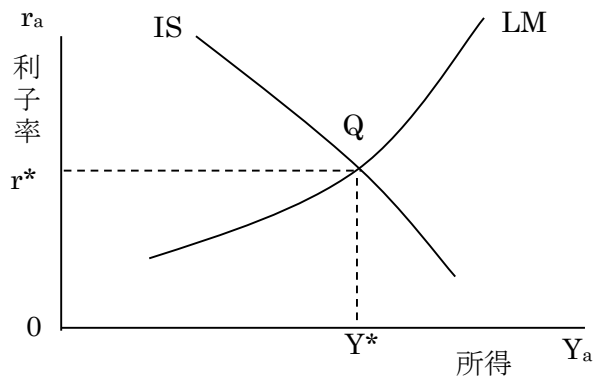


図 3 貨幣と生産市場の均衡  
Mark Gould, ibid., p.486.

$$I_a = I_a(r_a, Y_a) \quad \dots\dots (2)$$

$$S_a = S_a(r_a, Y_a) \quad \dots\dots (3)$$

この式は、投資  $I_a$  も貯蓄  $S_a$  もともに利率  $r_a$  と全体の所得  $Y_a$  の関数なので、投資と貯蓄を等しくさせるような利率と全体の所得の組合せが、いろいろあることを示している。このことを図示したのが、図 3 である。

図 3 では、横軸に実質的な全体の所得をとり縦軸に利率をとり、それぞれの全体の所得の水準において、投資と貯蓄を丁度等しくさせるような利率の大きさを描くと IS 線のようになる。つまり、全体の所得が大になるほど貯蓄が大になるので、その貯蓄に等しくなる投資は、より低い利率水準においてなされることになる。逆の面からいえば、利率が低いと投資が大になる。それゆえ、それにみあう貯蓄は、より高い全体の所得のもとではじめて可能になる。それゆえ、IS 線は右下がりになる。

他方、貨幣の需要も利率と全体の所得の関数であり、次のように表すことができる。

$$M_d = M_d(r_a, Y_a) \quad \dots\dots (4)$$

$$M_z = M_z(r_a, Y_a) \quad \dots\dots (5)$$

したがって、この場合もそれだけの全体の所得水準において、貨幣の需要と供給を等しくさせる利率の大きさを示す線を描くことができる。図 3 の LM 線がそれである。既に見たように、全体の所得の水準が高いほど、貨幣需要と貨幣供給を等しくさせるに必要なとされる利率は高くなる。それゆえ、LM 線は右上がりになる。このように、利率は IS 線と LM 線が交わる Q 点に対応する  $r^*$  に、全体の所得は  $Y^*$  の大きさに落ち着く。この点は、投資と貯蓄が等しくなり、同時に貨幣需要と貨幣供給も等しくなる均衡点である。それは、(2)(3)(4)(5) の 4 つの式を同時に満足させる利率  $r_a$  と全体の所得  $Y_a$  の組合せを示すものといえる。

### (3) 生産物インプット—政治の場合

(1)(2)で下位システムに対する生産物と要素インプットの相互換関係からアウトプットを論じてきたが、グールドは(1)(2)の経済的な例をさらに政治システムに応用している。ここで政治に対して3つの生産物インプットを主張している。政治的支援 ( $I \rightarrow G ; C_g$ )、生産性とサービスの統制 ( $A \rightarrow G ; S_g$ )、そして事務に関する権力の権威化 ( $L \rightarrow G ; I_g$ )である(Gould 1976:484)。

政治的総支援(消費者支援  $C_g$ )において、生産物インプット(権力の用語で定義されるが)は、 $I \leftrightarrow G$ 境界に表れる。それは政治的単位に権限を与えている諸資源、所得を提供している。個人的な単位についてみると、個人は例えば選挙においてひとつあるいは他の党に対する支援のように、集合体への支援を提供する。また支援の資源は、政策を決定する  $G$  から  $I$  への要素アウトプットから生じたものといえる。支援は  $L$  のなかに「堆積システム」をもち拡大していく。

政治的投資 ( $I_g$ )は、潜在的下位システム( $L$ )から政治( $G$ )の権力(=生産物)インプットについて言及している。このインプットは、パーソンズによって「事務の権力の法律に従うもの」と分類されたが、グールドはこの用語を「事務の権力の権威化」と変えている。

政治的な消費と投資(権威化)の両方とも、所得を引き出すための下位システムの配分を含んでいる。消費は「直接の欲求」の満足度に言及し、投資は合法的な政治的制度の世代において、将来のアウトプットの生産に利用される権力の配分を含んでいる。

政治的な貯蓄( $S_g$ )は所得の配分に依存し、次の2つの概念を持つ。第一には投資に対して役立つかもしれない下位システム諸資源の合計の定義を言及し、第二に、諸資源が政治的権威化( $I_g$ )に役立っているのを限定していることである。第一のものは、政治に対する生産物インプットとして、 $G$  と  $A$  の相互交換の境界を横切って生じ、第二のものは、 $L$  に対する要素インプットとして作用する責任の想定であるが、 $L$  と  $G$  の相互交換の境界を横切って生じている。

また  $A$  と  $G$  の相互交換の境界から生じる生産性とサービスに対する統制は、貨幣的投資インプット交換に保証されている。一方、機会の準備は貨幣的に定義された経済的余剰の配分と交換されている。

現実的な権威づけ ( $I_g$ )は、現実的に作用している責任性 ( $S_g$ )に等しい。このように政治的な所得が価値において、政治的な投資プラス政治的な消費あるいは政治的な投資プラス政治的な貯蓄に等しいということになる。

以上をふまえて、政治的なアウトプットと所得を決定するモデルを考えてみよう。

いま、政治的なモデルの場合と並行して、所得、貯蓄、作用している責任性において、生産性やサービスを越えた統制を一定不変のものとし、所得に関係したものとして、投資、権威づけを扱う。これらの関係を示したものが図4であるが、これによると政治的発展のどのように単純な段階の文脈においても、所得の増大は貯蓄のより大きな比例した増大を生ずるといえる。

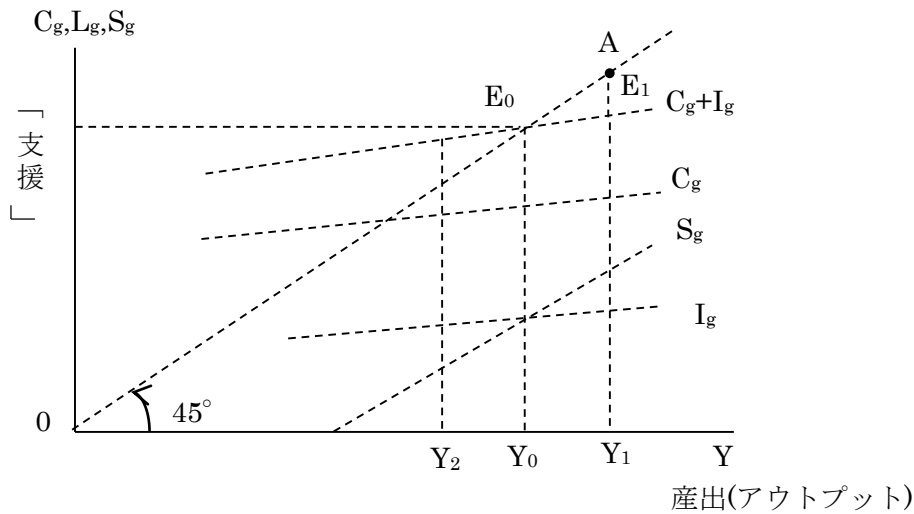


図 4 政治的産出の均衡の決定  
Mark Gould, ibid., p.488.

例えば、限界貯蓄性向 ( $MPS_g$ ) は平均貯蓄性向 ( $APS_g$ ) よりも大きい。それは政治的アウトプットの範囲の増加は、権力諸資源のより大きな比例的な配分を政治の機能の中に必要とするからである。ここで政治の機能は、事務の権力の権威化に対するより大きなインプットに対応する。権威づけ ( $I_g$ ) と貯蓄 ( $S_g$ ) との交点、総供給曲線 [権威づけ ( $I_g$ ) プラス政治的供給(支援)] と  $45^\circ$  線 ( $C_g + S_g$ ) との交点によって、政治的アウトプットの均衡点が決定される。

ここで政治的アウトプットとは、現実的(非権力的)産出物、集団の利害に関するリーダーシップの責任、道徳的責任の合計をさし、政治的所得とは作用している責任と政治的決定力—権力の用語で測定されるとの合計であるといえる。

図 4 において、 $Y_1$  の時、意図された総貯蓄 ( $S_g$ ) は意図された総投資 ( $I_g$ ) を越える。具体的にみると、例えば責任が作用しているという想定の下で、経済的諸資源の準備と利用は事務の権威づけられた権力よりも大きく、この場合、リーダーシップの責任が仮定されたレベルは支援が必要なレベルとは出会わない。かくして、政治的に統制された経済的諸資源のインプットと責任が作用しているという想定の中で、政治的な生産は減少し均衡点に近づいていく。

逆に  $Y_2$  の時、意図された投資 ( $I_g$ ) 権威づけ ( $C_g$ ) は意図された貯蓄 ( $S_g$ ) を越える。この時、アウトプットが増大するように圧力が加わり均衡点に近づいていく。均衡点においてだけ、総アウトプットと総支援が等しくなり、そして総貯蓄と総投資が等しくなる。

このような均衡は、乗数という概念の導入で限界消費性向が 1 より小さい正の定数という仮定に基づいており、式で表すと次のようになる。



アウトプットにおける変化

$$= \frac{1}{\text{MPS}_g} \times \text{投資における変化}$$

$$= \frac{1}{1 - \text{MPC}_g} \times \text{投資における変化}$$

ここで  $\text{MPS}_g$  とは限界貯蓄性向のことで、所得(アウトプット)が 1 単位増加するとその割合は、消費ではなく貯蓄に配分されるであろうことを示している。また  $\text{MPC}_g$  とは限界消費性向のことでアウトプットが 1 単位増加すると、その割合は消費に配分されるであろうことを示している ( $\text{MPC}_g + \text{MPS}_g = 1$ )。

重要な点は、権威づけられた権力の範囲の増大が、一見して表れるかもしれないよりもはるかに大きく、政治的アウトプットの範囲で増加を生み出すという点である。

#### (4) 要素インプット—政治の場合

グールドは、政治における要素インプットは「意向の明確さ」、利子需要、社会的共同体からの要素インプットに関係していると主張している (同前:489)。

第一に利子需要については、政治のリーダーシップの要素が地位に置かれていることに基づいている。利子需要は、政治の生産物の価値に関する影響力を限定している要素インプットであるといえることができる。

第二の要素インプットは、政治に対して経済的、貨幣的諸資源の配分に関係している。つまり政治に対する貨幣のインプットの増加は、権力保有という面で、権力に役立てうる増加を生み出しているといえる。そして経済の場合のように、政治的生産物過剰は保有されている権力の過剰という価値に相当する。

第三の要素インプットは、政治システムの評価的な状態に限界を設けておりシステムの合法性の方向への指標として役立っている。その指標の一つとして、政治システムのなかで履行されている諸価値から知覚された疎外率 ( $r_g$ ) をあげている。政治的疎外の増加は、政治的構造に対して合法性を減少させるといえる。

以上の要素インプットをあげて、グールドは生産市場と権力市場という 2 つの市場文脈において政治的諸変数間の相互関係を論じている。

第 5 図は、権力と生産市場の均衡を表したもので政治的 LM-IS 曲線を示している。このグラフにおける 2 つの曲線の交点は、政治的アウトプットと政治的合法性に関係している疎外率との均衡点である。ここで LM 曲線は、権力市場の均衡の結果として所得 ( $Y_g$ ) と合法性 ( $r_g$ ) との組合せを表したものであり、権力の総量と需要された権力は等しいとされている。そして媒介変数には、統制された権力の量と満足者に本質的に安全に役立つ能力との間の固定された率をあげている。LM 曲線は上方に傾斜しているが、それは所得の高い

レベルでより多くの権力が取引に要求されており、所得が低いところでは権力の取引が少なく機会が減少しているという意味である。

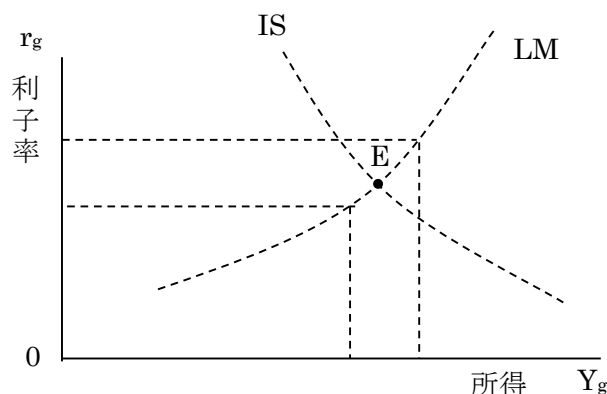


図5 権力と生産市場の均衡  
Mark Gould, *ibid.*, p.492.

IS 曲線は右下がりの曲線で、権力取引の機会が増加すると合法性は増大し、政治的疎外率が減少する。投資が上昇すると、アウトプットの範囲と所得が増え貯蓄は上昇する。

LM-IS 曲線は政治的アウトプットと政治的合法性との均衡点を表すが、また利子需要の範囲を決定するといえる。権力の量の増加は、LM 曲線を外側にそして右側に移行させ  $Y_g$  に置ける増加と  $r_g$  における減少を生み出している。IS 曲線の上方へ、そして右側への移行は  $r_g$  と  $Y_g$  における増加を生じ、政治的合法性の減少、政治的アウトプットの増加を生じている。LM 曲線と IS 曲線は、交点 E で政治的アウトプットと政治的合法性(利子率)との均衡を保つ。

## 第2節 シンボリック・メディアのインフレ・ギャップ、デフレ・ギャップ

グールドは、第3節で述べた下位システムにおける要素と生産物の関係を更に進め、シンボリック・メディアに適用している。彼は政治システムすなわち権力メディアに焦点をあてている。

権力のインフレーションとは、事務に関する権力の範囲が決定を履行する際に、能力を越えている状態をいうとされている。そしてそれは、もし事務の権力に関して与えられた権威づけが、政治によって経済的諸資源を上回る統制を超えるなら、またもし支援が上昇している状況において、作用している責任を仮定するための潜在性が、一定であったり減少したり、あるいはゆっくりと上昇しているなら明らかになるであろう、とされている(同前:493)。

支援のインフレーションは、LM-IS 図の文脈の中であらわされる。

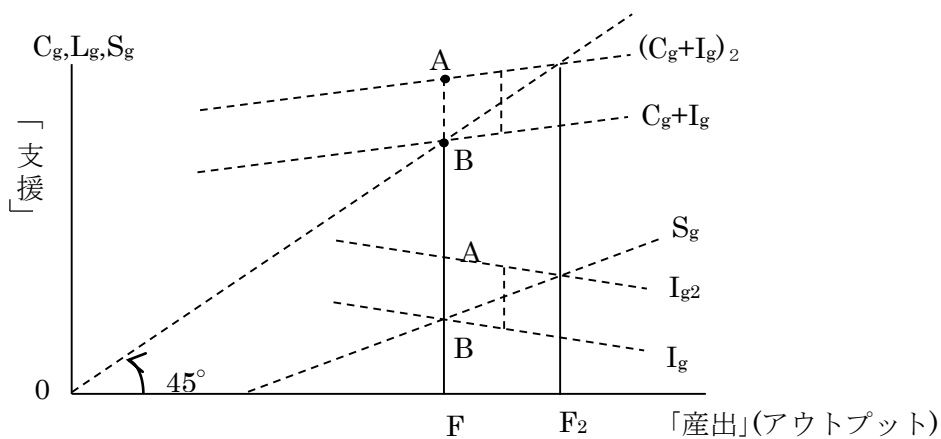


図 6 政治的投資「表」における上昇への移動とインフレーション・ギャップ  
Mark Gould, *ibid.*, p.493.

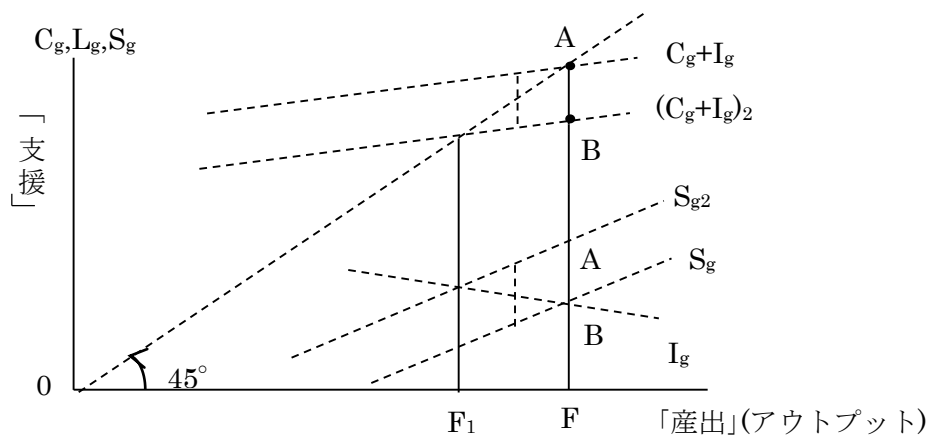


図 7 政治的貯蓄「表」における上昇への移動とデフレーション・ギャップ  
Mark Gould, *ibid.*, p.495.

第 6 図において、点  $F$  はアウトプットの均衡レベルを表し、また利子需要を履行している。いま政治的投資「表」の増加が生じているとする。例えば、選択された事務に関する権力の拡大によって、このことは、総支援曲線  $C_g+I_g$  と、投資曲線  $I_g$  がそれぞれ  $(C_g+I_g)_2$  と  $I_{g2}$  へ上方に移動していることによって示されている。アウトプットは  $F_2$  の方に増加しており、 $F_2$  の点で利子需要が認められる。そこでの利子需要間の差  $F_2-F$  は、政治および「十分に低い需要」「十分に高い需要」によって誘因された需要に等しい。 $F_2$  は、政治からのあるアウトプットがインプットによって適切に正当化されていない状況を示し、この場合、インフレーション・ギャップ  $A-B$  が生じる。それは支援が超過すると、政治的疎外の増加によって切り詰められるまで、インフレーションのらせん形を生み出すという状況である。らせん形は、また図 7 において支援「表」の減少、貯蓄「表」の増加によって、経済

的諸資源の政治的統制を停止させうる。インフレーション・ギャップは、アウトプットのレベルがもう一度点 F に到達する時に閉じる。

権力の拡大は、同じようなインフレーションの圧力を生み出す。図 5 で、もし LM 曲線の外側へ、また右側への移動が、利子需要のインプットによって、適切に正当化されたレベルを超えて政治的アウトプットを増加するなら、インフレーションの圧力が生み出される。「真のインフレーション」の状況を仮定してみると、アウトプットにおける現実の増加は無く、権力の価値の低下が停止する。そのとき、シンボリックな価値の低下は権力の量の増加に近づく。つまりインフレーションの時、メディアは「拡大」している。

他方、政治の分野に対するデフレーションの状況は次のようなところで生じている。すなわち、作用している責任の規定が事務に関して権威付けられた権力を超えている点で、あるいは政治的アウトプットが支援のインプットを超えている点で生じている。図 7 についてみると、全体的にもし貯蓄「表」が上方に移動するなら、総支援曲線  $C_g + I_g$  は下方に移動し、A-B のデフレーション・ギャップが生じる。

デフレーションとは、経済的諸資源が政治的アウトプットの範囲で増加することを示している状況である。しかし全体の意図された支援は、あらゆる正当な利子需要が会うところで、十分に条件を満たしていないアウトプットに低下する。それは、個人の需要者が権力を持つ状況になることである。しかしこの権力はシンボリックな性質を失う危険がある。その結果として、勢力を訴えることは強制の方法となる。

デフレーションの場合、状況はあまり複雑過ぎて、全体のモデルを適切に扱ってはいない。逆説的にいえば、デフレーションの位置に依存してインフレ的ならせん形の結果となりうる。もし権力のなかで、政府がアウトプットの範囲を強制するなら(十分な支援を生み出すことが不可能であるアウトプットに対して)、また、もし政府が政策決定を明らかにするなら(公共のある部分の利子需要を侵犯し、権威づけられた権力の侵犯であることがわかる政策決定に対して)そのとき、システムの均衡は減じられる。

## 第 5 節 貨幣メディアのシンボルとしての特徴、相互交換過程

本節ではシンボルとしての貨幣、貨幣メディアのもつ自由、財とサービス、貨幣メディアの相互交換過程について見ていきたい。

### (1) シンボルとしての貨幣

パーソンズは貨幣がたんに言語に類似しているだけでなく、それがきわめて特殊な言語、すなわち規典のなかで意味を与えられたシンボルの使用によるコミュニケーションの一般化されたメディアである、としている。そして、貨幣は経済的価値で「効用」とよんでいるものをシンボリックに具体化したものであるとしている。

効用とよばれる経済的価値は、行為の状況における諸対象への一種の利害関心の基礎である。シンボル化が生ずるためには、このような利害関心の基礎が十分な明確さと限定性をもって規定されなければならない、とパーソンズはいう。貨幣の場合、効用ある対象が限りなく多種多様であることから、これはきわめて高いレベルの一般性を伴うものである。のみならず、それは連続的尺度によるきわめて厳格な量化を意味するものである、とパーソンズは主張している(Parsons1969,新明監訳 1974:142)。

シンボルとしての貨幣の場合、その一つの意味は、明らかに「獲得」の場、つまり貨幣を使用して効用ある対象への接近と、これに対する統制力を得る機会の場にあるという。そこでパーソンズは、規定すべき状況として次の四つの構成要素をあげている。

第一の構成要素は、効用があるだけでなく、交換システムのなかで利用できるさまざまな対象である。第二の構成要素は、供給源、すなわち一方ではこうした事物の統制力を持ち、他方ではこうした統制力を捨てて、とくに貨幣を含めた他の便益を獲得したがっていると予想される相互行為システムの諸単位である。第三の構成要素は、交換条件が設定される諸条件に関するものであって、そのもっとも重要な条件は、統制力の譲渡を促す方法として特定量の貨幣の提供を制度化するということである。第四の構成要素は、一連の便益交換の両端、たとえば一方雇用者への労働サービスに対する統制の放棄と、他方消費者に対する統制の獲得とを一緒に結びつけることに伴う時間関係の問題に関係している(同前:143)。

パーソンズは、規定すべき状況の構成要素に(1)さまざまな対象 (2)供給源 (3)特定量の貨幣の提供の制度化 (4)時間関係の問題をあげている。そして貨幣を使用する前の交換方法、すなわち帰属主義的交換や物々交換とは異なり、貨幣は以上の四つのすべての点で、全く新しい自由度を導入しているとしている。

ここで、本質的に重要なこととして、貨幣所持者がいかなる特定時間にもしばられていないことを、パーソンズはあげている。その理由に、貨幣は時間がたてば腐るというものではなく、また貯蔵するのに最小限のコストでできる点をあげている。最後に、貨幣所持者は交換条件を受け入れたり、拒否したり、これをかけ合ったりする自由をずっと多くもっているとしている。

規則のなかで最も基本的なものは、貨幣の受け入れ可能性における相互性という条件である。ただ相互的受け入れ可能性のみが、貨幣をただで何かを手に入れる手段としてではなく、機能していくメディアとすることができる。このような中心点から、私たちが財産および契約の制度と考えている規範の網の目が形成される。これこそ一般化されたメディアを構成する複合体に関する規則の規範的枠組みである。パーソンズは、このように主張している(同前:144)。

そして、パーソンズは次のように記述している。

一つまたは一部類のシンボルが社会的相互行為の過程を媒介する際に、一般化されたメディアとして機能するためには、次の四つの基本的な点で、明確な規定と制度的な受け入

れがなければならない。すなわち(1)価値の範疇つまり、どの点に行為単位の欲求が賭けられているかに関するカテゴリー (2)利害関心の範疇つまり、行為状況のなかでこうした価値からみて重要と思われる対象の特性に関するカテゴリー (3)状況規定、すなわち利害関心の実現において「利用」されうる実際の状況の諸特徴を規定すること (4)当面の利害関心を追及するにあたって、正当的な行為様式と正当的でないそれとを区別する規則の規範的枠組みである。これら四つの点のすべてが制度化されて、はじめて「実質的」なものかわりに「シンボリック」なものを受け取る場合に本来伴う危険負担がありとあらゆる行為的単位によって広く引き受けられることが期待されうるのである(同前:145)。

貨幣がシンボルとして機能するには、価値の範疇、利害関心の範疇、状況規定、規則の規範的枠組み、この四つが制度化されて成り立つということ、メディア(媒体)として最も基本的な規則は、貨幣の受け入れ可能性における相互性であるということ、また本質的に重要なこととして、貨幣は自由度が高く、特定時間にしばられていないこと等を理解することができる。

パーソンズは、また次のように記している。

ここで取り扱っている四つのメカニズムは、すべて信用の態度の制度化に依存している。経済の場合、行為者はその利害関心(商品または労働に対する)を市場に譲渡している。そして問題は、彼がどのような根拠にもとづいて譲渡したものの見返りに「公正な価値」を受け取れるという信頼性ないし信用をもつことができるか、ということである。信用の問題には、二つの明確な焦点がある。すなわち貨幣の「不動産」への交換可能性と、行為者にとって正当な期待を現実的および潜在的な交換相手から充足できることを意味する「システム」の機能作用への信頼性がそれである(同前:152)。

価値の範疇、利害関心の範疇、状況規定、規則の規範的枠組みという四つのメカニズムが制度化されて、貨幣はシンボルとして働く。制度化の根底には、信用あるいは信頼が必要であるという。一つは貨幣が不動産に交換できるということ、もう一つは経済システムの機能に対する信頼があげられている。

## (2) 貨幣メディアのもつ自由

経済で流通しているメディアとしての貨幣のもつ自由を簡単に見てみよう。

パーソンズは次のように述べている。

古典的経済学者がいったように、貨幣は交換のメディアであると同時に「価値尺度」である。貨幣は経済的価値または効用を測定し、これを「表示」するものであるが、それ自体は本来の消費という意味での効用をもっていない——それは「使用価値」ではなく「交換」価値、すなわち効用のある事物を所有するための価値をもつにすぎないという点で、シンボリックである(同前:73)。

この箇所では貨幣自体は本来、消費という意味での満足をもっているのではなく、交換することによって満足のいく欲しいものをもつ価値がある、ということでシンボリックな

のである、という意味と捉えることができる。パーソンズは続ける。

だから、効用ある事物を一方では買入れようとする側と、他方では売払おうとする側とのコミュニケーションの仕方である。それは、特定範囲の近親者の間の贈り物の交換がおこなわれるのでもなければ、物々交換、つまり直接相手と一定の品物とかサービスの交換がおこなわれるのでもない場合に、はじめて不可欠のメディアとなる。

貨幣は、次の四つの重要性のある自由を利用者に与える。すなわち、(1)彼は市場で利用しうる品物に対して自分の貨幣を使う自由がある。(2)彼には欲しい品物のために、選択できる供給源を買う自由がある。(3)彼は自分の購入時期を選ぶことができる。(4)彼は時期と供給源との自由があるので、どのような条件を受け入れたり、拒否したり等について考慮する自由がある。これに反して、物々交換の場合には、交渉の当事者は自分の手持ちのものや特定時期には手放したいと思っているものに関して、その特定の相手が何をもちあるいは何を欲しているかという点に拘束されている。もちろん、さまざまな自由の利点がある反面、他者が貨幣を受け入れるかどうか、また貨幣価値の安定性がどうかという点で危険が伴っている(同前:73)。

貨幣はその出来事や物に価値を認めて買おうとする者と売ろうとする者とのコミュニケーションの方法であるという。それは近親者に限られるのではなく、物々交換に限られるのでもないということから、シンボリックとなり欠かせないメディアとなる。そして利用者は貨幣に次の自由をもつという。(1)自分の貨幣を使う自由 (2)選択できる供給源を買う自由 (3)購入時期を選ぶ自由 (4)考慮する自由、というのがそれである。

初期の貨幣については、以下のように記されている。

原始的な貨幣は、まだ品物にごく近いメディアであり、もっともふつうに見られるのは貴金属であって、多くの人びとは依然として貨幣の価値が地金のもつ商品価値に「実質的」に基礎づけられているものと思っている。しかし、これを土台として発達した貨幣制度では、複雑な構造をもつ信用機関が設立されている。すなわち、いかなる近代の貨幣制度も主として金属を現実のメディアとして用いている例はなく、そこでは「無価値な」貨幣が使用されている。のみならず、「無価値な」貨幣の受け入れは、貨幣制度に対する一定の制度的な信頼にもとづいている(同前:74)。

貨幣制度が発達する前、貨幣は貴金属など品物に非常に近いメディアであった。貨幣制度が発達してくると、金融上の信用機関がつくられてくる。銀行、信用金庫などである。貨幣自体は金属と違って価値のないものであるが、金融機関を通して貨幣の移動がある。そこには、貨幣制度に対する信頼があるから成り立つといえる。

最後に指摘しておきたい点として、次のことをパーソンズは主張している。

貨幣が比較的はっきり限定された市場関係の網の目のなかで、はじめて「よい」もの、すなわちメディアとして作用するものであって、この市場関係はいまや世界的な広がりとなっているが、これを維持するためには、各国通貨の相互兌換性を維持する特別の手段が必要であるということである。こうした組織は、一方では貨幣が使われる交換可能性の範

困であるが、他方では法律と法的に責任のある機関との双方によって貨幣単位の保護と管理に影響する一定の諸条件が維持されるそれである(同前:74)。

信頼できる貨幣制度があつて、それぞれの信用機関において貨幣は売買される。その市場は国内にとどまらず世界に拡がり、各国通貨の交換可能性や貨幣単位の保護と管理に係した組織<sup>1)</sup>が必要であり、それによって世界の貨幣秩序が維持される。

### (3) 財とサービス

経済の場合、土地は例外として、あとの三つの要素は社会システムの機能的下位システムからのインプットとみなさなければならない。すなわち労働は「パターン維持」システムからのインプットであり、資本は政治からのインプットであり、マーシャルの意味での組織は統合的システムからのインプットである。のみならず、土地は生産要素としては、たんに物的資源ではなく、本質的には資源が価格とは無関係にシステムの経済的生産に対してあらわす価値からみたコミットメントである(同前:68)。

土地は、経済学では物的資源としての生産要素であるが、パーソンズは本来、資源が価格とは関係なく、システムの経済的生産に対してあらわす価値からみた委託であるとして価値信託システムに関係が深いとしている。このあたりにも、パーソンズ特有の捉え方がある。

経済学において、財とサービス<sup>2)</sup>はひとくくりにして論じられている。ところがパーソンズは、この財とサービスを切り離して捉え、論じている。この点について、彼は次のように記している。

ここで、私たちにとってアウトプットの伝統的な経済的取扱いに対して、一つの決定的に重要な修正をしなければならないものがある。すなわち、これまで「財とサービス」は一括して取り扱われてきたが、それは私たちの専門用語でいえば、「パターン維持」システムの一部である世帯へのアウトプットとして取り扱われることになるであろう。これにたいして、現在の立場では、財、もっと正確に言えば、物的所有対象における所有権は、この範疇に属するが、「サービス」つまり「雇用者」または契約相手側に対する人間的な役割遂行のコミットメントは、世帯へのアウトプットではなく、政治へのアウトプットであつて、その典型的な場合は役割在職者が、集合体の有効な機能化に対する寄与として、職業的役割、つまり仕事<sup>3)</sup>の遂行に献身している雇用組織である(同前:69)。

つまり、従来の一とくくりにした「財とサービス」は世帯へのアウトプットとして扱われる。しかし彼は財とサービスを分けて、財は世帯へのアウトプットに属するが、サービスは政治へのアウトプットであるとしている。サービスを仕事上の献身であるとして、それは集合体の機能に役に立っているとしている。ここにも、サービスに対してパーソンズ固有の捉え方がみられる。



#### (4) 貨幣メディアの相互交換過程

##### [ i ] 経済システム(A)と政治システム(G)との相互交換

A・G(経済-政治もしくは資源動員)相互交換に含まれる範疇は、それぞれ権力や貨幣の「諸形態」ということができる。ここでの相互交換には、古典的経済——または労働-消費の場合のように、第一には一つの要素-相互交換すなわち「有効性の機会」(資本の場合には生産要素)と交換される有効性の要素としての「生産統制」が含まれている。生産力は資金を通じて統制される資源のプール(蓄えておくこと)であるから、それは貨幣要素である。それはまた特定の必要な便益、とくに財およびサービスと交換することができる。しかし、機会 は権力の一形態になっている。

サービスの効用をひきだす有利な地位に立つのは、個人の「欲望」を充足する能力ではなく、集合的目標に対する有効性である。サービスの政治へのインプットにうまく適合する権力のアウトプットを、パーソンズは「有効性の機会」としているが、この機会は、雇用によって被雇用者に与えられ、または契約によって相手側に提供される(同前:70)。

サービスを個人としてではなく、社会システムという視点から、パーソンズは捉えている。それゆえ「有効性の機会」の有効性とは、集合的目標に対するそれであり、機会とは雇われることによって被雇用者に与えられるそれを意味している。

第二にもものは、生産物アウトプットの相互交換である。この相互交換は通例、雇用による「集合体へのサービスの委託」——パーソンズはこれを権力の一形態と解釈しているが——と、サービスの提供者にその義務の遂行に不可欠な便益として「物流的資産の配分」をおこなうこととの間に発生する。——後者は一般化が拡充されていないことが多いが、通例予算資金によってまかなわれる。そこで理念型の場合、流動資源は資金という形態をとるものとされている(同前:128)。 (p.58 参照)

ここで、社会システムのシンボリック・メディアの構成要素について説明しておきたい。

パーソンズは各メディアの規典的側面(code)における二つの構成要素、すなわち一方では重要な「価値原理」、他方では「調整基準」とよばれてきたものを区別して置いている。貨幣メディアでは、「効用」が価値原理に置かれ、「支払い能力」の概念は調整基準に置かれている。効用は経済的意味における価値の基本的「尺度」であり、これに対して支払い能力を維持しなければならないという至上命令は、経済行為において諸単位を導く指針となる一種の規範であるとされている。政治の場合について、パーソンズは経済の効用に相当するものとして「有効性」の概念を採用している。これに対して、調整基準に役立つ用語は、集合的単位にとっての「成功」であるとしている。影響力メディアの場合、デュルケームの用いた意味での「連帯」が、効用や有効性に相当する統合の価値原理であるとした。これに対して、統合の調整基準を適切に定式化するものとして「合意」という概念を置いている。パーソンズはパターン維持システムの価値原理を「保全(integrity,完結性)」と、その調整基準を「型の一致性」と名づけている。(p.19 参照)

経済領域にある貨幣の場合、パーソンズは当該価値原理に効用を置いている。そして彼

は貨幣について次のように記している。

生産はある面では、価値実現の過程である。それは、システムとしての経済において利用可能な財とサービスの効用を増加するため、生産のアウトプットをつうじて、「消費」するために種々の組合せの生産要素を使用することである。貨幣はその古典的な役割の一つとして、効用の尺度となっている。この尺度は、支払能力を通じて生産単位相互間ならびに生産単位と経済以外の相互交換単位とを整序するために用いられる。支払い能力は、その適用において必要な期間にわたり、生産活動の貨幣コストが、こうした活動の収益、つまり生産物の売り上げによって充足できるという期待を意味している。最後に、効用の価値原理を強化しようとするコミットメントと、資源の具体的な配分や生産のアウトプットの分配との接合は、生産要素を購入したり、一般に「財とサービス」とよばれるアウトプットを売るための交換メディアとして貨幣が使用されることを意味している(同前:193)。

また、社会的構造の範疇について見てみよう。

第3章 図4(p.68 参照)のA列とG列は、それぞれ四つのメディアが裁定(sanction,制裁)として作用する脈絡をあらわしているが、それらの配列は、第3章 図2(p.58 参照)のように相互交換システムによるのではなく、それぞれ要素インプットと生産物アウトプットとの制御(control,統制)によるものである。たとえば、貨幣はそれ自体では生産要素ではないが、それぞれA-LおよびA-Gの相互交換システムにおいて主要な要素としての労働と資本とを「制御」する、つまり買うのである。他方、「消費」システムについては、貨幣は、経済のアウトプット、すなわち財(A-Lで)とサービス(A-Gで)をそれぞれ買うのである。

権力のかかわりあいも、これに対応するように考えられる。一方では、権力は有効性の二つの主要な可動要素、すなわち「生産性の統制」(G-Aで)と「個別利益要求」(G-Iで)を「左右」し、規範にアピールすることによって、これらを正当化するのである。他方では、政治過程からのアウトプットの「消費者」ないし受益者は、こうしたアウトプットを流動的資源の統制(たとえば、G-Aにおける予算配分)や価値づけられた目標に対する「リーダーシップの責任性」(G-Iで)という形で左右するために権力を使用することができる。

注意すべきことは、図4では、否定的裁定のタイプと肯定的裁定のタイプが制御のハイラーキーのなかで交互に入れ替わっていることである。否定的状況的な裁定に依存するメディアとしての権力は、肯定的状況的な裁定をもつ貨幣(下の段)と肯定的意図的な裁定をもつ影響力(上の段)との中間に「はさまれて」いる(同前:130-131)。

以上のように、パーソンズは社会的構造のカテゴリーを説明している。

## [ii] 経済システム(A)と信託システム(L)の相互交換

貨幣は、経済に根拠をおいている。この事は、企業体と世帯との間の貨幣の流通であるといえる。パーソンズは、世帯を本来的には経済の単位ではなく、パターン維持下位システムの単位においている。世帯の貨幣所得は、まず経済への労働コミットメントのアウトプット所産である。やがてそれは消費者の「使途」によって経済に「返還」される。これ

と同じような考察が、資本市場や労働および財貨から区別された「サービス」の市場にもあてはまる。彼はこのように世帯における貨幣所得と労働との循環について述べている。(p.97 参照)

(A)と(L)の相互交換では、理念的に世帯と企業体はその単位をなしている。世帯からのコミットメントのアウトプットを労働ないし労働能力とよび、企業体のそれを財とよんでいる。社会システムレベルにおいて一般的メディアを取り扱うに際して、物的事物としての財や行動有機体の身体的業績遂行としての労働を問題とするものではない。むしろ、こうした事物や過程がこれらの配分を含めた意味で統制されるメカニズムをさしている(同前:215)。パーソンズは、財や労働そのものを問題とするのではなく、それらを生産要素および生産物として流通し配分や統制を行うものとして、つまり一般的メディアとして扱っている。

経済からのアウトプットの範疇として、「財」は経済的意味で生産するコミットメントである。これにふさわしい下位価値型象は、経済的合理性である。その実現へのコミットメント(これをウェーバーは「資本主義の精神」として古典的に叙述している)は、他の生産諸要素との「合理的」組合せを企図し、適合的な技術的手続きを管理する義務をおびている。生産における成功は、財や生産品の効用という点から測定される。特定化の一連の諸段階において、企業体はまず生産一般にコミットし、次いで特定商品の生産に、さらに特定市場における配分にコミットする。したがって、これらの経済的組合せの成功は「支払い能力」の基準によって、すなわち適当な時期にわたって、生産単位がその販売の貨幣収入からその操作の貨幣コストのすべてを支払う能力によって測定される。近代社会では、世帯も企業体も、このような意味で支払能力があること、すなわち構成員の金かせぎやその他の財政的資産によって生活水準を「支える」ことが「通常」期待されている(同前:216)。(p.97 参照)

近代社会では、経済の面において支払い能力があることが世帯と企業体、両方にとって期待されている、経済的組合せの成功は支払い能力の基準によって測られる、パーソンズはこのように主張している。

シンボリック・メディアはすべて、究極的には価値システムに根源をもつ一定の規範的期待により、密接に適合するよう行為システムを拘束するために、資源の組合せを促進しかつこれを導いている。経済では、貨幣の観点から評価される組合せの対象となるのは、生産要素である。それゆえ貨幣は、交換メディアだけではなく、諸要素の組合せを通じて実現される生産政策の「合理性」を判断するための評価的メディアとなっている。

貨幣メディアの役割を考えると、交換価値がある、効用という価値尺度がある、金融秩序を維持している等があげられる。

## 第6節 結び

社会的下位システム間の相互交換における生産物と要素のインプット、アウトプットは、システムを円滑にするために働く。グールドは経済的消費 ( $C_a$ ) を  $L$  と  $A$ , 経済的投資 ( $I_a$ ) を  $G$  と  $A$ , 経済的貯蓄を  $I$  と  $A$  体系の相互交換に位置づけて、全体の所得 (アウトプット) の均衡水準は  $C_a + I_a$  線と  $45^\circ$  線との交点に決定されるとしている。それはまた、 $S_a$  と  $I_a$  との交点線上にあるという具合に、総産出の均衡点を求めている。また、貨幣と生産市場の均衡点を、 $LM$  曲線と  $IS$  曲線の交点に求めている。これらはケインズの経済理論に基づいたパーソンズの経済に対する見方を、更に進めたものにとらえることができる。

またグールドは、政治システムにも上記の概念を適用して分析を進めている。ただ政治システムの場合には、あくまで仮定で実態の面で裏付けられていないので、図では実線ではなく破線で示されている。

相互交換過程を媒介するのがシンボリック・メディアである。シンボリック・メディアのインフレ・ギャップ、デフレ・ギャップというのは、総産出の均衡状態からどのくらい乖離しているかを示すものであるが、抽象的な議論で実態面での把握がなかなかむずかしい。政治システムのインフレ・ギャップ、デフレ・ギャップについて、実際に対応している行動については、まだまだ検討の必要がある。

シンボルとしての貨幣メディアの場合、一つの大切なことは、貨幣メディアを使用して効用ある対象に近づき、これを統制していく機会の場合にあるという。そこでパーソンズは規定すべき状況の構成要素に次の四つをあげている。(1)さまざまな対象(2)供給源(3)特定量の貨幣の量の制度化(4)時間関係の問題がそれである。また貨幣メディアがシンボルとして機能するには、価値の範疇、利害関心の範疇、状況規定、規則の規範的枠組みの四つが制度化されていることが必要であるという。

貨幣がメディアとして成立するには、最も基本的な規則として貨幣の相互的受け入れ可能性がある。貨幣メディアの特徴に、自由度が高いこと、特定時間にしばられていないこと等がある。そして自由に関連して、貨幣は利用者に与える自由として主に次のことがあげられている。(1)自分の貨幣を使う自由 (2)供給源を買う自由 (3)購入時期を選ぶ自由 (4)交換条件について、受け入れや拒否を考慮する自由がそれである。貨幣が世帯や企業体でうまく働くためには貨幣制度が重要であり、それは貨幣制度に対する人びとの信頼に基づいていることが理解できた。

貨幣メディアの役割には、交換価値がある、効用の価値尺度になる、金融秩序を維持している等があげられる。

### 注

1) 代表的な例に国際通貨基金(IMF)がある。IMFは1946年に国際金融協力、為替相場の

安定を目的として設立された国際連合の専門機関である。加盟国は2011年において187カ国になっている。

- 2) 財——一般的に財とは人間の物質的・精神的な生活にとって何らかの効用を持っているもの。それを手に入れるために、対価を必要とするものを経済財といい、対価を必要としないものを自由財(空気、川の水など)という。所有権の移転を伴うものは財、そうでないものはサービスとして区別することができる。

サービス——経済用語において、売買した後にモノが残らず、効用や満足などを提供する形のない財のことである。

- 3) 具体的に世帯に向けられたサービスは、極端な場合と考えられるべきであって、そこでは消費者の役割と雇用者の役割が相互に区別されてはいない、とパーソンズは指摘している(Parsons1969,新明監訳 1974:133)。

## 第3章 権力メディアの特徴と問題点

### 第1節 はじめに

第3章では、社会システムの相互交換過程のうち政治システムから析出される権力メディアに焦点を当て、その特徴、権力メディアの相互交換過程、役割そして問題点を明らかにすることを目的としている。また問題点に関連して権力メディアが有効であるか、あるいは有効でないかについて論じてみたい（以下権力メディアを権力と記す）。

### 第2節 権力メディアの特徴

パーソンズのいうメディアとしての権力の特徴について(1)権力の概念(2)権力は強制か、合意かの問題(3)ゼロサム問題についての意見をあげることができる。本節ではこれらの点について述べてみたい。

#### (1) 権力の概念

パーソンズは、経済システムにおける貨幣メディアと平行して、政治システムにおける権力メディアをとらえている。つまり権力メディアを、政治システムに隣接している機能的な下位システムの他の三つ全部の中に(経済、統合、パターンの維持)その境界をこえて循環しているメディアと考えている。

ウェーバーは権力を「社会関係の中で、抵抗に逆らっても自己の意志を貫徹する各々のチャンス」と定義している。ミルズとパーソンズは、ウェーバーの定義から出発しながら、ミルズは政治を権力闘争とみる立場から、Aの権力は必然的にBの犠牲であるとして権力を個別利害のものと考えたが、パーソンズは権力を、集合的ないし公共的な目標達成のための道具とみる解釈を選ぶ。つまりパーソンズによると、政治権力は、集合的または公共的な目標達成のために集合的意思決定を行い、社会システムの動員可能な諸力を結集することによって、状況に働きかける一般的能力を意味する。

経済における貨幣のモデルは、古典派経済学の考えに基づいている。すなわち、(1)使用価値ではなく交換価値として(2)効用の比較可能な価値尺度として(3)それを持ちつづけることによる価値の貯蔵として捉えられている(Parsons 1975:95-96)。権力の場合も同様に(1)使用価値ではなく交換価値として(2)有効性の比較可能な価値尺度として(3)それを持ちつづけることによる価値の貯蔵として、そのメディアを考えることができる。

この段階でのメディアとしての権力の考えには、言語システムのアナロジーにもとづく定式化が一層加味されており、このことでパーソンズは政治学の伝統的な権力論と訣別する。循環性のあるメディアとしての権力は、政治システムの脈絡だけではなくその領域を超えて、他の下位諸システムとの間の相互交換の一般化されたシンボル媒体と考えられた。ここでは特に情報的性質が強調されている。

パーソンズによると、権力は「一定の集合性を拘束する目標志向的決定の実現をはかるために、集合体の構成諸単位の集合的諸義務を活性化する一般化された能力」と定義される(Parsons 1969:360)。パーソンズは権力を過程範疇として析出し、権力概念の複合的諸含意中、とくに制御能力、循環性を問題とした。構造範疇に基本として選ばれたのは、権力行使にチャンスを与える制度的規範の主な複合体としての権限(authority)である。権限とは、限定化できる集合的単位又は一組の単位を拘束している意思決定を実行あるものにし、そのことに貢献する正当化された能力とされている。そして権限の保持者は、集合体(主に政府機関)のもとで特定の権利をもつとされている。

制度化された権力システム概念の第一の焦点は、拘束的義務の遂行が規範的に定義された状態のもとで、適当な役割相互機関によって強く要求されてよい合理的システムであるといえる。権力は状況的に否定的な裁定の脅威、あるいは現実的な負担によって強制される。前者の場合、制止の機能をもっており、後者の場合、懲罰の機能をもっている。そのとき権力は、集合的組織のシステムで単位によって負っている義務の遂行を保証するための能力を一般化されている(同前:361)。

パーソンズは、権力の定義で「一般化」と「正当化」の概念を利用している。「一般化」については、貨幣の場合と同様、権力メディアとしての循環性は、一定の制度的限度内において特殊脈絡をこえた一般性をもたなければならない。権力は貨幣と同様に、それ自体としては無価値であるが、「現金化」すなわち拘束的義務を活性化しうる可能性の期待によって、一般的に受け入れられるとしている。つまりパーソンズは、権力メディアと平行して、権力メディアが拘束的義務を活性化させるために、各下位システム間を循環するシンボリック(象徴的)なものとして作用する。そこに一般化を見出しているといえる。

「正当化」については、権力が法のうちに具体化された規範内秩序の合意のもとに、規定された適切な役割担当機関における特定地位の権限として行使され、その行使が集合的目標達成の機能充足のためであるとき、そのかぎり、それによる集合体諸単位への拘束的諸義務の遂行は正当的に確保され、活性化されうるとしている。この規定の鍵概念の一つは「集合体」であるといえるが、パーソンズは集合体を集合的目標達成のために、成員の拘束を伴う諸過程によって、協同行為に志向するかぎり、その機能は第一次的に政治的であるといえる、としている(同前:362-363)。つまりパーソンズは、権力システムにおける正当化について金融上の単位とシステムの相互の受諾と安定性の信用に匹敵した要素と考えている。

## (2) 権力は強制か、合意かの問題

パーソンズは権力概念について社会システムの一般的理論分析に適合した最も基本的なものとして、他者の行動の意図的な制御能力をおいているが、これについて単純な二人の行為者から成る過程を、モデルを用いて分析を行っている。これはダールのいう権力の概念の文脈に適合させているもので、自我に対して二社択一的に分れる変数を分類している

(図 1)。

第一の変数は、自我が他我から自分の目的を得ることを試みる、というものである。つまり行為単位 A が自分の意思(または目的)に対して、他の行為単位 B の同調性を獲得しようとする時、A の置かれている状況をこえて制御のある状態を使用することによって、A の働きかけが B の状況を変化させるものか、意図を変化させるものか、の区別といえる。

図 1 チャネルと裁定

		チャネル (伝達経路)	
		第一の変数	第二の変数
裁定 の 型	状況的	1. 誘因	3. 説得
	意図的	2. 強制	4. コミットメントの活性化

T. Parsons, *Politics and Social Structure*, 1969, Free Press, p.363.

第二の変数は、他我から自我の目的の達成を保証することを試みることにおいて、自我がとるかもしれない裁定(sanction)の型に関連している。ここで二分法は肯定的裁定と否定的裁定に分れる。つまり A の働きかけに対して B がとる態度を A が評価し、その評価にもとづいて A が B に示すであろう反応が、B にとって肯定的意味をもつものか、という区別である。

そして自我にとって「戦略」の型を次のように分類している。(1)状況的チャネルにとって肯定的裁定の場合、すなわち“誘因”(2)状況的チャネルにとって否定的裁定、すなわち“強制”(3)意図的チャネルにとって肯定的裁定“説得”(4)意図的チャネルにとって否定的裁定“コミットメントの活性化”。

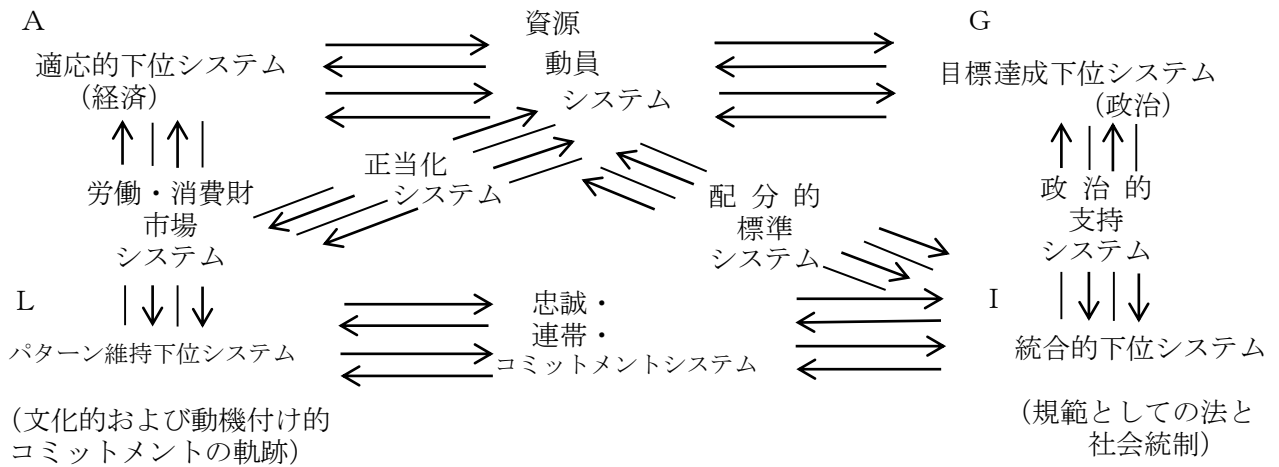
パーソンズは裁定を自我の部分に関する意図的行為として考えている。そしてパラダイムの裁定の肯定的側面と否定的側面との間には、基本的な不均衡があるとしている。このことは誘因や説得の場合、他我から自我の約束された肯定的裁定を“引き出す”ことを課している、ということである。誘因の場合は、他我の“よい意味”での承認は決定が自我によって望まれ、他我にとって“よいもの”として受け入れられる、という認識のうちにある(同前:364)。

結局、従順対不従順の決定の行為にたいする他我の自由は、また変化しやすい。この範囲は、表れない偶然性の要素という点で低い制限がある。そして連続している最初の段階において、自我は偶然性のある意図を他我にコミュニケーションを通して伝える。そこに含まれている裁定は、シンボリックであるかもしれない。

図 1 において状況的チャネルと否定的裁定のもとで、権力を強制というモード(mode-形態)にパーソンズはおいているが、かれは権力を強制、合意どちらの重要な現象であるかという問題に対して、むしろ二者択一的規定を克服し総合的に捉えているといえる。

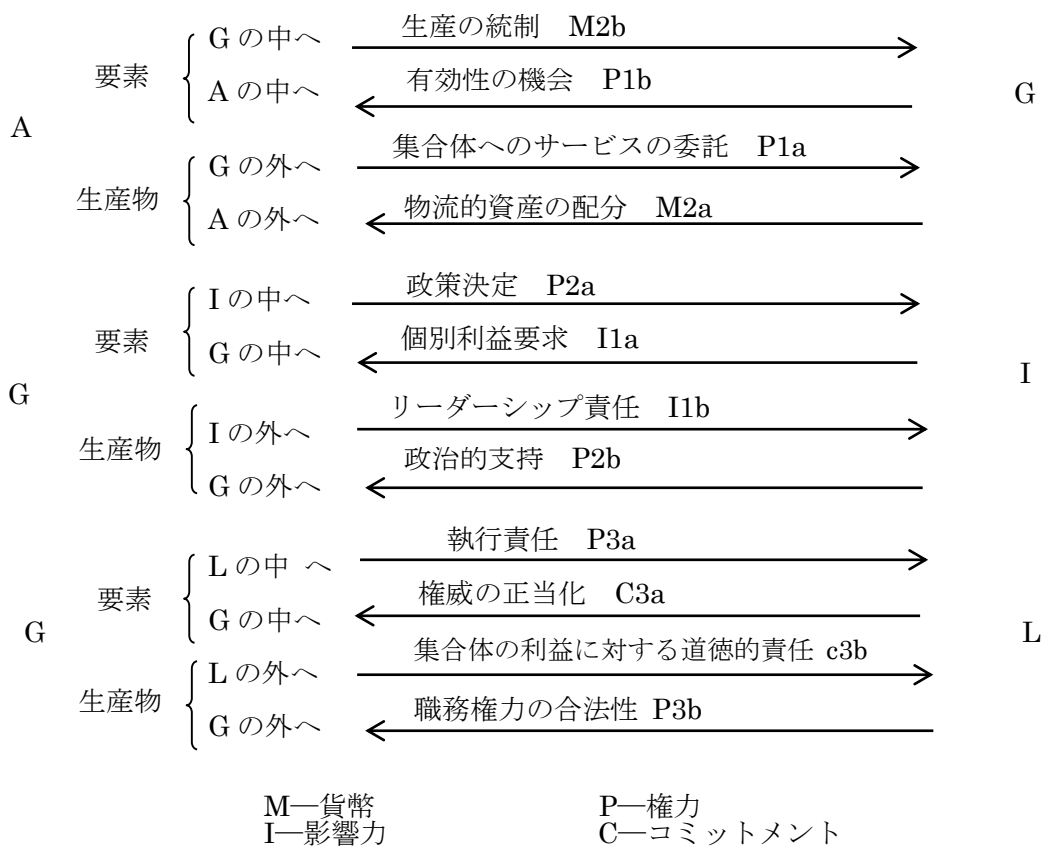


図2 社会的相互交換システムの図



T. Parsons, op.cit., 398.

図3 裁定としてのメディア



1, 2, 3—メディア間の階統的統制の順序  
 a, b —相互交換システム内の階統的統制の順序

T. Parsons, op.cit., 399.

また、かれは循環メディアとしての権力と、制御能力としてのメディアを区別している。つまり、下位システム間の相互交換の循環メディアの概念下において、サイバネティックな情報と、エネルギーに相当するメディアの「生産物」およびその活動に必要な「要素」とが区別される。このような相互交換的状況のなかで、権力の諸資源動員能力が、他の下位集団に固有のメディアやその資源によって条件づけられ、そのような権力が同時に他の諸メディアを動員し、あるいはそれらの接近可能となる関係が関連して重要な問題となる(図2, 図3)。

### (3) 権力のゼロサム問題

ラスウェルやミルズは、権力を伝統的な考えにそってゼロサム現象とみているが、すなわち社会システムにおいて権力の固定量があり、Aの権力の獲得は他の諸単位B、C、D等の権力の損失があって成り立つ現象とみている。他方、パーソンズはゼロサム現象がある状況のもとでは肯定しているが、しかしあらゆる状況のもとでの手段ではないと主張している(Parsons 1969:383)。つまり、権力についてゼロサム現象の通用するかぎられた状況はあっても、複雑な全体システムにはあてはまらないと主張している。

ゼロサム現象の通用する状態として、パーソンズは次の点をあげている。権力の処理能力(調整基準)は、集合的目標達成への成功(統治権)を意味し、制度的には権限が成功の主要基盤となる。その為には権限が他の集合体との相対的地位における鍵となり、その地位に伴った権限行使による権力のインプット(入力)とアウトプット(出力)のバランスが保たれている必要がある。この意味において成功は理念的にゼロサム体系をなしており、循環体系における権力の均衡と安定性を維持する条件となる。しかし、このようなゼロサム状態にある権力の処理能力は、影響力を通じて確保される。成功は政治的支持によって付加価値的に強化され、公益利益のための権力総量の増大がみられ、正当化される。ここにおいてパーソンズは経済システムの銀行における貨幣の信用創造(credit-creation)のメカニズムと理論的に平行するものとして、政治システムにおいて政治支持における物理的強制力の信用創造をみいだしている。

換言するならば、パーソンズは政治システムにおける権力をクローズド・システムにあるとみているのではなく、各システムの相互交換によってその境界が突破されるオープン・システムにあるとみている。この点において、権力のゼロサム概念を全面的に支持するというわけにはいかなくなる。

政治システムの民主主義的選挙制度において、政治的リーダーシップをとる人々が、選挙民によって一般的な権力を授与される。パーソンズは、この一般的な権力の授与を経済システムの「預金」と同じようにみなしており、政治的リーダーシップをとる人々が、銀行業者に似た位置に置かれているとみている。

影響力を媒介とした権力の委託(mandate)について、パーソンズは次のように記している。

「リーダーシップの要素は……直接『利益』を受ける人びと以外の、集合体の諸要素に拘束を及ぼす、ある種の拘束的意思決定を行う自由を獲得することができ、政治システムにおける権力量の正味の総体的な付加価値が創出される」(Parsons 1969:388)。ここで委託とは、集合体全体によってなされる委託の総量が増強されるような仕方で引き受けられる、リーダーシップ責任のうちに含まれると考えられる。

それからかれは、権力システムのなかにさらに自由に浮動する攪乱要素があることを問題にし、時間拡張に関連して信用創造が行われる権力メディアのインフレ、デフレ現象について述べている。

権力のインフレーションとは、権力の信用が拡張されすぎると、期待の達成に対して組織的な基盤が失われ、義務的に投票する試みが様々な種類の抵抗によって抑制される、その結果十分な実行が行われず、つまり、不十分な処理能力しかもたない権力現象をいう。貨幣システムの、過剰な信用膨張の結果生じる“支払不能”に似た状態に平行して考えられている。

権力のデフレーションとは、権力の信用が縮小しすぎる結果、形式のおよび非形式的なリーダーシップの責任を担っている影響力の基盤が崩され、権力の処理能力を停滞させる現象をいう。それは経済恐慌に似た現象として考えられ、デフレーション的な、らせん形をなす典型的な例として、アメリカの政治システムにおきたマッカーシー運動<sup>2)</sup>があげられている。

政治システムにおける権力メディアのインフレーションとデフレーションは、主に政治システムと統合システムとの間にみられる。一般化されたシンボリック・メディアとして、権力を行使するリーダーシップ責任に伴う危険負担と、政治的成功(統治権)を期待する信頼性の基盤における不確定要素によるシステムの均衡攪乱過程によって生じているものとみなすことができる。

### 第3節 権力メディアの相互交換過程、権力メディアの役割

本節ではシンボリック・メディアの導かれる過程、権力メディアの相互交換過程、権力メディアの役割について見ていきたい。

#### (1) シンボリック・メディアの導かれる過程

パーソンズは、シンボリック・メディアの導かれる過程を次のように説明している。

社会分析をする際、構造的に準拠点となるものが本質的に二つある。第一に、社会の十分に分化したレベルでは、構造機能が何を主要な機能とするかという点で、経済、政治、統合的システムが経験的に区別するようになるということである。例として、私的企業と政府の行政機関と裁判所の間には、重要な構造分化があるとしている。第二に、このような単位はすべての状況からの機能要件の大部分——つまり要素<sup>3)</sup>インプット factor input—

一と他方「分業」上の他の単位に寄与する条件——つまり生産物<sup>4)</sup>アウトプット product output の処理——に関連して、他の単位との複数的な相互交換的に包含されている。この種の分化は、それぞれに対をなす単位範疇、たとえば企業体、家族、企業体と政治的機関などに属するあらゆる構造的要素間の二重の相互交換を必要とする。この二重の相互交換的な状況は、帰属的な期待または物々交換のとりきめ、あるいは両者の結合による過程の媒介を不可能にする。それは、一般化されたシンボリックなメディア<sup>5)</sup>の発展を必然的に要請するものであって、私たちはこれに該当するものとして貨幣、権力、影響力を取り扱った(Parsons1969,新明監訳 1974:124-125)。

ここで、パーソンズは次のように主張していると考えられる。社会を構造的に分析する際、その準拠点は二つある。一つは、社会を機能的にみた場合、経済、政治、統合の領域に経験的に分けることができる。二つめに、これらの単位がうまく働くためには生産要素インプットと他の単位に貢献する生産物アウトプットが二重に相互交換して連携している。この二重の相互交換は、帰属的ではない、物々交換ではない、両者の結合によるものではないとされた。そこで諸資源の流通ということから、一般化されたシンボリック・メディアが必要とされ生み出された。貨幣メディア、権力メディア、影響力メディアがそれである。

これらのメディアは、また期待の充足にとって必要な「下位にある」資源の統制を獲得するための用具となる。すなわち「財」に対する貨幣の支出は、システムまたは「集合」のレベルでは、特定の商品の所有を獲得するものではなく、「満足な」市場的条件によって財を利用することができるという一般化された期待になっている。これは消費者に対する経済の主要なアウトプットである。これと同じように、私たちが生産力の統制が有効性の要素であるという場合、その意味するものは特定の生産設備の管理的統制ではなく、細目を明記せずに、市場のメカニズムを通じて経済の一般的生産力の分け前を統制することである(同前:125-126)。

つまり、一般化されたシンボリック・メディアの‘一般化’の意味であるが、具体的なことを意味するのではなく、普遍的に通じる意味と考えられる。そして、これらのメディアをコミュニケーションの道具と捉えると理解しやすい。

相互交換の範例は、図2、図3に表示されている(p.58 参照)。図2には三つの過程があるとされている。すなわち(1)社会システムの分化の型は、それぞれ社会の主要な機能下位システムの焦点となっている四つの機能的範疇によって、分析することができる。たとえば、ここで取り上げられている経済と政治は、このような下位システムであると考えられている。(2)これらの下位システムが互いに統合される主要な相互交換過程は、私が貨幣や権力をもってそれであると推定したような、一般化されたシンボリック・メディアを通じて作用する。(3)ここで問題となっている分化のレベルでは、おのこの相互交換システムは二重の相互交換であり、それは資源や生産物とその本源的なシステムから他のシステムへ「疎外」されることと、物々交換的な相互交換のレベルを越えることを同時に意味して

いる(同前:126)。

社会システムの分化の型は、機能的に四つに分析することができる。それが経済、政治、統合、信託システムであるというのである。そのシステム間の相互交換過程は、一般化されたシンボリック・メディアを通して作用する。ここで一般化というのは、諸資源や生産物の具体的な物々交換というのではなく、それを越えて普遍的に通じる資源や生産物の交換・交流と考えられる。

図 2 は、社会の四つの主な機能的下位システムのなかで、それぞれ論理的に組み合わせられて一対となる六つの二重相互交換のシステムを図示している。この六つの二重相互交換システムには、名称がつけられている。

図 3 は、六つの相互交換システムをそれぞれ横に並列したものである。六つの相互交換のなかで、権力メディアは政治(G)とそれぞれ他の三つのシステムとの相互交換をもっている。これらは経済に対する「資源動員システム」、諸決定と統合システムに対する「政治的支持システム」、パターン維持システムの価値側面に対する「正当化のシステム」である。

この三つのうち最後のものは、メディアとしての権力を含まないで、むしろ権力の制度的使用を規定するものとしての権威(authority,権限)を支配する規範の構造、したがって権威の正当化を含む特殊なケースであるとして、主要な注意は他の二つのものに与えることにしてよいわけであると、パーソンズは述べている(同前:128)。

権力メディアは、政治(G)と経済(A)、政治(G)と統合(I)との間で主に働いている。斜めの関係すなわち政治(G)と信託システム(L)との関係は、権力メディアの使用を制度化している権威に関係しており、権威を正当化するものとして、G-A,G-Iの機能を安定化させるのに役立っている。

## (2) 権力メディアの相互交換過程

### [i] 政治システム(G)と統合的システム(I)との相互交換

統合的システムには、集団構造の結社的側面と価値から区別された規範システムと関連する連帯性が含まれている点の特徴である。この場合、権力は貨幣とではなく影響力と相互交換されるという点、権力は貨幣に対しては「統制的」メディアであるが、影響力に対しては統制されるという点に、基本的な相違がある。

この場合問題の要素相互交換は、上記の意味における「連帯性要素」としての「政策決定」と有効性要素としての「個別利益要求」との間におこなわれる。ぜひとも言うべきこととして、パーソンズは個別利益要求が政治的意思決定に対して「状況を規定する」、ということをおこなっている。他の要素と同様に、個別利益要求は政治過程のなかで変化するのが通例である、としている。したがって、政策決定は、集合的行為に対して利益当事者がある限度で期待できる委託をなすという点で連帯性の一要素である、とパーソンズは述べている。

ところで、「生産物」アウトプットの相互交換は、政治のアウトプットとしての「リーダー

ーシップの責任」<sup>6)</sup>(影響力の一形態であって、権力形態ではないことに注意すべきである)と「結社的」システム——たとえば、政治の場合、権力の政治的「所得」の源泉となる選挙民——のアウトプットとしての「政治的支持」とからなっている。もちろん、注意すべきこととして、これら二つの相互交換の個々の場合における単位が通例同一ではないということである、をあげている——すなわち、政党指導者は支持を得ようと努めるが、他方行政官は一定の政策決定をおこなうといった具合である。この種の「分裂」は、あらゆる高度に分化したシステムを特徴づけるものである(同前:129)。ここでは、政策決定と政治的支持が権力の範疇に入り、個別利益要求とリーダーシップの責任が影響力の範疇に入っていることを理解できる。

#### [ii] 政治システム(G)とパターン維持システム(L)との相互交換

権力はここでは規典(code)として、つまり権威の側面として正当化のシステム(L・G)に含まれている。これはL行とG行における価値原理と調整基準とを結びつけるメカニズムと考えられよう。「完結性(integrity)の要素」として扱われている「執行責任」をとるということは、集合体的有効性だけでなく、社会の最高価値型式の完結性をも含めた価値原理の実現を成功させる責任である。「権威の正当化」は、このような成功への責任を「課する」ものといえよう。他方「職務権力の合法性」は、政治へのアウトプットの一範疇であり、パターン整合性の基準を適用してのものである。さまざまな関連的レベルにおいて、行為は価値コミットメントと整合的におこなわれえようとし、またおこなわれねばならない。このような行為をとらせる合法的権威づけと交換して、責任ある職務保有者は、この権力使用と解釈決定に対して「道徳的責任」を引き受けなければならないのである(同前:132)(p.57参照)。以上のように述べて、パーソンズは執行責任と職務権力の合法性を権力の範疇に、権威の正当化と道徳的責任を価値コミットメントの範疇に入れている。

#### (3) 権力メディアの役割

権力メディアの役割について考えてみよう。

パーソンズのメディアとしての権力の捉え方は、それまでの政治における権力の捉え方と大きく異なっている。それは、権力メディアを政治の領域に留まらせることなく、境界を出たり入ったりして流通するメディア(媒体)として扱っている、ということである。

パーソンズは、権力メディアを次のように定義している。「権力メディアは、当該集合体に拘束を与える目標志向的意思決定を実現するために、構成諸単位の集合的義務を助長する一般的能力である。」(同前:194)。このような意味での権力メディアは、全体としての集合体だけでなく、その意思決定をする諸機関にとっても、有効性の尺度となる。有効性を導く成功についての異なった評価を通じて、権力メディアは資源配分の基準となり、活動してこのような機能を達成するために働いている。そして権力メディアは集合体の秩序を維持するために働いているといえる。

#### 第4節 権力メディアの問題点と検討

パーソンズの権力メディアについての批判点は、最終的には四機図式にもとづいた一般的概念図式に関係してくる。本節ではカートライト(Cartwright, Bliss C.)とワーナー(Warner, R.Stephan,)の論文(1976)を中心に、権力メディアの問題点を検討してみたい。

パーソンズは、経済システムの貨幣メディアに平行して政治システムから権力メディアを抽出しているが、カートライトとワーナーは、パーソンズの提供した権力「メディア」の仮定は、進歩した政治システムの場合(特にアメリカ合衆国において)不必要であり、この意味で権力メディアはパーソンズが引き出した結論において作用的介入している変数にはなっていない、と主張している。

彼らの議論は、次の四つの問題点から発せられている。(1)ゼロサム問題 (2)信頼、適法化を含んだ委託、デフレーションとインフレーション (3)循環 (4)委託の一般化。各々の問題について、権力の一般化されたメディアが、パーソンズが伝達したいと望んだ政治についてメッセージとあまり関係がないと展開されている。以下では、これらを少し詳しくみて検討してみよう。

##### (1) ゼロサム問題

パーソンズは、C.R.ミルズのように権力をゼロサム<sup>2)</sup>概念に全般的にあてはまるとみるのではなく、ある場合はあてはまるが、ある場合はあてはまらないとみている。そしてシステムのアウトプット(経済システムでは効用、政治システムでは有効性)が、システムの遂行力が評価されるうえでの基礎的・現実的な「価値原理」であるということを背景に、経済システム・政治システムにおいて、貨幣メディア、権力メディアが裁定の単に「循環しているフロー(流れ)」で畏が仕かけられており、それはゼロサム概念によって特徴づけられると主張している。

これに対してカートライトとワーナーは、パーソンズの意見に反対で、経済システムと政治システムにおいて変化しやすい貨幣、権力の合計の特質は、ゼロサム概念に本質的には依存していないと主張する(Cartwright and Warner, 1976:643)。経済システムにおいて他の事情が同じならば、貨幣供給の単なる増加はインフレーションを生み出す。そして経済的効用の全体的な「パイ」が増加するかどうか、同様に政治的有効性の全体的な「パイ」が増加するかどうか、ということは重要なことであり、パーソンズはこのことをミルズのゼロサム概念の最初の論破で認めている。そこで彼は富(貨幣)に類似した権力を提示しているが、ここで貨幣と権力がシンボリックな現象になってきた点を、カートライトとワーナーが指摘している。

彼らは「現実の」効用および有効性という価値原理のもとで、全体の「パイ」の状態が増大しうることを研究したいなら、他の諸力の間に政治的および経済的投資の特徴(たとえば、それらの累積的な特徴)が考察されているのと同様に、システムの中で、たとえば使用され

ていない諸資源のように、可動化のレベルを調査しなければならないと主張している。そして可動化のレベルの構造的な特徴が、この点で変化しうる合計システムの説明の「メディア」よりも、より重要であると唱えている。

そしてカートライトとワーナーは、パーソンズの説に対して次の結論をあげている。

(1)メディアの一定の、あるいは変化しやすい供給の問題と同じように重要な問題は、「現実の」価値——パーソンズが効用と有効性とよんでいる——の問題の一定の、あるいは合計の問題である。(2) 高められた効用および有効性を成し遂げるために、変化しやすい合計メディアを仮定する必要はない(同前:644)。

## (2) 信 頼

パーソンズは経済システム、政治システムに対して信頼の高いレベルに依存して主要な問題を強調している。しかしカートライトとワーナーは、これらの現象の理解がメディア概念を通して無理やりなされているとし、メディアに類似して信頼が表面上由来しているものを、三つあげている。

### ㊦ 適法化(正当化)

パーソンズは、我々が貨幣にもっている信頼と我々が権力を授けている信頼との間に類似性を引用することによって、本質的に価値のないメディアを受け入れている。これに対してカートライトとワーナーは、信頼が社会過程に大いに作用している点は認めているが、貨幣における信頼はメディアそれ自体に授けられているが、権力の場合の信頼を支えている適法化は、メディア自体に授けられているよりもむしろ、メディアの利用者と使用に対して授けられていると説く。その根拠としてパーソンズの定義をあげている。「そのとき権力は、義務を拘束している遂行力を安全にするための能力に一般化されている。その時義務は、集団の目標を権力が担っていることに関連して適法化されている。」ここで権力の場合、「能力」よりむしろ「義務」が適法化されている、とカートライトとワーナーは言う。つまり貨幣の場合、非合法的にあるいは合法的に私用に供され費されており、その間中、引き続いてメディアとしてその特徴を留めている。これに対して権力の場合、集団の目標に対して雇われているものとして、パーソンズは社会的に考えていたと彼らは主張する(同前:644)。この点については筆者も同意見である。

### ㊧ 信用

カートライトとワーナーは、パーソンズが行為者と制度の信用をともなったメディアにおいて、システム的に信用を混乱させていると主張している。つまり自我が売っている価値の項目に対して、価値のない貨幣の断片を他我から受ける時、自我は信用を表現する、そして日頃統制をもってはいないが、責任あるリーダーシップを提供することを期待している他我に対して、自我の投票によって表現するのと同様に、これが信用であるとパーソンズは唱えている。これに対してカートライトとワーナーは、第一の場合、自我はメディア交換の量に対して価値目標を放棄している。第二の場合、自我は価値目的に対してでは



なく単なる予想に対して、メディア(彼の投票)の量を放棄していると唱える。

すなわち、自我は銀行にドルを「預金」し政治的指導者の信用について二つの型をパーソンズはみているが、これに対してカートライトとワーナーは、権力と貨幣の間に一般的な類似をいうことに疑問を投げかけている。彼らは貨幣の場合、信用はより大きな報酬が手近に用意されるであろう期待において、「支払」を直接に要求しているが、権力の場合「信用」現象は、社会的行為が一種の「忍耐」を表している現象であると説く。そして貨幣制度と政治制度は信用に強く依存しているが、パーソンズの分析それ自体にとって、メディア概念は現実的な分析を提供しては無く、二つの制度を連結している変数として役立つとはいないと主張する(同前:644)。

この点について考えてみると、各下位システムから考え出される流通媒体をメディアとしてとらえると、貨幣メディアはものに通じるのでわかりやすく権力メディアはより象徴性をおびるのでわかりづらい。しかし信用あるいは信頼を媒介にして考えると、理解できると考えられる。

#### ㊦ デフレーションとインフレーション

パーソンズは銀行と政治、両方において日頃の「破産」がデフレーションの危険を生み出すとしているが、カートライトとワーナーはこの点においても混乱を与えているという。

経済の場合、デフレーションは価値の低下を含んでおり、それゆえ、少なくとも一時限りに貨幣の交換価値の上昇を含んでいる。もしその状態が厳しいなら、貨幣価値の上昇は銀行体制を失敗させ、もしこの過程が十分に長引くものならば金融構造は崩壊し、物々交換への逆戻りが生じる。つまり経済学の場合、インフレーションとは価値が上がると価格が上がり、その結果市場に出回る貨幣量が増大する状態をいい、デフレーションとは価値が下がると価格が下がり、市場に出回る貨幣量が減少する状態をいう。

ところがパーソンズのいうメディアのインフレーションとは、価値が下がると信頼の上昇と結びついて、交換される情報量が増大する状態の社会をいい、メディアのデフレーションとは、価値が上がると信頼の下降と結びついて、交換される情報量が減少する状態の社会をいう。

このように短期間の現象に対して、パーソンズは経済学のインフレーション、デフレーションと、メディアのインフレーション、デフレーションとの関係を、究極的な価値の上、下という点において逆に行っているといえる。この点をカートライトとワーナーは指摘している。この点については、筆者も同意見である。これは経済学の貨幣の場合のものなので、貨幣の増大に上限がない。オープン・システムであるが、パーソンズのいうメディアの場合、人間が主体なのでクローズシステムであり、カートライトとワーナーがいう混乱をおこしているというよりも、むしろそこから生じる解釈の違いと考えられる。

パーソンズは、制度における(例えば銀行、政府)信頼の低下と「デフレーション」を関連づけ、権力メディアの場合、デフレーションはリーダーシップの適応的な潜在性を限定していると主張している。彼は超越したい点として、立場の中にリーダーシップを閉

ざす傾向をあげ、誠実な愛国心や「安全」に関する民族性やマッカーシーの主張を社会制度から信頼を撤退したものとして、「デフレーション的」と表している。しかしカートライトとワーナーは、経済的デフレーションは本質的にメディアの信頼の低下ではないと主張している。

### (3) 循環

貨幣が循環し、経済的交換の運びをよくしていることは直感的に明らかである。パーソンズとスメルサーは、『経済と社会』(1956)のなかで、家計と企業間の交換パラダイムから、異なった社会における貨幣の機能性を引き出した。パーソンズはさらに、権力メディアについて循環の性質をあげているが、カートライトとワーナーはこの点についても異議を唱える。

彼らは、パーソンズが権力に関して貨幣と同様に循環性をあげることに反対で、権力が「貯蓄」されたり「貯蔵」されうることは全く明らかではないとしている。パーソンズのいう権力は、集団一志向性や権威化された使用に対しての定義によって限定されている。分析的レベルにおいて権力は、「政治の境界において、前に後に動いている」として概念化されている。つまり、I—G 相互交換において(すなわち「社会的共同体」と「政治」との間に)「政治的決定」と「政治的支持」が相互交換されている。そしてA—G(すなわち「経済」と「政治」)の相互交換において、「有効性に対する機会」と「集団に対するサービスの委託」が相互交換されている。これらの相互交換が経験的な内容を持っている限り、一方ではそれらは、投票と政治的行為との間の相互関係を言及し、他方では政府や雇用の認容によって全職員の貸借が言及されている。

ここでカートライトとワーナーは、パーソンズが上記のような循環しているメディアの概念を提示していないと主張している。つまり彼らは、循環に関するパーソンズの強調は、制度や集団の間の統合および相互関係における機能の信頼の反復以上のものではないことを、強調している。

カートライトとワーナーが権力の「貯蓄」は不明であるという点について、筆者は具体的な例として、政策決定、政策支持率、その政策が実施された点での統治者と有権者との間の信用の蓄積、それが権力の「貯蓄」であると思う。そして統治者と有権者との間の政策に関する意見の交換から、権力の循環性が生まれると考えている。

図4 社会的構造のカテゴリー (範疇)

統制の階 統制にある メディア	コード		メッセージ		裁定の様式 と 効果の様式
	価値原理	調整基準	制御された 諸要素	制御された 諸生産物	
(価値) L コミットメント	完結性	型の一致性 (一貫性)	資源 賃金 A 忠誠の正当化 I	目的 消費者需要 A 忠誠への要求 I	否定的— 意図的 (コミットメントの活性化)
影響力 I	連帯性	合意	価値づけられた 結合体 L (アソシエーションへの委託) 政策決定 G	共通の価値への委託 L 政治的支持 G	肯定的— 意図的 (説得)
権力 G	有効性	成功	個別利益要求 I 生産性の統制 A	リーダーシップ の責任性 I 流動的資源の 統制 A	否定的— 状況的 (応答の保証)
貨幣 A	効用	支払能力	資本 G 労働 L	サービスのコミットメント G 財の期待 L	肯定的— 状況的 (誘因)

T. Parsons, op.cit.,403.

図5 権力メディアの問題点

パーソンズ	カートライト、ワーナー
<p>(1) ゼロサム問題 権力はゼロサム概念にある場合はあてはまるが、ある場合はあてはまらない。</p> <p>(2) 信頼</p> <p>㉞ 適法化（正当化） 我々が貨幣にもっている信頼と権力を授けている信頼との間に、類似性を引用することによって、本質的に価値のないメディアを受け入れている。</p> <p>㉟ 信用 自我が銀行にドルを預金し、政治的指導者の信頼に投票するという具合に、銀行業と選挙システムの特別な場合に信用の二つの型をみている。</p> <p>㊱ デフレーションとインフレーション 銀行と政治、両方において、日頃の「破産」がデフレーションの危険を生み出す。</p> <p>(3) 循環 家計と企業との交換パラダイムから、貨幣の機能性を引き出し、権力メディアについても循環の性質をあげている。</p> <p>(4) 命令(委託)の一般化 メディアの最も一般的な特徴として一般化をあげ、貨幣の出現によって流通がよくなっている消費者に対する自由の程度と、一般化された権力によって与えられた政治的リーダーシップの自由の程度が平行している。</p>	<p>(1) 経済システムと政治システムにおいて、変化しやすい貨幣、権力の合計の特質は、ゼロサム概念に本質的には依存していない。</p> <p>(2)</p> <p>㉞ 貨幣における信頼はメディアそれ自体に授けられているが、権力の場合の信頼を支えている適法化は、メディア自体に授けられているよりも、メディアの使用者と使用に対して授けられている。</p> <p>㉟ 権力と貨幣の間に一般的な類似をいうことに、疑問を投げかける。</p> <p>㊱ この点においても、混乱を与えている。</p> <p>(3) 貨幣と同様に循環性をあげることに反対で、権力が「貯蓄」されたり、「貯蔵」されうることが、全く明らかではない。</p> <p>(4) 選挙の命令が、「一般的な」命令になっているのは、アメリカの政治システムの構造的な状態にあり、我々の選挙したリーダーの決定の運びをよくしているのは、社会構造で同時におこる多元論であり、アメリカ合衆国の多数の選挙システムにある。</p>

(4) 委託の一般化

パーソンズはメディアの最も一般的な特徴として一般化をあげ、貨幣の出現によって流通がよくなっている消費者に対する自由の程度と、一般化された権力によって与えられた政治的リーダーシップの自由の程度とが平行している点をあげている。そして外国政治における柔軟性、国内の主導権、および強力な選挙区を欠いた生産性プログラムの支援、これらすべては権力の一般化によって運びをよくされていると主張している。つまりパーソンズは、投票に関してアメリカの選挙過程が政治的支持を一般化し、柔軟性とリーダー

シップ決定の運びをよくしたと主張している。

これに対してカートライトとワーナーは、選挙の命令を高い「一般的な」命令に渡すのは、アメリカの政治システムの構造的な状態であるとし、我々の選挙したリーダーの決定(パーソンズのいう「一般化された権力」)の運びをよくするのは、社会構造で同時におこる多元論であり、二重の党、単なる成員、アメリカ合衆国の多数の選挙システムにあると主張している。つまり彼らは、政治的リーダーシップが政治的命令の一般化というよりもむしろ特殊化された選挙、および党のシステムによって強制されていると言っているのである。

そしてパーソンズは、経済における物々交換の道具として貨幣をあげ、政治における物々交換として特殊な政治の二者択一を履行励行するために、候補者に対する投票をあげている。ここでカートライトとワーナーは、物々交換として投票をとりあげたことに異議をとる。パーソンズは貨幣と平行して権力をあげ、自由の程度の運びをよくしているとしているが、カートライトとワーナーは、この自由はそれが投票者に対して限定しているなかで、厳密に見るとリーダーシップによって享受されていると主張している。そしてかれらは、リーダーシップを一般に支持する政策に結びつける「人民感覚」の実行が、少なくとも三つの次元で融合するように思えるとして、次の三つをあげている。(1)エリート主義対人民主義 (2)集団性志向対単位志向 (3)象徴化対本質的な有効性。そしてパーソンズのいう「権力」とは、エリート主義、集団性志向、そして象徴的であると述べている。貨幣は象徴的であるが、最初の二つの次元で考えると中立的であるとしている。

かれらはパーソンズのいう権力概念がアメリカの政治システムの形式的な作用に対して、理論的な合理性を提供しているけれども、「一般化」の見出しのもとで貨幣と平行したメディアとしてとらえることには異議を唱えている。つまり、パーソンズのいう権力概念(その変数—合計の特徴、信頼、委託、信頼の危機)は、その依存性、平等主義と責任性、そしてリーダーシップ決定の促進させている政治的過程を考慮したうえで、制度的および社会的な構造変数から導かれたもので、貨幣に類似させた一般化されたメディアとして引き出されたものである、という意見に彼らは反対している(同前:648)。

この点について私見を述べるならば、カートライトとワーナーは、結局メディアが流通手段とはならないと主張しているが、価値原理と調整基準から成るメディアのコードには一切ふれていない(図4参照)。もし一般化されたシンボリック・メディアを否定するならば、この点についての論議も必要であるだろう。

## 第5節 結び

パーソンズは権力を集合的ないし公共的な目標達成のための道具とみている。彼によると政治権力は、集合的または公共的な目標達成のために意思決定を行い、社会システムの動員可能な力を集めることによって、状況に働きかける一般的能力を意味している。また

パーソンズは状況的チャネル(伝達経路)と否定的裁定のもとで、権力を強制という一形態においているが、彼は権力を強制か合意かと択一的に捉えているのではなく、むしろ総合的に捉えている。

権力のゼロサム現象について、ある状況のもとでは成り立つが、あらゆる状況のもとでは成立しないと彼は主張している。つまり彼は、政治システムにおける権力をクローズド・システム(閉じられたシステム)にあるのではなく、各システムの相互交換によってその境界が越えられるオープン・システム(開かれたシステム)にあるとみている。それゆえ権力についてゼロサム概念は一部であってははるが、全部にはあてはまらないとされている。

さらにパーソンズは、権力メディアについて時間の拡張に関係して信用創造が行われるインフレーション、デフレーションについて言及している。権力のインフレーションとは、権力の信用が拡張されすぎる結果、期待の達成に対して組織的な基盤が失われ、義務的に投票する試みがさまざまな抵抗によって抑制される、そのため不十分な処理能力しかもたない権力現象をいう。権力のデフレーションとは、権力の信用が縮小しすぎる結果、形式的あるいは非形式的なリーダーシップの責任を負っている影響力の基盤が崩され、権力の処理能力を停滞させる現象をさしている。権力メディアのインフレーションとデフレーションは、政治システムと統合システムの間にも主としてみられるという。すなわち、権力を使うリーダーシップの責任に伴って危険を担うことと、政治的成功を期待する信頼の基盤の間に、不確定要素がシステムの均衡攪乱をおこしインフレ現象、デフレ現象が生じると考えられる。

パーソンズによる権力の一般分析は、社会システムについての一般的概念図式を理論的根拠にしており、その権力論には評価もあるがかなり多くの批判もあり、どちらもこの基本的準拠に関わりがあるといえる。主な批判例として、権力論においても縦横に駆使されたアナロジーはまったく非現実的な推論であるとする批判、考察が体制内権力の合法的な動態分析に限定されていることに対する不満をあげることができる。カートライトとワーナーの論文(1976)は、前者に入るとみることができる。

パーソンズは権力概念について、とくにメディアとしての権力を抽出し、貨幣と対比することによって理論化を深めている。パーソンズ自身、制度化されない関係システムにおける諸現象の中の権力は射程外とことわっているが、この点について制度化された権力システムの動態分析上、前提とされた規範的秩序自体は政治権力により不断に再定義されなければならないとする意見がある。

この点についてパーソンズは、政治的意思決定過程のなかに、合議制的(collegial)アソシエーションが成功することが必要と考えている。この点についても、現実可能なようなものと理想的に可能なようなものを、理想的効果によって論述するにとどまっているという批判もある。

以上のことに関連していうと、パーソンズは、社会的な「利害要求」のすべてが等しく政治的意思決定過程に焦点として入力されないという意味で、「関門 (gateway)」があるこ

とを認め、政治的インプット、アウトプット循環システムに不安定要素が伴う現実と言及している。

この現実についての理論化は十分試みられていないが、パーソンズは権力を委託された管轄権を持つリーダーシップ責任が、諸要求の単なる受け入れ以上の公的な決定を行うという要件を強調しており、この決定の際の準拠的な価値理念として、統合システム(I次元)からのからのインプットである「社会的共同体」の意義の重要性に論及している。そしてそれは、全体としての社会を一元的に収斂させる性質のものではなく、多様な種類やレベルのアソシエーションや、地域社会の連帯の統合に根ざすものであることが強調されている。

全体的に権力概念についてみると、パーソンズのいうそれは、一般化されたシンボリック・メディアのうち、政治システムから析出される権力メディアとして捉えられているにもかかわらず、他の側面、例えば、パーソンズ理論は非現実的な推論、理論のための理論という批判、あるいは、制度的な面からの記述的な批判が多い。しかし、日本の政治社会をパーソンズの権力メディアを使って考えると、1986年7月に行われた中曽根内閣時の衆参同日選挙の衆議院議席について、自民党が三百議席を突破したことはインフレ現象の一つの極点とみることができる。その後、リーダーシップの責任と政治的成功(統治権)を期待する信頼性の基盤において、自民党は信用が縮小していくというゆるやかなデフレ傾向に向かっていた時期もあった。

また2001年から2006年まで5年間続いた小泉内閣のあと、2007年7月に安倍内閣のもとで行われた参議院選挙は、自民党が大敗を喫し、民主党が参議院における安定多数を確保した。いわゆる「ねじれ国会」の状況になったのである。ねじれ国会とは、衆議院で与党が過半数の議席をもつ一方で、参議院では野党が過半数の議席を維持している状態をいう。

その後、2009年9月に自民党から民主党へと政権交代があったが、2012年12月に衆議院選挙で自民党が再び政権を担うようになった<sup>7)</sup>。2013年7月の第2次安倍内閣のもとで行われた参議院選挙において、自民党が安定多数を確保するまで、ねじれ国会は続いた。このねじれ国会の状況は、権力メディアについてバウムのいうコンフレーションの状態にあるといえるのではないだろうか。メディアのコンフレーションとは、メディアのインフレ、デフレが混在している状態をいう。すなわち、社会的行為の生産過程で価値、規範、役割、便益という生産要素間に弛みや引き締めが生じ、システムが機能的に混乱する状態をいう。衆参両院がねじれた場合、法案、予算案、条約等の審議が難しくなる。つまり政治システムにおける機能的な混乱、低下がみられる。

それゆえ、政治システムと統合システムの相互交換過程に注目し、権力メディアと影響力メディアの関係、例えば図4の社会的構造のカテゴリーのメッセージの欄にみられる、政治的統治者と有権者間の信頼度を、政策決定、政策支持、個別利益要求、リーダーシップの責任性という点から測り、長い時間的パースペクティブでとらえて経験的調査を積み

重ねていくと、権力メディアの有効性が得られるであろう。

以上のことから、「権力メディアの概念について」(“On the Concept of Power”,1969)の論文は、一般化されたシンボリック・メディアのインフレーションとデフレーションを導くための一つの布石と見ることができる。

注

- 1) zero-sum とは、合計すると差し引きゼロになることをいう。例えばゼロサム社会とは、経済成長が停止して、ある人の取り分が増えると他の人の取り分が小さくなるような社会をさす。
- 2) アメリカ共和党上院議員マッカーシー(McCarthy, Joseph ,1908~1957)の行った反共活動をいう。
- 3),4),5) 翻訳書では、それぞれ要因、産物、一般化した象徴的媒体になっている。
- 6) 「政治的」影響力の場合、その原型的な脈絡は民主的結社の脈絡にある。集合体の意思決定をパーソンズは権力の行使と解釈しており、そのなかには選挙権の選挙権の行使が含まれているとしている。影響力が用いられる脈絡は主に二つあるとして、任意団体は通例、指導性―追従性を軸として分化されるとしている。この際、影響力の一つの焦点は職務の地位にある者としての、あるいは明示的または暗示的な候補としての、リーダーシップの地位なり評判の確立であり、したがって追従者に対しては直接に権力を行使したりする以上に、またインフォーマルなおどしを加えたりなどする以上に、信用の基礎があることになろうという。指導者は、シンボリックの意味で「選挙区」から信用される基礎を確立しようと努める。したがって彼が「地位につく」ときには、彼は、「彼についていったり」ときには、それぞれの能力と役割に応じて地位履行のため積極的に働いてくれる追従者を頼みとすることができるのでなければならない。パーソンズは、しばしばこの点を指摘して、指導者はこうした地位に対して、「責任をとる」ものであるという。ともあれ、リーダーシップの概念が影響力の使用に焦点をおき、職務の概念を権力の使用に焦点をおくものとして取り扱いたい、とパーソンズは述べている(Parsons1969,新明監訳 1974:159-160)。以上のような理由で、リーダーシップの責任を影響力メディアの範疇に、彼は入れている。
- 7) ねじれ国会時の内閣総理大臣の変遷をみると、自民党では2007年7月から2009年8月までに安倍晋三、福田康夫、麻生太郎と代わり、民主党では2009年9月から2012年12月までに鳩山由紀夫、菅直人、野田佳彦となっていずれも短期間で交代している。



## 第4章 影響力メディアの概念とマクロ的分析

### 第1節 はじめに

これまで「一般化されたシンボリック・メディア」のうち、貨幣メディア、権力メディアについて分析を進めてきたが、本章では影響力メディアについて検討を試みたい。

A (適応的下位システム)、G(目標達成下位システム)、I(統合的下位システム)、L(パターン維持下位システム)という各下位システム間の相互交換を媒介するものとして抽出されているメディアのうち、影響力メディアはIシステムに係留している。IとG、IとL、IとAの相互交換はそれぞれ政治的支持システム、忠誠・連帯・コミットメントシステム、配分的標準システムと特徴づけられ(図1)各システムを循環しているメディアの生産物と要素のインプット、アウトプットの関係は次のようになっている。IとGの相互交換の要素のうち、Iへのインプットとして政策決定、Gへのインプットとして個別利益要求、生産物の

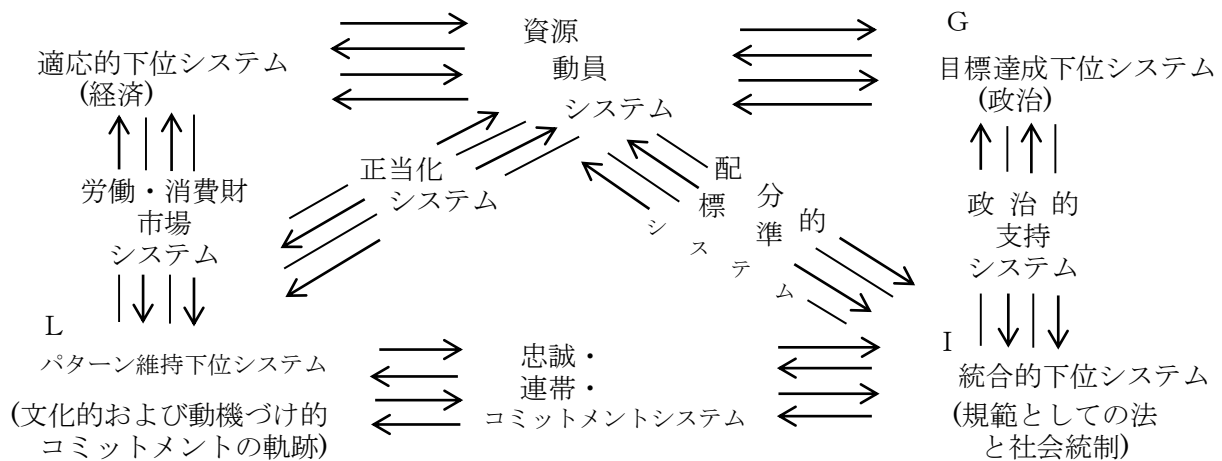


図1 社会的相互交換システムの図

T. Parsons, *Politics and Social Structure*, 1969 : 398.

うち、Iのアウトプットとしてリーダーシップの責任、Gのアウトプットとして政治的支持がうち出されている。同様に、IとLの相互交換の要素のうちI、Lへのインプットにはそれぞれ価値づけられたアソシエーションへのコミットメント、忠誠の配分に対する正当化、生産物のうちI、Lのアウトプットにはそれぞれ忠誠への価値を基礎とした要求、共通価値へのコミットメントがあげられている。またIとAの相互交換の要素のうち、I、Aへのインプットには資源に対する要求の主張、資源の配分に対する基準、生産物のうちI、Aのアウトプットには要求の正当化に対する根拠、要求の順序があげられている(図2)。

各メディアは上記のメッセージ(message, 伝言)をもって各システム間を循環しているといえる。

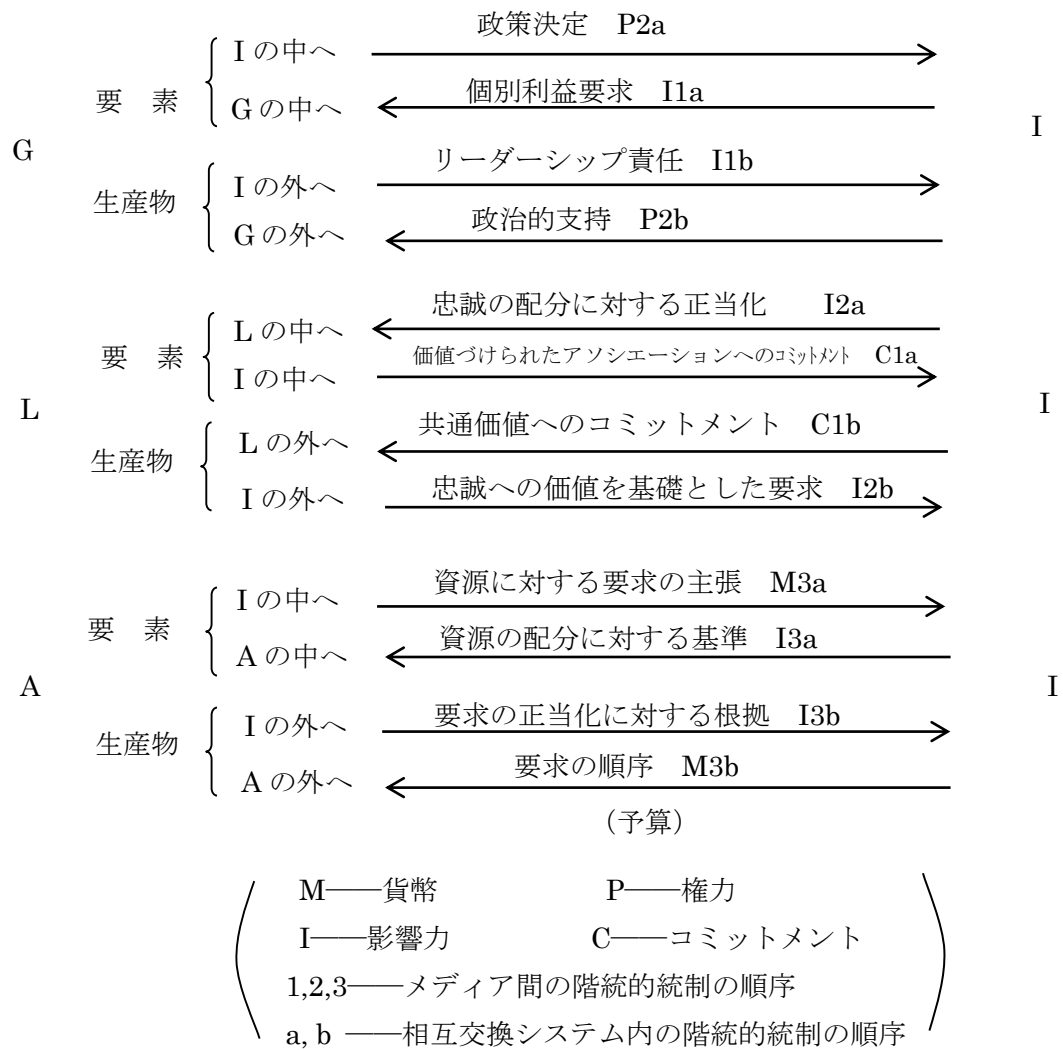


図2 裁定としてのメディア  
T. Parsons, op.cit.,399.

価値原理と調整基準から成るコード(code, 規典)については、貨幣メディアでは効用と支払い能力が、権力メディアでは有効性と成功があげられているが、影響力メディアの場合、その価値原理には連帯性が、調整基準には合意があげられている。では、影響力メディアについてなぜ上記のメッセージやコードが導かれるようになったのであろうか。それは影響力メディアをどのようにとらえるか、から来ていると考えられる。

本章では影響力メディアに焦点をあて、その概念を理解すること、そして動態分析として影響力メディアの信用に基礎をおいたインフレーション、デフレーションを明らかにし、そのインフレ・ギャップ、デフレ・ギャップについて検討したい。そして影響力メディアの意味、相互交換過程、機能について考察することを目的としている。

## 第2節 影響力メディアの概念

### (1) 影響力の概念

はじめに影響力メディアの概念について、理解を深めたい（以下、影響力メディアを、影響力と記す）。

パーソンズによると、影響力とは意図的行為を通して、他者の態度と意見に効果をもつ方法であり、その効果は他者の意見を変化させるかもしれないし、変化させないかもしれない。あるいは変化を可能にすることを妨げるかもしれないし、妨げないかもしれないと定義されている(Parsons 1969:405)。つまり影響力とは、その効果は潜在的なものかもしれないし、顕在的なものかもしれないが、他者の態度と意見に効力をもつ方法ということができる。そして、影響力は社会的相互行為の一般的メカニズムとして、経済システムから析出される貨幣と平行して論じられている。

一般にコミュニケーションの一手段として言語があげられるが、パーソンズは経済システムから析出される貨幣を単に言語に似たものではなく、非常に特殊化された言語、つまりコードの中で意味を与えられているシンボルの利用を通して、コミュニケーションの一般化されたメディアであると考えた。そして次のような4つの基本的なカテゴリー（範疇的枠組）を提示している。[1]価値のカテゴリー、行為単位の必要性がかけられていることに関係している。[2]個別利益要求のカテゴリー、これらの価値の見地から重要な行為の状況における目的の性質に関係している。[3]状況規定、関心を実行する際に展開される行為の状況の特徴に関係している。[4]当該の関心の追求において、行為の合法的な型と非合法的な型との間を区別している規則の規範的枠組(同前:409)。以上のカテゴリーにおいて、貨幣の経済的価値は“効用”であるとされている。

「一般化されたシンボリック・メディア」は、普通さらに命令法をもっており、それらは情報を伝えるだけというよりも、むしろ“結果を得る”方法であるとされている。例えば貨幣の提供を受諾したり拒否したりという反応を要求しているように、決定を伴う対象に直面しているというのである。そして、そのようなメカニズムは、接近や提案等に対して他の行為者の反応を引き出すことによって結果をもたらす、という構造的で意図的な試みの方法であるとされている。貨幣の場合、それは提供の問題であり、権力の場合、義務を活性化しているコミュニケーション決定の問題であり、影響力の場合、行為を示唆していることに対する理由、あるいは“正当性”を得る問題であるとされている。では結果を得るこれら様々の型を、パーソンズはどのように分類しているだろうか。

彼は、人の行為単位(自我)が他者の行為単位(他我)を担うことを考えることによって結果を得ることを試みることが出来るとし、そこにモードの非常に単純なパラダイムを提示している。それは二つの変数からなり、第一の変数として“チャンネル”(伝達経路)を、第二の変数として裁定の型をあげている。前者は、他我がおかれている状況または行為しなければならない状況をこえて、潜在的な統制を通して自我の作用することをどのように試みる

かということであり、あるいは他我の意図に効果を持つことを通して、彼の状況における変化とは独立して自我の作用することを試みるかどうかということ、状況的チャンネルと意図的チャンネルに分類されている。後者には、自分の行為の複雑さにおいて自我を仲介する他我に対して偶然の結果の性質に関係している。すなわち、ひとつの側面として他我が直面する種類の決定をあげており、他我にとって有利な裁定をなすものか、あるいは不利な裁定をなすものかということ、肯定的裁定と否定的裁定に分類されている（図3）。

		チャンネル（伝達経路）	
		第一の変数 第二の変数	第二の変数
裁 定 の 型	肯定的	状況的	意図的
	否定的	モード メディア	誘因 貨幣
		モード メディア	抑止 権力
			説得 影響力
			コミットメント の活性化 コミットメント の一般化

図3 チャンネルと裁定  
T. Parsons, op.cit.,413.

二つの変数の縦横の分類から4つの型の組合せが生み出され、それぞれモードとして誘因、抑止、説得、コミットメントの活性化があげられている。そしてそれに対応するメディアとして貨幣、権力、影響力、価値コミットメントが対応されている。内容については、次のように説明されている。[1]誘因…自我の提案を伴い自我の応諾に関して状況的に有利な偶然性の提供によって、他我から好都合な決定を得るための自我の試みである。[2]抑止…応諾を得るために自我の担当している試みである。否応諾が状況的に不利を受ける不確定の脅迫に対して、他我に合わせるような方法でコミットメントすることによって行われる。[3]説得…応諾を得るための自我の試みである。他我の観点からみて状況の有利さから独立し、自我が望んでいるように行うことは自我にとって“よいことである”という理由を提供して行われる。[4]コミットメントの活性化…応諾を得るための自我の試みである。自我の観点からみて自我が望んでいるような行為を拒否することは、自我にとって“悪い”という理由を提供することによって行われる(同前:410-411)。

ここで相互行為システムの適切に構造化されたタイプにおいて、上のような目的を獲得するために強められた能力が可能とされ、必要な状況において、そのようなメディアを受け入れる提供された危険が仮定されたものが、一般化されたメディアのパラダイムである。

ここで誘因の一般化されたメディアとして貨幣が、抑止には権力、説得には影響力、コミットメントの活性化には価値コミットメントというメディアが考え出されている。この

うち、誘因と説得は要求された反対を肯定的に引き出す方法であり、抑止とコミットメントの活性化は裁定された応答と要求された応答との間の逆の関係を確立することをもくろんだものである。否定的裁定の場合、拘束している義務の遂行を動員させるものとして、非応諾の場合における(状況的な場合、“懲罪”であるが)否定的裁定の負担の状況的関連を伴っている。しかし自我の目的は罪することではなく、遂行を保証することである。ここで権力が、有効な集団的行為の関心において(目標達成)、拘束している義務の遂行を保証するための一般化された能力として考え出されている。これと平行して意図的な側面において、コミットメントの一般化(価値コミットメント)が状況的裁定のどのような脅迫にも準拠することなく、関連している義務の遂行に動機を与えるための能力として考えだされている。しかしこの場合、非応諾の傾向は自我の部分の評価的表現に出会うとされている。自我の部分は、義務に関して他我の感覚を活性化するものを助けるために計算されており、もし他我が自我に従うことに失敗するなら、罪の感覚で自我に脅迫されている。

社会システムの中で作用しているメカニズムとして、一般化されたメディアの他の側面を見てみると、行為単位の観点から個人的にか、あるいは集団的にかメディアがその利益を促進している手段として役立っているといえ、そしてこのことは、様々な偶然の機会にその利益が多少とも安全であるというもつで状態の構造化を含んでいるといえる。システムの観点からは統合や他の重要な機能に混乱を起こすことなしに、その過程に安定性をもたらすことができるという一組の状態であるといえることができる。

では、意図的チャンネルのもつで肯定的裁定をなす説得と影響力メディアについて考えてみよう。メカニズムの4つの全部は、ここで真相の態度の制度化に依存しているといわれ、ここに意味があるとされている。経済学の場合、行為者は市場および問題に対する彼の利益が、自分が放棄したことに対して代わりに“失敗の価値”を受け取るであろうという信頼あるいは信用を持つという基礎にもつづいて、彼の利益を放棄しているとされている。ここで信用の問題について、2つの異なった側面があるとされている。つまり、“システム”の機能において“現実の資産”や信頼の中にある貨幣の兌換性というのは、行為者が現実的および潜在的な交換のパートナーから多かれ少なかれ彼の合法的な遂行を期待されている。同様に権力の場合、彼は強制的な自足を放棄するかもしれない。その時、彼は自分自身を適切に自分の強い腕だけで防御することができない。権力システムに対して、彼は自分の安全を委託することにおいて、一方には強制的な手段の現実の統制を伴って彼のできる限りの同一化があり、他方には彼への期待が彼の個人的な期待をこえた働きを通して、有効に達成されるだろうという信用がある。なぜなら、権力システムは有効であるからである。

以上のようなシステムの中で、影響力が適合していく為には何をシンボルとしているのか。パーソンズは、貨幣の場合には効用をシンボル化し、権力の場合には集団行為の有効性をシンボル化していると主張する。そして影響力の場合、統合的遂行のパラダイムにとっては連帯性を主張している。

影響力は説得の一手段と考えられている。それは確かな方法における行為に対して、他我の部分に関しひとつの決定をもたらしている。貨幣の場合、決定をもたらす本質的なものとして経済学者は“財とサービス”を唱えているが、影響力の場合、本質的に説得者のカテゴリーとして彼は次のように唱えている。つまりこのカテゴリーの最も明らかなメンバーは、他我が“彼自身結論を引き出す”ことが出来るということからの“事実”である。すなわち、自我は他我に情報を与えることによって説得することができるとしている。バーンズは、他我が自我を情報の信頼できる資源であると考え、自我は情報を独立的に検証する立場にないことを通してさえ(あるいは自我は困難なことを欲していないことを通してさえ)自我を“信用している”というある基礎があるにちがいないと考えている。

金属としての貨幣は、多くの商品の間のひとつではなく、特別な安全性と最大の交換可能性というある性質を持った一つであると考えられ、同様に強制一脅迫の道具としての力をもっているとされている。同様に、信用をよびおこす可能性をもった説得に関する比較可能な本質的資源について、社会的相互交換をもって考えられている。つまり、他我が自我を説得するような自我の努力を信用するというもとの、最も好都合な状態として連帯性の相互関係があげられ、きずなを保有している限り、自我は他我を欺くことに関心をもつことができないとされている。そして、連帯性のゲマインシャフト型にある共通の属性が、自我と他我にとって相互の影響力の本来の基礎であると主張されている。その共通の属性は影響力システムに対してのものであり、貨幣システムに対する金、権力システムに対する力と同等のものであるとされている(同前:417)。

他のどんな相互交換システムにも似て、自由なコミュニケーション・システムの安定性は、性質と契約の規範に対応し一組の制度化された規範による規則に依存しているといわれている。そしてお互いに、人々のアソシエーションの規範的に規則化しているタイプの状態と関係しているとされている。規範的な準拠については、貨幣の場合、準拠は契約の自由の範囲内で効用の意味において価値が等価であるとされている。ここで価値尺度としての貨幣機能、すなわち価格は交換可能な項目の評価の声明であるとされている。権力の場合、準拠は所与の制限の中で権威化することであり、自分自身の他に全体として関連している集合体と、他の確かなカテゴリーもまた拘束する決定をなすために権力が権威化されている。具体例として、選挙の規則にもとづいた投票があげられている。

影響力の場合、対応している概念として情報あるいは目的が一般化された声明の規範的な正当化であるだろうとされている。影響力はシンボリック・メディアであるので、情報の項目に関して正当化が必要である。正当化の機能は、現実に項目を点検(確認)することではなく、正当化を点検するための他我の必要性なしに項目を述べるために、コミュニケーターの権利にとっての基礎を提供することである。影響力の正当化に関して非常に重要なカテゴリーは、普通“評判”によって意味されるといえる(同前:418)。つまり能力、信頼できること、良い判断等に対する高い評価をもった誰かによって評判がつくられるなら、より重さをもつであろうということであるが、ここで誰かとは誰をさしているのだろうか。

すなわち集団の成員をなしている個人なのであるが、パーソンズはここで、ゲマインシャフト連帯性に基礎づけられたものとして影響力について語っており、例えば家族をあげている。他にも、地方のコミュニティにおける成員、職業上の集団、あるいは専門家の集団の成員であってもいろいろなレベルで、“その集団の一員である”という意識は影響力を強めている一要素であるといえる。

## (2) 影響力の型

パーソンズは影響力の型を分類するにあたり、影響力システムが閉じられたシステム(closed system)ではなく、オープン・システム(open system)であることを前提とし、“循環している”メディアとして影響力を考えている。これは貨幣や権力にも共通している性質である。そして影響力について、仮説的ではあるが、次のような分類を行っている。[1]“政治的”影響力 [2]“信託”上の影響力 [3]異なった忠誠に訴えることを通しての影響力 [4]規範の説明を志向しているものとしての影響力(Parsons 1969:419)。これはA、G、I、Lという四機能図式にてらしてみると、[1]—G [2]—A [3]—L [4]—Iに対応しているものとみることが出来る。

本節では上述の各々について検討を試みたい。そして(1)~(3)を説明する重要なガイドラインは、一般化されたメディアの他の3つ(貨幣、権力、価値コミットメント)の各々の兌換性のうちに横たわっているとされている。

### [1] “政治的”影響力

政治的影響力について、パーソンズは典型的な構造的文脈を民主主義的アソシエーションにおいている。それが政治の分野や私的なアソシエーションといういくつかのレベルのどの段階にあっても、民主主義的なアソシエーションは現在ある政権の構造によって特徴づけられているとされ、その現職にある人は全体として集団を、それゆえ集団の各々の能力を持つ成員を拘束するある決定をするために権威づけられている。集団の決定をすることをパーソンズは権力の行使と解釈し、その権力の行使は選挙という手順の中で、選挙権の行使を含んでいるとしている。というのは、権力は政権に対して選挙される人が決定する投票の総合であるからである。そして、彼は影響力と権力との間には直接に重要な関係があるとしている。

また、彼は影響力と権力を二つの主要な文脈のもとでとらえている。アソシエーションはリーダーシップ—従者の軸では典型的に区別されており、ここではこの軸が使われている。その時、影響力の一つの焦点はリーダーシップの立場、あるいは評判の確立であるといえる。政権の在任者、あるいは明らかな候補者と当該の従者との間には、従者に与えられる特別の情報と権力の直接の行使を超えて、また非形式的な脅迫や誘因等の巧みな操作をこえて信用の基礎があるとされている。その結果、リーダーシップを持つ人は、“支持者”によって自分が信用されているということから、地位につく時、自分に協力する従者を数えることが出来る。そしてそのような地位に対して、指導者は“責任を果たす”というこ

となる。このようにしてパーソンズは、影響力の使用の焦点としてリーダーシップの概念を、権力の使用の焦点として政権の概念を扱っている。政治的影響力は選挙の過程でふつう使用される。その時、選挙の支持という型をとるか、あるいは政策の決定に影響を与えることによって、政権の在任者に役割を与えているといえる。そこにおいて、影響力には基本的に“信用”の使用があるといえる。

政治的影響力をパーソンズは、集団の目標に機能しているという文脈で作用している影響力と考えている。それは一方ではリーダーシップの地位のために影響力を働かせることによって、他方ではリーダーの決定や方向に効果をもつように、一般化された説得と考えられている。

## [2] “信託” 上の影響力

ここで関連している文脈は、集団目標達成の効果的な決定ではなく、集団とそれらの目標の両方が二つ以上から成るというシステムにおいて、諸資源の配分と二つ以上から成る目標間の正当化は疑わしいというものである。諸資源は目標達成の観点から通常成功の見通しを統制しており、原則的に機会の要因を構成している。それゆえ、諸資源の配分を担っている影響力は特に信用の重要な分野であり、この場合には貨幣と関係があるとされている。

経済が社会構造の特に関連している社会では、貨幣が最も重要な配分のメカニズムとなっており、それゆえ信託機能の焦点は、資産の配分にあるとされている。なぜなら資産の所有者は市場のチャンネルを通して、現実の諸資源の指摘された配分について統制を要求する地位に順にあるからである。

貨幣の側面について、パーソンズは例を予算に設定している。このとき予算は規範のレベルで作用しており、価値のレベルで作用しているのではないとされている。要求を主張している人々は、予算を得る為に権力を具体的に使用するかもしれず、あるいは様々な他の手段を使用するかもしれない。しかし、特別な役割は影響力によって演じられるとされている。

影響力が予算において最も明らかに作用しているのは、次の2つの分野においてである。ひとつは、配分的な過程が規則化されることによる規範の確立である。例えば税法の制定や似たようなものを通してのように、他は、配分における自発的な寄付金の財政困難のように“純粹”な市場過程の修正を通してである。

そして、“信託”という用語は最も一般的に次のような場合に使用されている。つまり“利害のある党”が援助なしに自らの利害を守ることを期待されえないところで、例えば所有権を持つ政府は“受託者”によって少数者の利害を守るという具合に、すなわち自らの行為を通してさえ、受け入れられる標準に当てはめる為に、信用される人々が個人的な財政上の関心によっては命令されないという具合に。

## [3] 異なった忠誠に訴えることを通しての影響力

政治的影響力の場合、中心的な構造的焦点はリーダーシップの軸上にあった。信託上の



影響力の場合、それは希少資源配分の問題であった。そしてこの場合、それは社会における団体の一員(メンバーシップ)としての多面的な構造にあるといえる。これは役割をもつ個人と集団の両方のレベルで作用している。個人にとって、特に成人男性の場合、普通最も重要な例として、親戚関係と職業との間の関係をあげる事が出来る。

我々の社会は急速に変化しており、そのような変化の原則的な側面のひとつは、新しい集団の発生である。その時新しい集団に対する忠誠、また古い集団への忠誠の減少が問題となる。この時人は、新しいコミットメントに参加するか、古いコミットメントの犠牲となるか、あるいは両方か、あるいは忠誠の間のバランスの移動についての決定に直面しているといえる。

[3] の影響力の現在のタイプが関係しているのは特殊な集団と下位集団の文脈において、仮定している特殊な責任の正当化の問題である。その時人は、集団への参加を通してコミットメントに対する多種多様な需要に直面し、彼が成す配分的な決定を正当化し、それをもつような地位にしばしば置かれる。その時、そのような過程を統治しているコミットメントの規範構造は次のことを含んでいる。つまり、一方では共通の価値に訴えること、他方では複数の忠誠間のコミットメントの配分に関して具体的な決定を統治している規範の主張を含んでいる。その時影響力のカテゴリーとして、第一に行為者が具体的な事件としてこの集団の責任を引き受けるべき口実であること、第二に規範の主張は、再び具体的な配分のレベルにおいて、そのような決定を統治し続けるべきである、の二点があげられている(同前:424)。

価値にもとづいたある意味で一般化されたコミットメントは、関係している行為者の“信用”を含んでおり、そこでそれらはますます一般化される。例えば、職業においてさえ、保有の規則が雇用上の組織を束縛しているというのは一般的な規範であり、そのような地位にある在職者は、道理をわきまえた注意を与えるだけで権力を放棄していると一般に考えられている。パーソンズが関心をもっている影響力の範囲として、コミットメントの柔軟性の範囲で作用しうる変化のための正当化と、コミットメントがなされ達成されるためより一般化された忠誠との間には関係があるということがあげられる。

#### [4] 規範の説明を志向しているものとしての影響力

これまで議論された影響力の3つの型は、“政治”“経済”“パターン維持”(構造的な側面において価値コミットメント)システムとよんでいる社会の機能的な下位システムに対するものであるといえる。[4]の最後の型は、規範の解釈に対して方向づけられる影響力として統合的システムに対して内在的であるとされている。そして原型として、法的過程の控訴の段階における法律上の規範の解釈の過程があげられている。

規範は価値コミットメントと特別の関心をもつ状況的な緊張との間に媒介しており、それは形式上これらのレベルでの変化に対して、絶えず繰り返す調整の中にあるとされている。さらに社会システムにおけるそれらの主要な機能は、統合(I)であるので一致(調和)の問題は特に重要とされている。影響力の範疇は、最上の例が裁判官、および法律家の名声に含まれていると方向づけられ、統合的な影響力の他の例として、例えば宗教的な伝統におけるよう

に、倫理的な規範の解釈の分野があげられている。

[1]~[4]の影響力の型に批判的な共通の事実は、“説得”のメカニズムにあるとパーソンズは強調している。それは特別な事実、特別な目的、特別な義務や委託、特別な規範的な規則に訴えることを越えて一般化されている。一般的な主張はこの意味で影響力について枝分かれしたシステムがないために、次のように言われている。つまり、影響力を実際に獲得するよりも、信用できないということ(不信用)が浸透している雰囲気の方がより多くあるか、あるいは信用のレベルで特別な方法で信用されうる誰かについては、より厳密に情報の詳細を導入することによってのみ生じうるか、どちらであろうと、それは複雑な社会に対して、重要な柔軟性の範囲を非常に制限しているとされている。

### 第3節 影響力メディアのマクロ的分析

#### (1) 影響力メディアのインフレーション、デフレーション

影響力メディアを社会システムにおいて量的に固定した量であるか否かを考える場合、それはメディアの作用の“ゼロサム”状態に一般に属するかどうかという問題に関係してくる。貨幣、権力など一般化されたシンボリック・メディアにとって、あるレベルで、またある文脈で“ゼロサム”状態は保有されていると、パーソンズは考えている(同前:383-395)。例えば貨幣の場合、固定した貨幣所得を伴った単位にとってひとつの目的に対する支出の増加は、ひとつあるいはそれ以上の他のものに対する減少によって均衡されているに違いない。同様に権力システムにおいて、選挙の規則は一人の候補者に対する投票の考え方が、他者に対して否定されるに違いないことを意味している。そして権威をもつ人々は、多くの決定をする際に相反した二者択一の間で選ばねばならない。しかしこのことは重要ではあるが、それは全体の話ではないとパーソンズは主張している。

ゼロサム概念が適合することに失敗している貨幣分野で、最も親密な例として銀行を通じた信用の創造をあげている。ひとつの側面において、貨幣は所有権の最も重要な対象である。ある意味で銀行の預金者は、銀行に所有権を貸している。しかし銀行は、その預金者の資金に対して管理人として単純に行為しているのではない。銀行は借業者に、契約期間に一定の割合を貸している。銀行は借用書がローン(貸付け)の期間中支払の立場にいる限り、もちろん利子や他の料金も支払うのであるが、彼らに“浪費する”ことを可能にしている。このことは、同じドルが循環しているメディアとして二重に機能していることを意味している。その結果、銀行は循環しているメディアの量に付け加えて目立った網を構成している。

他のメディアに関して銀行の現象に類似した現象があるかどうか、そして金融の分野で信用があるかどうか、が問題となる。権力の分析の分野で有力な意見は、それらはないということのようであるが、しかしパーソンズは、この立場には問題があるとしている。そして最も適切な文脈として民主主義的アソシエーションにおいて、リーダーシップの権力

の贈与とリーダーシップによるその権力の使用の間に関係をあげている。権力の場合、選挙されたリーダーは、選挙権の行使を通して権力の贈与の受取人であるとされている。この贈与は典型的にそして原則的に取り消しできるものであり、投票者は自分の支持を競争相手の候補者に転換することができることとされ、その時これは権力の“預金”として議論されうるとしている。そしてシステムにおいて、政権のどこかの在任者によって決定がなされることを通して、政治的利益の“獲得”に対し預金者の整理にあるとされ、このことは均衡された権力の量が、あるところで循環しているシステムをなしているとされている。

政治家たちがしばしば利口に範囲を確立しうるように、構成者たちが構成している構成要素によって、要求しているよりも他に委託をしていると仮定することは安全である。政治的に組織された集団は、政府を含んでメカニズム、言い換えれば、新しい権力の増大の創造について、このタイプの徳によって社会的変化を創り得る機関として多分役立ちうるとされている。

影響力についても同様に議論がなされ、ゼロサム概念が特に適している例は、政治的影響力であるとされている。そして影響力の分野において、銀行や信用との類似は忠誠の配分に関連して最も明らかであるとされている(同前:428)。

パーソンズの分析の仮定は、高度に多元的な社会システムに対し、それが適応していることに基づいているとされている。ここで高度に多元的な社会システムにおける忠誠の配分は、固有な議論の重要性が含まれている直接の評価に全体としてもとづいてはいないが、しかしその委託は、影響力に反応して広くつくられているとされている。もし影響力の量に変化があるなら、その時権力と委託に対して与えられうる能力が再配分されることによって、メカニズムとして作用することに影響力は可能になるとされている。そのような委託を命令する影響力は、ある機関の手に多かれ少なかれおかれうる。

パーソンズは、アメリカのような社会で上記のことがなされているのは自発的なアソシエーションを通しており、そのアソシエーションは政治的な機能に本来関係していないと主張している。そのようなアソシエーションの加入者達は、銀行における預金者に類似している。彼らはアソシエーションやそのリーダーシップに対して、彼らの“名前”を貸している。しかし、そのようなアソシエーションは、しばしば影響力の増大を単純に集めている以上である。つまりそれは、循環の中で影響力の全体的な量につけ加えて効果を生み出す。このことは個人の成員としてではなく、アソシエーションの成員として“名前”を使用する方法において、独立した判断を行使するリーダーシップに比例して生じる。

このようなアソシエーションは、“影響力銀行”の一種として考えられている。そして貨幣銀行に似て、そのようなアソシエーションは、形式的に“支払不能者”である。それゆえ、もしアソシエーションの成員が厳密な勘定を要求するなら、このことはリーダーの行為の自由を破壊する。そして“影響力信用”のデフレーションを導く。この効果は、順に多くの機関の信用を剥奪する。そのような影響力調達者(アソシエーションの成員)の支持に依存して、彼らが重要な委託をするために与えることができる基礎の多くの働きを奪って

いる。しかしより通常の場合で、そのようなアソシエーションのリーダーは、彼らの自立の受け入れ可能な限界の判断を動かしている。事実彼らは成員による明らかな権威のレベルをこえて、アソシエーションの名前の委託を行なっている。そうすることにおいて、彼らはシステムの中で循環している影響力の純量をつけ加えており、彼らが望ましいと保有している原因を助長する方向で、社会の中で委託の分配の効果をもっている。

以上のように、経済的例におけるデフレーションとインフレーションに類似した現象を、権力や影響力の分野でも同様に見出している。権力の分野においてデフレーションは、厳密な権威と強制的な裁定を信頼して、究極的には脅迫と物理的な力を使用することによって連続的に増大している。

影響力の分野においてデフレーションは、より広い忠誠に対する疑問への増大と狭い集団主義への疑問の増大を通して、評判と信頼の名のもとに信用の基礎を侵食する方向へ進んでいる。

他方、影響力に対するインフレーションの過程は、しっかりした情報であるが確認されない状況のもとでも、権威的な特性に対して要求の拡大を行っている。また称賛に値する目的の公表は、機会が生じた時に現実的な委託によって支持されることが少ない(同前:428)。

パーソンズは、影響力のインフレーション、デフレーションに関してこれ以上の分析を行っていないが、以上の分析は試験的であるといえる。しかしこの枠組は、理論に対してのみならず、影響力の調査に取り組む際にも有益な枠組みを提示しているであろう。

## (2) 影響力メディアのインフレ・ギャップ、デフレ・ギャップ

(1)で影響力のインフレーション、デフレーションについて検討してきたが、次にさらにおし進めてインフレ・ギャップ、デフレ・ギャップについて考察してみよう<sup>1)</sup>。影響力のインフレ、デフレは政治的影響力に顕著であるので、ここでは特には政治的影響力に限定してとらえてみたい。政治的影響力を扱う際には、GシステムとIシステムにおける生産物と要因の相互交換をさらにおし進めて考えることになる<sup>2)</sup>。

政治的影響力のインフレーションとは、政権に関する影響力の範囲が政策決定を履行する際に能力、すなわちリーダーシップの責任（個人のレベルではなく、全体社会のレベルで考えるならば、政府又は政党の責任のほうが妥当のように思われる）を超えている状態といえることができる。それはもし政権の影響力に関して与えられる評判が、政治によって経済的諸資源を上回る統制を超えるなら、またもし政治的支持が上昇している状況において、作用している責任またはその潜在性が一定であったり、ゆっくりと上昇しているなら明らかになると考えられる。

図4において、 $C_i$ ,  $I_i$ ,  $S_i$  はそれぞれ政治的影響力の消費、投資、貯蓄を表すものとする<sup>3)</sup>。点Fは政策支持とリーダーシップの責任の均衡点を表し、また利子需要を履行している。ここで利子需要とは、政策支持を続けていくことによって生じる政権への信用度が増すこ

とを意味していると考えられる。いま例えば、選択された政権に関する影響力の拡大によって、政治的影響力の投資の増加が生じているとする。このことは、総支持曲線  $C_i+I_i$  と投資曲線  $I_i$  が、それぞれ  $(C_i+I_i)_2$  と  $I_{i2}$  へ上方に移動していることによって示されている。アウトプットすなわちリーダーシップの責任は  $F_2$  に増加しており、 $F_2$  の点で利子需要が認められる。そこでの利子需要間の差  $F_2 - F$  は、政治および「十分に高い需要」「十分に低い需要」によって誘因された需要に等しい。 $F_2$  は政治からのあるアウトプットがインプットによって適切に正当化されていない状況、すなわち政治的支持が均衡点より増大すると、それに対応するリーダーシップの責任性が増えすぎて応じきれない状況が生じ、この場合インフレーション・ギャップ  $A - B$  が生じる。それは政策支持が超過しすぎると、政治的影響力排除の増大によって切り詰められるまで、インフレーションのらせん形を生み出すという状況である。インフレーション・ギャップは、リーダーシップ責任のレベルがもう一度  $F$  点に到達するとき閉じられる(図 4)。

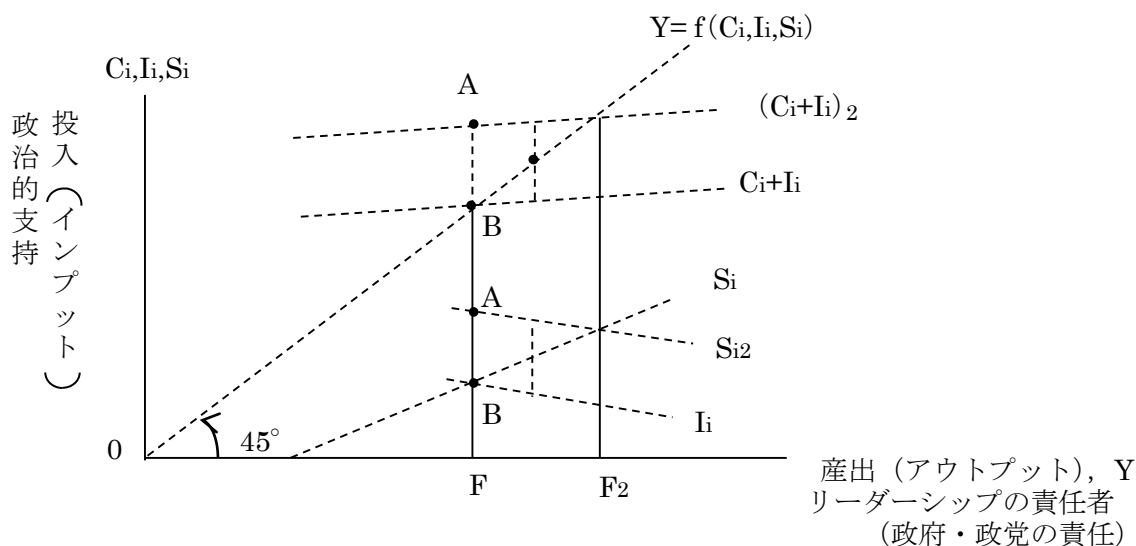


図 4 政治的影響力の投資における上昇への移動とインフレーション・ギャップ

(Mark Gould, Analysis, Macrosociology, and the generalized media of social action; J. Lonbser, R. Baum, A. Effrat and V. Lidz (eds.), *Explorations in General Theory in Social: Essays in Honor of Talcott Parsons*, 1976 : 495 を参考に作成)

政治的影響力に対するデフレーションの状況は作用しているリーダーシップ責任性が、政権に関する政治的影響力を超えている点で、あるいは政治的アウトプットが政策支持のインプットを超えている点で生じている。図 5 についてみると、もし政策支持の貯蓄が全体的に上方に移動するなら、総政策支持曲線  $C_i+I_i$  は下方に移動し、 $A - B$  のデフレーション・ギャップが生じる。それは、リーダーシップの責任能力よりも政策支持が低い時に生じるもので、政策支持が均衡店に到達すると閉じられる(図 5)。

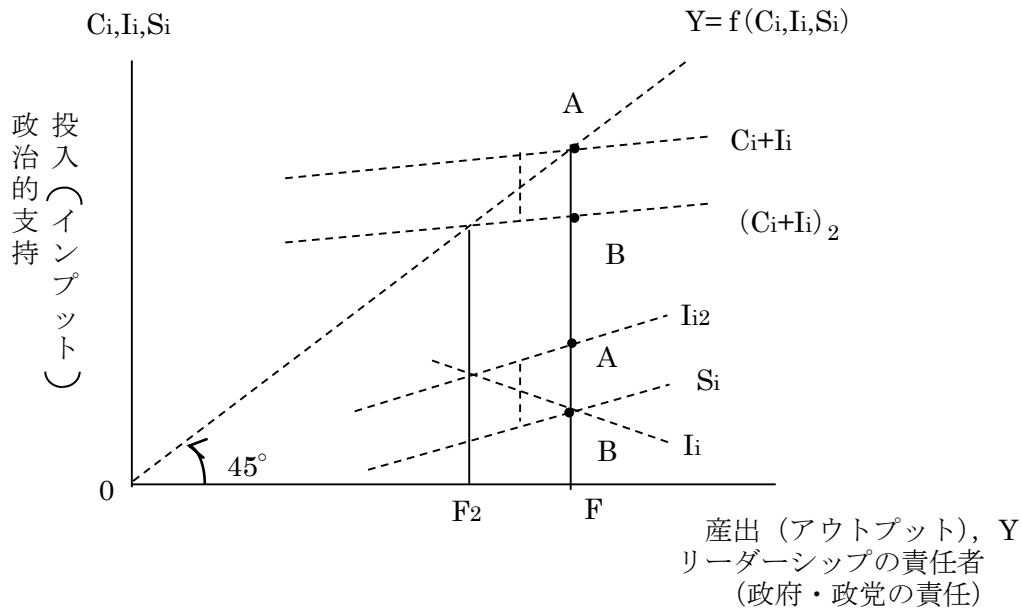


図5 政治的影響力の貯蓄における上昇への移動とデフレーション・ギャップ (Mark Gould, op.cit., 495 を参考に作成)

#### 第4節 影響力メディアの意味、相互交換過程、機能

##### (1) 影響力メディアの意味

パーソンズは次のように記している。

意見の分野について、直接的な意見の記述や分類を越えて、とりわけ意見が変化する場合の決定が、どのような一般化した過程ないしメカニズムの活動を通じておこなわれるかについて、何かいいうるものがあるかどうかという問題に関心をもっている(Parsons 1969, 新明監訳 1974:139)。パーソンズは、こうした態度や意見を決定する一般的メカニズムとして「影響力」問題を考えようとしている。さらに明記しておきたいことに、意図的な形態における社会的相互行為の過程で作用する一般的メカニズムの問題に限定している。

影響力というのは、意図的(かならずしも合理的ではない)行為を通じて他者の意見や態度に影響を及ぼす仕方である——この影響は、意見を変えたり、変化の可能性を防止したりすることもあれば、そうでないこともある(同前:140)。ここにおいて、意図的な行為を通して他者の態度や意見に作用し、決定する一般的なメカニズムとして影響力を捉えていることを理解することができる。

影響力メディアは、相互行為に関する遂行—制裁(sanction, 制裁)の様式では、説得の一手段になっている。そこで説得に関係して、他者が自我(自分)を信用する基礎は何だろうか、という問題が生じる。このことに関して、パーソンズは次のように記している。

決定的に追及しなければならないものは、信用の基礎となるべき一般的な意図を伝達す

る自我のシンボリック的行為またはその構成要素であるように思われる。これは情報の領域で作用しうるが、ここでは他者が自我を信頼するに足りる情報源とみなし、自我を「信ずる」何らかの根拠がなければならない。それはまた自我の意図の領域でも作用しうる。そして、このことはもちろん決定的な問題である。

地金は安全性と最大限の交換可能性にとって有利な一定の特性をもつ商品である。強制＝無理押し的手段としての物理的力についても同様である。では、これと同じく、特別に信用を与える可能性をもつ「本来的な」説得の源泉があるのだろうか。このことについて、他者が自分を説得しようとする自我の努力を信用するのにもっとも有利な条件は、この両者が基礎的な非限定的な連帯の相互関係に立ち入るときであり、この結びつきがあるかぎり自我は他者を裏切ろうとする関心をもちえないであろうという根拠にもとづいて、両者が集合体に共属しているときであるといっても無理でないように思われる。

そこで、私たちは、ゲマインシャフト型の連帯における共属関係こそ、相互影響の主要な「基礎」であり、それが影響力システムに対する関係は、貨幣システムに対する金や権力システムに対する力に相当するものであるとよいであろう(同前:154)。

つまり、他者が自分を説得する自我の努力を信用するのは、限定的でない基礎的な連帯のおたがいの関係があるときであり、この紐帯がある限り、自我は他者に対して約束や信義に反する行為をしないであろうという根拠を、パーソンズはあげている。そのようなことから連帯したゲマインシャフト型の共属関係、すなわち連帯して、成員が互いに感情的に融合し全人格をもって結合する共同社会に、共に所属する関係の重要性を彼は主張している。具体的には家族、地域社会などがある。貨幣システムにおける金、権力システムにおける力に相当するものとして、影響力システムにおいてはゲマインシャフト型の連帯における共属関係を、パーソンズはあげている。

また市場に結びつく自由度に該当するものに、ここでは「コミュニケーション」システムの自由度、たとえば新聞の自由などをあげている。自由なコミュニケーションの安定性は、財産や契約の規範に相当する一定の制度的規範による規制、つまり規範的原理に依存しているという(同前:155)。

では、こうした規範的準拠となるものの性質について、どのようなことが一般的にいえるだろうかとパーソンズは問い、貨幣の場合、準拠となるものは、効用という意味での価値の等価性であるという。権力の場合、準拠となるものは、権威づけであるとしている。そして影響力の場合、これに対応するものは、情報ないし意図の経験的確認化ではなく、それらの一般的表示の規範的な正当化であるという。そして影響力の正当化のきわめて重要な範疇は、通常「評判」ということばで表されるとしている。同じことをいっても、有能とか信頼性とかすぐれた判断力などで評判の高い人が言明すると、このような評判をもたない人や信頼できないと評判されている人による場合よりも、「重み」を加えるであろうという。それらの共通の構成要素は、「信用上の責任」であるとしている。すなわち、ある単位が影響力を発揮するのは、このような脈絡において、その確証のない情報や意図の表示

が責任をもってなされていると信じられる程度に比例している(同前:156)。パーソンズは以上のように述べて、金銭での信用的地位に相当するものに、影響力メディアにおいては評判という信用的地位をあげている。

さらに連帯性については、次のように説明されている。

影響力に関連する機能的下位システムは統合的システムであり、社会的共同体とよぶことができるものである。私は、その支配的価値原理をデュルケームのいう意味での連帯性<sup>4)</sup>とよんでいる。連帯性は社会システムの「凝集」状態であり、そのなかには、一方では社会システムを分断しがちな「派閥主義」のような遠心力に対する抵抗とともに、他方ばらばらの種々異なる諸部分の積極的な整序の促進が含まれている(同前:194)。

連帯性とは、社会システムにおいて広がっていたもの、散らばっていたものが集まってくることをいい、そのなかには派閥主義のような社会システムを断ち切るものにて向かったり、また離れ離れになっている部分をまとめていくように促すことが含まれているという。さらに、影響力や威信については次のように記されている。

影響力ないし威信は、その機能の一つとして、システムの連帯のレベルに対する寄与の尺度として取り扱ってよい。それは、価値ある結合的紐帯へのコミットメントや連帯性を促進する集会的な意思決定のような、連帯性の諸要因のうまく成功した組合せをなすものがある。私たちの見解では、影響力の量的次元はあるが、それは数的連続による基本量ではなく、序数による順位づけである<sup>5)</sup>(同前:195)。

影響力やその構成要素である威信は、連帯に役立っているという点から尺度として扱ってよい。それは、価値ある結合の結びつきへの委託や連帯性の諸要因を成功に導いた組合せをなしている。そして影響力の量的次元はあるが、それは順序数による順位づけという把握である。パーソンズはこのように述べて、影響力を評価するときの規準に連続した数字による量的把握ではなく、順序によって把握できると主張している。

## (2) 影響力メディアの相互交換過程

### [i] 統合的システム(I)とパターン維持システム(L)の相互交換

影響力メディアは説得と関係しているが、説得するものは、その影響力の使用を通じて一定のコミットメントを「受け取る」が、やがてこれを「利用する」ことができる。パーソンズは、ごく簡単な例として、医療の例をあげている。患者はある手術を受けるよう「助言」を受けたとする。そして彼がこの助言を「受け入れる」つまりコミットメントを行うとき、外科医はこの患者が「頑張り通す」であろうという確実な見通しをもって、実際の手術を行う計画を進めることであろう。

ここにおける相互交換は、統合的システム(I)とパターン維持システム(L)とのそれである。これに関連するコミットメントの「形態」は、「共通価値へのコミットメント」すなわち患者の健康という点で医者と患者との関係——それは医者の助言によく従うことを意味する——の価値基盤を肯定するということである。医者は患者に対して彼の助言を受け入れる



ようコミットメントを求めるし、患者は医者に対して患者の健康のために最善をつくすようコミットメントを求める。この相互のはっきりしたコミットメントは、双方の側における健康評価へのより一般的なコミットメントによって有意なものとなるのである(同前:178-179)。

統合的システムへのコミットメントのインプットは、「価値づけられたアソシエーションへのコミットメント」として定式化されるが、そのインプットはサイバネティックな尺度からみて最上位にあり、この意味で連帯性そのものよりも上位にあるところの連帯性を促進する要素である、とされている(同前:179)。(p.75 参照)

ここでは、医療の場における医者と患者の例をあげて、統合的システム(I)とパターン維持システム(L)の相互交換を説明している。影響力メディアより価値コミットメント・メディアが上位にあることが理解できる。

#### [ii] 統合システム(I)と経済システム(A)の相互交換

ここで関連する脈絡は、システムにおける資源の配分であって、そこでは集合体とその目標はいずれも複数的であり、複数的目標のそれぞれの正当化が問題となっている。資源は目標達成の観点からすると、成功の見込みを制約的に支配する主要な機会要素である。したがって、資源の配分に関する影響力は、とくに重要な信用の場である。

この場合における貨幣との関係は、ある点で政治的影響力における権力との関係に相当する。すなわち、経済が社会構造の他の諸要素に比して高度に分化している社会では、貨幣は商品だけでなく人間のサービスに対して、もっとも重要なメカニズムになるというのである。したがって、受託的機能の焦点は資金の配分にある。なぜならば、資金の所有は、やがて市場のチャンネルを通じて指示した分だけの「実質的」資源にたいする統制力を要求することができるからである(同前:161-162)。

ここでは、次のことがいえる。統合システム(I)から貨幣システム(A)には要素として「資源の配分に対する基準」に影響力メディアが流れ、そこではとくに信用が重要となる。また貨幣システム(A)から統合システム(I)へは「資源に対する要求の主張」ということで貨幣メディアが流れている。ここで要求というのは、資源に対する統制力を要求するということである。(p.75 参照)

生産物として考察している相互交換は、流通メディアの貨幣の使用ではなく、むしろ価値尺度としての貨幣の使用である。貨幣の側では、予算の計上がその一例である。予算の分け前を得ようとするさまざまな利害関心が「要求を掲げ」、そして予算づくりの機関は、これらの諸要求のいわば配分上の順位づけに到達する。これは、貨幣からみた欲求の表現であり、「権利」の表現である。だが要求や権利取得は正当化の基準にしたがうものである。こうした基準は、価値のレベルではなく規範のレベルで作用する(同前:162)。

統合システム(I)から貨幣システム(A)へ生産物として、予算に対する「要求の順序」に貨幣メディアが流れ、貨幣システム(A)から統合システム(I)へ「要求の正当化に対する根拠」

を示すものとして影響力メディアが流れている。(p.75 参照)

具体的には、予算折衝に際して、高度の資格をもつ信頼に足る専門家が、ある程度の限定された最小限の資源を自分の手で自由に使えるのでなければならぬと主張するような場合がある。他方、配分の決定は、諸要求の適当な優先順序の一致した基準に照らして正当化されねばならない。予算官がしばしば専門家の必要を判断することができないのと同じように、専門家もシステムの一つの専門分野でしか活動していないので、自分自身の要求と相いれない諸要求の緊急性を判断する資格をもっていない。このような時にギャップを埋め合わせる必要があり、相互影響力が作用する。パーソンズは、このように説明している。

### (3) 影響力メディアの機能

影響力メディアの機能について、パーソンズは次のように記している。

メディアとしての影響力の一つのおもな機能は、多分もっとも重要なものであるが、社会の規範的構造についての平等主義的要素とエリート主義的要素との間の均衡<sup>⑥</sup>およびこの均衡の現実主義的履行をめぐり、動的な社会において発生する緊張を「処理する」ための機構としてのものである(Parsons[1970first publication]1977, 田野崎監訳 1992:474)。

すなわち、影響力メディアは社会構造を平等にしていこうために、エリートと均衡をはかるために働く、そしてこの均衡を現実に行う際に生じる緊張を処理するためのメカニズムとして働くというのである。以上は社会的にみた機能である。個人的には、影響力を使うことによる主な機能の一つに、自分の中の自我が他者を説得して自分がなそうとする行為を正当であると認められるようになっていくことがあげられる。

さらに、パーソンズは続ける。

規範的視点では、現代のパターン維持「基盤」は本質的に平等主義的である。このことは特に重要である。階層の脈絡において、影響力の主要な機能は不平等の機能的に必要な形態を正当化することにある。

そして社会システムの水準では、これらは3つの主要な種類に還元されうる。

- (1) 貨幣資産を通じての一般化された経済的資産への接近
- (2) 政治権力を通じての集合的効率性要因への接近
- (3) 価値コミットメントを通じての「文化的資源」への接近

その試みは、社会的に正当化された機能的利用に向けて、こうした「諸資源」を役立てるべく、さもなければこうした「諸資源」の保有者を「説得」することである(同前:474)。影響力メディアは、不平等を機能的に必要な形に導き、正当化していくように働く。さらに、それは経済的資産へ、集合的効率性要因へ、文化的資源へと近づいて諸資源の利用、あるいは諸資源を持っている人を説得するように働いている。

## 第5節 結び

影響力は、意図的チャンネルと肯定的裁定のもとで説得の効果をもつメディアであると言われている。それは地位、威信を背景とした情報あるいは目的の公表を通して意味をもつ。

本章では、第2節(1)で影響力の概念として“説得”が導かれる過程が明らかにされ、その説得に本質的に関係するものとして価値コミットメント、集団のリーダーシップに対する政治的支持と、流動的な諸資源を要求する順序のあることがあげられている。そして説得には情報が信用の基礎になることを理解することができた。また影響力の価値原理には連帯性があげられ、そこでは原型としてゲマインシャフト型のアソシエーションが想定されている。

第2節(2)でとりあげた影響力の型はA, G, I, L 図式に対応した分類とみることができ、個人から集団への影響力と論が進められ、最終的には価値、規範が重要な意味をもつことが述べられている。

第3節(1)の影響力メディアのインフレーション、デフレーションは、メディアの量に注目した分析で、ゼロサム概念と関係し、影響力にも循環性が認められている。影響力のデフレーションとは、忠誠に対する疑問、狭い集団主義への疑問が増大し、評判が低下することによって信用が侵され影響力が低下する状態、影響力のインフレーションとは、確認されえない情報であっても、評判が上昇することによって信用が増し、影響力が上昇する状態と理解することができる。

第3節(2)の影響力メディアのインフレ・ギャップ、デフレ・ギャップについては、影響力が貨幣や権力と平行して論じられていることに着目し、各システムの要素と生産物の均衡点から、インフレーション、デフレーションが乖離している状態を、筆者が試験的に分析したものである。これらは理論的に考え出されたものであるが、影響力の調査を行う際に有効な枠組であるように思える。人間のシステムを経済学の金融モデルにそのままあてはめることはできないが、一般化されたシンボリック・メディアとして貨幣、権力と同様に展開されてきた影響力メディアにとっては、十分に適用できる余地がある。

第4節では、次のことを理解することができた。

影響力メディアは、意図的な行為を通して他者の態度や意見に作用し決定する一般的なメカニズムとして捉えられている。それは意図的チャンネルと肯定的裁定のもとで‘説得’の一手段になっている。ここで説得に関して、他者が自我(自分)を信用する基礎は何だろうか、とパーソンズは問うている。そして他者が自分を説得しようとする自我の努力を信用するのは、他者と自我の両者が基礎的な非限定的な連帯の相互関係にあるときであるという。その根拠にこの結びつきがある限り、自我は他者を信義に反する行為をしないであろうということをつけている。このようなことから、ゲマインシャフト型の連帯における共属関係こそ、相互影響の主要な基礎であるとパーソンズは主張している。

また市場に結びつく自由度に相当するものに、新聞などの「コミュニケーション」システムの自由度をあげている。そして自由なコミュニケーションの安定性は、規範的原理に依存しているという。こうした規範的原理に準拠しているものとして、貨幣メディアの場合には金、権力メディアの場合には権威づけ、そして影響力メディアの場合は「評判」であるとされている。評判は威信に基づいてなされると考えられる。

影響力メディアあるいは威信は、システムの連帯のレベルに対して寄与の尺度として扱うことができる。そして影響力メディアの量的次元はあるが、それは数的連続による量的把握ではなく、序数による順位づけによって把握できるのものであると、パーソンズは主張している。

注

- 1) Mark Gould, *Systems Analysis, Macrosociology, and the generalized media of social action*; J.Lonbser, R.Baum, A, Effrat and V.Lidz (eds.), *Explorations in General Theory in Social Science: Essays in Honor of Talcott Parsons*, 1976.を参照。
- 2) 本稿、図2を参照。
- 3) 補足的に説明するならば、 $C_i$ とは、統合的下位システムにおける政治的影響力の消費(統合的消費)、 $I_i$ とは、統合的下位システムにおける政治的影響力の投資(統合的投資)、 $S_i$ とは、統合的下位システムにおける政治的影響力の貯蓄(統合的貯蓄)を表し、 $C_i$ は  $G \leftrightarrow I$  の相互交換に、 $I_i$ は  $L \leftrightarrow I$ 、 $S_i$ は  $A \leftrightarrow I$  の相互交換にそれぞれ関係していると考えることができる。
- 4) 連帯とは社会の成員相互の間の相互依存の関係をいう。この関係は共属感に支えられる。デュルケームは同質による相互依存の関係を機械的連帯、異質によるそれを有機的連帯とよんだ。社会的分業の進展に伴って、人びとを結びつける連帯の形態が機械的連帯から有機的連帯に移行するとした。
- 5) パーソンズの影響力メディアの量的次元に対するこの考え方は、経済学の分野において『経済学の本質と意義』(1932)を著したライオネル・ロビンズ(Lionel Charles Robbins)の効用に対する量的把握と同じである。
- 6) *balance* を翻訳書では平衡と訳してあるが、本節では均衡と記すことにする。

## 第5章 価値コミットメント・メディアの性質と動態分析

### 第1節 はじめに

価値コミットメント・メディアは、A・G・I・L システム(適応・目標達成・統合・パターン維持システム)のうちLのパターン維持システムに係留し、サイバネティックな階統性では一番上位にある。それゆえ、人間の行為を決定する諸要素のうちでは最も重要なものである。

これまで貨幣、権力、影響力の各メディアについて検討を進めてきた。そこでは一貫して人間の行為を決定する諸要素をシンボリックなメディアとしてとらえ、貨幣メディアをモデルとして各メディアについて平行的に論じている。

Lシステムでは、パターン維持下位システムに係留している価値コミットメント・メディアを扱っている。Lシステムは文化システムとも関係しており、パーソンズ社会学においては、文化システムが最もおざなりにされていることが指摘されている。それは、文化システムで扱う価値の問題がその人(行為単位)によって百人百様であり、一般化することが非常に困難であることに基づいているからである。またパーソンズのシステムで、文化はきわめて静的な要素にとどまっていると指摘されている(Rocher 1974, 倉橋・藤山訳 1986:214-218)。この点について筆者は、価値コミットメント・メディアと関係してくるのであるが、文化システムの諸要素は、メディアの循環性と関係して動的な性質をもつと思う。しかし、それが人間の内面的な要素であるために、理論的にはっきりと把握できない。ここに批判を受ける原因がある。

本章では価値コミットメント・メディアが導かれる過程、その性質を検討していきたい。さらに価値コミットメント・メディアの意味、相互交換過程、機能について考察していきたい。最後に動態分析として価値コミットメント・メディアのインフレーション、デフレーションについて考察を進めたい。

### 第2節 四機能図式と価値コミットメント・メディア

パーソンズは、社会システムから貨幣(money)権力(power)影響力(influence)価値コミットメント(value-commitment) という4つの社会的メディアを導き出している。本章で扱う価値コミットメント・メディアについて価値、コミットメントの概念および定義についてみてみたい。

価値について、パーソンズはアメリカの人類学者クライド・クラックホーンの考えを支持している。それは価値を具体的な社会目的としてとらえているのではなく、社会的過程における行為者と目的の相互行為の規則化における一要素ととらえていることであり、相互行為の意味のなかに価値があるとみていることである(Parsons 1969:441)。つまり価値を、社会的過程にある経験的諸要素として作用している機構(メカニズム)と、社会システム

の構造的な組合せを構成しているメカニズムにあるとし、個人のパーソナリティに関する制度化と内面化の現象を含んでいるとしている。

パーソンズは、価値について“望ましいこと(desire)”という用語を支持している。それはクラッホーンが、単なる欲望とは非常に注意深く区別したものであるとされている。その時価値は、制度化によって経験的な社会的過程を決定することのできる、文化的なレベルでの“パターン(型)”であるとされている。換言すれば、社会システムの構造の構成要素となっている価値は、準拠している社会の成員によって支えられ、彼らが成員である特殊な社会に適合している、社会の望ましい型の概念であるとされている。

またコミットメントについて、価値パターンが選択の方向を定義し、行為に対する結果のコミットメントを定義していると記されていることから、コミットメントとは価値を実行する過程と理解することができる。コミットメントの一般性レベルについては、コミットメントが作用的である範囲内で評価されるシステムの範囲を定義するとされている。

価値コミットメント・メディアは、Lシステム(パターン維持下位システム)に係留し、ここでは文化のおよび動機づけ的コミットメントを担当している。社会的相互交換システムの図によると、Lシステムは経済を担当しているAシステム(適応的下位システム)とは「労働・消費財市場システム」として、政治を担当しているGシステム(目標達成下位システム)とは「正当化システム」として、そして規範としての法と社会統制を担当しているIシステム(統合的下位システム)とは「忠誠・連帯コミットメント・システム」として、それぞれ諸資源を相互交換している(第4章 図1参照)。このように各システム間を循環して、インプット、アウトプットの関係からLシステムについては価値コミットメント・メディアが生まれる。

社会システムにおいてコミットメントを維持しているのは、諸価値というよりも実行の過程の中心となる規範的な状態であるとされている。そしてコミットメントを実行する義務において、誠実性があるに違いないとして、この次元で価値の一般化をとらえている(Parsons 1969:444-446)。

またコミットメントの調整基準は、パターンの維持であるとされている。それは貨幣の場合の支払能力、権力の場合の成功、影響力の場合の合意に相応している。ここでは、より詳細にされうるコミットメントが特殊化の線にそって配分され、また調和という点で完結性の命令をもって保持されるばかりではなく、そのようなコミットメントが実行にとって必要な価値のない要素と交換に使用されるかもしれないとされている(同前:448)。

### 第3節 価値コミットメント・メディアの性質

状況的一意図的チャネルと肯定的—否定的裁定という枠組で4つのメディアを分類すると、貨幣は状況的一肯定的枠、権力は状況的一否定的枠、影響力は一意図的一肯定的枠、そして価値コミットメントは一意図的一否定的枠に位置づけられている(図1)。ここで貨幣は誘

因の一般化されたメディアであり、権力は集団を拘束している決定を応諾しているために、活発化している義務の一般化されたメディアであるとされている。また影響力は、他我が現実に欲求している訴えを通して、適法的な場合に作用している説得の一般化されたメディアであり、そして価値コミットメントはその活性化をはかるメディアであるとされている。

裁定の タイプ	チャネル	
	状況的	意図的
肯定的	誘因;意見の一致の 有利さ、偶然の事の 提供を通して、例え ば契約の”強制能力” を背景としている。	説得;情報あるいは 意図の公表を通し て、地位—威信を背 景としている。
否定的	集合的コミットメント の活性化、偶然の強制 を背景としている。	価値コミットメント の活性化、道徳的裁定 を背景としている。

図1 裁定のパラダイム

T. Parsons, *Politics and Social Structure*, 1969 : 448.

価値コミットメント・メディアは、自我と他我が分け合っている価値の徳によって、道徳的に拘束される一般化された義務があると仮定されている(同前:449)。このレベルでのコミットメントは、義務を達成するための行為の精細な方向を指令していない。そのとき単位は、具体的な状況においてその価値コミットメントを履行している命令法に直面しているとされている。つまり価値コミットメントの活性化は道徳的裁定を背景としており、価値コミットメントの実行には道徳的責任性が重要視されると考えられる。

つぎに、価値コミットメントの配分には柔軟性があることについて述べてみたい。パーソンズは価値コミットメントの柔軟性について、そのコミットメントを次の2つに限定している(同前:451)。(1)構造分割の階統制における責任制のレベルの専門化、(2)より一般的な実行の過程に対して、部分的な貢献をなしている分業の機能的“役割”の専門化、この2つである。そして(1)の明らかなモデルとして、官僚的な権威と責任の階統制をあげている。ここでは権威と権力が関係しており、責任の成層は“道徳的リーダーシップ”とよばれている。価値—制度化の道徳的水準と宗教との間の密接な関係のために、社会の主要な道徳的リーダーシップは宗教的な身体に基づいているとされ、特に具体例には司祭をあげている(同前:452)。しかし、世俗化に連結して政治的な運動は道徳的リーダーシップにおいて、しばしば重要な役割を演じてきた。メンバーがそのようなリーダーシップを集団的に仮定してきたものとして、“道徳的エリート”をあげている。例として初期のカルビン主義者と共産党のあらかじめ運命を定められた“聖人”をあげている。そしてこの道徳的リーダーシップと政治的権力との密接に結びついた状態を、ウェーバーは強調したとしている。(2)について、“分業”という言葉は経済学者のいう意味とデュルケームのいう意味の両方を包含しているが、何か異なって作用しているとし、価値システムの最も一般的なレベルで

コミットメントを実行するというはその責任を含み、全体というよりは部分的であるとしている。

コミットメントの性質について、パーソンズは主要な問題に直面するとして 2 つあげている。第 1 には成功的な実行が、急迫した事態の性質に関係している点をあげ、第 2 にはシステムの統合に対するコミットメントの配分に関連している点をあげている(同前:453)。価値コミットメント・メディアの性質について、ここでコミットメントと相互交換パラダイムをみてみたい。L システムは、それぞれ A システム、G システム、I システムと要素、生産物をインプット、アウトプットし、L システムに係留するメディアが各システム間を循環している(第 5 章 図 2)。

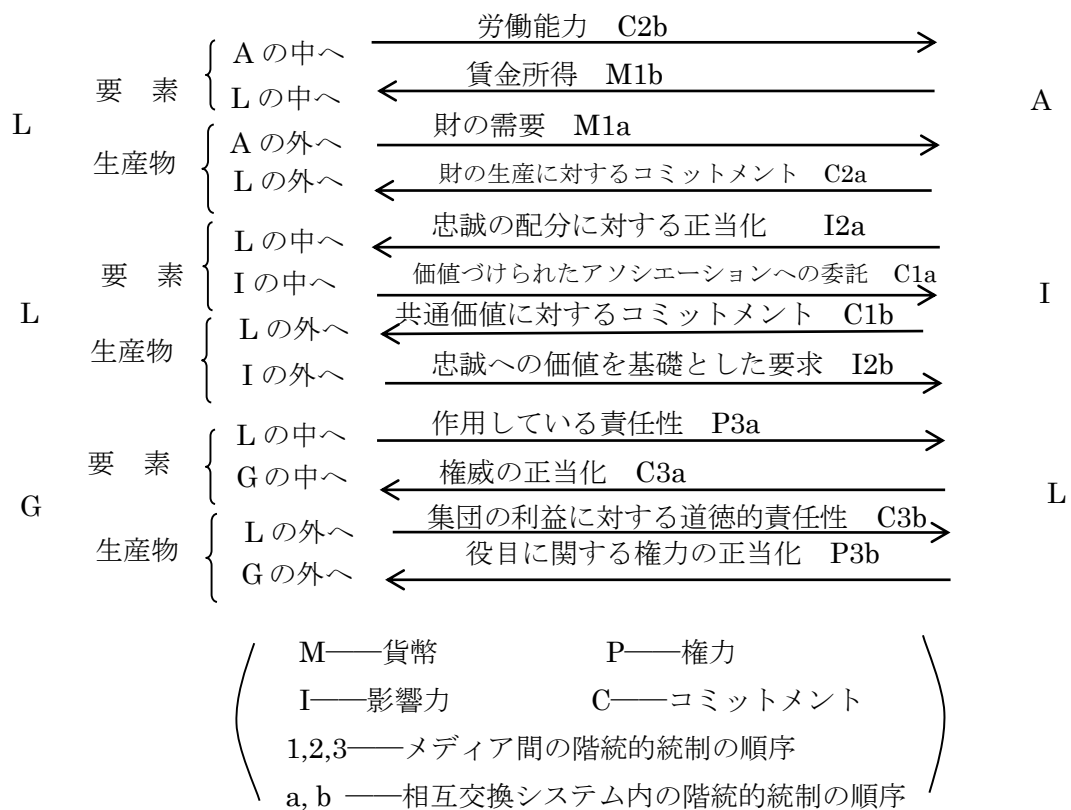


図 2 裁定としてのメディア (T. Parsons, op.cit.,399.)

L システムと A システムの相互交換において、L システムから A システムへは「労働能力」というアウトプットがあり、それに対して A システムからは「賃金所得」というインプットがある。また生産物において、L システムから A システムへは「財の需要」というアウトプットがあり、それに対して A システムからは、「財の生産に対するコミットメント」というインプットがある。この L システムと A システムで働いている価値パターンは経済的合理性である。具体的には人間のもつ能力と家計、企業間の財や商品を媒介とした相互交換であり、貨幣メディアが関係している。ここでは、効用が価値原理として働き、支払



能力が調整基準となっている。

LシステムとGシステムの相互交換では、権力、権威が関係してくる。まず要素についてLシステムからGシステムへは「権威の正当化」がアウトプットされ、GシステムからLシステムへは、「作用している責任性」がインプットされている。生産物についてLシステムからGシステムへは、「役目に関する権力の正当化」がアウトプットされ、GシステムからLシステムへは、「集団の利益に対する道徳的責任性」がインプットされている。ここでは権力メディアが媒介となって働き、有効さが価値原理に成功が調整基準になっている。

LシステムIシステムの相互交換では、要素についてLシステムからIシステムへは、「価値づけられたアソシエーションへのコミットメント」がアウトプットされ、IシステムからLシステムには、「忠誠の配分に対する正当化」がインプットされている。生産物について、LシステムからIシステムへは、忠誠に対する価値に基礎づけられた要求がアウトプットされ、IシステムからLシステムには、「共通価値に対するコミットメント」がインプットされている。このシステム間で働いているのは影響力メディアで、連帯性が価値原理、合意が調整基準となっている(同前:463)。

Aシステム、Gシステム、Lシステムにおいてはそれぞれ、経済的合理性、政治的合理性、認識的合理性が働き、サイバネティックな階統制では認識的合理性が一番優位となっている。それゆえLシステムで働く認識的合理性が最も重要で、Lシステムの具体的な単位には学界、高等教育、大学をあげている。

価値コミットメント・メディアはLシステムに係留しているので、上記のことから最も重要な意味をもってくるのがわかる。

#### 第4節 価値コミットメント・メディアの意味、相互交換過程、機能

本節では、価値コミットメント・メディアの意味、相互交換過程をもう少し詳しくみて、価値コミットメント・メディアの機能について検討してみよう。

##### (1) 価値コミットメント・メディアの意味

最初に価値についての意味、次にコミットメントの意味についてみてみよう。

価値についてパーソンズは、一方ではマックス・ウェーバーから、他方ではアメリカの文化人類学者クラックホーンから由来する見解をあげている。この見解によると、価値は、具体的事物の範疇またはその特性ではなく、人類学的事物を用いるならば「パターン」である。それは、文化——具体的な社会的な事物ではない——の構造の一要素であると同時に、社会過程における行為者と客体との相互行為の規制における一要素である。価値が社会過程の経験的要因として作用し、社会システムの構造の構成要素となる「メカニズム」は、制度化と個人の人格における内面化を含んでいる。

したがって、私は望ましいものの観念として価値を想定したクラックホーンの定義を認めるものである。文化的関連性は「観念」conceptions という中心的な用語のなかに与えら

れており、価値の独自性は、望ましい *desirable* という語のなかに与えられている。

そこで、価値とは、文化的レベルにおける「パターン」であって、それは、制度化によって経験的な社会過程の決定因となることができる(Parsons1969,新明監訳 1974:191)。

パーソンズによると、価値というのは望ましいもの、望ましいこととして *desirable* という単語が用いられている。社会システムのなかで取り上げられているので、社会に共有する価値と捉えることができる。そして、それは文化的水準におけるパターンすなわち型であり、制度化によって社会過程を決定していくもとなることができる。このように理解できる。

そこで、どのような価値的側面が社会学的意義をもっているかという問題が発生するという。価値パターンは選択の方向とその結果生じる行為へのコミットメントを規定する。原則として、価値パターンは、ある部類の行為者が「人間的条件」の全体に対する志向に関連しうる。しかし、私たちがここに述べた意味で社会価値というとき、私たちは、人間的条件のうちでの、ある限定されたコミットメントの範囲におけるパターン、すなわち社会構成員である行為単位の側からみて、望ましいパターンの社会についての観念を明確化することを意味している(同前: 191-192)。

価値パターンは、選ぶ方向性とその後に行きへのコミットメントの規準を定めるという。ここでパーソンズは、社会システムのメディアを扱っている段階で、人間的条件システムを構想していたことが読み取れる。しかし、価値パターンについて‘望ましいパターンの社会に対するコミットメント’と人間的条件のうちでも限定的な側面であることをことわっている。

コミットメントについては、次のように記述されている。

メディアとしてのコミットメントとは、価値実現に影響を及ぼす一般的能力と信用できる約束と定義しなければならない。その規準的な構成要素は当該社会の道徳的権威ともいえるべきものである。その伝達内容は、本質的には当該価値パターンへのコミットメントの主張内容であって、それは一定の限定的な義務を引き受ける約束——私たちはこれをしばしばコミットメントと明示している——のように、価値実現のなかに含まれている諸要素の形をとることがある(同前:211)。

ここでコミットメントは、価値実現をする際に影響する能力と信用できる約束であるとされ、それは当該社会の道徳的権威に支えられているという。ここでの価値というのは、個人におけるそれではなく、社会システムにおかれている価値なので社会における共有価値をさしている。そして価値コミットメントの場合、パーソンズは‘道徳的に拘束を与える’ものとみなされる一般的義務があると仮定している。

## (2) 価値コミットメント・メディアの相互交換過程

### [ i ] 信託システム(L)と政治システム(G)の相互交換

伝統的な経済理論では財とサービスは一括りにして扱うが、パーソンズはこれらを分け

て取り扱う。すなわち財を生み出す労働は生産の一要素であるとしてコミットメントに範疇化し、サービスは生産過程のアウトプットとして政治的意味での権力に範疇化している。サービスとコミットメントとの直接的な結びつきは、「集団の利益に対する道徳的責任性」と集合システムにおける「作用している責任性」との受け入れを伴う L・G 相互交換を通じて構造化される。ここにおいて政治からパターン維持システムへの「集団の利益に対する道徳的責任性」のアウトプットは、自我と他者に対する価値の共有と表裏をなしている、とパーソンズはいう(同前:216)。自我と他者に対する価値が一致していないので、集団の利益に対して道徳的責任が生まれると考えられる。

#### [ii] 信託システム(L)と社会的共同体(I)の相互交換

LとIの相互交換について、以下のように記述されている。

ここではコミットメントは「価値づけられたアソシエーション(結社)」の脈絡に限定されている。個人的単位はもはや「独り歩きする」のではなく、結社的な地位を取得し、この地位が当の共同体ないし集合体の構成員仲間との連帯の期待を彼に与えるものである。結社的な諸関係の好都合な組合せは、首尾よく実現する能力を大いに強化することができる。というのは、連帯とこれに付随する潜在的な影響力は、権力と経済的資源を再確認するだけでなく、これらを現実統制することができるからである。こうした保障基盤の可能性をつくるのは、とりわけその構成員の共有する価値コミットメントであるが、こうした価値コミットメントは自己実現するものではない。したがって、連帯的な結合は価値実現の成功にとって第一の条件である。

だから、結社的集合体への価値コミットメントは、忠誠心、すなわち価値実現への努力の「支持」を「買いとる」ものである。だが、まさしくこの点で近代社会において強まっている問題、すなわち多元主義が発生する。コミットメントは、さまざまな集合体から役割における個人にいたるまで、社会システムの構造における単位レベルに焦点をおくものである。しかし、社会システムが高度に分化すればするほど、どの単位の「所属」もますます多元化するようになる。たとえば、個人は家庭、雇用組織、種々さまざまな近隣集団、宗教団体、政党などに所属している。これと同じ原理が集合体にあてはまる。たとえばハーバード大学は、ケンブリッジの地方的共同体や大都市ボストン、マサチューセッツ州、アメリカ合衆国、さらにあるいみでは「世界社会」の「一構成員」である(同前:218-219)。

要素に L から I には「価値づけられたアソシエーションへの委託」としてコミットメント・メディアが流れ、I から L には「忠誠の配分に対する正当化」として影響力メディアが流れている。また生産物に L から I には「忠誠への価値を基礎とした要求」として影響力メディアが流通し、I から L には「共通価値に対するコミットメント」としてコミットメント・メディアが流通している(p.95 参照)。影響力メディアが発するものとして、連帯が価値実現にとって重要であるとされ、価値コミットメント・メディアが発するものには、多元化する近代社会にとって忠誠が価値実現に重要であるとされている。

### (3) 価値コミットメント・メディアの機能

どのように価値コミットメントは、一般化されたシンボリック・メディアとして機能しているのだろうか。パーソンズは、これについて次のように記している。

第一の必要条件は、シンボリック・メディアが本来的効力をもたないという規準をめぐる明確さと首尾一貫性である。たとえば、貨幣は、古典的経済学者のいう意味で、「使用価値」をもつのではなく「交換価値」をもつにすぎない。権力は、たとえば強制を通じて集合的目標を達成するために「本来的に有効な」ものではなく、それは集合的決定への服従を通じて集合的過程に寄与すべき義務を「活性化する」コミュニケーションによってはじめて有効である。影響力は、関連情報を与えることと同じように、「本来的に説得するもの」ではなく、不可分の集合的単位の連帯性のために一定のタイプの行為に訴えるものである。私たちは、価値コミットメント実現の論議を「物々交換」ないし帰属的過程だけに限定するならば、新しい理論的貢献への機会のすべては見失われてしまう(同前:198)。

すなわち価値コミットメント・メディアを物々交換や帰属性に限定するのではないことを、第一にあげている。普遍的に通じるメディアとして扱っているということである。

シンボリック・メディアはすべて、結局、価値システムを基礎にして、それに合うように行為システムを拘束しており、資源の組合せを促進したり抑制してこれを導いている。

パーソンズは、価値コミットメント・メディアがパターン維持との機能的な関連において作用する点で特別の位置を占めているとして、パターン維持システムの価値原理に完結性(integrity)をあげている。それはパターンそのものの完結性を意味している。

完結性については、次のように説明されている。

それは、いわゆる価値実現の過程に指針を与える価値の問題ではなく、むしろ価値実現過程の中心的な規範的な条件となるコミットメントを維持する問題である。問題は、広範にわたる種々さまざまな現実のおよび可能的意思決定を越えて、パターンへのコミットメントの完結性を維持するということである(同前:195)。すなわち完結性というのは、価値実現過程においてパターンへのコミットメントの完結性を維持することを問題にしている、と理解できる。さらにパーソンズは続ける。

完結性の維持による価値実現は、完結性の維持が種々異なる実現活動を正当化する広範囲の行動領域や機会と両立できると考えられるのに比例して、強化されるであろう。ここで持ちだされた範囲という観念は、序数<sup>2)</sup>による順位づけの論理にしたがっており、こうしたことが影響力システムとの接合の主要な根拠となりうるように思われる(同前:196)。ここで価値コミットメント・メディアの範囲についての考え方は、序数による順位づけにしたがうとされ、影響力メディアの量的次元に関する考え方と共通している。

次に一般的メディアとしてのコミットメントを特質づける基準について検討してみよう。その出発点に、裁定(sanction,制裁)のパラダイムを取り扱う分析図式をみていきたい(p.96 図1参照)。

図 1 は縦軸に裁定のタイプとして肯定的、否定的が置かれ、横軸にチャンネルとして状況的、意図的が置かれて四つに区分されている。

四つの一般的メディアは、次のように適合する。すなわち、貨幣は、誘因、つまり条件付きの状況的利益の提供に関する一般的メディアである。権力は集合的に拘束を与える決定にしたがう義務を助長する一般的メディアであって、不服従に対しては条件付きの強制的裁定を伴う。影響力は、他者が自分の「真に欲する」ものを規定するところに訴えることによって作用し、正当な場合には、彼自身の最高の利害関心と自他ともに所属している集合的システムの利害関心とを統合する説得の一般的メディアである。

コミットメントは、自我と他者が共有する価値によって道徳的に拘束を与える義務を活性化する一般的メディアである。価値の不履行に伴う裁定は、権力の場合と同じように否定的である。だが、それは個人にとっては罪となり、集合体にとってはなんらかの内部的秩序のたてなおし、たとえば、価値から見て受け入れることのできない意思決定の責任をもつ役職者の解雇となるという点で「内的」である(同前:200-201)。

図 1 において、貨幣は誘因となるメディアであり、意見の一致の有利さ、偶然事の提供を通して、例えば契約の“強制能力”を背景として生じる。権力は集合的コミットメントの活性化をはかるメディアであるとされ、それは偶然の強制を背景としている。影響力は説得のメディアであり、情報あるいは意図の公表を通して、地位－威信を背景としている。価値コミットメントは、価値コミットメントの活性化のために働き、道徳的裁定を背景として生じる。

価値コミットメントの活性化については、次のように説明されている。

自我が他者のコミットメントを活性化するというこの意味は、シンボリック・コミュニケーションを通じて、自我が他者に対して、道徳的自由を他者が行使するために「状況を規定する」のを助けるということである。一般化されたコミットメントもまた、他の望ましいもの、とりわけ貨幣や権力や影響力、さらにこれらを通じて報酬や便益という形のもっと具体的な資源と交換することができる。裁定としてのコミットメントの使用は、道徳的是認が報酬であり、否認が処罰であることを意味している。そこでは、自我と他者が価値を共有し、自我の是認ないし否認が、他者の内面的な裁定体系を「活性化する」傾向となることが前提条件である(同前:210)。

価値コミットメントを使用することは、道徳的に認めることが報酬につながり、否定することが罰することにつながる。その前提条件に自己と他者が価値を共有し、自我を認めたり否定することによって、他者が当否を判断して決定する仕組みを活発にすることがあげられる。このように理解できる。ここで道徳的権威は、個人であっても集合体であっても、コミットメントの完結性に対する評判を通じて獲得される、とパーソンズは主張している。そしてコードの調整基準に貨幣には支払能力があげられているが、価値コミットメントの場合、型(パターン)の一致性があげられている。型の一致性は本質的には、自由のバランスを維持し、自分の道徳的判断が尊重されるところに成立するとされている。

社会システムでは政治的機能は経済的機能よりも優位を占め、統合的機能は政治的機能よりも優位にあり、パターン維持的機能は統合的機能よりも優位に立っている。パターン維持機能をもつ価値コミットメントは、制度的なコードに道徳的権威がおかれている。このように、パーソンズは社会システムの最上位の機能に道徳に関係するものをおき、道徳の重要性を強調している。

## 第5節 価値コミットメント・メディアのインフレーション、デフレーション

価値コミットメント・メディアのインフレーション的な場合は、価値を実行する文脈においてコミットメント過剰を含んでいる。コミットメント過剰は現実に行う際、警告という形で表れる、あるいは合法的に期待された実行するための尺度が成功している場合、その失敗に対する批判という形で表れる。勧告と批判の切実さは、そのときコミットメントされている単位の完全性(完全な状態を保つこと)において、「信頼」を根底から危うくするかもしれない。その将来において、その信頼の結果とともに、すでにまかされてきたコミットメントでさえ少なくなるであろうとされている。

価値コミットメント・メディアのデフレーション傾向とは、単位(人)が喜んで行なうコミットメントを「名誉」とするのに対して、不承不承の方向へという性向である。それゆえ、それは一単位が価値実行の範囲で楽しむであろう自由の程度に関して、ある制限を含むようになる、とくに責任を単位からある外側の機関、たとえば法律へ移動することによってそうであるとされている。

サイバネティックな用語で、コミットメントの最も高いレベルに宗教がおかれている正統派キリスト教は、コミットメント・システムに関するデフレーション過程の適切なモデルであるとされている。つまり正統派キリスト教においては、「宗教の自由化」とよばれていることに対する反動を内包することが推定されている。同じように、歴史的に宗教として定義されてきた集団——プロテスタンティズム、カソリズム、ユダヤ教等…それらは宗教からの分離というパターンをはねかえし、「信頼の喪失」として定義されている——も、厳密な意味でデフレーション過程のモデルであるとされている。

また、社会あるいは個人の道徳についての意見に関して、社会主義者と資本主義者のコミットメントの間の鋭いイデオロギー上の論争が、西洋社会の発展とそのコミットメント・システムの中でデフレーション的な運動を構成している、とされている。つまり各々の側面は、それ自身のコミットメントに関して絶対的な道徳的正当性を要求しており、それによって判断している、それゆえ極端な場合には「戦争」がおこる、とされている。

一定の観点から、実存主義者とそれに関連している無政府主義者の傾向については、「価値づけられたアソシエーション」とよぶところのあらゆるコミットメントを棄てるために、道徳的自由に対する個人のコミットメントの真正さの試みである、とみている。「ヒッピー運動」については、根本的にゲマインシャフトの連帯性に対して、許し得る程にアソシエ

ーションを制限しているという。それゆえ、現代社会の全人類的で非個人的な構造のなかで、すべてのアソシエーションを明らかにすることは論理にあわない、とパーソンズはいう。

価値コミットメント・メディアのゼロサム問題については、「道徳的リーダーシップ」とよぶところの作用を通して主張している。道徳的リーダーシップ、そこには価値コミットメントを配分して存在しているのではなく、価値コミットメントというメカニズムのタイプが存在しているとし、システムの中にそれらの量をつけ加えているとしている。ここで量は、一般性と強度のレベルの組合せの結果として考えられている。

経済的な例で銀行の場合、預金者と銀行の双方から仮定された義務によって、権利と保留されたもの間に著しい不均斉があるといわれる。もし預金者全員が銀行にすぐに支払を全部主張するなら、すべての機能している銀行は破産する。このことが生じないのは、預金者の期待を基本としているにすぎず、また銀行はそのローン(負債)の契約が通常、払い戻しに対する緊急の需要に直面することなく預金者に清算して正当化されているからである。ここで預金者の期待は、一般に銀行の「予備の貯え」のメカニズムをもつシステムによって払い戻しされている。

コミットメントの場合、それらの「流動性」、すなわち配分に関する選択の公開性を維持するのに高い報酬があるという。これに関して第1の状態は、あらゆるメディアがもつ「信頼(trust)」であり、コミットメントの統合であるとされている。このことは第1に信頼を預金する人に表れており、いくつかの他の機関に対して、それらの流動性を委託している行為を含んでいる。第2には、他の機関において信頼を受け取る人々に対してそうであるとされている。コミットメントの実行において、行為の自由をもつ「委託銀行家」とはつねにある種の道徳的権威を所有している機関である。このことは、道徳的リーダーシップに対して準拠されている。例えば宗教的団体がそうである。この他、様々な団体や個人が道徳的権威を所有している。たとえば、学問的自由に対するコミットメントでは、学問的な制度の統合に対する信頼、あるいは政治では政党に対する信頼があげられる。

これらの例におけるコミットメントの「預金」は、一方では配分の決定に関して停止という形で保有されるかもしれないことを意味している。つまり機関に対するコミットメントの「収入」は、預金者に同じ割合で「支払われる」必要はないということである。

他方、統合を保護する側(機関側)は、信頼を預金している単位の単独の責任を必要としているのではない、としている。

コミットメントのデフレーションに関する特徴として、パーソンズは価値絶対主義をあげている。それは最も直接的で最も激烈なものに対して、義務を制限しているものであるとされている。

一般行為システムのパラダイムで、道徳の問題が生じるのは、文化システム(L)とパーソナリティシステム(G)との間の特別な関係を負っていることが指摘されている。それは、カリスマと個人(パーソナル)の性質の関係に基づくものとみられている。つまりパーソナリテ

ィとしての個人が文化的価値の実行に関して、道徳的責任の最も重要な焦点を担っているにちがいないということである。この文脈で「価値づけられたアソシエーション」に伴う個人にとって難しさは、道具的な点にあり特に実行する行為に対する状況規定にあるとみられている。それゆえデフレーションの圧力は、影響を与えている個人であれ、集団であれ、すでに正当化された枠組の中でどのようなカリスマ的<sup>1)</sup>な影響の衝撃をも制限する傾向にあるとされている。

## 第6節 結び

本章において、第2節ではA・G・I・Lという四機能図式の相互交換過程から、価値コミットメント・メディアが導かれる過程をみている。第3節では価値コミットメント・メディアの性質として、状況的一意図的チャンネルと肯定的—否定的枠組において、意図的チャンネルと否定的裁定の枠組に、コミットメントを活性化するとして位置づけられている。そこでは道徳的に拘束される一般化された義務があるとされ、価値の実行には道徳的責任が重要視されている。そしてA・G・I・Lの4システムにおける生産物と要素のインプット、アウトプットについて述べている。

第4節では価値コミットメント・メディアの意味、相互交換過程、機能について考察している。パーソンズは、価値についてクラックホーンの定義を取り入れており、望ましいもの *desirable* という単語を用いている。社会システムのなかで扱われているので、社会に共有する価値とみなすことができる。価値とは文化的水準におけるパターンであり、制度化によって社会過程を決定していくものになることができる、とされている。価値パターンは選択の方向とその結果生じる行為へのコミットメントを規定するとして、そこに価値パターンの社会学的な意義があるとしている。またパーソンズは、社会システムのメディアを研究していた段階で、価値パターンが人間的条件と関連していることを見通していた。

価値コミットメント・メディアとは、価値実現に影響を及ぼす一般的能力と信用できる約束と定義されている。そして、それは当該社会の道徳的権威に支えられている。

第5節では、価値コミットメント・メディアのインフレーション、デフレーションについて論を進めている。価値コミットメント・メディアのインフレーション傾向とは、価値を実行する際に委託過剰となることであるとし、デフレーション傾向とは、価値を実行する際の望まない方向への性向であるとされている。そしてそれは、自由を制限する程度に関係してくるとされている。

## 注

- 1) パーソンズがカリスマ的という用語を使っているのは、ウェーバーのいうカリスマ的なリーダーシップの概念に依拠している。ここでカリスマ的なリーダーは、自己の利益を高めることとしてではなく道徳的義務をはたすこととして必要とされ、それに対して応諾を課している。



## 第2部

一般行為システム、システムとしての人間的条件  
における相互交換メディア

## 第6章 一般行為システムにおけるシンボリック・メディア

### 第1節 はじめに

パーソンズは一般行為システムから知性、遂行能力、感情、状況規定の4つのシンボリック・メディアを導いている。本章では一般行為システムの構造、そこにおけるメディアの導出、メディアの性質、そして知性メディアと感情メディアの特徴について検討していきたい。

### 第2節 一般行為システムの構造

パーソンズは、社会システムの相互交換過程から貨幣、権力、影響力、価値コミットメントという4つのシンボリック・メディアを発見し、その特質を苦勞して仕上げた(第1章、表1)。その後、社会システムのシンボリック・メディアが複雑でつねに発展している社会でうまく流通しているのは、人間の行為システムにより根源的なものが存在しているからに違いないと考えた。このようにして、むしろ逆の順序で人間の一般行為システムのシンボリック・メディアが究明された。それゆえ一般行為システムのシンボリック・メディアは、社会システムのそれに比べると人間の本質にかかわる人間の存在条件に関係したメディアであるといえる。

それでは一般行為システムにおけるシンボリック・メディアは、どのように生じたのであろうか。サイバネティックな階統制の下で、一般行為システムは行動有機体、パーソナリティ・システム、社会システム、文化システムに分割された(図1)。そして4つの下位

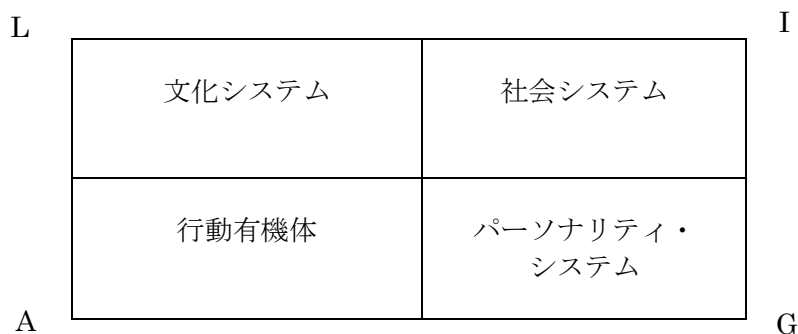


図1 一般行為システムの構造 (1)  
T. Parsons and G.E.Platt,  
*The American University*, 1973 : 15

システムの間にく遂行システムの組織><動機づけの統合システム><道德秩序の根拠づけ><認知的複合体><報酬配分のシステム><表現的基準のシステム>という6つの二重の相互交換が生じ、お互いに指令を伝えている。ここに一般行為システムのA・G・I・Lに対応するシンボリック・メディアとして知性(Intelligence)、遂行能力(Performance

capacity)、感情(Affect)、状況規定(Definition of the situation)が生み出される(図 2)。

まず、一般行為システムの構造をより詳しく見てみよう。図 3 が、このパラダイムの構造的側面を表したものである。これは、図 4 の社会システムの構造と同じ観点で構成されたものであり、逆に図 3 の I 下位システムをさらに区分したものが、図 4 であるといえる。図 3 の 4 つのパターン維持枠は、それぞれの下位システムの統合の焦点として位置づけられる。つまり行動有機体においては、生物圏における行為の統合の焦点として遺伝学的な構成要素について語る事ができる。パーソナリティ・システムにおける統合の焦点には、個人生活に対する意味の複合体である人格同一化(自我の究極目標)をあげる事ができる。すなわち生物としての人間は目標を達成する為に表現型をもたねばならず、人格同一化というのは人間の誕生から死までのライフコースの通路であるといえる。社会システムにおける統合の焦点には、「歴史」における意義と関係した信託システムをあげる事ができる。すなわち人間の歴史の方向は、個人の短い一生を超越して集合体としての統合をはかって進むところに意義が見出され、それは個人すなわち行動有機体のレベルでもても意義を減ずるものではないとされている。

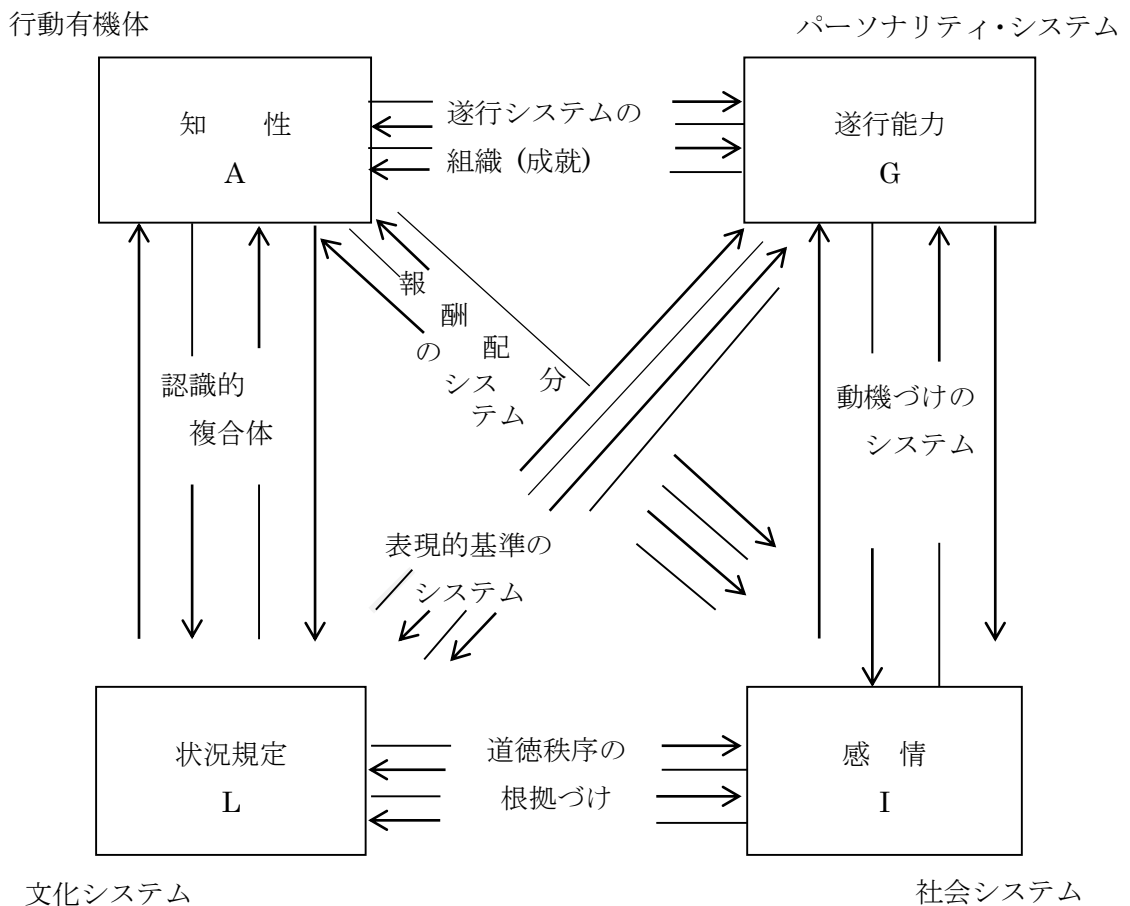


図 2 一般行為システムの図形

Parsons and Platt, op.cit., 435.

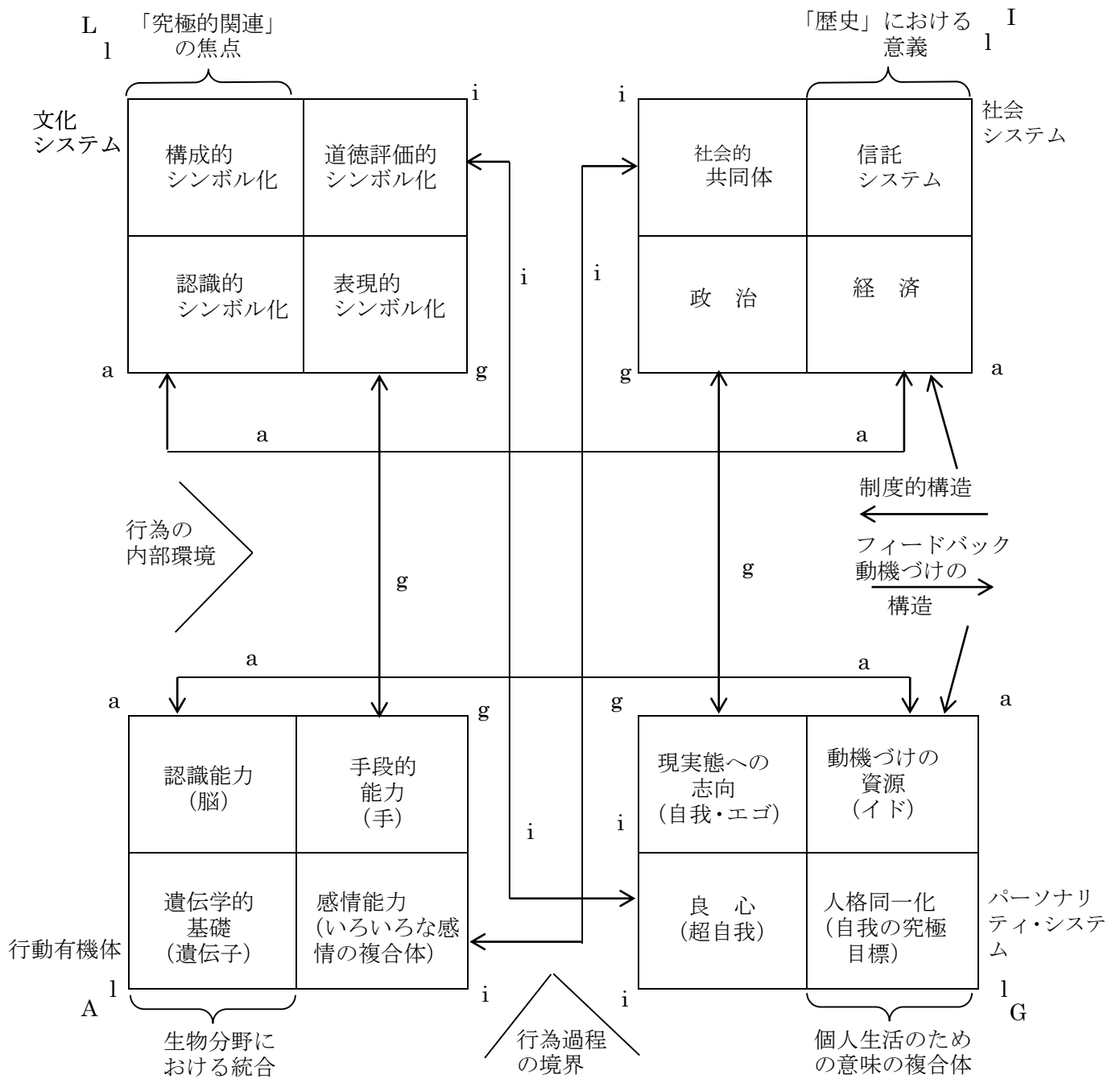


図3 一般行為システムの構造 (2)  
Parsons and Platt, op.cit., 436.

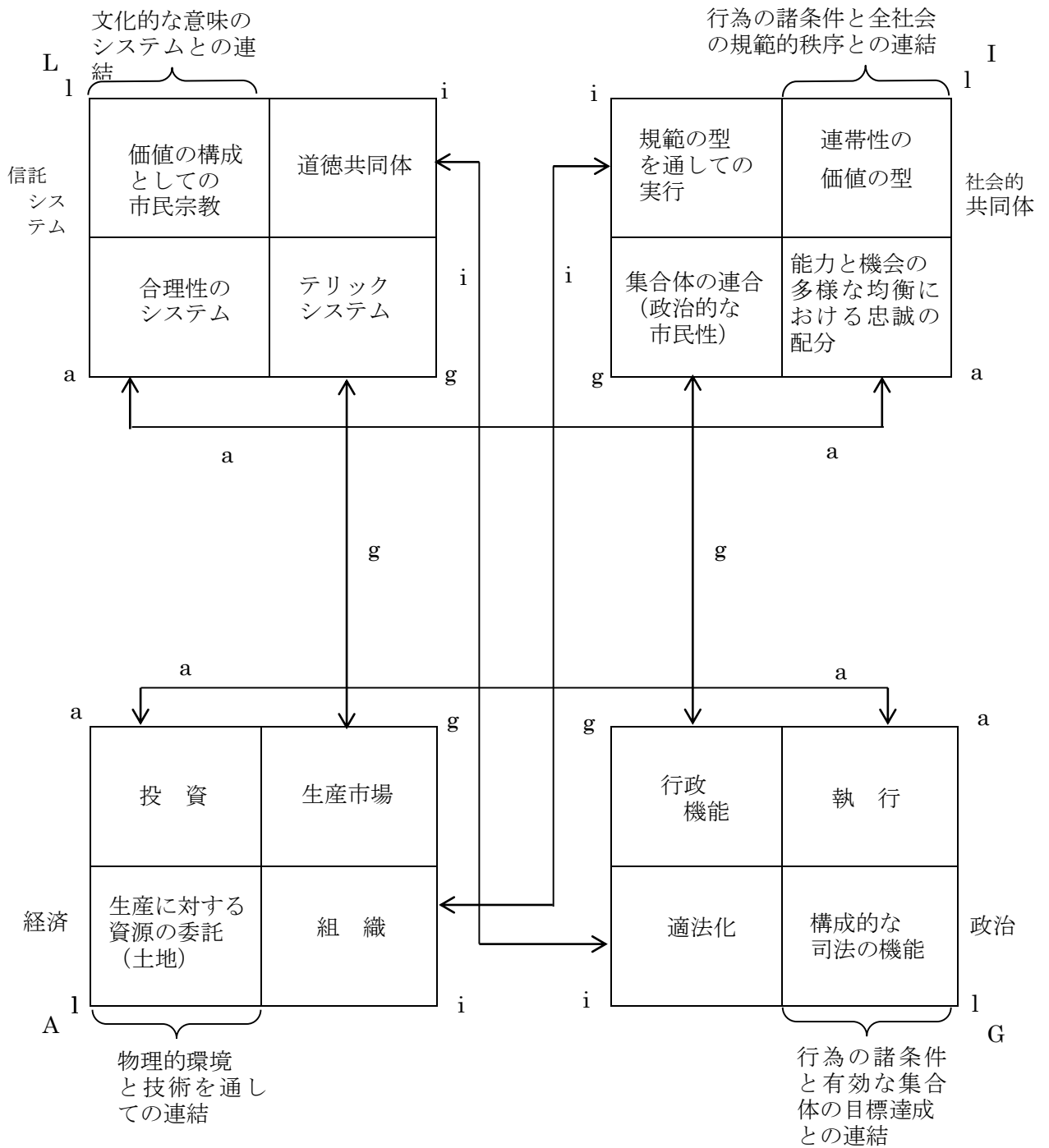


図4 社会システムの構造  
Parsons and Platt, op.cit., 428.

最後に、文化システムにおける統合の焦点には、人間の行為体系とテイリッヒのいう「究極的な関連」と連結して、あるいはウェーバーのいう原始宗教についての「意味の問題」と連結して、構成的シンボル化をおいている。それは、一般行為システムの4つの機能的な下位システムのパターン維持枠にとって重要なものである。つまり、それは行動有機体とパーソナリティ・システムを組み合わせることで構造的に形成化し、作用している個人行為者の内部環境と社会システムと文化システムを組み合わせることで、構造的に形成化している社会環境との関係をつなぐものとして重要であるとされている。

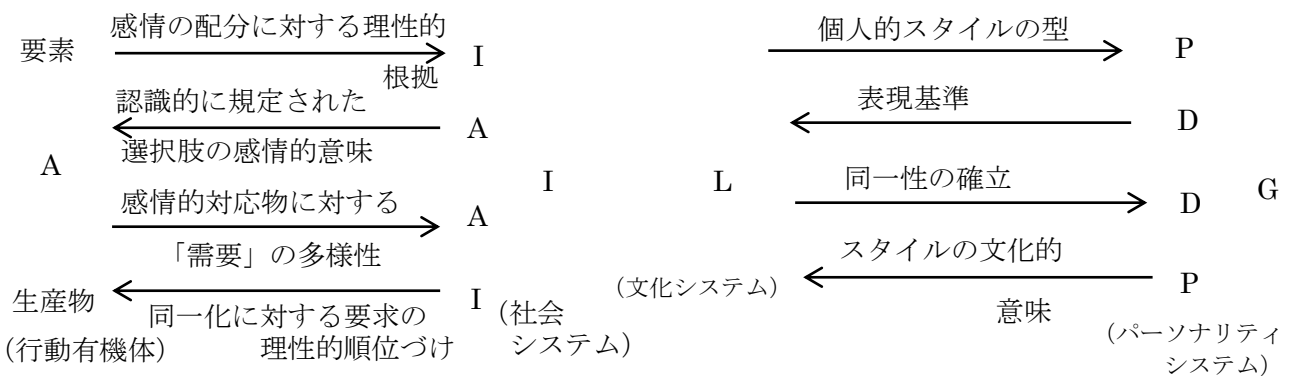
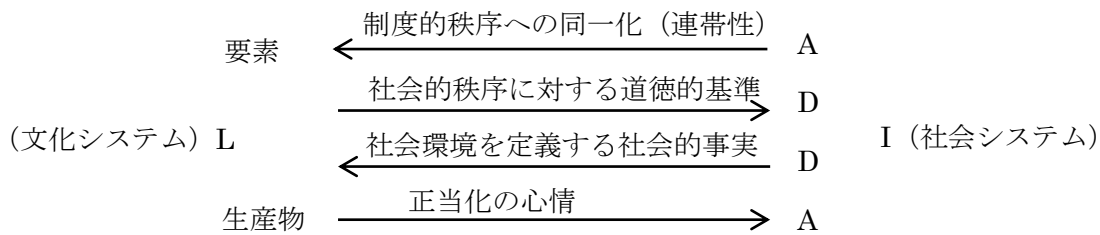
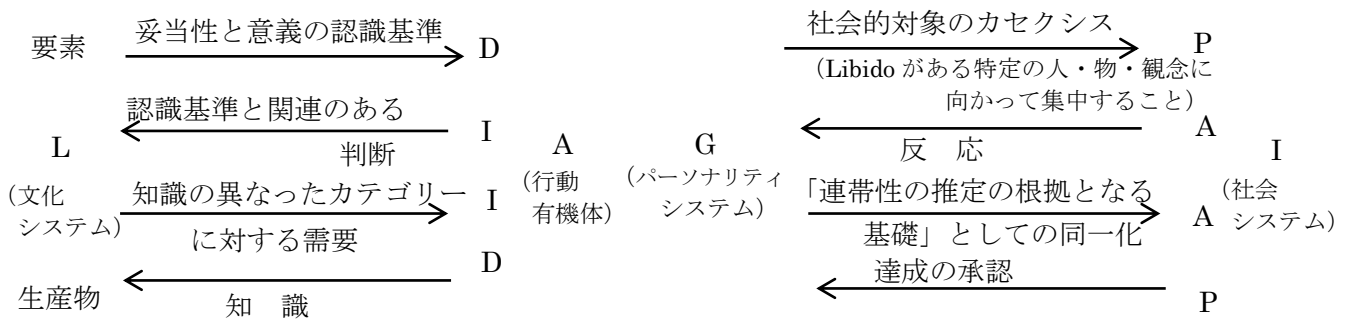
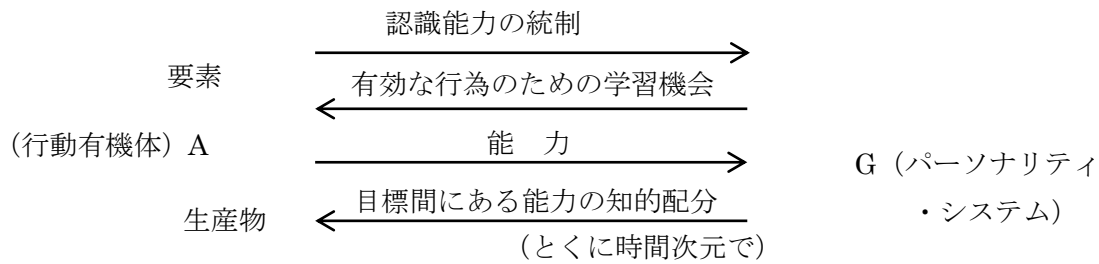
結局、文化システムの中の構成的シンボル化は、認識的複合体の概念に対して鍵を提供していると考えられている。パーソンズは、認識的複合体が一般行為システムの構造の中でつづられていると主張している。一般行為システムとは、知識のカテゴリーにある文化システム、合理性のカテゴリーにある社会システム、遂行のカテゴリーにあるパーソナリティ・システム、および知性が係留している行動有機体をさしている。

### 第3節 一般行為システムにおけるメディアの導出

図5は、一般行為システムのレベルにおける6つの2重の相互交換を、カテゴリー化したものである。A-LとA-Gの相互交換に知識と能力のカテゴリーを用いているが、それは社会システムの経済的生産過程の生産物である財・サービスに対応している。6つの相互交換のうち行動有機体、すなわちA下位システムに関係するA-L、A-G、およびA-Iの相互交換は、秩序のパターンになっている。他の再秩序化は、L-I相互交換から発展している。このことは、デュルケームのいう個人行為の内部的環境、社会的行為に参加している人が道徳的権威によってその命令を課せられているという社会的規範の構造、および社会的事実の集合体が直面している社会的環境との考察を含んでいる。パーソンズは、しだいにL-Iの相互交換に着目していく。

このようにして図5から、知性・遂行能力・感情・状況規定という4つの一般行為システムにおけるシンボリック・メディアが導き出される。

図6は、第1章表1の社会システム・レベルにおけるメディアの裁定様式を、一般行為システム・レベルに相当させたものである。縦にはシンボリック・メディア、横にはコード(code,規典)とメッセージ(message,伝達内容)がおかれている。コードは特殊なメッセージに関する準処枠を提供している。その準処枠とは語彙、文法、文章論のレベルでの無条件の枠組みをさしている。そして、コード自体は何も伝達しない。



メディア D 状況規定  
 A 感情  
 P 遂行能力  
 I 知性

図5 一般行為水準における相互交換  
 Parsons and Platt, op.cit.,439.

メディアの 構成要素と 相互交換 関係項		コード (規 典)		メッセージ (伝達内容)	
		L 意味の型	I 価値基準	制御される要素 A (本源地)	制御される生産物 G (目的地)
状況規定	L	人間的条件の 意味の構成的 根拠	道徳的権威におい て基礎づけられる 価値合理性	認識的基準に 関連した判断	A 知識 A (の異なったカテゴ リー) に対する需要
				制度的秩序に おける同一化	I 正当化の心情 I
感情	I	社会に関連し た意味の制度 化	社会的命令におい て基礎づけられる同一 性の調和	社会秩序に関 する道徳的基 準	L 社会的事象 L —社会環境
				社会的対象の カセクシス	G 達成の承認 G
遂行能力	G	パーソナリティ に関連した意味 の内面化	実際的に基礎 づけられる目 的合理性	反応	I 同一化 I
				認識的能力 の統制	A 能力 の分配 A
知性	A	認識的妥当性 と意味の根拠	認識基準にお いて基礎づけ られる認識的 合理性	学習のための 機会	G 能力 G
				認識基準	L 知識 L

図6 裁定された一般行為システム・メディア  
Parsons and Platt, op.cit., 446.



パーソンズは、ミッキンニー(Mckinney)とティラキアン(Tiryakian)が初期に L 枠において合理性の下位カテゴリー(subcategories)を、統合の I 枠におくべきであると主張している。なぜなら、合理性のカテゴリーは価値基準として考えられるべきで、一般行為システムでのそれは、社会システムでの調整基準に相当すると考えられるからである。このようにして、合理性のもつ本来の働きは縦・横ともに I 枠に位置づけられ、統合に密接に関係する同義語として調和(Harmonization)という用語で表現されている。コード・レベルにおける価値基準に、知性と交叉する枠には認識的合理性を、遂行能力と交叉する枠、状況規定と交叉する枠には、それぞれのウェーバーのいう目的合理性、価値合理性がおかれている。

コード・レベルにおけるパターン維持枠には、意味の型をおいている。ここでの型とは、価値基準より一步ふみこんだもの、つまり価値に対する認識的客観性と関係したものである。意味とは、人間行為の志向と経験の規範的な秩序の両方にかかわったもので、究極的には人間性、つまり人格と結びつけて考えられる。

意味の型とシンボリック・メディアである知性、遂行能力、感情、状況規定とが交叉する枠は、それぞれ認識的妥当性と意味の根拠、パーソナリティに関連した意味の内面化、社会に関連した意味の制度化、そして人間的条件の意味の構成的根拠となっている。

#### 第4節 一般行為システムにおけるメディアの性質

本節では、知性・遂行能力・感情・状況規定の性質について記していきたい。

##### I. 知性

パーソンズは、人の知性を個人が単に「持っている」ものとしてよりも、むしろ知識の獲得、伝達、利用に必要なものとして、また「消費する」ことによって有効に使用される流動的な資源として扱っている。知性を「消費する」とは、英明に行為することを意味する。

メディアとしての知性と特性としての知性は、本来区別される。メディアとしての知性は、社会システムのシンボリック・メディアである貨幣をモデルとしている。それゆえメディアとしての知性には、循環性があるということ、貨幣メディアと同様に、本質的にはゼロ・サムの性質を有していないということがあげられる。また、貨幣が銀行を通して信用創造の可能性がある。つまり、循環をしていくなかで貨幣量の純増加を生み出すのと同様に、知性は知性銀行としての大学を通して信用創造の可能性がある。このことは行為システムを循環して、知性量の純増加を生み出していくと考えられうる。

人は行為の中で認識的利益を高める為に、知識のほかにもいろいろな資源に知性を委託している。そのことは、必然的に二者択一の選択を行なって行為していることになる。例えば、研究者は認識的問題の解決に時間やエネルギーを委託しているが、それは二者択一し

た行為の利益が何であろうとも、他の人が利用している時間エネルギーが、例えばレジャーの楽しみをもたらすかもしれないことに先んじている。そのような選択が、知性的であるかどうかという質問は、その人の行為システムの中での知識のモードの重要性や、他のことについての関心の重要性に関係している。そのような決定や決定の結果に対する委託の費用は、乏しい資源に対して利用することから、利息がつくかもしれない利益を犠牲にしている。これは、経済学で用いられている機会費用(opportunity cost)に相当している。

貨幣が支出されるように、知性がコミュニケーションの過程を通して支出されるなら、知性はまたコミュニケーションによって獲得され得る(Parsons1973:56-57)。

一般行為システムの中で、経済的消費者に相当する者は、知識に関心を持って役割を演じている人たちであるといえる。その役割を遂行する人たちは、知性のインプットを要求している。そこで、知性という所得は認識的アウト・プットのいろいろな型に対する需要として役立つ。

知性は、認識的価値尺度として機能している。というのは、認識的妥当性の判断や重要性を組み合わせることによって、知性は社会的レベルで行為の合理性に関する評価に最も重要に関するものとして資するからである。

貨幣の調整者は、支払能力である。経済的生産に重点をおいていない組織(大学の事例のように)は、支払能力の命令が緩和されている。つまり、大学は財政的に補助金を与えられている(同前:73)。

支払能力に類似したものは、認識的基準であるといえる。

知性の循環の中での命令的なものが、知性のインプットとアウトプットの均衡を保って作用している。認識的アウトプットの第一の市場は、知識に対する需要を構成しており、第二の市場は能力に対する需要を構成している。このようにして、知性は費用統制のメカニズムとして、人間の行為と社会の内外に機能している。

知性を合理的に利用することは、そこに認識的基準がみられるであろうということを保証している。このことは、認識的合理性の価値パターンが知性の機能に対立して正当化されている根拠である。

## II. 遂行能力

能力は、パーソナリティ構造に内面化された構成要素である。知性によって導かれた能力とは、認識的問題を扱うための能力であるといえる。能力は人々の目標を有効に遂行する為に、人々の受容量(capacity)に横たわっている資源のひとつである。遂行能力とは、目標達成能力のもっとも一般化された形態をいう。そして、遂行能力はパーソナリティの中にしっかりと受けとめられている。

遂行能力に対する所得のカテゴリーは、対象についてのカセクシス<sup>1)</sup>である。つまり、対象に関係してふさわしい行為をするための動機的委託が、カセクシスであるといえる。パーソナリティ・システムの最も重要な産出は、同一化と認識的資源の知性的な組み合わせ

せにある。これらは、遂行能力の所得についての資源であり、貨幣や知性についての所得の資源に似ている。

経済的生産に対する物理的資源(土地)に等しいものと、知性的な行為に対する頭脳に等しいものとは、パーソナリティ・システムについては同一化であるといえる。

知性と同様に、遂行能力も費用を統制するメカニズムとして作用している。

遂行能力のパーソナル内部の一部は、自我(ego)の強さである。自我とは、決定に関して作用する資源で、パーソナルな目標遂行という意味で心理学的に重要な資源である(同前:78-79)。個人のライフ・ヒストリーの中で、認識的学習は行なわれる。そして、認識的学習は知識に関するいろいろな型への委託や能力についてのいろいろな型を獲得する過程から成り立っている。

認識的構成要素と非認識的構成要素との組み合わせの中で、特に重要なことは学生の社会化に関する認識と感情の構成要素の組み合わせであるといえる。

### III. 感情

一般行為システムの社会的下位システムの中に係留している感情メディア(以下、感情と記す)は、社会システムの中ばかりではなく文化システム、パーソナリティ・システム、行動有機体の間においても循環していると考えられている。このようにして、感情は移動やデュルケームのいう意味での連帯性(Solidarity)の要因の統制に関係している。

連帯性は、社会的集合体の元来の性質が価値カテゴリーに基づいていることから考え出されたもので、行為の4つの下位システムすべてから移動してくる緒要素に依存している。これらの緒要素は、個人のカセクティック(cathetic)な委託を含んでいる。この概念として、社会的秩序に横たわっている道徳的基準はデュルケームによって採用されたものであり、それは文化的資源からの貢献である。そして、結局合理性は感情の配分に基づいているといえる(同前:83-84)。

いいかえると、連帯性は個人の内部環境と社会環境に関係しているが、その元来の調整者は道徳的秩序にある。その道徳的秩序を安定させているのが感情である。

パーソンズは、一般行為システムのレベルにあるメディアは、社会システム内部の命令的なもので循環しているに違いないと主張している。そして、彼は循環過程にある知性の機能と感情の機能とを対応させて扱っている。事実、集合体に対する個人の感情の愛着は、社会的単位の構造を規定している制度化の状態に到達し得ると彼は述べている。

### IV. 状況規定

状況規定の概念は、アメリカの社会学者ウィリアム・トマス(W.I.Thomas)から引き出されたものである。トマスは、問題に直面した個体の自己決定的・内省的行為を方向づける「吟味と思索の段階」を“状況規定”とよび<sup>2)</sup>、パーソンズもこれにほぼ近い意味をもつものとしてとらえている。

状況規定メディアは文化システムに係留し、コードの意味の型には人間的条件の意味の構成的根拠がおかれ、価値基準には道徳的権威に基礎づけられる価値合理性がおかれている(同前:446)。状況規定は、社会システムレベルにおける価値コミットメント・メディアに平行しており、一般行為システムというより大きなシステムのパターン維持下位システムに係留しているメディアとして、価値コミットメントを分担している。このようにして状況規定メディアは、境界を定義づけたり当該システムの自己再生産を規則づけている主要なコードを具体化したものであるといえる(Parsons 1978:269)。遺伝学と比較して、それはコードのレベルよりも型あるいはプログラムのレベルにより密接に関係している。このコードの型は、2つのチャネルを通して具体的な行為システムに影響しているといえ、第一には特質性を通して、第二には相互交換の一般化されたメディア、すなわち状況規定メディアにおける統合を通してであるとしている。

特質性は、特別な遺伝子あるいは遺伝子の房(gene-clusters)の中の、遺伝子コードのつづりに似ている。最も一般的なコードレベルの特質性は、第一に文化システムそれ自体の機能的な相違の焦点に関連している。すなわち構成的、道徳評価的、表現的そして認識的シンボル化のパターンの中での相違として、特質化が見られる。そのうち、道徳評価的レベルに対するコードの特質性の焦点となるものは、行為システムの統合に関連しており、価値の制度化に関係する文化システムと社会システムの間関係を導いているとされている。

パーソンズは、より問題となるのは文化的レベルでの表現的シンボル化と行為の下位システムとしての個人のパーソナリティとの関係であるという。そして、個人のアイデンティティの核は規範的概念あるいは個人のスタイル(様式)の型によって組織され、系統だてられていると彼は主張している。

文化システムの構造をみると、パーソンズはシンボリックな意味、そして道徳的、表現的そして認識的定義のパターン化されたセット(集合)として、構成的要素が定義されるという<sup>3)</sup>。

状況規定メディアの機能的な重要性は、制度化のレベルで制限されるのではなく、社会的レベルの道徳的基準や価値関係に関連しているとされている。しかし、行為が構成的複合体それ自体に関係しているのに加えて、より一般的な行為レベル・メディアのすべては、認識的基準と表現的基準、道徳的基準と構成的基準の両方、またそれら互いに関連して包含しているに違いないとされている。

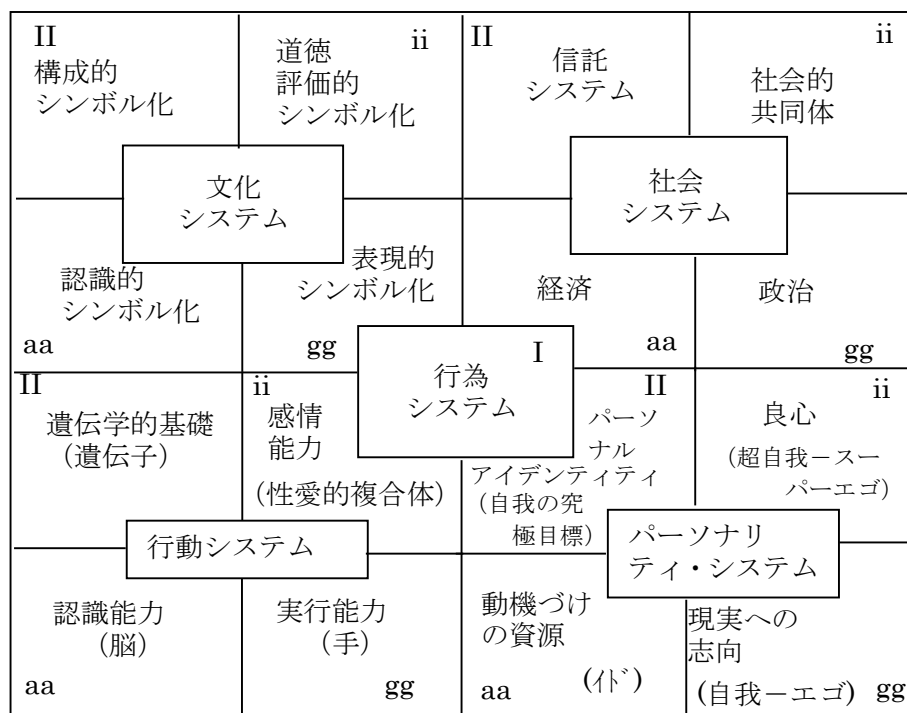
状況規定メディアが価値あるものとなるのは、三つの相互交換の文脈の中ではかられるとしている。第一には認識的基準との相互交換をあげており、このなかで状況規定メディアに適合したり統合しているメディアは知性であるとしている。もし行為が知性的であるなら、それは認識的妥当性と重要性の基準に可能な限り従うにちがいないと、パーソンズは述べている。

第二の文脈には道徳をあげている。道徳的基準が制度化されている限りにおいて、道徳的基準は個人成員の観点から、彼らの社会環境を定義しているシステムの基礎を構成して

いるとしている。社会システムのこの二重の性質は、一般行為メディアの感情に係留している。相互交換の中で、状況規定メディアは制度的秩序やその成員の公正(正義、justice)の感覚に関係して同一化(identification)の基礎として、感情メディアに統合されている、としている。

第三の文脈には、文化システムとパーソナリティ・システムとの相互交換があげられている。ここでは、パーソナリティ(人格)におけるアイデンティティの確立や様式の仕方に、状況規定メディアが関連しているとされている。ここにおいて、状況規定メディアは表現的基準を強調している個人の遂行能力に統合されているとしている。状況規定メディアは、状況的緊急事態、文化的基準、そして個人の動機づけの関心を統合する中で、表現的強調を行なっているとされている(同前:270-271)。

図7 一般行為システムの構造 (3)



T.Parsons and G.M.Platt, *The American University*, 1973 : 436

T.Parsons, *Action Theory and the Human Condition*. 1978 : 382 より作成

一般化されたシンボリック・メディアとして、状況規定メディアは内容が不足していて不十分であるとパーソンズは言う。状況規定メディアは、文化的に意義のあるシンボリック・パターンを作るために働いているが、行為コミットメント(action-commitment)を排除

しているという意味で、不十分であると主張している。

以上のように状況規定メディアは、行為システムの中の文化システムに係留しており、認識的、道徳的、表現的分野と関連して、知性、感情、遂行能力の各メディアと統合していると分析されている。状況規定メディアは、その解明が不十分であるとされているが、人間は複雑性を特徴とする生命体であるので、それは当然の帰結であるといえるかもしれない。

## 第5節 知性メディアの特徴、感情メディアの特徴

本節では、社会システムと文化システムの区別、知性メディアの特徴、感情メディアの特徴について検討していきたい。

### (1) 社会システムと文化システムの区別

一般行為システムは、行動有機体(後に行動システムと改称)、パーソナリティ・システム、社会システム、文化システムに四分割されているが、ここで社会システムと文化システムは明確に区別する必要がある、とパーソンズは主張する。そして文化システムに大学が関係しているとして、次のように記述している。

文化システムへの大学のかかわりあいの焦点は、知識に対するかかわりにある。知識の伝達、とりわけ教授と学習の過程を通して、教員から学生へと伝達されることに関するのだが、知識の進歩ともかかわっている。研究者およびその協力者の観点からすれば、研究もまた学習過程なのである。

知識をわれわれは、行為の一般システムの下位システムすべてを包含するより大きな複合体のなかの主要な文化的構成要素として分析してきた。このこととの関連で、われわれは能力がパーソナリティ・システムに深く関連しているのと同じく、合理性は社会システムに関わる現象だとして分析してきた。そして、リッツ兄弟が行動システムとよんでいるものに密接に関連している一般化されたシンボリック・メディアの役割を果たすものとして、知性<sup>4)</sup>という概念を採用した(Parsons 1977, 田野崎監訳 1992:285-286)。

大学では、教授と学生(学部学生、大学院生)が知識を通して真理を探究していく。その知識をパーソンズは文化的構成要素として扱っている。これと関連して、彼は人の持っている能力をパーソナリティ・システムに関係するものとして、合理性を社会システムに関係するとしている。そして知識、能力、合理性をつないでいく働きをするものとして、行動システムから知性メディアを用いた。このように理解できる。

文化システムと社会システムとの関連については、以下のように記されている。

文化システムと社会システムのもっとも重要な連結は、大学全体が認識的合理性の価値に深く関与していることである。われわれの考えでは、この脈絡で言及している合理性は

基本的には社会的範疇である。ところが他方、「認知的」という用語は、伝達と進歩という主要な二つの様式をとる知識に関して、一般的にもたれている関心に対して合理性の関係はどうなっているかを、明確に規定するものである。われわれは、認知的問題を扱う個人の能力のことを遂行能力とよんでいる。われわれの考えによれば、これは学部学生と大学院生とを問わず学生という役割で、学界的共同体に参加するという経験の基本的に重要な部分を占めている社会化の過程を通して、パーソナリティのなかに確立されるのである(同前:287)。

文化システムと社会システムは認知的合理性(cognitive rationality)の価値のよってつながっているという。認識は文化システムにとどまり、合理性は基本的には社会システムにとどまる。「認知的」という語は、知識に関して合理性との関係を規定するとある。それゆえ、認知的合理性は文化システムに入ると考えられる。また遂行能力メディアは、パーソナリティ・システムのなかにうち立てられる。以上のように述べて、パーソンズは社会システムと文化システムのつながりを説明している。

## (2) 知性メディアの特徴

知性と感情は一般行為システムのメディアであり、『アメリカの大学』(1973)のなかで主に取り上げられている。それゆえ、知性メディアは大学との関連において論じられている。

パーソンズは、知性の概念をなぜ相互交換の一般化されたメディアにあてはめようとしたのかについて、次のように記している。

知性とは、認知的諸問題の解決に必要な諸資源を効果的に動員するための、通常では個人である行為単位的能力であると考えられよう。ふつうは、この定義で間に合っている。しかし、われわれが知性を考察する際には通常のやり方と異なっている。それは、このような能力としての知性の作用に密接に結びついた諸条件や諸過程に関するわれわれの考え方に起因している。第一に、われわれの考えでは、知性は遺伝的な構成要素によって、大きく影響されているけれども、社会化と学習過程を通して主に獲得されるものである。ところが、われわれは知性を獲得することが可能であるばかりか、問題解決活動において使用することによって、それを消費することも可能であると考えている(同前:287)。

もっとも簡潔な知性の定義として、認知的な問題を解決するために必要な諸資源を動かしていくための個人の能力であるとしている。しかし、パーソンズは知性を遺伝によるもの、固定したものとは考えていない。知性が働く際の条件や過程を視野に入れて捉えている。知性は遺伝による影響も大きいですが、社会化と学習過程によって所有することができるとしている。そして知性を身につけることができるだけでなく、それを問題解決に役立てることもできる。このように、パーソンズは知性を働きの面からおさえている。

では、知性の流通はどんな意味内容をもっているのだろうか。この点については、以下のように記述されている。

人間個人を主な準拠点とすると、たとえば成人した個人の場合、彼がもつ知性の水準は

彼のこれまでの生活史のなかで、彼に作用を及ぼしてきた様々な要素の組合せによって生じた集積体であると考えられる。このような要素のなかには、遺伝的組成が含まれている。とはいっても、遺伝的要素はそれだけで独立して作用するわけではない。遺伝的要素は、認識的な学習経験と結びついているし、社会化に関する種々の期待といった非認識的枠組みとも結びついている。

とすれば、認識的能力としての知性は、長い期間にわたって成長することのできるものと考えられる。いったん獲得されれば、知性は多種多様な方法で認識的問題の解決に「利用」される。そこで問題は、当該行為者が問題解決活動に費やした知性を回復することができるかどうか、また回復するとすれば、いかにしてなのかということになる。このことに対する回答は、当該行為者は「経験から学習し」、そしてその次のときには、大体において経験である場合よりは、うまく行うことができるということだと思われる(同前:287-288)。

ここでは、知性は長い期間にわたって成長できるものと把握され、行為者は経験から学習して、次のときにはその経験を活かしていくことができるという。パーソンズは人間の知性を人が単に持っているものというよりも、行為の経過の中で獲得され高められ、また使うことによって利用される流動的資源として分析している。そして彼は、知性メディアが流通という基準を満たしているにちがいないことを強調している。また、知性が本質的な点で非ゼロサム現象としての貨幣モデルにあてはまることを主張している。

知性と社会構造との関係についてみてみよう。

パーソンズは、認識的複合体全体が社会システムの水準で制度化されていることから、制度化という状態のうえに近代の大学はあるという。制度的類型として、大学は一つの社会組織の範疇に属するという。そして彼は、大学という組織にふさわしい専門用語に「合議制的アソシエーション」(collegial association)を提唱して、次のように説明している。

これは、一方では市場システムから、他方では官僚制的な組織類型から峻別されなければならない。また純粹に民主的なアソシエーションから明確に区別されなければならない。なぜなら合議制的アソシエーションは、価値の信託という要素をもっているからである。この場合、その要素とは認識的関心の複合体、およびそれらの認識的関心が、より上位の行為システムやそれに関連した階層の型に、ある点で組み込まれていることに対する責任である。

大学の核心は、われわれが合議制的アソシエーションと規定する教授陣・学生から成る集合体にある。この集合体のもっとも顕著な構造上の規準は、成員資格を持つ者の地位が根本的に平等だということである。われわれの考えでは、任意のどの在任資格においても同じ大学の成員たち(正教授、准教授、講師、大学院生、学部生)は互いに平等である。しかし、そのシステム全体は、認識的合理性の価値の実行にどれだけ委託がみられるか、そしてどれだけの能力があるかという水準にもとづいて階層化されていると考えられる(同前:289-290)。



ここでパーソンズは、大学のもつ特色をふまえて「合議制的アソシエーション」という呼び方を提案している。それは‘寄り集まって相談して物事を決めていく結社’を意味している。そして合議制的アソシエーションは、価値を信用して委託するという要素をもっているが、それはより上位概念である行為システムと、それに関連した階層の型に入っていることに対する責任でもあるという。大学の構成員は根本的には平等である。しかし、その組織はおかれた地位によって、つまり認知的合理性の価値の実行などによって階層化されている。以上のように理解することができる。

近代社会において、大学以外でもっとも注目すべきアソシエーション的構造に親族アソシエーション、国民社会ないし社会的共同体、宗教的アソシエーションを、パーソンズはあげている。これらの主要な類型は、社会的価値の信託に関して合議制的アソシエーションのもつ特徴や成員資格についての一定の考え方を有する傾向にあるとして、彼は市民権という概念をあげている(同前:290)。続いて次のように記述している。

このようなアソシエーションは、支配の手段をむき出しにして統制したり、政治権力や富によって強制的な裁定を与えることによって特徴づけられはしない。

私は、ダニエル・ベル<sup>5)</sup>と同じ意見である。すなわちベルによれば、大学は近代社会とりわけベルが近代社会の脱産業的な側面として言及している社会構造の構成要素としての、集合体の、方略的に最重要な唯一の範疇となってきたのである。

その理由は、大学が富や権力の中心になってきたからではない。大学がこのように近代社会の構成要素として、もっとも重要な範疇となってきたのは、大学がある種の資源を動員する際を中心になってきたからであり、その資源とは、ベルが「理論的知識」の重要性に焦点をおくものとして特徴づけているような、社会発展のごく最近の諸側面において、きわめて新しい水準の重要性を獲得してきたような資源なのである(同前: 291-292)。

ベルは工業社会の次に到来する社会に、知識社会というべきものを構想した。パーソンズの用語でいえば、大学は「認知的合理性」を生み出す場所である。近代社会の発展には、知識あるいは知恵が重要になる。大学がこのような資源を動員する中心になってきたことを、パーソンズは指摘している。現代社会においても、大学や大学院などの高等教育機関の重要性は変わらないといえる。

### (3) 感情メディアの特徴

一般行為システムにおいて、知性メディアは行動システムに根ざしているのに対して、感情メディアは社会的下位システムに根ざしている。感情メディアについては、次のように記されている。

感情メディアは、社会システム内部のみならず、社会システムと行為のその他の第一次的機能的な下位システム、すなわち文化的下位システム、パーソナリティ下位システムおよび行動的下位システムとの間をも循環すると考えられる。このように捉えられた感情メディアは、デュルケームの述べた意味での連帯の諸要素を動員したり制御したりすることに、

もっとも深く関係しているような一般化されたメディア<sup>6)</sup>なのである<sup>7)</sup>(同前:292)。

ここでは、感情メディアは社会システムの内部(経済、政治、社会的共同体、信託システム)だけではなく、文化システムの下位システム、パーソナリティ・システムの下位システム、行動システムの下位システムの間を循環しているという(本論 109 頁参照)。行動システムの i 機能に根ざしている感情能力は、社会システムの i 機能にある社会的共同体につながっており、社会システムの価値原理になっている連帯の要素に働きかける。連帯については、次のように説明されている。

価値という範疇に基礎をおく社会的集合体の主要な属性としての連帯は、行為の 4 つの第一次的な下位システムのすべてから動員されてきた、さまざまな要素に依存している。これらの諸要素には、まず連帯的な集合体に参加することに対する個々の人間の充ちた委託が含まれる。さらに、社会的秩序の根底にある道徳的規準、この概念は、デュルケムによって採用されたものであり、文化的資源から由来しているものであるが、その規準が含まれる。そして最後に、感情配分の合理的根拠が含まれる。この場合、感情配分とは、たとえば全体社会の委託と全体社会以外のものへの委託の間の感情配分であるとか、さらに後者のなかではさまざまな下位集合体における諸成員資格の間での感情配分といったものである(同前:292)。

社会システムにおける連帯という価値はパーソナリティ・システム、文化システム、行動システムから流動してくる要素に依存しているという。それはパーソナリティ・システムから「社会的対象のカセクシス」として社会システムへ流れてくる遂行能力メディア、文化システムから「社会的秩序に対する道徳的基準」として社会システムに流れてくる状況規定メディア、行動システムから「感情の配分に対する理性的根拠」として社会システムに流れてくる知性メディアが該当している(本論 112 頁参照)。

感情メディアが循環することについては、次のように記述されている。

感情を循環する一般化されたメディアとして捉える方法の背景には、社会システムが行為において二重の役割を果たしているとする、デュルケム的な考えが潜んでいる。一方において、行為している個人の観点からすれば、社会システムは、その個人の第一次的な適応的定位の焦点をなしている環境である。他方、社会システムは、人間行為の領域から分析的に分離されている「自然」環境の一部ではなくて、それ自体、行為と過去の行為諸過程の反作用とから成る行為システムの一部なのである。

このように、社会システムが構成されるのは、行為の諸構成要素によるのであり、そのなかでも特に重要な側面は道徳的秩序である。これは、当該の社会システム内部における連帯的な関係状態を第一次的に規制するものである(同前:293)。

感情メディアを循環するメディアとして考える背後には、行為における社会システムの二重の役割があるという。それは、一面において社会システムは個人が第一に適応している環境であるという点であり、他面において社会システムは行為システムの一部であるという点である。パーソンズは一般行為システムを行動システム、パーソナリティ・システ

ム、社会システム、文化システムと四分割をしているが、行為システムはあくまでその一部であり、行為システムの上位概念に文化システムをおいていることが大きな特徴であるといえる。社会システムのなかでは、信託システムが最上位概念であり、そこでは道徳的秩序が重視されている。そして道徳的秩序は、統合の価値になっている連帯の関係をなによりも規制すると強調されている。

上記のことを踏まえて、パーソンズは感情メディアについて次のように定義している。

感情メディアとは、社会システムの道徳的秩序にとって基本的に重要な安定状態が、そのなかで個人が行為しているより具体的な社会的環境の内部で生じるさまざまな範囲の変異に対して、それによって調整されるようなメディアなのである(同前:293)。

すなわち、感情メディアとは個人が行為している社会的環境のなかで起きるいろいろな変化に対して、社会システムの道徳的秩序からみて重要な安定した状態になるように調整されるメディアである。このように理解できる。

知性メディアと感情メディアの相互交換をみてみよう。

知性(A)と感情(I)の交流は斜めの関係にあり、<報酬配分のシステム>にある(p.108 参照)。A と I の相互交換をみてみると、要素には A から I には「感情の配分に対する理性的根拠」があるとして知性が流れ、I から A には「認識的に規定された選択肢の感情的意味」をもつとして感情が流れている。産出物には A から I に「感情的対応物に対する需要の多様性」があるとして感情が流通し、I から A に「同一化に対する要求の理性的順位づけ」にあるとして知性が流通している(本論 112 頁参照)。

またパーソンズの示した‘一般行為システムの構造(2)’において、行為の内部環境をみると、行動有機体(行動システム)における感情能力(i)は社会システムにおける社会的共同体(i)につながっている。またパーソナリティ・システムの良心(i)は文化システムの道徳評価のシンボル化(i)につながっている(本論 109 頁参照)。このように、一般行為システムと社会システムは連結している。

## 第6節 結び

筆者は一般行為システムのシンボリック・メディアの L 機能において提案を試みたい。

パーソンズは、一般行為システムの一般化されたシンボリック・メディアに知性(A)、遂行能力(G)、感情(I)、状況規定(L)の4つをあげている。彼は亡くなる前年、1978 年秋に関西学院大学千刈セミナーハウス会館記念講演会の講師として来日し、社会学部の大学院で集中講義を行なった。その時の講義において、行為システムの4つのシンボリック・メディアのうち知性のみが残っていて、残りの3つは名称の変更が検討されている。改定後のシンボリック・メディアには知性(A)、自我の能力(G)、集合感情(I)、集合表象(L)が置かれている。G の目標達成機能には「自我の能力」が置かれ、その理由として、それはパーソナリティ・システムに集中しているので、ここに適合していると記している。I の統合機能

は「集合感情」となっており、Lの型の維持機能は「集合表象」となっている。集合表象はデュルケームの著作の中で非常に重要なものとして用いられた用語であるが、ここによく適合していると思うとパーソンズは記している。さらに彼は、初期にはトマス (W.I. Thomas) の「状況規定」を使ったが、今ではこれはそれほどよくは適合していないと確信していると記している(Parsons,1978,倉田編訳 1984:93-94)。

パーソンズはデュルケームの用語「社会的環境」を、他者と社会的相互作用を行なっている個々の行為者からなる社会的環境を意味していると記述している。そこでデュルケームのいう社会的環境を、一般行為システムの「内的環境」と解釈している(同前:72)。

ここでいう内的環境は、クロード・ベルナールや W.B.キャノンが述べているように生物体(あるいは有機体)でいうならば、からだの内部環境に相当するものと思われる。W.B.キャノンによれば、からだの内部環境は液質によって恒常性が保たれ、液質は自律神経の中の交感神経によって支配(影響)されている。デュルケームのいう集合表象は、社会を成り立たせている諸個人の意識の結合・総体であり、個人表象にとって外在的で拘束的、超越的という特徴があげられている。集合表象には社会制度、法、道徳、宗教などをあげることができる。デュルケームのいう集合表象は、アダム・スミスのいう共感(sympathy)と部分的に共通するところがあると考えられる。

ここにおいて、筆者はL機能に置かれている集合表象の代わりに、共感(sympathy)を置くことを提案したい。人間のからだの恒常性(安定性)を保っているのは、交感神経(sympathetic nerve)<sup>8)</sup>であり、スミスが『道徳感情論』の中で人間の感情のうちの究極的なものを共感(sympathy)に求めているからである。共感( sympathy)は人間あるいは個人が存在するために、欠くことのできないものである。共感( sympathy)は、人間が存在するための究極的で根源的な条件であると考えられるからである。

パーソンズは、改定後の行為システムのシンボリック・メディアとして、I機能に集合感情、L機能に集合表象と個人と集合体がつながるものを置いている。集合感情は、集合体への感情、集合体につながる感情である。集合表象は個人表象と区別され、個人に外在的で拘束的、超越的であるとされている。社会制度などがあげられている。改定前の行為システムのシンボリック・メディアは知性(A)、遂行能力(G)、感情(I)、状況規定(L)である。筆者は、一個人の行為システムの場合、改定前の A、G、IはそのままLだけ変更して共感(sympathy)を置くと良いのではないかと考えている。なぜなら、共感( sympathy)は個人の存在条件の根源を成していると思われるからである。個人の統合機能(I)は集団への感情ばかりではなく、まず個人内部での感情のバランス(均衡)が重要であり、その中に集合体への関わり、感情も含んでよいのではないかと考えられる。G機能について、改定前の遂行能力は、何かを成就しようとする能力である。改定後は自我の能力が置かれているが、ここで自我とは自分自身あるいは意識や行動の主体となるものとみなすことができ、遂行能力をも含むより広い概念であると考えられる。改定後のシンボリック・メディアは、改定前よりもより広い人間性、個人と集合体をふまえて置かれている。筆者は理論から実証へと考えた場

合、G 機能の場合には目的があつてそれを成就する力とした方が捉えやすいのではないかと考えている。

以上をまとめると、筆者の提案する一般行為システムのシンボリック・メディアは図 8 のようになる。ただし、これらのシンボリック・メディアにはパーソンズが行なっているように、コードとメッセージにおける条件整備の検討が必要であり、ここで提案したのはあくまで試案である。

L	I
共感 (Sympathy)	感情 (Affect)
知性 (Intelligence)	遂行能力 (Performance capacity)
A	G

図 8 一般行為システムのシンボリック・メディア (試案)

一般行為システムは行動システム、パーソナリティ・システム、社会システム、文化システムに四分割されるが、社会システムと文化システムは明らかに区別する必要があるとされている。大学は文化システムに関与しているが、その焦点は知識に対する関わりにある。知識を文化的構成要素として、パーソンズは分析している。そして人の持っている能力をパーソナリティ・システムに関係するもの、合理性を社会システムに関係するとしている。ここで知識(L システム)、能力(G システム)、合理性(I システム)をつなぐ役割を果たすものとして、行動システム(A システム)から知性メディアが生み出されている。

文化システムと社会システムは、認識的合理性の価値によってつながっているとされている。認識は文化システムに、合理性は社会システムに属するが、「認識的」という用語は知識に関して合理性との関係を規定するとされ、そのため認識的合理性は文化システムに入る。このように社会システムと文化システムのつながりが説明されている。

知性メディアとは、認識的な問題を解決するために必要な諸資源を動員するための、個人の能力であると定義されている。知性は遺伝による影響も大きいですが、パーソンズは社会化と学習過程によって主に獲得されるものであると捉えている。そして知性を獲得するだ

けではなく、それを問題解決に活用できることを、パーソンズは強調している。ここにメディアとしての知性の特徴がある。

また知性は長い期間にわたって成長できるものとされ、いろいろな方法で認知的問題の解決に利用される。行為者が問題解決に費やした知性は、枯渇するののかというと、そうではなくて回復することができるという。それは行為者が経験から学習して、その次の時には経験を活かして、よりうまく行うことができることをさしている。私たちは、これらのことを自分たちの経験から理解できる。パーソンズは知性メディアを、行為過程のなかで獲得して問題解決に利用していく流動資源として分析している。

知性メディアと社会構造との関係については、大学が例としてあげられている。パーソンズは、大学という組織に相応する専門用語に「合議制的アソシエーション」を提案している。それは、集まって協議して事柄を決めていく結社を意味している。合議制的アソシエーションは、価値を信用して委託するという要素をもっており、それはより上位概念である行為システムや、それに関連した階層の型に入っていることに対する責任を併せ持っていることでもある。

感情メディアは、社会システムの内部(経済、政治、社会的共同体、信託システム)だけではなく、文化システム、パーソナリティ・システム、行動システムのそれぞれの下位システムの間を循環しているとされている。すなわち行動システムの機能を担っている感情能力は、社会システムの i 機能を担っている社会的共同体につながっていて、社会システムの価値原理である連帯の要素に働きかける。このように感情能力は連帯に働きかけているといえる。

そして社会システムにある連帯という価値は、パーソナリティ・システムから社会システムへ「社会的対象のカセクシス」として流動している遂行能力メディア、文化システムから社会システムへ「社会的秩序に対する道徳的基準」として流動している状況規定メディア、行動システムから社会システムへ「感情の配分に対する理性的根拠」として流動している知性メディアに依存している。

社会システムのなかでは、信託システムが最上位概念になっており、そこでは道徳的秩序が重視されている。そして道徳的秩序は、統合の価値になっている連帯の関係をなによりも規制する。それゆえ行為において連帯は重要な価値であるが、それを規制する道徳的秩序はより重要な価値であるといえる。

このようなことを踏まえて、感情メディアとは、個人が行為している社会的環境の内部で生じるさまざまな変化にたいして、社会システムの道徳的秩序にとって重要な安定した状態になるように調整されるメディアである、と定義されている。

注

1) カセクシス(cathexis)とは、リビドー(libido)がある特定の人・物・観念に向かって

集中することをいう。

- 2) トマス(W.I.Thomas1863~1947)は状況規定について、社会の成員が行なう自発的な状況規定と社会が彼に提示する規定との間には、つねに競合関係があると指摘している。そして彼は状況規定について、行為の複数の選択可能性の中から特定の行為を選択する、意志をもった行為に不可欠の与件と意義づけている(森岡・塩原・本間編 1993:728)。
- 3) パーソンズは文化システムを認識的シンボル化、表現的シンボル化、道徳評価的シンボル化、構成的シンボル化に四分割しているが、そこには、デュルケームの『宗教生活の原初形態』(1917)に描かれた行為システムにおける認識的、道徳的、宗教的という三つの文脈が下敷きになっているといえる(Parsons 1973:270)。
- 4) **Intelligence** は翻訳書では知力と訳されているが、本稿では知性と記すことにする。
- 5) **Daniel Bell** 1919~2011,アメリカ合衆国の社会学者。工業社会の次の発展段階として、知識が中心となる社会類型を‘脱工業社会’として提示した。それは、財貨生産中心の経済からサービス経済への移行、職業構成における専門職・技術職の優位、社会制度における理論的知識の中心性などを特徴としている。主著『イデオロギーの終焉』(1960)、『脱工業社会の到来』(1973)など。
- 6) **generalized media** は翻訳書では一般化的媒体と訳されているが、本稿では一般化されたメディアと記すことにする。
- 7) メディア理論を一般行為水準におけるテーマとして取り上げている学者たちの間でも、感情をどのように位置づけるかに関しては、意見の一致が見られてこなかったという。とりわけ、マーク・グールド、ディーン・ガースタインは感情を第一義的にパーソナリティ・システムに根ざしたメディアとして用い、社会システムのメディアとしてはそれにかわる何らかのメディアを導入しようとしてきたという。パーソンズは、感情を明確に社会システムの脈絡で用いている(Parsons1979,田野崎監訳 1992:292)。
- 8) 交感神経を構成する個々の遠心性末梢神経をいう。内蔵諸器官の相互的影響、すなわち交感作用(sympathy)を媒介する特殊な神経の意味で、J.B.ウインスロー(Jacob Benignus Winslow 1669~1760)が命名した(1732)。交感神経の節後繊維は汗腺に分布するものを除き、アドレナリン作動性であることを特徴とし、コリン作動性の副交感神経と拮抗して各器官の二重神経支配を実現している(『岩波生物学辞典』第4版,八杉龍一他編集,岩波書店 1996年)。

J.B.ウインスローは、フランスの解剖学者である。**Sympathetic** について、語源は近代ラテン語の **sympatheticus** (1500年以降)、その源はギリシア語の **Sympatheia** である。**Sympatheia** は同情、共感、共鳴の意味である。**Sym** は共に、**pathos** は感情、悩み、悲しみの意味を持つ(『医語語源大辞典』[縮刷版]立川清編,図書刊行会,1979年)。

## 第7章 パーソンズによるパレート理論の把握

### 第1節 はじめに

パーソンズは経済学者・社会学者であるパレートの残した功績を通して行為理論を展開するなど、パレートから大きな影響を受けている。本章では、パレート社会学の主な諸概念、パーソンズによるパレート理論の把握について検討し、パーソンズがパレートから学んだ点について考察する。

### 第2節 パレート社会学の主な諸概念

パレートは、1906年に『経済学提要』を刊行し、1909年にローザンヌ大学を退職後、1916年に『一般社会学概論』<sup>1)</sup>を著している。パレートによる社会学の目的は、「社会システムの動態的均衡分析」にあり、「経済システムの均衡分析」を社会システムに拡大したものとみることができる。彼は大学では数学や物理学などを学び、経済学ではワルストラの一般均衡理論の体系を継承している。

パレートは経済学を<論理-実証的>(logico-experimental)<sup>2)</sup>な方法で論じている。これは自然科学の論理的実験的な方法を、社会科学に適用したものである。経済システムの均衡分析については、ワルラスの方程式体系を推し進めて数学的理論を大成している。パレートは早くから社会学研究に関心を寄せていた。純粋経済理論を政策に、すなわち現実の具体的問題に適用する場合、人間行動の経済的側面以外の面(例えば、政治的、歴史的、宗教的側面など)を考慮に入れなければならないと、彼は気づいていたのである。

パレートによる社会学の捉え方は次のようであった。

「人間社会は数多の<sup>あまた</sup>研究の対象である。これらの研究中の若干のものは法律・歴史・経済・宗教史等の如く特殊の学科を構成し、他のものは未だ雑然とした事項を包括している。人間社会の一般的研究を目的とするこれらすべての研究の総合に、社会学という名称を与えることができる」(Pareto 1920 § 1. 姫岡・板倉 1996:3)。

パレートは法学、歴史学、経済学などの研究の総合(synthèse)に位置するものとして、社会学を捉えていた。そして彼は、純粋経済理論を実際に応用して政策として実施するには、人間行為における政治的、倫理的側面や社会現象の間に存在する相互依存的な関係が解明されなければならないと考えた。

経済学においてワルラスによってはじめられ、パレートによって発展した「一般均衡理論」は、均衡を一群の連立方程式体系によって表現している。パレートは、社会システムの均衡もこのような方法によって表現されるのが望ましいと考えたが、現実にはそれは不可能であった。なぜなら貨幣や物を変数とする経済システムと異なって、人間の感情や利害、言行に関わることを変数として、それらの相互作用を定量的に現わすことは不可能だった



からである<sup>4)</sup>。

本節ではパレートによる社会学の主な概念について記述することにする。箇条書きにすると次のようになる。(1)社会システム (2)社会均衡 (3)論理—実証的方法 (4)論理的行為と非論理的行為 (5)残基と派生 (6)社会的異質性とエリートの周流 (7)社会的効用

### (1)社会システム

パレートはワルラス<sup>5)</sup>の一般均衡理論<sup>6)</sup>を継承し発展させたが、ここでは経済的諸量—需要、供給、価格、労賃など—は相互依存の関係にあると把握されている。均衡論という考え方は、経済関係を因果的ではなく相互依存という关系的に、すなわち関数的にとらえて展開されている。経済現象を経済システムの状態にあるものとして展開されている。

パレートによる社会システムの概念は、経済システムの概念を敷衍したものとイえる。

パレートは社会システムについて、『一般社会学概論』(1916)第一章において、次のように記している。

「…集団のつぎつぎの状態は、前提された条件と共に作用するこれらの要素によって決定せられると想定してもよからう。簡単にするため、我々はこの集団を社会システム(sistema sociale)と呼び、そして紐帯とともに社会システムの諸点の位置を決定する一定の力が社会システムに対して作用していると言いうるであろう。」(同前:14-15)<sup>7)</sup> (傍点筆者)。

社会現象や社会形態は諸々の要素から成り、これらの要素は相互依存関係にあって一つのシステムを構成している。このような状態のシステムを社会システムと言うことができよう。この場合、経済システムは社会システムの一部である。

### (2)社会均衡

パレートの社会学の主な目的は、社会システムの動的な均衡分析にあった。ここで「均衡の状態」について以下のように記されている。

「・・・動的にせよ、静的にせよ、システムの現実の状態は、その諸条件によって決定されている。システムの形態を人為的に変えると仮定しよう。変化する形態を現状に戻す傾向をもった反作用、一層正確に言えば現実的变化がもたらしたであろうと思われる状態に戻す傾向をもった反作用が直ちに起こるのである。」(Pareto 1920 §820. 姫岡・板倉 1996 : 257)。

社会システムを構成している諸要素は、相互に依存し作用しあっている。経済における一般均衡理論は、均衡を一群の連立方程式体系で表している。社会システムにおける均衡(=社会均衡)も同じような方法で表されるのでは、とパレートは考えて試みたが、それは実現困難であることがわかった。なぜなら社会システムを均衡に導く諸要素(変数)は非常に多く、それらを一律に定量的に表わすことは不可能に近かったからである<sup>8)</sup>。

社会均衡を決定している諸条件は多数存在しているが、パレートはこれらの要素(element)を以下の三つに分類している。(一)自然的要素—土地、気候、植物系、動物系、

地質、鉱物などの自然環境に属するもの。(二)外的要素—空間的に外部的なもの：例えば、ある社会が他の社会から受ける影響など。時間的に外部的なもの：例えばある社会が以前から保持してきた条件の与える影響など。(三)内的要素—人種、残基、気質、利害、思考、観察の態度、知識の状態、派生など(同前:256)。

社会均衡の研究について、パレートは(三)内的要素に注目し、その中の次の4つの要素(a)残基 (b)利害 (c)派生 (d)社会的異質性とエリートの周流をとりあげている(同前:291)。このうち、残基と派生が最も重要であるとしている。利害については、本来残基に含まれるべきものとし、物質的な財のほか地位や名誉のような非経済的な目的といわれうるものをも含めている。しかし、利害の大部分は経済学の範囲に入るものとしている(Pareto 1916 §1207, §2010)。

パレート社会学の主な研究の目的は、社会均衡の決定におけるこれら諸要素の相互依存関係の究明にあったといえる。

### (3) 論理—実証的方法

パレートは自分の方法を「論理—実証(実験・経験的)(logico-expérimentale)な方法であると規定している。彼は社会学においても、化学や物理学やその他の自然科学のように実証的(実験的)な方法論を用いて『一般社会学概論』を展開している。そこでは経験と観察を案内者としている。なおパレートは、「経験と観察」をあわせて「経験」と呼んでいる。

ただここで、コントが自己の社会学につけた「実証的」という立場について、独断的で宗教になっているとパレートは批判し(Pareto 1920 § 6. 姫岡・板倉 1996 : 4)、コントやスペンサーのいう実証的とパレートのいう実証的(実験的)とは意味が異なることを主張している。

パレートの場合、社会学において、実証(実験)すなわち社会的事実の中にどのような斉一性(法則)(uniformità)があるのかを見ようとし、また社会的事実間にどんな相互依存関係があるのかを研究しようとしている。彼は社会現象や人間行為の普遍性を追求しているという点で、社会学を科学として扱おうとしていたといえる。

パレートのいう「論理—実証的」方法とは、一方では「理論的」であること、他方では「実証的」であることを意味している。彼は理論と実証は独立しているのではなく、相互に補完しあっている、事実はデータで表され実証可能である、ということを『概論』の中でくり返し述べている。

### (4) 論理的行為と非論理的行為

パレートによれば、行為は客観的観点から考察するか、主観的観点から考察するかによって相違する。彼による行為の論理性的の基準とは、証明可能で内在的な「目的に対する手段の適合性」である。

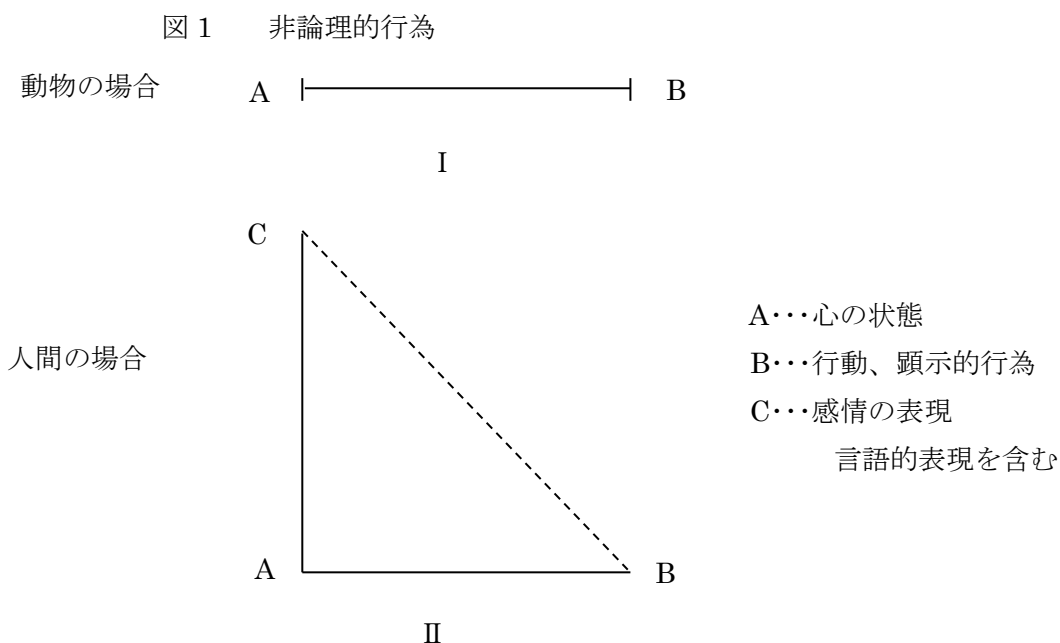
論理的行為(azioni logiche)とは、主観的にも客観的にも手段と目的とが論理的に結合して

いる行為をいい、非論理的行為(*azioni non-logiche*)とは、それ以外の行為をいう。非理論的というのは、反論理的という意味ではない(同前:18)。

行為の全体は、論理的行為と非論理的行為から成る。論理的行為は、その主な部分は推理の結果であり、非論理的行為は主に感情や無意識等、一定の「心の状態」から生じている。ここで「心の状態」とは観察可能な実在を説明するために導入された仮説上の実体である。パレートは「心の状態」を研究するのは心理学の役目であるとして、それ自体を深く追求しているのではない。

パレートは、人間のたいていの行為は非論理的行為に属しているとして、主にその研究を進めていく。パレートによれば、非論理的行為は「行動」<sup>9)</sup>(*azioni, acts*)B, 「感情の表現」C, 「心の状態」A という三つの要素から成る。動物の場合、観察できる「行動」Bは、「心の状態」A に結びついている。人間の場合、この「心の状態」A は、「行動」B によって表現されるだけでなく、しばしば道徳理論や宗教理論等に発展する「感情の表現」C によっても表現される(同前:24)。 (図 1)

つまり、人間にとって観察可能な事実は「行動」B と「感情の表現」C である。「心の状態」A は観察不可能な仮説上の実体である。B は顕示的行為であり、C の中には言語的表現が含まれている。「行動」B と「感情の表現」C を統合しているのが「心の状態」A である。しかし A については、深く立ち入って研究を進めてはいない。



V.Pareto,1920 § 73,姫岡、板倉 1996 :24.

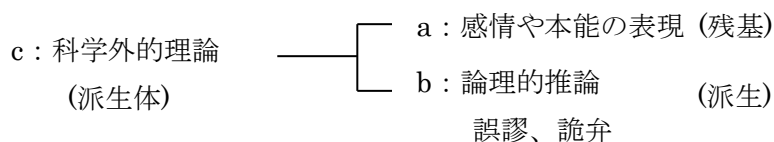
パレートはまた以下のように記している。「人間には、非論理的行為を論理的行為に転化しようとする傾向がはなはだ顕著であり、この傾向が B を、「原因」たる C の結果であると信ずるに到らしめる」(同前:24)。

すなわち、論理的行為ならば「感情の表現」C を「行動」B の原因であると言えるかもしれないが、非論理的行為については、C が B の原因であるとは言えない。実際には三つの要素 A,B,C は、相互依存の状態にあるとパレートはみていた。彼の関心は、A,B,C 間の関係にあった。行為が非論理的行為である限り、より重要なのは A と C、A と B という二つの関係である。C と B の関係も存在しているが、それは人々の考えるほど多くはない。

### (5) 残基と派生

パレートは論理—実証的科学的基準から偏向している理論を科学外的理論として、その内部構造を「abc の枠組」を使って「残基」と「派生」を定義している。ここで(4)で呈示した非論理的行為の準拠枠組である「ABC の三角形」と「abc の枠組」は異なるものであることに注意をはらわなければならない。「abc の枠組」において、「c : 科学外的理論」は「派生体」とよばれる。派生体は、「a : 感情や本能の表現」である「残基」と「b : 論理的推論、誤謬、詭弁」である「派生」から成る。残基は恒常的な要素で、派生は可変的な要素である。(図 2)

図 2 科学外的理論の構造



赤坂 1995 :144 を参考にして作成

「ABC の三角形」と「abc の枠組」とは内容に異なる区分が適用されており、両者は別のものと捉えなければならない。この同一視という誤りは、「ABC の三角形」の「C : 感情の表現の言語的表現」と「abc の枠組」の「c : 科学外的理論(=派生体)」が実質的に同じものを指しており(Parsons1937.稲上他 1996:105-107)、「A と a、B と b」を区別するに際して「ABC の三角形」で示された規準、すなわち論理—実証的な科学的方法の二つの要素「恒常的な要素」と「可変的な要素」を使用していることから生じている点が指摘されている(赤坂 1995:144)。

以上のことをふまえると、非論理的行為の「感情の表現:C」の構造は、「残基」(residui ; residue)と「派生」(derivazione; derivation)から成るといえよう。

「残基」とは、感情や本能の表現されたものである。しかし、感情や本能そのものではない。そして「残基は欲望・利益と共に、社会均衡決定の主要要因である」とパレートは述べている(Pareto 1920 § 360. 姫岡・板倉 1996:114)<sup>10)</sup>。残基は六つの綱に分類されている。第一綱：結合の本能、第二綱：集合体の維持、第三綱：外部的行為により感情を表現せんとする欲求、第四綱：社会性に関連する残基、第五綱：個人とその所属物の保全、第六綱：性的残基(同前:115-117)。

このうち最も重要であるのは、第一と第二の残基であるとされている。

「派生」<sup>11)</sup>とは、論理的推理や詭弁や派生するために用いられた感情の表現を包括し、それは人間の推理の欲求の表現である(同前:152)。

派生は次の四つの綱に分類されている。

第一綱：断言、第二綱：権威、第三綱：感情もしくは原理との合致、第四綱：言葉の上の証明(同前:156)。

次に残基と派生を取り出す順序についてみてみよう。

まず非論理的行為から「行動」(B)を取り除き、非論理的行為に含まれる「感情の表現」(C)の言語的表象(派生体)を分離する。次にこの言語的表象から論理—実証的基準と一致するものを取り除く。そして最後に残った要素を不変的な要素(残基)と可変的な要素(派生)に分離する(Pareto 1916 § 798)。

社会システムは非論理的行為によってこそ維持される。それゆえに、人間行為の真の動因であり社会システムの均衡と変動を決定する残基が探求されねばならない。

#### (6) 社会的異質性とエリートの周流

パレートは、社会システムの均衡にとって最も重要な要素として(a)残基(b)利害(c)派生(d)社会的異質性とエリートの周流をあげている。

社会的異質性について、パレートは「人間社会は同質ではなく、諸々の個人は肉体的・道徳的・知的に異なっていることは事実である」と述べ(Pareto 1920 § 791. 姫岡・板倉 1996:248)、現実の現象を研究するにあたって、この事実を考慮しなければならないとしている。

社会的異質性と種々の部分間の周流は、現実においては結合して現れる。

エリートについて「それぞれの活動分野において最も高い能力をもつ人々の階級をエリート階級(*classe eletta*)と呼ぼう」と定義している(Pareto 1916 § 2031, 1920 § 792)。パレートによれば社会は(一)下級階層と(二)上級階層、つまりエリートに二分され、エリートはさらに(a)政治的エリート(*la classe eletta di governo*)と(b)非政治的エリート(*la classe eletta non di governo*)に二分される。パレートは社会均衡の研究という立場から、政治的エリートに焦点をあてている。

パレートによるエリートの理論には、以下の三つの点が重要であると言われている<sup>12)</sup>。第一に、社会はいくつかの階層に分けられているということ。第二に、社会は政治的エリ

ートによって統治されているということ。第三に、社会の運営が貴族政治的であろうと民主主義的であろうと、またエリートの周流が急速であろうと緩慢であろうと、エリート階層の構成員が変わっても、エリートが支配することには変わらないということである。

#### (7) 社会的効用

パレートは社会的システムにおいて、どの時代にも認められている一つの特質に、効用もしくは繁栄をあげている(Pareto 1920 § 857. 姫岡・板倉 1996 : 269)。

「一国の経済的・道徳的・知的繁栄、軍事的・政治的力などと言われるもの、或いはそれらを要約した一国の繁栄乃至力という実体に留意すると、それらは増大したり減少したりするものであることが分かる」(同前:269-270)。

そして、この実体が決定される規範に効用概念を考えている。

純粋経済学では経済均衡決定の条件が課題であった。純粋経済理論において均衡決定の条件は数式(偏微分の連立方程式)で表された。応用経済学(政策)の研究においては、社会的均衡決定の条件が課題となり、それは経済的要因以外の社会現象に見られる様々な要因から成っているため数式で表すことは出来ないものであった。

パレートは経済学における効用概念と社会学における効用概念を区別して用いている。経済学の場合はパレート特有の語でオフェリミテ(ofelimità, ophelimité)<sup>13)</sup>を、社会学の場合は効用(utilià)の用語を使用している。オフェリミテとは、経済的な側面からもたらされる満足をいい、個人の満足を基準にしている。効用とは経済的側面およびそれ以外のあらゆる側面からもたらされる満足をいう。パレートは社会学の議論においては、オフェリミテの概念ではなく、効用の概念を用いている。それは経済的要因以外に政治的、道徳的、宗教的など社会現象にみられる様々な要因から生じるものである。

社会的効用について、パレートは、社会にとっての効用と社会の効用を区別している。前者は社会の構成員一人一人の立場から見た効用をさし、後者は社会を一つの統一体とみなしての効用をさしている。パレートは、経済分野のオフェリミテの場合、構成員一人一人の立場からの効用が考察されるだけであるが、社会分野の効用の場合、構成員一人一人の立場からと、社会を一つの統一体としてとらえる立場からと二通りあることに留意すべきであることを強調している。

### 第3節 パーソンズによるパレート理論の把握

#### (1) 方法論

パーソンズは、1927~1932年にかけてヘンダーソンがハーバード大学で開いていた「パレート・サークル」(Pareto Circle)<sup>14)</sup>で、パレートの『一般社会学概論』に出会っている。本節ではパーソンズがパレート理論から学んだ点、とくにシンボルに注目していく過程、なぜシンボルについて焦点をあてていくようになったのか、について考察していきたい。

パーソンズは『社会的行為の構造』(1937)の中で、社会学を科学として扱うパレートを取りあげ、社会システム、均衡の概念などパーソンズ理論の骨格をなす様々な考え方をパレートから学んでいる。

パレートによる社会科学方法論は「論理—実証的」方法論で、それは物理学や数学など自然科学における論理—実験的な方法を、経済学や社会学に論理—実証的に適用しようというものであった。そこには、論理的推論と経験あるいは「事実」の観察という二つの重要な要素が含まれ、前者は後者に従属すると考えられている。すなわち、パレートにおいてふつうに使われる経験(*esperienza*, *experience*)という用語には、検証可能性と観察者の主観的感情からの独立性を含意しており、彼は経験と観察を併せて経験と表している。

パレートの場合、科学というのは自然科学の場合、実験的斉一性(実験上の法則)を求めることであり、社会科学の場合、実証的斉一性(*uniformità*, 実証上の法則)を求めることをさしている。それゆえ社会学においても、社会的事実の中にかなる斉一性(*uniformità*, 法則)がみられるか、社会的事実間にどんな相互依存関係があるのかを研究しようとしている(Pareto 1920 § 2. 姫岡・板倉 1996:3)。

パレートの主張には、経験された事実には言語的表現について意味的側面が含まれているとパーソンズは主張し、この点について二つの重要な点をあげている。

第一に重要な点として、パレートが議論の出発点において経験的事実としての「命題と理論」に言及している点を、パーソンズはあげている。

ここで言語や言語の表現についてパーソンズは言及している。

我々が話された命題と書かれた命題を「同じ」命題として言及する時、すなわち同じ事実、あるいはより厳密には同じ現象として言及する時、以下の(a)(b)の覚書で十分である。

(a) 音韻の組み合わせ

(b) (話された命題と書かれた命題の)二つの場合のインクの跡は、命題が表現している中に、シンボリック・メディア(*symbolic media*, 象徴的媒体)をそれぞれ構成している。

この同じということは(a)と(b)に共通な内在的(*intrinsic*, 本来備わっている)要素の一般化に基づいているものではない。内在的レベルに関して、いかなる重要な共通の要素が、どの程度存在しているかは難しい問題である。二組のデータに共通するものは、ある具体的な感覚(観念)における「感覚印象」(*sense impression*)ではなく、シンボルの「意味」(*meaning*)である(Parsons 1937:182)。このように経験的事実あるいは観察可能な現象の領域に意味を含むということは、たぶん事実に関するパレートの概念について注意すべき最も重要な点である。

ここで留意すべき点として、シンボリック・メディアという語が『社会的行為の構造』(1937)の中で初めて用いられているという点である。話し言葉と書き言葉が同じ事実、あるいは同じ現象をさしているのは、二つのデータに共通しているものを「感覚」として受けとめるのではなく、そこに介在しているシンボリック・メディアが、同じ「意味」をさし

ているからである、というのである。シンボル(象徴)は、本来かかわりのない二つのもの(具体的なものと同抽象的なもの)を、何らかの類似性のもとに関連づける作用をもっている。例えば、オレンジ色はあたたかい、黒色は悲しみを表すなどのように。

パーソンズは、経験的事実あるいは観察可能な現象の中にみられる言語的表現が意味を含むということ、このことが事実に関するパレートのうちで最も重要な点であることを見出している(同前:183)。パレートは『一般社会学概論』(1916)の中で、はっきりとそのことを明示しているのではないが、パーソンズは非理論的行為の「ABCの三角形」等を吟味することによって、上記のことを読みとり重要視している。

パーソンズは『経済と社会』(1956)の中で、社会システムの経済領域の中で、貨幣をメディアとして捉えて以来、社会システム、一般行為システムの中にメディア(媒体)を生み出し<sup>15)</sup>、それらは正式には「一般化されたシンボリック・メディア」(generalized symbolic media)とよばれている。メディアとは行為者間の相互行為を促進したり規制するメカニズムに作用するものとして、メディアの働きに、情報を伝達し相互行為における「生産物」や「要素」の配合や結合を制御する点をあげている。パーソンズはメディアについての基本的な基準として、シンボリック(象徴的)という特徴を挙げ、このシンボリック性という一般的な見出しのもとで、さらにメディアについて(1)制度化 (2)評価と相互交換における意味と有効さの特質性 (3)循環性 (4)信用創造によって付加価値が認められる、という4つの性質をあげている(Parsons 1975:95-96)。

パーソンズは言語を自由度と普遍性という点から、一般化されたシンボリック・メディアには入れないで、シンボリック意味メディアのコードに位置づけたと考えられる。

パーソンズは最初の著書『社会的行為の構造』(1937)の中で、書き言葉と話し言葉が同じものをさしているのは、人々の間でそれらを感じとして受けとめるのではなく、それらの間にシンボリック・メディア(象徴的媒体)があり、同じ意味を表しているからである。そして言語的表現の意味は、パレートの考え方においては社会的事実、社会的現象においては同じ資格をもつということを強調している。

パーソンズの中期、後期に至って、一般化されたシンボリック・メディアを独創的に考え出していくのは、社会システム、一般行為システムというシステム観に初期から一貫した問題意識を追求していたと考えることができよう。

また、なぜ一般化されたシンボリック・メディアを追求していたのか、については、論理—実証主義というパレートの考え方を受けついで、理論を実証化する方法を探求していたと考えられる。

第二に重要な点として、パレートの著書において、経験的な事実はある具体的現象の全体を必ずしも体現しているわけではないとパーソンズは述べている(Parsons 1937:183)。

パレートは『一般社会学概論』において「科学的法則とは経験的斉一性にほかならない」とくり返し述べ、社会学研究の目的に斉一性(uniformità, 法則)を求めることを強調している。この場合、物理学や化学などの自然科学において、実験を通して法則を発見している



ように、経済学や社会学などの社会科学においても、経験や観察を通して斉一性(法則)を見いだそうとしている。それゆえ、認識よりも歴史的事実、神話説話など経験についての記述がまず行われている。

原始時代から近代に至るまでの歴史的事実、ギリシャ神話や説話にみられる人間の行為には理性外的、非論理的な感情、本能が普遍的に表れている。この場合の本能というのは社会的環境のなかでのみ出現するもので、個体の状態においても見られる食欲等の本能は含まず、社会的本能というべきものをさしている。これらの人間行為に見られる感情や本能の表出が「残基」とよばれるものである。「派生」とは残基によってひき起こされた行為を正当化、「論理化」するための理論、観念、理念、表象等をさしている。派生は残基の指標であり、残基を表現しているといえる。

パレートは、人間行為には論理だけでは説明できない非論理的行為があり、その要素に残基と派生を見だし、それらの特質や相互依存関係をみようとしている。

パーソンズもパレートの意図を受けており、斉一性(法則)といってもそれは観察された具体的現象のある「側面」であって、こうした現象の必然的で具体的な行動を一般化したものではない、ということ述べている。

パーソンズは、パレートによる社会学を科学として捉えそれによる説明も近似的なもので決して完全なものではない、という点を支持し強調している。そこには人間は多様で複雑な存在であるということ、パーソンズは十分に意識していたと考えることができよう。

## (2) 儀礼的行為

パレートは、行為の概念図式 ABC の三角形から更に B を下位分類して D を置き、ABCD の四角形を試みている(Pareto 1916 § 167.井伊 1939:91)。 (図 3)

パレートによると、三角形 ABC に関してある点までは宗教上の礼拝の儀礼は B に、神学は C におかれ、礼拝と神学の両方とも一定の心の状態 A から生じるとされている(Pareto 1920 § 76.姫岡・板倉 1996:26)。

B の下位分類 D を置いて、彼は次のように述べている。

「ギリシアの神々が侵入する以前、古代ローマの宗教はいかなる神学 C ももっていなかった。それは祭祀 B に限られていた。しかし祭祀 B は、A に作用することによって、ローマの人々の行為 D に強い影響を与えていた。しかしこれが話のすべてではない。BD の直接的関係が与えられる時、それは現代のわれわれにとっては、まことにばかげたものに感じられる。しかし BAD の関係も、ある場合には、きわめて道理にかなったものであり、たしかにローマの人々にとっては有益なものであった。一般的に、神学 C の影響力は A に対してそれほど重要でないにしても、D に対しては直接的な影響力をもっている」(Pareto 1920 § 78.Parsons1937:195.稲上他 1986:102)<sup>16)</sup>。

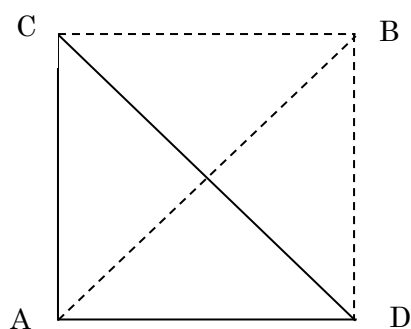
パーソンズはパレートの上述の箇所から以下のように考察を進めている。パレートはもとの図式 B つまり「顕示的行為」を「祭祀」と「その他の行為」に分けているが、祭祀 B

とは通常「儀礼的」行為とよばれるものであり、また D はその「内在的な」(intrinsic,本来備わっている)意義を有する行為の範疇と考えることができるであろう、とパーソンズは解釈している。そして、新しい呼称 D を置いたことは重要なことであり彼は非論理的要素によって規定された顕示的行為中核に、儀礼を考えていたのかもしれないと述べている。いずれにしても、顕示的行為 B を考える場合、儀礼的行為は非常に重要な位置を占めるといふこと、パレートの扱う道徳理論、宗教理論等について大部分が儀礼的手段を用いれば解釈できるということをパーソンズは主張している。

パレートは ABCD の四角形を考え出したが、その後分析上の関心が感情の表現 C だけに向かっていったので、これ以上立ち入って論じてはいない。

ここで、はじめてパレートの行為に関する帰納的研究が、すなわち個々の具体的事実から一般的な命題を導き出す研究の始まることをパーソンズは指摘している。パレートは最初に行為の論理的要素を抽象化して非論理的行為を分離する。次に非論理的行為のうちから顕示的行為 B(或は B と D)を捨て去り、非論理的行為に含まれる言語的表現あるいは道徳的理論や宗教的理論などの理論のみを分離する。それゆえ総合的部分からまったく異なったものとして、パレートの著書の分析的部分の核心は、非論理的行為に含まれる道徳的理論や宗教的理論あるいは言語的表現に関する帰納的研究ということになる(Parsons 1937:196)。パレートの非論理的行為に関する研究の核心は、感情の表現 C に含まれている道徳的理論や宗教的理論などの理論、言語的表現に関する帰納的研究にあることをパーソンズは強調している。

図3 Bを下位分類した場合の非論理的行為



A…心の状態

B…顕示的行為 : 祭祀——「儀礼的」行為  
その他の行為

C…感情の表現 : 神学

D…「内在的な」意義を有する行為の範疇 (パーソンズによる呼称)

V.Pareto,1916 §167, 井伊 1939:91.

### (3) 残基と派生について

パレートは論理的行為については積極的に定義しているが、非論理的行為については残余範疇にあるとされ、その定義は消極的にされているだけである。パレートが扱う理論は、科学的基準に一致しない限りでの理論ということになる。パレートのいう科学的理論は、事実の言明と論理的推論という二つの要素から成る。彼はこの図式を帰納的研究の成果にも採用して、論理—実証的といえない理論も主に恒常的な要素と可変的な要素から成るとしている。

パレートによれば、具体的な論理—実証的理論は C と記号化され、理論の主要な事実的要素と主要な前提のみから成る A と、A からの論理的推論と他の重要でない事実的要素から成る B とで構成されている。更に感情がある役割を果たしている場合、すなわち経験にそれ以外のある物をつけ加え、経験以上に出るところの理論を c とし、恒常的要素を a、可変的要素を b で表している。a はある感情の表現から成る部分で、b は論理的推論や詭弁やその他 a の推論を引き出すために用いられる感情の表現から成る部分である。a は人間の心の中に存在する原理であり、b はこの原理の説明であり演繹である (Pareto 1916 § 803. 井伊 1039:128-131)。a は残基 (residui', residue)、b は派生 (derivazioni', derivation)、c は派生体 (derivate, derivative) と呼ばれている。

パーソンズはパレートに関する初期の研究者の多くが、a : 残基を前の図式の A と、b : 派生を同じ図式の C と同一視しているのは非常に奇妙なことであると述べ、例外としてホマンズとカーティス、ヘンダーソンをあげている。また彼は、パレートによる残基という言葉の用法には粗雑なところがある点も指摘している (Parsons 1937:199. 稲上他訳 1986:108)。

### (4) 非論理的行為の二つの構造的側面について

パレートは、行為の「理論」(道徳理論、宗教理論、その他の理論)を吟味し、それらが非科学的なものであることを立証したとされてきた。そして残基と派生を見だし、残基の基礎をなす中核的要素は「非合理的な」本能であると考えられている。

ここでパーソンズは、パレートの著書をより詳しく吟味して、パレートの思考には非科学的な (unscientific) 側面ばかりではなく、科学外的な (nonscientific) 側面も含まれていることを主張している。すなわち科学に反対の立場だけでなく、科学に対する消極的な否定の立場も見られるというのである。

パーソンズによると「理論」は、なぜある行為が行なわれたかを「正当化する」ものとその行為を成し遂げるための適切な手段と方法についての考えと二通りに分けることができる。科学外的側面が特に関係しているのは、前者すなわち正当化に関してである。パレートが多く事例を通じて展開している議論の内容は、行為者が自らの行為について付与するかもしれない正当化というものを、それを誤りであると立証しようとするような仕方では議論していない。むしろ正当化など全然念頭にないとか、あるいは検証に服しえないよう

な正当化がなされているといった言い方で議論している(ibid.:205.同前:117)。

パーソンズは上記のように指摘している。すなわち行為者の行為についての正当化について、誤りを立証するという方法ではなく、正当化について全く考えていないとか、論理—実証的観点を基準とした場合に、その基準が不完全のまま正当化されているというのである。それがごく普通の例である。そこに含まれているのは、行為の正当化についてのあいまいさ、論理的あるいは事実認識の誤りという要素であることを、パーソンズは指摘している。しかし残基と派生の区別が重要になるのは、まさにこの点においてである、とパーソンズは言う。というのは、あいまいさや論理的あるいは事実認識の誤謬という要素は、主に派生に属し残基の特徴ではないとパーソンズはいうのである。

残基とは、一群の理論に共通する中心的命題ないし信念のことをいい、行為の基礎をなす原理である。いま論じているのは、行為の正当化に関連する「理論」であり、このような場合に非常に重要となる残基は「これが事態の望ましい状態であると思う」という形で一般的に述べられる感情の残基である。この言明は、科学的理論によっては正当化しえないような行為の目的を具体的に表現している。すなわちそのような言明は、他の目的に適合的な手段を述べたものではなく、それ自体目的として望ましいと思うことを述べたものである。パーソンズは、このような残基を規範的残基(normative residues)と呼んでいる。パーソンズによる規範的残基、非規範的残基(non-normative residues)という分類の仕方は、パレート自身による残基の分類とぴったり重なるものではなく明らかに交差するものであると、パーソンズは述べている(ibid.:206.同前:118)。

パレートは残基の分類を試みているが、そのことは次の重要な定理を示唆しているという。第一に、残基は行為システムにとってランダムなデータではなく、反対に行為システムの明確な一つの要素を構成し、他の要素と理解可能な相互依存状態にあるという定理である。パーソンズによれば、この定理が認められるならば、規範的残基にも適用されなければならないという。そしてこのことは、目的のランダム性という功利主義の仮定とは明らかに矛盾するとパーソンズはいう。目的が独立した要素として残基の範疇に入ってくる限り、それらはランダムな目的ではなく他の目的や行為の他の要素とも実証的に説明できる関係になる。それゆえパレートの概念図式によって構成される具体的なシステムは、功利主義的システムでも極端に実証主義的なシステムでもありえないとパーソンズは主張している(ibid.:206.同前:119)。

第二に、パレートが論理的行為の概念を用いているのは、ある方法論的目的に対する区別の基準としてであることをパーソンズは指摘している。しかし分析的な観点からみると、このような行為や行為システムにふくまれるのは論理的行為の概念で定式化される要素のみではない。逆に論理的行為の概念で定義されるのは、目的—手段関係の特徴のみであり、しかもその場合、目的は与えられていると前提されているようにみえる。

分析的な意味で、目的のもっとも重要で他と区別する目安になっている一つの特徴は、それが必ず主観的な範疇であるということである。客観的な観点からだけでは、目的を一

連の行動の客観的に観察可能な他の結果から区別することはできない。しかしパレートのいう残基には、非主観的要素もまた表出されている。

パーソンズによれば、残基は客観的観点からみても検証可能な言明によって置き換えられたり訂正されたりすることのできないもの、検証不可能な命題である。そしてすべての規範的残基が非主観的な項目へ還元されるわけではないとするならば、その限りで、パレートの理論体系は実証主義的な体系とは言えないという点を、パーソンズは重要な点として主張している(ibid.:207-208,同前:121)。

このようにパーソンズは、パレートの理論の科学外的側面について議論し、その議論の焦点が行為の経過の正当化にあることを見いだして、パレートの理論体系は実証主義的な体系とはいえない、ということを主張している。

次に、方法と手段にかかわる理論にも科学外的要素が同じように見いだされるかどうか、換言すれば論理—実証的基準からの偏りが見いだされる場合、そのような偏りを無知と誤謬だけに還元することができるかどうかという問題である。この文脈で具体的な行為として現れてくるのが、儀礼的行為(ritual actions)である。パレートの議論のなかで儀礼的行為は大きな比重を占めている。非論理的行為が重要であるという彼の命題は、儀礼が広くあちらこちらにわたって出てくる場所にある。

パーソンズは、以下のことを提案している。

論理的行為に含まれる規範を、「内在的合理性」(intrinsic rationality)の規範とよぼう。内在的という用語を選んだのは、その反対語として「シンボリック」(symbolic, 象徴的)という用語が示唆されているからである(ibid.:210,同前:125)。

目的に対する手段の選択には、論理—実証主義に合致するような内在的適合性とは別の見地に立つ選択の基準が含まれているとパーソンズは主張して、それを象徴的適合性の基準としている。象徴的適合性の基準には、規範的感情の「表現」あるいは表出を含むものとしている。パレートの儀礼的行為に関する記述には、暗黙のうちに本来備わっているのではない別の基準があるとパーソンズはみている。それは抽象的な規範的感情を具体的に表現しているもので、パーソンズはそれをシンボリック(象徴的)と表した。儀礼的行為の目的—手段関係を支配する規範的側面は、科学的理論によって定式化されるような原因—結果(cause and effect)の関係ではなくて、むしろ象徴と意味(symbols and meaning)の関係に含まれる類の関係である(ibid.:211,同前:126)。ここにおいて儀礼的行為を通して、象徴と意味の関係がはっきりと主張されるようになってくる。

儀礼的行為の目的—手段関係に対する規範的要素の影響について、パレートの提示した合理的規範とは別の基準をパーソンズは見つけ出した。それが象徴的適合性の基準で、シンボル(象徴)—意味図式(象徴と意味の関係)を表している。ここに、パレートを通してパーソンズのシンボル論の基礎をみることができると思われる。パーソンズは次の段階に、宗教におけるシンボリズム(symbolism, 象徴主義)の役割をめぐってデュルケームの議論を検討している。

象徴と意味の関係について、パーソンズによれば、パレート自身の概念化の作業にはシンボル(象徴)の意味が観察可能であるかどうかという問題について、いかなる態度決定も含まれていない。しかし彼の示唆していたのは、意味もまた観察可能な事実には包摂されるということである。

なぜそうなのか、パーソンズはさらに考察を進めている。パレートの中心的な分析上の課題は、行為に付随して起こる「理論と命題」(theories and propositions)を帰納的に研究することである。その際の彼の第一次的な関心は、それらを意味のある水準において分析し、それらの科学における地位、論理的一貫性、検証可能な事実の言明を含んでいる程度といった観点から理論と命題を批判することにある(ibid.:212.同前:127-128)。パーソンズは、こうした分析を完了した後にのみ、なぜこのような理論が多くの人々によって生み出され受け入れられるのかという問いが生じるという。

パレートの方法論のなかに、ある水準では象徴の意味(meanings of symbols)は、科学的理論の中にある位置を見つけ出すことが可能な事実として、それゆえ検証可能な事実として取り扱われるのが正当である(ibid.:212.同前:128)。上記のことをパーソンズはパレートの記述の中に読みとっている。そして考察を続け、より深い水準において新たな問題が表れるという。行為が論理的である限り、それは「推論の過程」(process of reasoning)から生じたものとして理解することが可能である。しかし行為が非論理的な場合は、それは「心の状態」(state of mind)から生じたものであるとパレートは述べている。パーソンズはこの点について分析を進める。そして方法論的にいえば、次のように言うことができるとしている。

「言葉を知る」者にとっては、理論をつくりあげているシンボル(象徴)の意味さえ理解すれば、顕示的行為の経過は、十分理解可能なものとなる。「心の状態」にさかのぼる必要はない(ibid.:212.同前:128)。

「心の状態」は、たしかにシンボル(象徴)の意味と機能的には結びついているが、しかし両者の区別を不必要にするほどには密接に結びついていないとパーソンズは主張している。

ここでパーソンズは、行為が非論理的な場合、それは「心の状態」から生じたものである、というパレートの先の言明を検討している。

非論理的行為を理解しようとする場合、シンボル(象徴)の意味は手がかりとならず、行為の真の源泉は、それとは全く異なった種類の要素に求められるとパーソンズは推測し(ibid.:213.同前:129)、この推論は正当かについてABCの三角形図式で考察している(図1参照)。その図式において具体的現象の範疇としてのCは、観察不可能で仮説的実体であるAと俊別されていることから、推論の正しさは強く示されているとパーソンズは受けとめている。

換言すれば、Cの要素である残基(residue)とAの要素であるだろう「感情」(sentiment)との関係を、パレートは「表出」(manifestation)という言葉で表しているが、この表出という言葉に含まれている意味は何かという問いが生じるとパーソンズはいう。

この問いに密接に結びついているのが、行為の規範的要素の地位はどのようになっているのかという問題である。規範が観察可能な事実であるとするならば、それはシンボル(象徴)の体系という形式をとるほかはない。そして行為が規範に同調し、その限りで行為が規範的要素によって決定されるものならば、A(「感情」と C(「残基」)を区別する必要はなくなる。その限りで、理論は行為の真の規定因を適切に表現しているものとみなされる。このことは、パレートの意味における論理的行為にあてはまる。

行為が規範によって設定されたコースをはずれるような場合、行為を説明するためには他の要因を持ち込まなければならなくなる。A と C を区別する主要な理由のひとつが、まさにここにある(ibid.:213.同前:130)。つまりパーソンズは、ABC の三角形においてAとCが区別されているのは、行為が規範によっては決定されない場合があるからであり、その行為を説明するには、シンボル体系以外に他の要因を考えなければならないとした。パーソンズはさらに続けている。

行為の非論理性を特徴づける他の側面に、論理的行為という範疇には含まれていないが、論理的行為そのものの中に依然として存在している規範的要素の一群がある。これらのうちのひとつは、行為の究極的目的(the ultimate ends of action)の中に見いだすことができる。ここに、行為の究極的目的というシンボル体系とはちがう規範的要素の一群が考え出されている。もし残基が行為の究極的目的を定式化しているならば、なぜ残基が行為の真の規定因を適切に表現したものと考えるとはいけないのかとパーソンズは述べ(ibid.:213.同前:130)、その理由をパレートの議論の中に見いだすことはできないとしている。

またパーソンズは、理論と実践とのくい違いに関連して、シンボル(象徴)が指示する実体の性質について言及している。

論理的な行為の場合、シンボルの指示対象は行為者に外在する世界の事実であった。しかし非論理的行為の場合、行為の指示対象は行為者自身の感情である。A と C を区別することが必要なのは、C のシンボルのいくつかには科学的理論の中にその位置を見いだすことのできない要素を指示しているものがあるからである。それゆえ行為を規定するのは、推論の過程すなわち科学的理論を形式化する要素ばかりではない。それに加えて他の要素、つまり行為の究極的目的もまた行為を規定しているのである。この究極的目的は事実を言明したものではなく、それとは対照的に「感情を表出したもの」(manifestation of a sentiment)なのである(ibid.:214.同前:131)。

パーソンズは上記のように記述して、ABC の三角形の「感情の表出」や「残基」を意味するCにおいて「シンボル(象徴)」と「行為の究極的目的」という二つの重要な要素を発見している。前者はデュルケームに、後者はウェーバーに続く内容をもつ要素であると考えることができる。

さらにパーソンズは、究極的目的はより大きな複合体の一つの要素にすぎないとし、その複合体の核は価値的態度(value attitude)の体系であるという。そして、この価値的態度も感情(sentiment)の中に含まれているとパーソンズは主張している。ここでパーソンズは

「感情」(sentiment)というパレートの用語を、本研究のためには「価値的態度」(value attitude)という表現に置き換えるのが最良であると思われると述べて(ibid..同前:214)、感情を価値的態度と解釈している。そして究極的目的も儀礼的行為も、制度や芸術や演劇などの他の現象と同じように、究極的価値態度を部分的に表出しているものであるとパーソンズは主張している(同前:260)。ここに行為における価値という要素が見いだされ強調されている。

#### 第4節 結び

パーソンズは、パレートについて次のように記している。

パレートの業績は開拓者の仕事である。けれどもそれは、終始一貫してシステム理論の論理によって支配され導かれており、しかもそのようなシステムの構築に向かって大きな前進を遂げている。パレートの業績のうち、本研究の観点からみて捨て去られるべきと思われるものは、方法論および理論のいずれの水準に関しても、本質的には何一つ見当たらない(ibid.:300.同前:264-265)。

パーソンズはパレートのシステムは不完全な点はあるが、自らの行為論研究の目的からすれば、かえってそれは有用でもあるとして、パレートから実に多くのことを摂取している。以下、パーソンズがパレートから学んだことを記述して結論にかえたい。

1. 社会システムという概念
2. 社会均衡という概念
3. 社会的効用という概念
4. 方法論に関して——パレートは社会学を科学として捉え、論理—実証主義の方法をとっている。そして社会学研究の目的に社会的斉一性(社会の法則)をあげている。しかし、ここでの斉一性は近似的なものである。理論と実証は独立しているのではなく、相互に補完しあっている。事実はデータで表され実証可能である。パーソンズはこのようなパレートの見解を支持している。
5. シンボリック・メディア(象徴的媒体)という用語が『社会的行為の構造』の中に出てきており、後期・晩期で展開される一般化されたシンボリック・メディアの原型になる用語と思われる。このことから、パーソンズの行為に対する考え方には、初期から晩期に至るまで終始一貫したものがあつたと考えられる。
6. 行為における目的に対する手段の選択には、内在的合理性の規準とは別に象徴的適合性の規準が含まれている。儀礼的行為の目的—手段関係を支配する規範的側面は、原因—結果の関係ではなく、シンボル(象徴)—意味の関係である。
7. 非論理的行為を理解しようとする場合、シンボル—意味関係とは別の規範的要素をうち出さねばならないとして、行為の究極的目的という要素を見いだしている。6と7はデュルケームとウェーバーの研究に続いていく。さらにパーソンズは究極的目的や儀礼的



行為も他の現象と同じように、究極的価値態度を表しているものであると主張している。

ここにおいてパーソンズは、行為における価値という要素を見つけだしたといえる。

パレートの著書『一般社会学概論』『一般社会学提要』は難解である。パーソンズはパレートの取り出した残基をめぐって、パーソンズ特有の行為における規範的、非規範的要素という視点を取り入れ分析を進めている。多分パーソンズは、パレートの論理—実証主義の考え方を受け継いで、シンボルを媒体として実証化の方法を模索しはじめていたと考えられる。

現代社会において対人コミュニケーションや情報は、言葉や身振りなどの記号(sign)によって行われ、それは信号(signal)とシンボル(象徴、symbol)という二つの側面を持っている。そのうちシンボルは人間の認識を規定する要因として作用し、意識やイデオロギーの形成に大きな役割を果している。その時にシンボルの意味や行為の価値は、重要な意義をもつ。パーソンズはパレート社会学を深く検討することによって、そこにパーソンズ独自の思考を展開し、シンボル—意味関係および行為の価値という非常に重要なものを見つけだしているといえる。

注

- 1) *Trattato di sociologia generale*, 2 vols., 1916, 2. ed., 3. vols., 1923. 抄訳:井伊玄太郎訳、『社会学大綱』白揚社、1939; 戸田武雄訳『歴史と社会均衡』(現代思想全集第11巻)三笠書房、1939; 北川隆吉・廣田明・板倉達文訳『社会学大綱』青木書店、1987; なお、門弟の編による要約書として *Compendio di sociologia generale*; Farina, G., 1920. が出版されている。姫岡勤訳、『一般社会学提要』、刀江書院、1941. 姫岡勤訳、板倉達文校訂『一般社会学提要』名古屋大学出版会、1996.
- 2) 赤坂 2001: 128 においても指摘されている。
- 3) *logico-experimental* は、邦訳『社会学大綱』(1987)『一般社会学提要』(1996)において論理的実験的と訳されているが、経済学、社会学などの社会科学においては、論理—実証的の方が意味を捉えやすいと考え、本章においてはそう訳すことにする。なお文脈によって *experimental* を実験的、経験的と訳した方がよい場合も多くある。
- 4) この点については、松嶋 1985: 239 - 240, 263 に詳しい。
- 5) *Walras, Marie Esprit Léon*. 1834 - 1910。フランスの経済学者、一般均衡理論の創始者、メンガー・ジェヴォンズとともに近代経済学の祖。
- 6) 変動する現実を一定時点で切り、相互に依存関係をもつあらゆる商品の需要供給関数を同時にとりあげて、その均衡価格の決定をもとめようとするもの。
- 7) 社会システムの特徴については、Pareto 1920 § 819, 姫岡・板倉 1996:257 に記されている。
- 8) この点については、松嶋 1985:238-240 に詳述されている。

- 9) パーソンズは『社会的行為の構造』の中で以下のように記している。「行為(action)」という語をより広い意味で使っているので、ここで acts [行動] という用語を使うことは混乱を招くかもしれない。behavior[行動]という語の方が適切かもしれない。(Parsons,T., 1937:193, 稲上・厚東・溝部 1986:99)。Pareto,v., 1920. § 73 においては、動物の例もあがっているので、筆者はここでの [azioni, acts] を [行動] と訳すことにする。
- 10) 残基について井伊『社会学大綱』(1939)では、恒常態と訳されている。そして次のように記されている。レシデュ(residue)という言葉は、元来化学上の用語であって、種々の化学的動因の作用の下に置かれて、あとに残ったものを指示する。尚、派生態となっている derivation という言葉は、水の流れを横に逸らす作用とその結果とを指示する。パレートの用語は自然科学上の、殊に物理化学上の言葉であることを吾々は注意すべきである(井伊 1939:3)。
- 11) 「派生体」(derivate; derivative)と「派生」(derivazione; derivation)は厳密に言えば異なるという点については、赤坂 1995:144 - 145 に詳しい。ただパレートの著書『一般社会学概論』(1916)において、「派生体」と「派生」があいまいに用いられている箇所のあることも指摘されており、松嶋 1985 においては「派生(態)」と記されている。
- 12) 日向寺 1982:18-19. W.J.Samuels, Pareto on Policy(New York :Elsevier Scientific Publishing Company)1974:92.
- 13) オフェリミテという用語は、「有用な」という語義をもつギリシャ語オフェリモス(ὠφέλιμος)からパレートがつくった新造語である(松嶋 1985:246)。なお日本で最初に出されたパレートの訳書『社会学大綱』(井伊 1939:329-342)においては、オフェリミテを「経済的功利」、utilitá 効用を「功利」と訳してある。
- 14) この点については、赤坂 1993, 1994 a. b. 1995, 吉原 1996, a. b.に詳述されている。ローレンス・J・ヘンダーソン(Henderson, Lawrence Joseph, 1878~1942)は、生理学および生化学の研究者として世界的に著名であったがパレート社会学に出会い、晩年は社会科学の構築に力を注いだ。パレート・サークル(ハーバード大学におけるパレート・セミナー)の主なメンバーには、ヘンダーソンの他に A. N. ホワイトヘッド、T. パーソンズ、G. C. ホマンズ、R. K. マートン、C. ブリントン、J. A. シュンペーター、F. クラックホーン、C. I. バーナード、E. メイヨー、F. レスリスバーガー、T. N. ホワイトヘッドなど、後に社会学、経済学、文化人類学、経営学の分野で活躍する人たちがいた。T. パーソンズは、1927年にハーバード大学経済学科に講師として就任している。
- 15) 社会システムにおいては、貨幣、権力、影響力、価値コミットメント、一般行為システムにおいては、知性、遂行能力、感情、状況規定の一般化されたシンボリック・メディアが析出されている。
- 16) Pareto, 1916 §803、この記号化はABCの三角形図式とは異なっており、混乱を招きやすいことが、パーソンズによって指摘されている(Parsons 1937:197.稲上他 1986:106)。

## 第8章 システムとしての人間的条件のメディア

### 第1節 はじめに

パーソンズは人間的条件を物理的-化学的システム、人間有機体システム、行為システム、目的システムに4分割し、その相互交換過程から経験的秩序、健康、シンボリックな意味、超越的秩序の4メディアを析出した。社会システム、一般行為システム、そして人間的条件システムへと、最初は社会システムの貨幣メディアという人間の外部の世界で起こる現象の分析から始め、次に人間の行為から生じる、あるいは行為を引き起こすメディアの分析、そして最後に人間の存在条件に関係するメディアの分析へと進んだ。そこにはパーソンズ独特の分析的レベルの設定がみえる。

本章ではシステムとしての人間的条件のメディアに焦点をあて、それが考え出された背景、過程、性質、そしてそれらのメディアがもつ意味について考察することを目的としている。

### 第2節 システムとしての人間的条件でメディアが生み出された背景

パーソンズは社会システムの分析、一般行為システムの分析だけでは満足できず環境的諸要素を考慮に入れて、人間が存在するための条件の分析へと更に進んだ。そのシステムとしての人間的条件では行為者と環境、あるいは環境内部の意味的関連が問題となった。

社会システム、一般行為システムの一般範式と同様に、人間的条件の範式においても横軸に「道具的-成就的」、縦軸に「内的-外的」の2つの軸がおかれた。ここで内的-外的の軸は人間的条件にとっての内部環境、外部環境という意味をもつ。人間的条件の4機能範式には、それぞれ物理的化学的システム(A)、人間有機体システム(G)、行為システム(I)、目的システム(L)がおかれた(Parsons1978:364-365)(図1)。

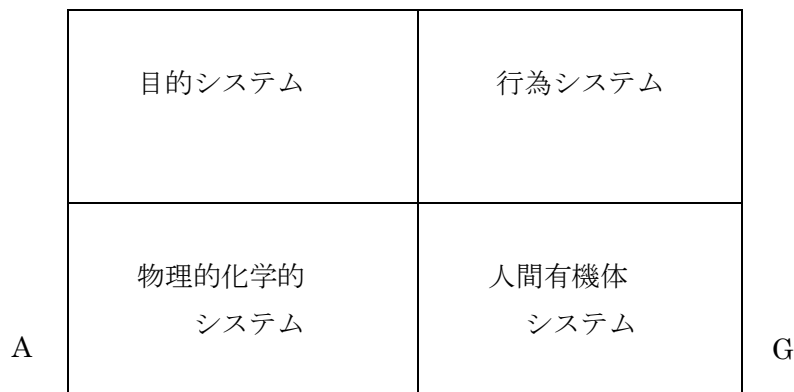
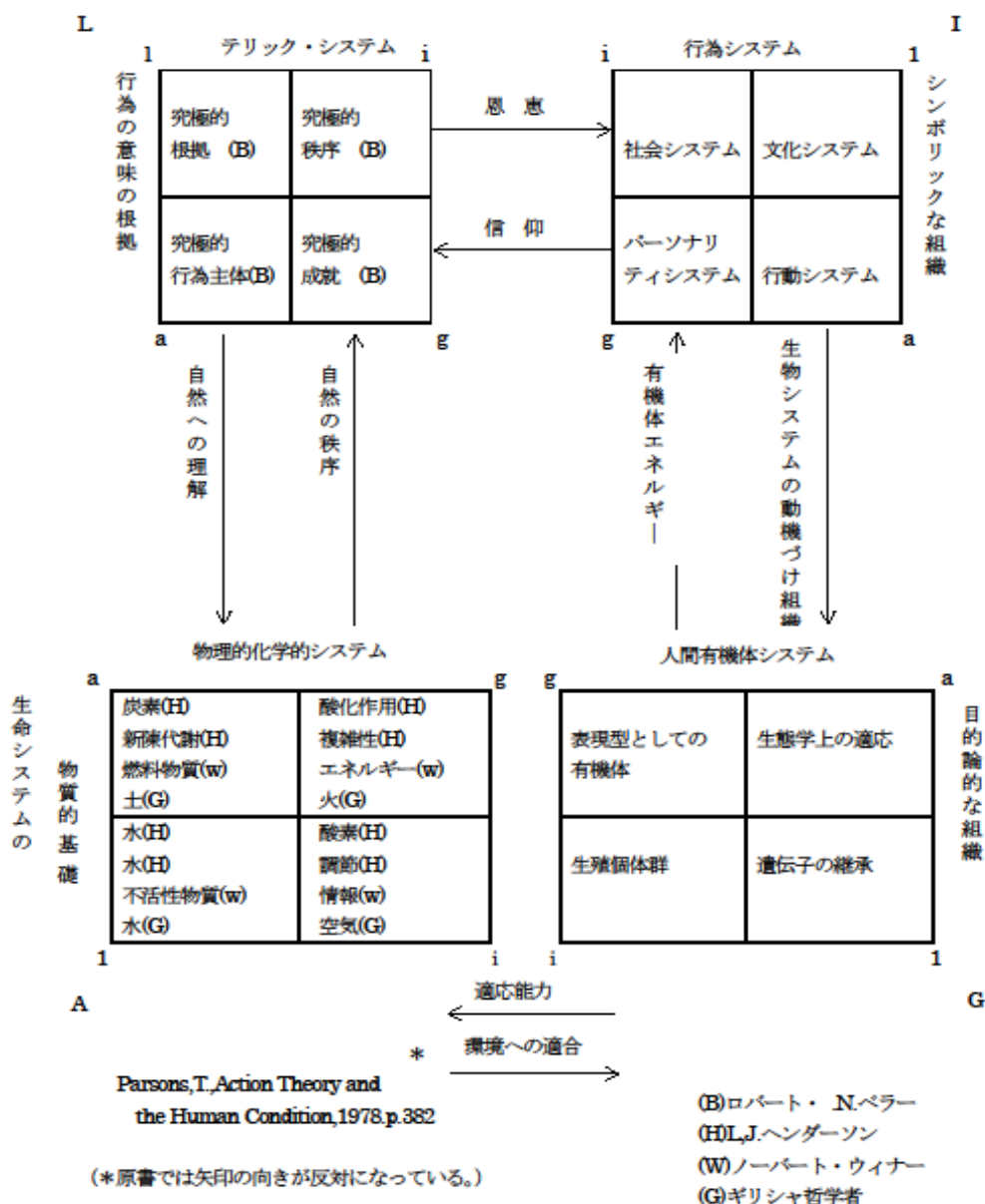


図1 人間的条件の一般範式  
T. Parsons, *Action Theory and the Human Condition*, 1978:361.

ここでLシステムに対応する目的システムは、パレートのいう「残基カテゴリー」、ウェーバーのいう「意味の問題」と深い関連があった。目的システムの内部構成もカントの三批判から示唆されて、さらにベラーの説を借りて究極的主体(a)、究極的充足(g)、究極的秩序(i)、究極的基礎(l)に4分割されている。

そして、物理的・化学的システムは生命システムの物質的基礎をなし、人間有機体システムは合目的組織をなし、行為システムはシンボリックな組織であるとみなされ、目的システムは行為の意味の根拠をなすとみなされた(同前:390-392) (図2)。このなかでパーソンズは行為システムを最も中心的な存在とみなし、そのうちでも社会システムを最も中心的な研究対象として取り上げてきた。また人間的条件システムで行為システムだけが行為するシステムと考えられ、他の3つのシステムは行為するシステムとは捉えられていない。

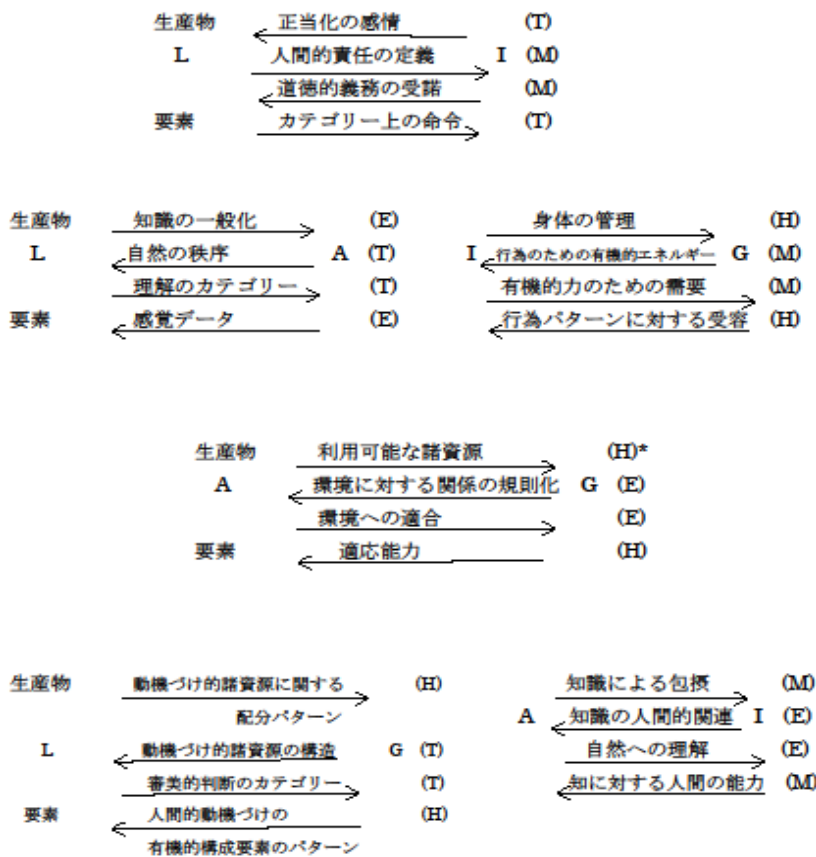
図2 システムとしての人間的条件の構造



第3節 システムとしての人間的条件におけるメディアの相互交換過程

システムとしての人間的条件の相互交換の範疇は、図 3 のように示されている。この相互交換関係から、パーソンズは各システムに係留する交換メディアを創出していった。この相互交換のカテゴリーでは、A,G,I,L の四システムの四つの側面と二つの対角線から全部で二十四のカテゴリーができ、それぞれ「生産」と「要素」という二つの組み合わせで表示されている。『アメリカの大学』(1973)では社会システムと一般行為システムの相互交換過程が示されているが(Parsons1973:432,439)、『行為理論と人間的条件』(1978)では更に人間的条件システムに理論を展開させている。相違点をみてみると、人間的条件ではL-Iの相互交換がトップにきており、その真下にL-A と I-G の相互交換が、一番低いところにA-Gの相互交換がおかれ、更にその下にL-G、A-Iの対角線の相互交換のセットが配置されている。

図 3 人間的条件に関する相互交換のカテゴリー (範疇)<sup>2)</sup> Parsons,ibid.p.407.



メディアに関するシンボル:L(T);I(M);G(H);A(E)

\*原書とは記号が異なっている。

出発点として最上であるのは A-G の関係であり、物理的世界と有機的世界の相互交換である。物理的世界から有機的世界へのアウトプットの要素として、ヘンダーソンのカテゴリー「環境への適合」がおかれている。有機的生活に対して環境がしてきたことは、多くの種類の生活有機体が有効に機能できるように条件を提供することである。有機体から物理的世界への逆のアウトプットには、適応能力がおかれている。要素レベルから生産物レベルに移ってみると、環境から有機体へのアウトプットには利用可能な諸資源がおかれている。例えば酸素、水素、栄養物、土といったものである。有機体から環境に対しては、環境を修正することによって、生活が調整されている。有機体と物理的環境との関係はオープン・システムのもとで機能している。

つぎに L と A の相互交換においては認識論的な問題が最も重要になってくる。物理的世界から超越論へのアウトプットには感覚データがカテゴリー化され、逆に理解のカテゴリーがおかれ、これにはカントの影響がみられる。知識はそれ自体を扱うのではなく、人間的条件の他の要素とともにあると考えられ、L から A へのアウトプットには知識の一般化がおかれている。A から L へのアウトプットには自然の秩序がおかれ、背後には現代の西洋文化の強い認識的志向がある。

A-I の相互交換において、I は行為システムの軌跡であるので、人間の行為とくに行為者として人間個人に対して知識については究極の構成要素でないものを含んでいる。この点で人間中心的観点がとくに重要になる。要素レベルで物理的世界あるいは自然から行為システムへは、自然への理解がおかれ、逆に行為から自然へのアウトプットには知に対する人間の能力がおかれている。生産物レベルで I から A へのアウトプットには、人間の知識への適応性があげられている。ここにはウェーバーの「価値」という用語を使用することによる適応性の概念の影響がみられる。逆の自然から行為システムへのアウトプットには、知識による包摂がおかれている。自然が「そこから外」という外部的な世界の部分だけというより、むしろ決定的な意味で行為システムの一部になってきている点が重要視されている。つまり自然は外であるけれども、その知識は行為の内部的な環境の一部になってきていると理解できる。

G-I の相互交換では、要素レベルで行為システムから有機体システムへのアウトプットには、有機体の遂行能力に対する需要がおかれ、逆に行為パターンに対する受容力がおかれている。生産物レベルでは有機体システムから行為システムのアウトプットに行為のための有機的エネルギーが、行為システムから有機体システムには身体の管理がおかれている。ここでフロイトの考えを取り入れて、身体には人間個人を構成しているパーソナリティを含んでおり、また有機体には行為の一般システムの機能的な単位として、エネルギーの初期の資源を含んでいるとしている。

L と G の相互交換では、人間中心的観点から人間の経験的世界の部分として、とくに人間の生活部分として有機的生活の意味深い規範的状态の背景を扱っている。つまり、要素レベルで G から L へのアウトプットには人間的動機づけの有機的構成要素のパターンがあ

げられ、L から G へのアウトプットには審美的判断のカテゴリーがあげられている。前者は人間個人の道徳的秩序に焦点を合わせているところから生じ、後者も有機体として個人の判断に焦点を合わせている。両方とも分析的に重要であり、全体として人間的条件の文脈でみるとき、お互いに補い合っている。生産物レベルでは、G から L へは動機づけの諸資源の構造が、L から G へは動機づけの諸資源に関する配分パターンがアウトプットされている。これは超越的に動機づけが、行為のより複雑な方向に入ってきていることを示している。

L-I 相互交換では、再びカントのカテゴリーに依存している。L から I へのアウトプットにはカテゴリー上の命令がおかれ、I から L へのアウトプットには道徳的義務の受諾がおかれている。目的システムと行為システムの間貫流しているものは何か、パーソンズはここにカント的な超越論的な構成要素をみている。つまり L から I へのカテゴリー的命令法であり、その性質と役割は「実践理性批判」の原則的な関係であるとしている。I から L へはカントの考えの強い道徳的強調がなされている。そして、この関係にはカントとデュルケム流の間に著しい類似のある点が指摘され、「道徳的義務の受諾」はデュルケム流の語句の使い方であることを明らかにしている。生産物レベルの相互交換では、目的システムから行為システムへは人間の道徳的責任の定義を、行為システムから目的システムへは正当化の感情をあげている。ここで正当化の感情は、肯定的と否定的の両方を含んでいる。つまり超越的な命令法に照らしてみると、人間である行為者は正当化(例えば信仰による正当化)と、否定的に非正当化(罪深い)の両方を含んでいるとみることができる(Parsons1978: 405-414)。

#### 第4節 システムとしての人間的条件におけるメディアの性質

社会システムの一般化されたシンボリック・メディアの構成要素に価値原理と調整基準をおき、一般行為システムのそれに意味の型と価値基準をおいて検討したように、パーソンズはシステムとしての人間的条件では志向のカテゴリーと評価の基準をコードの種類において、各メディアの性質を検討している(図4)。

図4 システムとしての人間的条件のメディア

	メディア	係留部門	コードの種類	
			志向のカテゴリー	評価の基準
L	超越的秩序	テリック・システム	超越性	批判
I	シンボリックな意味	行為システム	生成変形	解釈
G	健康	人間有機体システム	目的志向性	診断
A	経験的秩序	物理的・化学的システム	因果律	説明の適切性

T. Parsons, *Action Theory and the Human Condition*, 1978: 393.より作成

パーソンズはここで、システムとして考えられている人間的条件のレベルにおいて、相互交換のメディアがつねにシンボリックでありえないことを最初にあげている。その理由としてシンボリックな現象と関係が、人間の行為レベルに閉じ込められている点をあげている(同前:394)。つまり人間的条件のレベルにおいてメディアとよばれるものすべてが行為システムに内在しており、そのうちのシンボリックなメディアだけが相互交換において、人間行為システムから発出されているにちがいないとしているのである。

具体的にみるならば、物理的・化学的システム(A)の経験的秩序メディアと、人間有機体システム(G)の健康メディア、目的システム(L)の超越的秩序メディアにおいてはシンボリック性を認めていない。そして行為システム(I)のシンボリックな意味メディアにだけシンボリック性が肯定されている。パーソンズは、社会システムと一般行為システムでメディアを「一般化されたシンボリック・メディア」(generalized symbolic media)とよび分析を試みってきたが、生身の人間を究極まで問いつめたシステムとしての人間的条件では、メディアのシンボリック性をすべてのメディアに認めていない。

しかしパーソンズは、人間的条件のシステムから考え出されるメディアについて“一般性(generalized)”“相互交換(interchange)”“媒体であること(media)”の性質は認めている。メディアの概念は、人間的条件の各システムの性質を異にした、また変わりやすい現象、傾向等において単に解消不可能なものを越えて関係しうるにちがいないとし、そこにメディアの超越性を認めている。そして、この性質つまり性質を異にするものの関係に対する能力は一般性とよばれるかもしれない、とパーソンズは述べている。そしてメディアの機能は間接的であるとし、もしシステムの中で利害関係から闘争が生じるなら回避したり調整して統合することができるかどうか、とくにシステムの部分間で調整された、または組織された内部関係の範囲を拡大することができるかどうか、がメディアとして重要な問題であるとされた(ibid.395)。

またパーソンズは、人間的条件のレベルで最も中心となるメディアは行為システムに係留するシンボリックな意味メディアであるとし、それは言語と関係があるにちがいないとしている。しかし言語自体をメディアとして扱わずに、貨幣に関係した貨幣制度、権力に関係した権威と同じような立場、コードの一種に言語をおいている。すなわち言語といううしろ盾があってシンボリック意味メディアはうまく働くと考えた<sup>2)</sup>。

シンボリックな意味メディアは、一人の行為者から他の行為者へ意味を伝達しうることから循環しており、貨幣が信用創造によって増大しうるように意味の供給も人間の行為によって増大あるいは進歩しうると述べている(ibid.396)。

図4をみるとコードの種類に「志向のカテゴリー」と「評価の基準」がおかれているが、前者は主にメディアが作用する機能的問題分野であるとし、後者はメディアを使用した結果の評価に接近する基準を示している。これは社会システムの価値基準と調整基準、一般行為システムの意味の型と価値基準に相当するものとみることができる。



## (1) 各メディアの性質

### I. 経験的秩序

物理的・化学的システムには経験的秩序メディア(Empirical Ordering)がおかれた。我々が得ようとしていることは、知識と知ろうとする目的の関係を通っている秩序性から得られるとし、メディアは媒介物であるということから経験的秩序という用語が用いられた。ここで物理的世界の知識は外部世界の「所与のデータ」以上のもの、とくに目的システムの超越的秩序メディアによって提供されるカントの意味の悟性のカテゴリーを要求しているとされている(ibid. 398)。

つまり知識を得るための外部的な目的からのインプットは、でたらめなものではなく秩序づけられており、秩序のこの要素が人間的条件の構造を通して人間の心を動かしやすいものになっている、とパーソンズは主張している。

また経験的秩序メディアは、物理的・化学的システムの内部と人間的条件の他の下位システムとの関係から循環しているものと考えられ、その経験的秩序メディアの配分は継続的に交換が経験されているとしている。それらは交換価値をもっており、物理的世界の秩序について直接にというよりもむしろ具体的な現象から、たとえば「経験的な」事実から抽象化されるにちがいないと主張している。このような過程から、経験的秩序メディアは固定された量ではなく、成長を含んだ様々な過程を通して変化していくと考えられた(ibid. 400)。

このメディアの志向のカテゴリーには、因果律がおかれた。これはカントの悟性のカテゴリーからひとつを選択したもので、関係している現象の原因を理解するためにおかれた。このとき判断に対応している基準は、説明の適切性であるとされた。つまり秩序メディアを通しての経験と過程、その原因と結果の関係を知るには適切な説明が必要であると考えられた。

### II. 健康

人間有機体システムのメディアには健康(Health)がおかれた。今までメディアというと抽象的な表現が多かったが、人間的条件の G システムにきてはじめて現実的な表現となっている。G システムにおけるメディアは人間有機体の外部と内部をつなぐもの、すなわち肉体と精神の統合や安定をはかるための基礎としての健康状態と理解することができる。

パーソンズは、メディアとしての健康の概念を全体として個人の状態に基づいており、器官、組織、あるいはそれらの複合体を良いまたは悪い健康状態の例として考えた。またメディアとしての健康は、他の人間とくに健康サービスに従事する人を通して、よい環境が整えられるかぎり循環するとされた。そして良い健康状態のときに、多くの生産的活動がなされるという具合に、良い健康状態を維持するには有機体にとってインプットとアウトプットのバランスは重要であるとし、それは量的に固定されたものではなく、改善され

うるものと考えられた(ibid. 402-403)。

健康メディアの志向のカテゴリーには、目的志向性がおかれた。これはマリーの目的論(テレオノミー)の概念を採用したもので、健康メディアは目的論的な能力の形態とみなされた。また評価の基準には診断がおかれ、これによって健康状態が良いか病気が判断されるとした。

### III. シンボリックな意味

行為システムに係留するメディアには、シンボリックな意味(Symbolic Meaning)がおかれた。そして、志向のカテゴリーには生成変形がおかれている。これは言語学的にはチョムスキーの語法を借りたもので、具体的な文脈で意味を生み出すことと、文脈の表面的な構造がラベルづけすることにより深い構造に変形していくことを表している。チョムスキーは、言語を利用することによって新しい意味を形成する可能性が無限的に大きいことを強調しているが、パーソンズはシンボリックな意味メディアについても、言語をコードの一種とすることによって、その供給は固定しているのではなく拡大する可能性があるとした。

図4の第三欄、評価の基準には解釈がおかれた。たとえば言葉による表現が感情を表すかどうか、また何を意味するかという解釈をさしている。ここでパーソンズは、この「解釈」(Interpretation)の用語は、ウェーバーのいう「理解」(Verstehen)のカテゴリーを適応させたものであることを明らかにしている。そこで「解釈」と「理解」との関連をより明らかにするために、パーソンズが受けたウェーバーの影響について少し詳しくみてみたい。

パーソンズは自分が社会学科の学生として個人的な態度をみだし、また人間的行為の分析に対する理論的道具の発展に捧げたのはハイデルベルグ大学に留学した時であり、彼自身の方向をすえるために助けた人物に、マックス・ウェーバーをあげている。しかし、パーソンズはウェーバーを個人として直接には知らなかった。ウェーバーは、パーソンズがハイデルベルグに来る5年前、1920年に肺炎で亡くなっていたからである。しかし、彼の影響力はパーソンズが学生として日々を送った時には、まだ非常に強く残っていたと述懐している。

そこで行為理論におけるウェーバーの影響についてみてみたい。しかし、ウェーバーの著書を詳しく検討してはいないので、ここではあくまで大ざっぱなものにしかすぎない。

パーソンズは歴史的にみてこれまでの行為理論に3つの特徴をあげている。第一はシンボル化およびシンボル化過程に関係するもので、態度あるいは行動との区別の最も重要な線としている。第二は主体-客体の関係に関するもので、現代世界では認識論から始められるとしている。第三はシステムの概念に関する点をあげている。このうち第一、第二の点とウェーバーが最も強く関連しており、第三番目については何か関連の強さが少なかったとパーソンズは主張している(Parsons1979:150-151)。

そして歴史的にみてこれまでの行為理論に対するウェーバーの貢献の最も重要な特徴を、

パーソンズは 3 つの異なったレベルで検討している。第一は方法論的なレベル、第二は哲学上のレベル、第三は社会学的なレベルである。第一の方法論的なレベルにおいて、全体の流れは不幸にも調査技術の方向に向かっているが、ウェーバーの場合、英語的な感覚よりもドイツ語的な感覚でむしろ科学の哲学と密接している、とパーソンズはみている。彼の見解によると、このレベルでのウェーバーの最も重要な貢献は、〈自然科学〉と〈文化科学〉のディレンマの克服であったとされている。自然科学は非難をともなって一般化された概念を扱い、これに対して文化科学は特殊性にとくに〈文化体〉(Kultur einheit)に関わってきた。そこでドイツ人は、知的な伝統としてまちがったディレンマを構成してきた。この二分法の重要な結果として、科学論のすべてが事実に関して抽象的で選択的であるにちがいないとウェーバーが主張し、両者の偏見を超越したとパーソンズは解釈した。

第二の哲学上のレベルでは、ウェーバーは〈現実的要因〉(Realfaktoren)と〈観念的要因〉(Idealfaktoren)という二つのカテゴリーの用語を用いて、行為-現実のディレンマを克服していた。それは 17 世紀と 18 世紀の哲学的な革命以来、哲学的な構造と何か関係しており、観念論と実証主義の二分法で最高点に達した。そして行為論における二分法は、自然の世界から人間行為の世界へ現実的決定の概念の拡大であった。一方、観念論は関係の異なった秩序を強調していた。

第三の社会学的なレベルでは、〈ゲマインシャフト〉と〈ゲゼルシャフト〉のテンニースの有名な二分法と関係している。つまり具体的な社会構造が〈ゲマインシャフト〉の場合か、あるいは〈ゲゼルシャフト〉の場合かという二分法である。パーソンズは、ウェーバーがこの方向にはあまり重きをおいていなかったと見ているが、しかしウェーバーの観点はこのディレンマを克服する方向を示唆している、とも言っている。例えば市場経済は〈ゲゼルシャフト〉の典型的な例であり、血縁関係は〈ゲマインシャフト〉の典型的な例であるとされている。では家計は〈ゲマインシャフト〉現象か〈ゲゼルシャフト〉現象かを問うた場合、それは両方に属しているが、前者に属している方が状況を決定している広い範囲で優位に立っている。このときウェーバーは、それは〈どちら〉とも、あるいは具体的な現象について〈疑問である〉ということから自由であるとみなす。

第一、第二、第三のレベルにおいて、ウェーバーの方向は 3 つのディレンマのどれをとっても具体的な現象を拒否することと関係している(ibid. 151-154)。パーソンズは注目してきた行為論の 3 つの柱のうち、最大の困難が生じるのは第二のレベル、すなわち主体となる側面と客体となる側面との間の均衡を維持することであろうと述べている。ここで議論は行為している個人としての主体に、すなわち〈行為者〉としての主体に焦点を合わせている。そこでウェーバーのとった形式は、行為している個人が理解の用語を取り扱うにちがいない、というものであった。すなわち彼の有名な〈理解〉(Verstehen)のカテゴリーであるが、それは行為しなければならない状況に関して主体的に意図づけられた意味の用語である。この接近法に関して非常に重要な問題は相互行為ということであり、ウェーバーは〈社会的行為〉の定義でそれを考慮に入れていた。パーソンズはこれをさらに発展

させて、シンボリックな相互行為に焦点をあてた。

さて主題におけるカテゴリーの役割についてみると、問題は<理解>(Verstehen)が進行すると、カテゴリーの内容がとくに行動している個人の主観的な状態に閉じ込められているかどうか、ということになる。この点についてウェーバーの最も重要な洞察のひとつは、その限りではなかった、とパーソンズは述べている。そしてこの点でウェーバーは、デュルケームの社会学的な立場、フロイトの心理学的な立場と矛盾しない立場をとったとされている。

さらに問題は内面化である。つまり個人に内面化された動機づけは行為者に特有化されるばかりではなく、目的、規範、シンボルにも通じている。目的、規範、シンボルは個人の行為者に特有なものではないが、しかし通常の文化の部分を構成している(同前:154-155)。

以上のようなウェーバーの考え方を、パーソンズはさらに発展させて人間的条件システムの評価の基準に解釈(Interpretation)をおく基礎とした。

#### IV. 超越的秩序

目的システムに係留するメディアには、超越的秩序(Transcendental Ordering)がおかれた。秩序を「超越的」としたのは、物理的・化学的システムの「経験的」秩序に対応させたもので、カントによって用いられた意味と同じくしている。この超越的秩序メディアは、人間のもつ思考や感情と目的システム内の生命に抵触する問題との間の関係を秩序づけるための、人間的条件の枠組みのなかでの能力と考えられている(Parsons 1978:403-404)。

パーソンズは超越的秩序メディアにも循環性を認めている。「我々が人間の知識の目的として作りあげていることは、それ自体のなかのものではなく、それと同一化できない構成要素の組み合わせを情をこめて作りあげることである」とし、もし超越的な秩序メディアがこの意味で循環しているなら、それは比較可能な異なったものをつくっているという意味で、価値尺度として機能していると主張している(ibid. 404)。

また超越的秩序メディアの量は固定的なものではなく、発見を通しての認識的革新、思考の独創力、宗教改革によって変化するとした。このメディアの志向のカテゴリーには超越性(Transcendentality)がおかれ、評価の基準には批判(Critique)がおかれている。ここでいう批判の用語はカントの意味で用いられており、「純粹理性批判」「実践理性批判」「判断力批判」の三著書から得られたものであるとしている(ibid. 405)。

##### (1) シンボリックな意味メディアのインフレ、デフレ

システムとしての人間的条件のなかで、行為システムが一番中心になるシステムであるとパーソンズは述べているが<sup>3)</sup>、すると行為システムに係留しているシンボリックな意味メディアが最も中心的な働きをするメディアということになる。そこで本節ではシンボリック

クな意味メディアのインフレ、デフレについて検討してみたい。

人間が行為をする際にシンボリックな意味をもつものは何だろうかと考えてみると、それは信仰に結びつくのではないだろうか。信仰すなわち宗教に結びつくと思われる。パーソンズは宗教においてはプロテスタント派キリスト教を肯定している。そもそも四分割の「道具的(instrumental)」－「成就的(consummatory)」の軸は、禁欲的プロテスタンティズムを起源とした「道具的活動主義(Instrumental Activism)」から生み出されている。そしてアメリカの価値体系について、パーソンズはもっとも一般的には道具的活動主義を志向していると主張している 4)。 (図 5)

社会システム、一般行為システムでのメディアのインフレ、デフレの定義はシンボリックな意味メディアにも適用できると思われる。インフレの場合、行為者相互間に信用が増す、その背景に共通の信仰があればより一層、信用が推進されるのではないだろうか。デフレの場合、行為者相互間に信用が減少する、その時、心理的に共有するものが異なる場合、信用の減少する速度がはやくなるのではないだろうか。

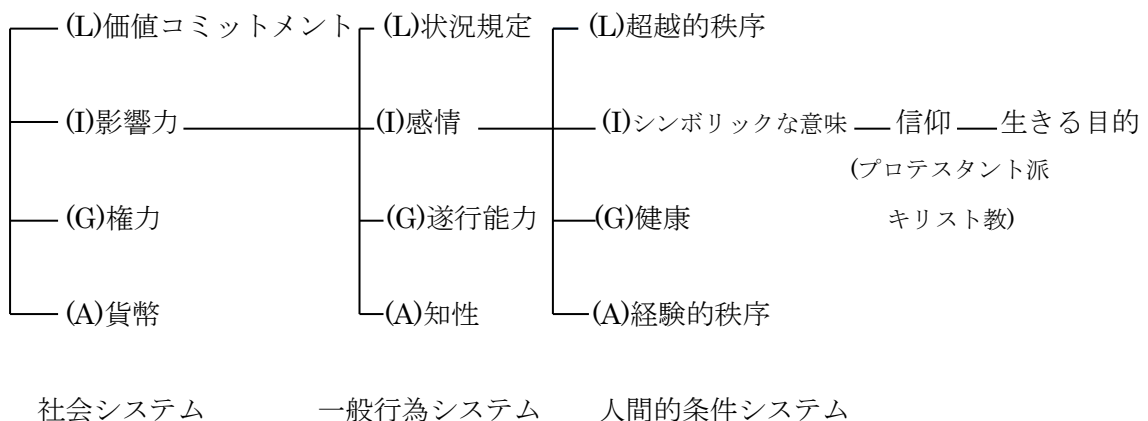
シンボリックな意味メディアの場合、意味の問題、すなわち人間の存在の意味、幸福や不幸の意味、善悪の意味など、宗教の中心的な問題となることが関わってくると思われる。

パーソンズはメディアについておだやかなインフレ状態が望ましいと述べているが、シンボリックな意味メディアについて考えてみると、信仰、宗教、とくにプロテスタント派キリスト教を肯定していることが改めて伺える。

また宗教は個人的な問題として根本的な「意味の問題」に解決を与えることができるが、それは単に認識論的哲学的な問題ではなく、すぐれて実践的問題であり我々が日々の生活を行う上での基本的な価値委託の問題と結びつく。このことを考えるとシンボリックな意味メディアは、行為システムの外部と内部を結びつける働きをするのではないだろうか。それによって人間的条件における行為システムの均衡を保つ働きをしていると考えられる。

シンボリックな意味メディアが信仰と結びつき、生活上の実践的な価値委託と結びつくとする、シンボリックな意味メディアに関して一種の仮説命題であり実証性に欠けるといふ意見に対して、一つの風穴をあけることができるといえよう。

図 5 シンボリック・メディアと信仰



## 第5節 結び

本節ではパーソンズ理論全体のなかでシンボリック・メディア論のもつ意味、システムとしての人間的条件のメディアについて検討して結びにかえたい。

### 1. パーソンズ理論全体のなかで、シンボリック・メディアのもつ意味

パーソンズ理論は、静態的な分析にとどまっているという批判に対して、社会システム、一般行為システム、人間的条件のシステムそれぞれの各下位システム係留するメディアが、「循環性」を持っていることから動態的な分析もできると考えられよう。

具体的には、『アメリカの大学』(1973)の中にその例をみることができる。例えば、1960年代におこった大学紛争について、1964年時点では行動システムに係留する知性メディアと文化システムに係留する状況規定メディアの生産物と要因の相互交換が、非常によく作用してメディアのインフレ状態にあったとして、二重の矢印で表されている。それが1968年から1970年の紛争が生じた後での時点では、知性メディアと状況規定メディアにデフレ状態が生じたとして、その関係が破線で表されている。このことは、大学の危機を大学組織体の危機として構造的にとらえ、メディアの循環性という動態的な性質を使ってその分析を試み、解決をはかろうとしていることがいえると考えられる。

### 2. シンボリックな意味メディアについて

(1) シンボリック意味メディアについては、人間が行為する際に、シンボリックな意味をもつものは何かを考えてみると、信仰、すなわち宗教に結びつくと考えられる。パーソンズの場合、宗教においてプロテスタント派キリスト教を肯定していることが理解できる。アメリカの宗教について、パーソンズは、ロバート・N・ベラーの「アメリカの社会的共同体は宗教をもっており、十分に信仰をともなって実践されている。それは市民宗教とよぶにふさわしく、キリスト教の型がより近い」という説を支持している。なお、アメリカの価値体系について、パーソンズはプロテスタント派キリスト教の考えを使って分析を行っている。

今まで抽象的とばかり思い込んで現実から遊離しているかのようにであったシンボリック・メディアがすぐれて実践的なことと結びついてきたこと、すなわちシンボリックな意味メディアが、生活上の基本的な価値委託の問題と結びつくことを理解することができた。

(2) パーソンズは、社会システムには感情メディア(Affect)をおき、行為システムにはシンボリック意味メディア(Symbolic Meaning)をおいている。そして、シンボリック意味メディアの志向のカテゴリーには、生成変形(Generativity)をおいている。これは言語学的にはチョムスキーの語法を借りたものである。ここでのGenerativityとは、生物が生きていく中での生命と制限力に抵触しており、フロイトの影響がみられる。

フロイトは、夢の研究から無意識のうちのエディプスの欲求に注目し、幼児期以来一貫

する性的欲求をリビドー(libido)となづけた。フロイトによると、リビドーは最も強力な本能的衝動であり、人間の根源的な欲求である。他の様々な欲望はみな、リビドーの変形や仮装にすぎないとしている。

一方、ロバート・N・ベラーは『日本近代化と宗教倫理』(1966)のなかで、心学とその創始者として石田梅巖(1685-1744)をとりあげている。そのなかで梅巖は、学問という言葉に含まれる過程に関して、二つの主要な方向をあげていると指摘している。ひとつは悟り(見性、けんしょう)、すなわち「性を知ること」あるいは「心を知ること」に導くものをあげ、もうひとつはその悟り、あるいは認識から生じる倫理的実行をあげている。

これらのことから、西洋、東洋を問わず、人間の行為を生み出す心的エネルギー源には、性—フロイトによるとリビドー(性本能、生命力)、石田梅巖によると悟り(見性)—が重要になっていることが理解できる。

(3) パーソンズはシンボリック意味メディアの評価基準に「解釈(Interpretation)」をおき、M・ウェーバーのいう「理解(Verstehen)」と密接なかかわりがあるとしている。これは行為論の主体となる側面と客体となる側面との間の均衡を維持することの困難性というレベルに関するもので、ウェーバーの場合、相互行為という観点から接近して、行為している個人としての主体が理解の用語をとり扱うにちがいないとしたものである。

これに対してパーソンズは、ウェーバーの考えをさらに発展させた。すなわち彼は 行為をするさいの評価の基準にシステムという考えをとり入れ、相互理解、換言すれば行為をパターン別にとらえ、システムの相互に理解して解釈するという意味で、「解釈(Interpretation)」という用語を用いたものと考えられる。

注

1) 図3について。A-G 交換図における生産物と要素に誤りがあることを、松本和良先生より教示された。原書では(E)(H)(H)(E)となっているが、本書では(H)(E)(E)(H)と修正してある。

2) ヴィクター・リッツは言語について次のように述べている。

パーソンズが確認している一般化されたシンボリック・メディアのすべてを発展させたものから、共通の母体として言語は扱われるべきである。また私は社会関係と相互行為に関するすべてのメディアの利用は、現代社会において言語の使用と密接に関係していることを証明したい (V.Lidz(eds.)2005:330)。

大黒は、パーソンズが一般化されたシンボリック・メディアに言語を取り入れていないことに触れ“パーソンズのシンボリック・メディアは、貨幣と言語の「妥協」の産物である”と述べている(大黒 2003:62)。パーソンズは、言語を自由度がある場合とない場合がある、また言語の形態素や語彙的要素はシンボルとしての意味を一般化することができるが、統語的要素や語法的要素はシンボルとしての意味を一般化することができな

いと述べている。それゆえ、彼は言語をシンボリック・メディアには入れないで、シンボリック・メディアのコードに位置づけている。筆者は、パーソンズが言語を自由度と普遍性という点から、一般化されたシンボリック・メディアのコードに位置づけているのは妥当であると考えている(詳細は第 10 章第 2 節参照)。

- 3) 田野崎昭夫「晩期パーソンズの理論的展開」(社会学研究 40)1981,p.110,pp.117-118 においても確認されている。
- 4) 高城和義『パーソンズの理論体系』(日本評論社)1986,pp.301-304 で詳しく述べられている。



## 第9章 人間的条件のパラダイムについての検討—その1—

### 第1節 はじめに

第8章で人間的条件のメディアについて述べた。パーソンズは人間の存在に関わる人間的条件をシステムの枠を超えて、より大きくパラダイムという捉え方をしている。本章では人間的条件のパラダイムについて導入、概略についてより詳細に検討することを目的としている。

### 第2節 人間的条件のパラダイムへの導入

パーソンズは社会システムや行為の一般システムを概念化し、さらに人間的条件のシステム分析へと進んでいる。人間的条件の分野は哲学的である。パーソンズは人間の存在条件をも理論的に分析しようとしている。

パラダイム(理論的枠組)という用語について1978年に『行為理論と人間的条件』が出版された時に、トーマス・クーンの著書『科学的革命の構造』(1970)の中で提案されているパラダイム概念との相違が論争点になったが<sup>1)</sup>、パーソンズ自身はクーンのいう意味とは少し違って、オリジナルな立場で人間的条件の理論的枠組という意味で使用している。実際彼は『行為理論における作業論文集』(1953)の中で、“四機能パラダイム”について、常に語ってきたとし、ロバート・マーソンの論文「機能分析に対するパラダイム」(『社会理論と社会構造』1957所収)に刺激を受けたと記している(Parsons 1978:352)。

行為の一般システムと呼ばれるようになってから、行為システムの境界の定義と境界の維持が決定的に重要になってきている(同前:352)。概念化に関して、境界をこえて同じ秩序がなぜ試みられるべきでないか。たとえば社会システムと文化システム、社会システムとパーソナリティ・システムにおいて、上記のことが問題になってきている。

パーソンズは、一般行為システムから人間的条件システムへと研究を進めているが、ここで一つ注意しなければならない点がある。それは、人間的条件システムにおける行為システムのAシステムに、行動システム(Behavioral System)をおいていることである(第8章図2参照)(同前:382)。パーソンズは1973年に出版された『アメリカの大学』の中で、一般行為システムの構造の適応的下位(A)システムに、行動有機体(behavioral organism)をおいている(Parsons 1973:435)。なぜ彼は行動有機体から行動システムへと名称を変えたのか。それは、チャールズ・リッズとヴィクター・リッズが1976年に出した論文「J・ピアジェの知性に関する心理学と行為理論におけるその地位」の中で、行動有機体に相当するものを「行動システム」(behavioral system)とよび、分析のカテゴリーとしての有機体(organism)は、行為システムから全く排除されるべきである(—相互浸透地帯を除いて—)、そしてシンボリック・レベルにおける認知的有機体のシステム(the system of

cognitive organization)は、行為の重要な部分としてとり扱われるべきであると提案した(Parsons 1978:353)からである。その提案はパーソンズに大きな説得力をもち、パーソンズは行動有機体を行動システムと変更した。

この提案は行為と有機体の境界について、徹底した再考を促す契機になった。

大部分の心理学者たちは、心理学を「有機体の行動」として単に定義することを拒否し、行為と有機体を区別することに反対した。他方、デュルケーム、ウェーバー、フロイト、ピアジェ、G・H・ミード等は、全く正確に人間の“行動”(behavior)とよばれることの中にシンボリック過程(Symbolic process)が巻きこまれることは区別するべきであると強調している。この関連においてパーソンズは、非常に重要な“有機体”(organic)と“精神的なもの”(psychic)との間の区別に関するフロイトの主張を参考にしている(同前:353)。

行為システムをめぐっては、他のシステムとの境界が問題になる。第一には、行為システムと有機体システムの境界についてである。

パーソンズは、人間的条件のパラダイムを考察する際に、Iに行為システム、Gに有機体システムをおき、これらの相互関連について理解するには、有機体側面の理論的な理解が必要であるとしている。すなわち、人間の有機体的側面を生物学理論により分析し、(a)には生態学上の適応、(g)には表現型としての有機体、(i)には生殖個体群、(l)には遺伝子の継承を置いて(第11章図2参照)、生命システムにつながっていることを示している。

第二には、行為システムとテリック・システムの境界が問題になる。テリック・システムは、“非経験的”分野として認識的に対応している分野で、パーソンズは残余範疇(residual category)という用語で対応している。この残余範疇に対して、パーソンズはウェーバーの『宗教社会学』(1922)から強く影響を受けている。一つの決定的な問題は、ウェーバーが「意味の問題」(problems of meaning)とよんだものに対応させて「志向」(orientations)の多様性を強調していることである。ウェーバーが『宗教社会学』の中で強く主張している2つの立場を、パーソンズも支持している。

第一には初期のカルヴィニズムと初期の仏教が、意味のある宗教的志向の変化の範囲の中で対極にある立場のものとして扱われうる、という議論である。第二にはウェーバーが志向を特徴づけるタイプに用いた二分法に貢献したという重要性である。一方では禁欲主義と神秘主義という区分、他方では“内部一現世的”と“来世的”志向という区分がそれである(同前:355)。

ウェーバーの立場を熟慮する一方で、パーソンズはこの分野においてカントからも決定的な影響を受けている。カントは“形而上学的”(抽象的論議、metaphysics)な方法で、認識とはなにかについて論じている<sup>2)</sup>。

パーソンズによると、カントは『純粋理性批判』(1781)の中で空間と時間、あるいはものそれ自体として理解のカテゴリーを扱わなかった。経験的認識は、現象として知識に反対している。しかし、むしろ経験的な知識がつくられるかもしれないという見地から、彼の認識は“超越論的”枠組みであったものを構成しているために現象を支えているとし、そ

の理由は『実践理性批判』(1788)『判断力批判』(1790)の2分野における抽象化への試みにも通じているとしている(同前:355)。

すなわち、カントは超越論的主観性として人間理性を規定し、それは三批判書に通じているといえる。

また、パーソンズはカントが明らかに二重のレベルの用語を考えていたことを指摘している。すなわち、経験的知識の認識的事実と理解のカテゴリー、実践倫理の「問題」と「カテゴリー上の命令」、審美的「経験」と判断の規範がそれである。パーソンズはこの二重性に対応するものとして、言語学者の「深層構造」と「表面的構造」、生物学者の「遺伝子型」と「表現型」、サイバネティストの「高い情報」と「高いエネルギー」、そして実際、社会学者の「価値」あるいは「制度的パターン」と「関心」をあげている。そして、これらの各ペア(組み合わせ)の初めの語句は、メタ構造<sup>3)</sup>を示すために用いられ、現象の一性質としてではなく、むしろ当該の現象が秩序ある方法において必ず思い出される条件の一つの超越的なセットであるとしている(同前:356)。

とくにサイバネティックな階統制が、人間の行為や存在にとって重要であるとパーソンズは主張している。その階統制の最高位に位置するのがLシステムであるが、パーソンズは人間的条件の場合、行為の境界を超えてテリック(目的)をおいている。テリックとは、アリストテレスの用語、“teleology”<sup>4)</sup>(目的論)を修正して使用したもので、その使用には二人の科学者によって励まされたとしている。一人は、生理学者ローレンス・J・ヘンダーソン(Lawrence J. Henderson)で、彼は『自然の秩序』(1917)の中で、アリストテレスの問題は、人間の存在を考えた時に現代科学の思想から抹消されえないと述べている。二人目は、同時代の生物学者エルンスト・マイア(Ernst Mayr)で、進化や生物哲学を論じた論文の中でテレオノミー(Teleonomy, 目的論)の概念を導入していることである。

テリック・システムにおいて、第一に関連しているのは宗教的文脈である。メタ世界の存在が著しく宗教に関係しているに違いないとパーソンズは考えているが、これについてはカント<sup>5)</sup>をひきあいに出している。またパーソンズは有機体、行為、テリックの世界の他に、物理的な世界をとりあげている。物理的な世界については、有機体の世界から物理的な世界を区別している生物学者たちの著書、たとえばヘンダーソンの『環境への適応』(1912)、『自然の秩序』(1917)、マイア『人口、種そして革命』(1970)、ルリア『生命:未完の実験』(1973)の影響を受け、物理的な世界が人間の環境について重要な構成要素をなしていることを指摘している。とくにヘンダーソンからの影響が大きく、『自然の秩序』の中で「目的論的な」側面は、一様に物理的な世界の理論的な取り扱いに数えられるにちがいないと記述されている点は、パーソンズが自然に対して仮定していることと同じであることを主張している(同前:357)。

ヘンダーソンは「メカニズム」の大衆的な考えについて、それ自体が適切でないとし、概念をかなりの長さで精緻化して物理的な世界の最も重要な性質のひとつに、秩序(order)をあげている。そしてヘンダーソンがしばしば用いる語句は、一秩序とほとんど同義語で

あるが一有機体(organization)<sup>6)</sup>であるという(同前:357)。

ここにおいてパーソンズは、物理的な世界にも目的があり、自然界にも秩序があるという  
 ことを見通しているように思える。

図1 物理的-化学的システム

生命システムの物質的基礎	a	g
	炭素 (H) 新陳代謝 (H) 燃料物質 (W) 土 (G)	酸化作用 (H) 複雑性 (H) エネルギー (W) 火 (G)
	1	i

T. Parsons, *Action Theory and the Human Condition*, 1978:382.

『環境の適合性』の中で、ヘンダーソンは生命有機体が依存している条件として、物理的-化学的環境の特徴について論じている。これらは、地球の表面上に大気、ガスの構成物とともに温度を含んでいるとし、水(H<sub>2</sub>O)の重要性について語っている。とりわけ空気と水の両方の循環、そして、それらの間の連続した相互交換、大気ガスの水分中の溶解性に基づいている。その時、条件のこのセットの中にある水素(H)、酸素(O)、炭素(C)の3つの化学的要素の豊富さと影響されやすさの重要性を特に強調している。これらの要素は水の構成物すべてに含まれており、酸素(O<sub>2</sub>)と二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)という自由な形の中で、生命の大気環境の最も重要な構成要素を提示している。ヘンダーソンは水素、酸素、炭素が有機体の複雑性の中で、一つの特別な秩序をつくっていると論じた。パーソンズによれば、それは生物化学レベルで生命有機体の特に重要な特徴の一つということになる(同前:360)。

ヘンダーソンは複雑性というもとの、有機体について他に2つの主要な性質を論じている。第一の性質に、新陳代謝(metabolism)をあげている。新陳代謝の基礎的な化学的過程は、酸化作用(oxidation)であり H、O、C の3つの要素と関連している。酸化は炭素(C)と他の物質を要求しており、酸素(O)が有機的に使用可能なエネルギーを生み出すことと組み合わせられているとしている。

第二の付加的な性質に、調節(regulation)をあげている。環境を伴った相互交換という新

陣代謝過程を通して維持されている有機体の均衡は、それ自体環境システムの均衡と同じではなく、有機体にとって特有のものである。この調節は、遺伝子の相続財産のパターン化と伝達を秩序づけているといえる。パーソンズによると、ヘンダーソンは有機体生命や行為の世界に対して何かまったく無関係なものとして調節(regulation)をとらえているのではなく、それらに対して比較的明らかで特別な関係を何か維持しているものとして調節をとらえている(同前:360-361)。

以上のようにして、物理的-化学的システムには生理学者ヘンダーソンの説が大きく取り入れられている(図 1)。パーソンズは、物理的-化学的システムに自然の秩序を見出しているといえる。

### 第3節 人間的条件のパラダイムの概略

パーソンズは、物理的世界、有機体世界にとっても人間存在の重要性に注目しており、それは行為自体の世界に加えて、“超経験的な” テリック世界に関係するものであった。彼は 20 年以上にわたって 4 機能カテゴリーに精通しており、一般行為システムのパラダイム<sup>7)</sup>の拡大により、人間的条件の 4 機能パラダイムを提示している。

図 2 人間的条件の一般的パラダイム

	L	道具的	成就的	I
内面的 (人間的条件 にとって)		テリック システム	行為 システム	
外面的		物理的- 化学的 システム	人間有機体 システム	
	A			G

T. Parsons, op.cit., 361.

図 2 は人間的条件システムのパラダイムの最も単純な図式である。縦軸に人間的条件にとって外面的、内面的という 2 つの項目を置き、横軸に道具的、成就的という項目をおいて物理的-化学的システム、人間有機体システム、行為システム、テリック・システムという 4 つの主要なカテゴリーが導かれている。

パーソンズは、人間的条件のパラダイムにおいて明らかに人間中心の(anthropocentric)観点を想定している。彼は、パラダイムについてその様々な部分と側面の人間存在にとっての意味という用語で、人間の経験に接近できる世界をカテゴリー化している<sup>8)</sup>と述べている(同前:361)。このことは、人間的条件のパラダイムは実証に結びついているということ、強く暗示しているように思える。

パーソンズによると、パラダイムそれ自体は、その中に関心をもつであろう他者による

考察と評価に対して「知識に対する貢献」として認識的意味をもつとしている。そして「観察者の観点」は、現代の科学哲学のなかで重要になってきているが、たとえばアインシュタインの相対性理論から同時代の社会理論の方法などすべてが、人間の行為システムに関連しているに違いないとみている。

その時、第一の問題としてこの観点はパラダイムの中に配置されていることをあげている。パーソンズはそれを、統合細胞(I)の中に配置している。すなわち、知識のさまざまな構成要素を統合したり、ある種の意味ある全体を形づくっている人間的条件において、「世界」の他の3つのカテゴリーの人間の経験に関する他の側面を統合するのは、人間の心(human minds)であるとしている。しかし、この意味で一つの意味深い全体は、シンボリックな用語の標語で表現されるにちがいないとしている(同前:362)。ここにおいて、行為システムとは他の3つの世界を統合する働きをする人間の心であり、それはシンボリック(象徴的)<sup>9)</sup>なものであることを強調している。パーソンズは、人間の心という形として直接につかみにくいもの、目にみえないものをシンボル(象徴)と結びつけて表現していると言える。

この基準は行為システムにある。

観察者(すなわち行為者)の観点のある行為システムでは、有機体の世界は除外されている。フロイトも行為者の観点を“精神的な”ものとみており、彼によると“本能(instincts)”(Triebe)は有機体の現象ではなく、むしろ精神に対する有機体過程の“後継者”(representatives)とされている。

行為システムは、このように精神と物理的な世界(肉体)を統合する立場にあるが、この議論が受け入れられるなら、物理的な世界は適応的な立場(A)におかれるとされている。そして、物理的な世界は一般化された資源の究極的な源泉であるとされ、そこでは地球上の生命システムすべてが依存しており、生命システム機能の究極的な条件を提供しているとされている(同前:362)。ここではヘンダーソンの『環境への適応』の考えが取り入れられている。

次に有機体システムであるが、ウィナー(Norbert Weiner)のサイバネティック<sup>10)</sup>な階続性を取り入れるなら、以下のように問題が解決されるとしている。すなわち有機体システムは、サイバネティックにたぶんヘンダーソンのいう“調節”(regulation)によって物理的システムの側面を支配し、そして順にある点において行為システムによって支配されている。それゆえ、有機体システムはパラダイムの目標達成システム(G)の中に配置されている。有機体のこの位置とマイア(Mayr)の強調しているテレオノミー(目的論)との間に満足させる一致がある。マイアは、テレオノミーが目標を達成しようと努力する有機体システムの性質に関連していると主張している。

最後のテリックについて、パーソンズはパターン維持細胞(L)にそれを配置するための、合理的理由をあげている。第一に、テリック・システムはサイバネティックな視点から、行為システムに対して高い位置にあること。第二に、テリック・システムは“潜在的な”基準に適合していること。テリックは行為過程を通して、認識的過程を含んで定義されて

いるに違いないと考えられている。第三に、テリック・システムは“緊張管理”(tension management)とよんできた機能と関連している。

このように、人間存在に強い感情をおこしているテリック分野には、志向(orientation)の問題がある。ウェーバーが宗教と関連させて論じている苦痛や悪の問題が例としてあげられている(同前:363)。

人間的条件のパラダイムの縦軸には内面的、外面的が提示され、内面的は上の列を、外面的は下の列を構成している(図 2)。パラダイム(範式)が行為という観点に関係して形成されており、行為システムは内面的なものとして扱われている。フランスの哲学者デカルト(René Descartes)が『方法序説』(1637)の中で、あらゆる知識の絶対確実な基礎を求めて一切を方法的に疑ったのち、疑いぬ心理として「考える自己」を見出し、そこから神の存在を基礎づけ、外界の存在を証明して「精神」と「物体」を相互に独立な実体とする二元論の哲学を樹立したことを踏まえて、パーソンズは行為の外面的なものに物理的な世界をおいている。そのことは、行為の主体—客体関係にとって中心的であることを指摘している。パラダイムの外面的軸におけるもう一つの細胞には、有機体の世界あるいは生物の世界がおかれている。

パーソンズはもし行為システムが、人間的条件において内面的なものとして扱われるなら、それはテリック・システムにつながりテリック・システムも内面的な分野におかれるとしている。その理由として、人間の外面的部分と内面的部分との間に中心となっている重要な境界線は、シンボリックなレベルで意味の基準(the criterion of meaning)によって定義されていることをあげている。マイアは、テレオノミー(Teleonomy, 目的論)の概念をシンボリックな過程の感覚よりも、より広い感覚で理解しているとしている。マイアは生物学者において目的律的な[teleonomic]行動は、その目標指向性をプログラムの操作に負うものであると定義し、あらゆる生物学的「目的」の中でもっとも一般的なものは、生殖による永続であると述べている(Mayr 1974,1988,八杉・新妻訳 1994:51,74)。

生理学者ヘンダーソンは、『環境への適応』の中で、このカテゴリーの中にシンボリックな意味を含んでいることを、決して主張していない。パーソンズは、かれらが物理学や生物学がシンボリックな意味のレベルについて経験的なシステムから除外してきたとし、このことは人間だけが言葉をもっていること、そしてより重要なことには、人間だけが我々の感覚で文化をもっている、という結果を素通りしていると主張している。

パーソンズは、生命システムの間で人間だけがテリックの問題をもっているとし、それを秩序 Ⅱの問題と結びつけている。すなわち人間だけが生きる目的、生きることの意味や価値を考えることができるとし、自然界の秩序と関連づけているといえよう。そしてパーソンズは、シンボルを学習したり使用する能力やシンボルの意味が存在しないなら、テリックの問題は生じないだろうとし、シンボルとテリックを強く結びつけている。この議論について彼は、エデルソン(M.Edelson)の『言語と夢』(1972)と関係づけて論じている。それは、夢を見ることは言語を仮定しており、意識の底に潜む無意識が両性の再生産に結び

ついているとするフロイトの研究に関するものである。

このように、テリック問題を人間的条件にとって内面的な問題であるとし、人間だけがもつことについてパーソンズは、次のように説明している。

もし人間行為が認識的理解の合理的な形に属するなら、そのとき、なぜテリックの分野が合理的に理解することに関して、この可能性から締め出されるべきかということについて説得力のある理由をもちえていない。反対に、人間の行為志向の重要なモードすべては、人間的条件のなかで彼がさらされている環境のすべてに対して行為者の志向(orientation)として人間に関係している(Parsons 1978:364)。

ここでパーソンズは、人間の行為が志向、すなわち心が一定の目標、目的に向かって働くことを指摘し、そのことは行為が合理的な判断だけで決定されるのではないと解釈することができる。ここにおいてテリックの分野と人間行為の目的が関連しているといえる。

人間的条件のパラダイムの横軸は、道具的・一成就的とラベル化されているが、時間により密接に関係しているとされている。この軸の原型は意味-目的(means-end)関係であり、意味の適用は目的の達成に先行しなければならないということを含んでいる。道具的・一成就的の軸の原型とされるこの関係は、合理的な関心の事例をこえて、特に非合理的な事例を含んで一般化することを意味しているとされ、目的を成就するには、そのことのもつ意味が重要であると理解できる。合理的なことにはばかりではなく、非合理的なことにも十分に意味がある、行為それ自体の枠よりももっと広げて、人間的条件の枠組みを考えるにあたり、人が地球上に存在するとはどういうことかを、パーソンズは考えていたといえよう。

パーソンズは、かつて行為の準拠枠を議論した際に『社会的行為の構造』第2章の中ですでに行為の“意味”(meanings)と“条件”(conditions)の間の区別を吟味している。その時の区別の基準は“外面的な”実在が行為者の支配(control)を受けやすいかどうかに関連するものであった。この基準によると、行為システムの観点から条件と意味が、行為システムそれ自体におけるのと同様に、人間的条件の物理的システムと有機体システムの両方に見出されるという(同前:365)。かくして人間的条件のパラダイムにおいて、これらの関係は道具的(instrumental)という用語で表されている。パーソンズによれば、人間は神から道具あるいは手段としてこの世につかわせられたものである。それゆえこの道具的という用語の中には、“意味”が関連しているということができる。また、人間行為者にとって重要な如何なる対象にも意味のこれらのタイプのひとつが与えられるとして、成就的の軸にも意味が関連しているとしており、物理的対象、有機体対象にも意味が関連しているといえる。例えば、自然の多くの現象(よく知られている日没など)にも意味があるとしている。そしてこのことは個人や集団に緊張が生じて最も小さいものであるとし、緊張の度合いを考えるなら、その次に有機体の対象がくるとしている。

このようにして人間的条件のパラダイムの物理的・一化学的システム(A)は、自然界の秩序につながっているといえる。またパーソンズによると、イデオロギー上の論争のこれらの点に関する関係はうちそこなわれないであろうとされ、この点についての言及は人間の労



働を“商品”として扱う資本主義的扱いについてのマルクス主義の教義についてなされるべきであるとされている(同前:365)。このA部分において、人間や自然を分子、原子のレベルにまで分解している。

次に行為システムと有機体システムについてであるが、パーソンズは早くから両者の間を重要に分割している線を構成しているのは、シンボリックな意味であると主張している。

生物学者マイアのテレオノミーの概念は、生物界における意味-目的(means-end)関係の概念よりもより一般的で、人間の場合、非シンボリックな有機体レベルの中に“努力すること”(strivings)を含んでいると彼は解釈している。なるほど人間には肉体と精神があり、精神にもとづいて実際に動いているのは肉体であるので、有機体の中に“努力すること”を含んでもおかしくはない。

有機体の世界と物理的な世界を区別する基準として、“テレオノミー”(teleonomy)を使用することは、広義において正しいとパーソンズは考えていた。物理的な世界において、各原子、分子はヘンダーソンの使用では“組織化”(organize)されているけれども、テレオノミックに(目的論的に)一様ではないという意味で、上記のように考えられたのである。

最後に、道具的な側面のひとつであるテリック・システムに関して、テリックについての考察は、実際に人間の最も重要な目的や他の様々なことを定義していると彼は主張している。ここで定義することは意味を明確にすることであり、テリックとは、人間の生きる目的を明確にすることにつながっている。

そして、行為システムとテリック・システムを区別している要点として、“テリック・システムは行為しない”という意味を含んでいることを彼はあげている。それは、物理的システムが行為をしないということの他に、目的論的なものではないということと平行しているとしている。以上を考えると、人間的条件のパラダイムの道具的軸は行為をしない側、成就的軸は行為をする側と見ることができよう(図2参照)。この判断に対する原則的な理由に、彼は経験的な生命システムが2つの方向から“くくられている”ことをあげている。第一の方向として、行為システムが環境という物理的な条件と有機体構成の条件で取り囲まれていること、第二の方向として、行為システムが有機体や人間存在のテリックの条件、すなわち超越的、非経験的あるいはメタ条件によって囲まれていることをあげている。これらの条件は、お互いにサイバネティック・ハイラーキーに関係して立っている(同前:366)。

パーソンズによると、サイバネティック・ハイラーキーとは低エネルギー、高情報にあるものが、高エネルギー、低情報にあるものより上位に位置するというもので、4機能図式では低い方からA→G→I→Lの順になる。パーソンズはこのサイバネティックな秩序を人間的条件の発展方向において、最も重要な単一軸と考えており、それは物理的宇宙の発展、有機体生命の発展、人間行為現象の発展を含んでいるものである。

また彼は、サイバネティックな秩序や発展の現象は、存在するすべてのものとしての“宇宙”の限定された概念の中で制限されているにちがいないとし、もし宇宙が“1つに目的化

された”のではなく“2つに目的化された”そして“循環している”と考えられるなら“秩序”の制限された概念の種類が1つではなく、2つあるに違いないと考えた。あるいは“条件”に関して小さな相違がおかれているに違いないと考えた。“秩序”の制限された概念の種類は、“意味深長な”志向のそれであるとも述べている(同前:366)。

#### 第4節 結び

以下の二つに関して簡略に要点を述べて、結びにかえたい。

まず<人間的条件のパラダイムへの導入>について。パーソンズは一般行為システムの適応的下位システム(A)に『アメリカの大学』(1973)では「行動有機体」(Behavioral Organism)をおいていたが、『行為理論と人間的条件』(1978)では「行動システム」(Behavioral System)と変更している。これはチャールズ・リッツとヴィクター・リッツが行動有機体を行動システムとよび、有機体は行為システムから全く排除されるべきである、そしてシンボリックな水準での認識的有機体のシステムは、行為の重要な部分として扱われるべきであると提案し、パーソンズが納得したからである。ここにおいて、行為と認識とシンボルが結びついてくる。

つぎに<人間的条件のパラダイムの概略>について。パーソンズは、行為システムが物理的-化学的システム、人間有機体システム、テリック・システムの3つの働きを統合する人間の心(human mind)に関係し、シンボリックなものであると強調している。そしてテリックの分野には志向(orientation)の問題があるとしている。またパーソンズは人間有機体のパターン維持システム(L)に、マイアが「あらゆる生物学的な目的の中でもっとも一般的なものは生殖による永続である」と述べていることを取り入れて、“遺伝子の継承”をおいている。パーソンズは、生理学者ヘンダーソンや生物学者マイアが触れてこなかった点として、シンボリックな意味のレベルで、人間だけが言葉や文化をもっていることを強調している。また彼は生命システムのなかで、人間だけがテリックの問題をもっている、すなわち人間だけが生きる目的や意味、価値を考えることができるとして、秩序の問題と結びつけている。

#### 注

- 1) クーン(Thomas Samuel Kuhn, 1922~1996)アメリカの科学史家。科学理論の発展と転換の構造を説明するパラダイム概念を提出したが、後にこれを専門学問母体と言いつくした。

- 2) カントは、『純粋理性批判』(1781)の中で、「われわれの認識がすべて経験でもって始まるにしても、そうだからと言ってわれわれの認識が必ずしもすべて経験から生じるのではない」と語り、「ア・プリオリ(a priori, 先験的)な総合判断」というものを考える。かれは、認識の要素は直観(感性)と概念(悟性)であり、その先験的諸概念を「カテゴリー」(範疇)とよんでいる。そして直観と概念を媒介するのが、超越論的構想力(想像力)であるとしている。

カントによると、我々が認識しうるのは、直観(感性)という形式を介して与えられる「現象」だけだということになる。その背後にあるかもしれない「物自体」は認識できない。

またカントによると、空間や時間は概念ではなく、われわれの知覚に先験的(ア・プリオリ)に備わっている「感性的直観の純粹形式」(reine Formen sinnlicher Anschauung)であり、そこで(空間や時間の中で)知覚される世界は、あくまで「現象」(Erscheinung)の世界になる。つまり空間や時間に関しては、超越論的観念性(transzendente Idealität)を主張している。

- 3) メタ(meta)とは化学に関する用語で、ギリシャ語で「間に」「後に」「越える」の意の meta に由来する接頭語である。メタ構造とは、構造を説明するための構造と理解できる。
- 4) ギリシャ語では、teleonomy(テレオノミー,目的論)である。telos(テロス)とは目的・目標を意味し、目的論とは目的、目標志向的な行動、プロセスと解釈される。
- 5) カント(Immanuel Kant,1724~1804)は、認識というのは対象の模写ではなく、主観(意識一般)が感覚の所与を秩序づけることによって成立すること(コペルニクスの転回)を主張した。さらに彼は、超経験的なもの(不滅の靈魂・自由意志・神など)は科学的認識の対象ではなく信仰の対象であるとして、伝統的形而上学を否定し、道徳の学として形而上学を意義づけた。
- 6) 「世界の永遠に神秘的なことは、その包含性(内に多くのものを含んでいること、Comprehensibility)にある」というアインシュタインによる有名な声明は、ヘンダーソンのいう有機体の内容と関連しているように思える(Parsons 1978:357-358)と、パーソンズは指摘している。
- 7) プラトンでは物事の範型としてのアイデアを意味するが、後には一時代の支配的なものの見方をいう。科学史家 T.S.クーンによれば、パラダイムとは科学者集団が共通に活用する概念図式・モデル・理論・用具・応用の全体であって、科学研究の伝統をつくるものをいう。たとえばニュートン力学など。
- 8) 分類する、範疇化するという意味。
- 9) シンボル(symbol, 象徴)について。象徴は symbole(フランス)の訳語であり、中江兆民の訳書「維氏美学」(1883)に初めて出てくる。語源であるギリシャ語のシュンボロン、ラテン語のシンボラス(symbolus)は、割符の意味である。

- 10) アメリカの応用数学者・電気工学者であるウィーナー(Norbert Wiener,1894~1964)の生み出した概念。語源は「舵手」の意のギリシャ語に由来する。ウィーナーは1930年頃から神経生理学と共同研究に従事し、計算機械も生物における神経系も同じ構造をもつことを認め、その数学的論理としてのサイバネティックスを創始する。それは通信・自動制御などの工学的問題から、統計力学・神経系統や脳の生理作用までを統一的に処理することに関連している。ウィーナー『サイバネティックス』(1948)。
- 11) 物事の条理。物事の正しい順序・筋道。

## 第10章 人間的条件のパラダイムについての検討—その2—

### 第1節 はじめに

本章では、人間的条件のメタ理論すなわち理論をさらに分析対象とし、その構造を解明していく理論について究明していきたい。人間的条件システムの構造的関係ばかりではなく、ダイナミック(動的)な関係あるいはプロセス的(過程的)関係についての検討が主になっている。

### 第2節 メタ理論の枠組 [I]

#### (1) 行為システムと他の3つのシステムとの関連

行為システムと他の3つのシステムとの関連をどのように考えていったらよいかについて、パーソンズは有機体システム(G)と物理的—化学的システム(A)との関係、物理的—化学的システム(A)とテリック・システム(L)との関係、有機体システム(G)とテリック・システム(L)との関係についてまず考えている。すなわち行為システム以外の他の3つのシステム相互の関連について検討している。

彼は一般行為システム<sup>1)</sup>の枠組においては、シンボリックなもとして関係のメカニズムを扱ってきたが、人間的条件のシステムになると、必ずしも全てのシステムにシンボリックな関係を認めているわけではない。

パーソンズは、人間的条件システムにおいては行為システムの中にだけシンボル性を認めている。彼によれば世界に対する人間の「志向」(orientation)は、人間行為者にとってシンボリックに理解することのできる意味をもつ実在性(entities)から構成されており、このような実在物を「客体」(objects)と呼ぶにふさわしいとなる。すなわち、行為する主体—客体関係の客体には、シンボリックに理解可能な実在物があり、人間の志向を反映していると理解できる。

西洋思想の歴史の中で、このような関係は通常「認知的」(cognitive)とよばれてきた。つまり、知る主体と知られる客体との関係であり、このことの古典的な学説は、デカルト<sup>2)</sup>によってなされた、としている。デカルトは『方法序説』の中で「コギト—エルゴ—スム」(われ思う、ゆえにわれあり。Cogito, ergo sum(ラテン))と述べ、あらゆることを懷疑したあげく、意識の内容は疑いえても意識するわれの存在は疑いえないという結論に到達し、これを第一原理として、確実な認識の出発点とした。西洋の認識論における最大の論争は、デカルトがよんだような「外部世界」の知識に対して、何がどのように貢献するかという問題についておこなわれたという。

経験主義者<sup>3)</sup>たちは、認識を感覚的経験から生ずるとして、主体の外側からの貢献を強調した。しかし、カントは『純粹理性批判』(1781)の中で、認識について「理解のカテゴリー

(範疇)から感覚データ(sense data)を組み合わせているものとして考えねばならないと主張している。そして、パーソンズは認識についてカントの学説を支持している。

カントは我々の認識の源泉は、感性と悟性と理性であるとしている。「感性」は「直観」の能力であり、時間と空間という形式をもつ。「直観」とは、カントの場合には見たり聞いたりする感覚的な直接知を意味する。「悟性」はドイツ語の「Verstand」の訳で、「理解する力」「常識」を意味する。その純粋な形式は、カントが「カテゴリー」とよぶ判断の論理的形式である。「理性」は、より高次の悟性の判断を総合的に関係づける推理の能力である。カントの場合、推理といえば、ほとんど三段論法をさしている。

次に、アプリオリ(a priori)な認識とアポステリオリ(a posteriori)な認識の区別を押さえておく必要がある。アポステリオリな(a posteriori=「より後のものからの」)認識とは、経験に依存する認識である。これに対しアプリオリな(a priori=「より先のものからの」)認識とは、我々の「経験」に依存しない、従って普遍的な知識を意味する。

経験的知識に対するカントの見方は、それがシンボリック(象徴的)であろうとなかろうと、主体と客体の間で二方向の関係の形式的要件に対応している。パーソンズは、人間行為者と行為システムの外側の世界(行為システムの内側の客体と同じように)の間の関係様式としてとらえるカントの知識についての考慮を採用している。そしてパーソンズは、人間行為者が知識を獲得するうえで最も決定的な人間行為システムの特質に、言語の所有をあげている。

パーソンズは言語の特徴について、それ自体知識の一つの形態というのではなく、言語を通して知識が獲得され客体とコミュニケーションを行ない、客体について対話しあうメディア(媒体)であるとしている(Parsons 1978:368)。すなわち、人間行為者は言語の使用によって認識的な情報が得られ、客体にコミュニケーション(伝達)しうるというのである。しかし、彼は言語を一般化されたシンボリック・メディアではないとして、人間的次元のメディアにおいてコードの位置においている。

## (2) 言語についての考察

ここで、言語を一般化されたシンボリック・メディアとしてとらえていないことについて考察してみよう。

パーソンズは、言語をコミュニケーションや、さらには社会的統合にとって、最も一般的かつ基礎的なメカニズムであるとみている。言語の主要な機能に表現(expression)とコミュニケーションをあげ、コミュニケーションの機能の方が表現の機能より重要であるとしている。そしてコミュニケーションは主として社会システムにおける機能であり、表現はシステムとしてのパーソナリティの機能であるとしている(Parsons 1961,丸山訳 1991:38)。

パーソンズは言語を貨幣と比較することによって、言語にあてはまる特質を浮かび上がらせている。貨幣がもつ交換の媒体としての機能と、価値尺度としての機能との区別は、言語においては、メッセージとしての機能と、コードとしての機能との区別に対応させている。

パーソンズは、貨幣を用いると4つの自由度が考えられるとしている。第一に、貨幣の受

け取り手は、その同じ時点で特定の商品やサービスのためにそれを使うべく拘束されない。第二に、特定の供給者から商品やサービスを入手しなくてもよい。つまり、自由にいろいろなところで買い物ができるのである。第三に、特定の時点や一定期間内にお金を使う必要はない。使う時期を遅らせるのは自由である。第四に、前もって特定の取引条件を受け入れなくてもよい。つまり、個別の状況やその時々<sup>の</sup>事情に応じて条件を設定することができるのである。以上の4つをあげている。

上述の比較を言語にあてはめてみると、言語的記号によるコミュニケーションと前言語的コミュニケーションとの比較になる。言語シンボルを用いなくても、本当の重要なコミュニケーションをすることはできる。しかし、もし意味を伝達する行為が標準化されたコードの枠内にあるのではなくて、特定の文脈での特殊な行動的、具体的な特性に応じて、その場その場で解釈されねばならないとしたら、言語によってもたらされるような自由度は存在しないだろうとパーソンズは述べている(同前:45-46)。

また、言語学者が「辞書的(lexical)」水準と呼んでいるものについての問題に、彼は次の四つをあげている。第一に、自己の言語レパートリーの一部として、このような辞書的シンボルをもっているからといって、話者は単語や語句の唯一の決まりきった用い方をすることにはならない。第二に、辞書的レパートリーの要素は数限りない相手から、すなわち、潜在的には、その言語の使用者すべてから反応をひき出すことができる。第三に、この辞書的レパートリーの使用は、時間的な限定を受けない。話者は自由に話す時を選ぶことができる。第四に、会話は一種の相互調整の過程であって、そこでは両当事者に共通の標準化された言語的用具が特殊なメッセージを伝えて個別具体的な理解を得るといふ、きわめて特殊化された目標にもあうように使用され得るのである。標準化されたレパートリーと、特殊目的へのレパートリーの柔軟な適応性という二つの面の結合のおかげで、言語は前言語的記号によるコミュニケーションではとうてい到達不可能であるような自由度を獲得するのである(同前:46-47)。

以上のことから、パーソンズは言語について特定の文脈で、個別の立場に応じてのみ解釈されねばならないとしたら自由度は存在しない、標準化されたレパートリーと特殊目的へのレパートリーの適応が組み合わさってはじめて自由度を得るといふ。このことを考察してみると、言語においては標準化された意味が、行為者同士のコミュニケーションにおいて、同じ意味をもってやりとりされる場合と、異なる意味をおびてやりとりされる場合とがあるように思われる。なぜなら、行為当事者のみにしか通用しない言語もあると思われるからであり、言語のやりとり、対話においても、感情が作用して行為者同士で言語の意味の受けとめ方、解釈に差が生ずることも多分にあると思われるからである。それゆえ、言語については自由度がある場合とない場合があると考えられる。

またパーソンズは、言語における語法(phraseology)が社会システムにおける価値に相当しているように、言語における統語論的水準は、社会システムに制度化された規範に相当しており、さらにまた配分の規準としての貨幣に相当していると述べている(同前:50)。これ

を表にすると次のようになる(表1)。

表1 社会システムと言語

社会システム	言語
価値	語法 統語論的水準
規範	
貨幣	

次に言語と文化の関わりについてみてみよう。

パーソンズは文化システムの諸次元の要素を、コントロールのハイアラーキー、外的—内の軸、手段的—成就的軸の三つの主要な方法で分析しているが、これを言語にも適用している。彼は、言語が意味(meaning)という範疇のもとで意味論的なシステムとして理解されるならば、上記の文化の分析方法に言語を全般的に対応させることができるとしている。コントロールのハイアラーキーについて、言語学者であるヤコブソンとハレの例を用いて、言語の形態素としての要素、語彙的要素、統語的要素そして語法的要素が、順次、より低次の水準からより高次の水準へと移行するハイアラーキーを成すとし、四つの機能的範疇[適応、目標達成、統合、パターン維持]にほぼ正確に対応しているとしている。

音韻論の分野においても同様のハイアラーキーが存在しているとして、デル・W・ハイムズ博士の例をあげ、低次から高次なものへと順に音、音素、音節、抑揚型(intonation patterns)という諸範疇の区別を採用している。ひとかたまりのパターンが、メッセージの要素を担っているという点で、形態素は音声システムと意味システムとを結ぶ主要な接合点となっているとパーソンズは述べている。

表2 言語についてのコントロール・ハイアラーキー  
 <ヤコブソンとハレ、ハイムズによる>

	意味論	音韻論
A	形態素としての要素	音
G	語彙的要素	音素
I	統語的要素	音節
L	語法的要素	抑揚型 (イントネーション・パターン)



さらにヤコブソンとハレは、それぞれ言語システムの組織化における二つの異なった側面の区別を強調しているとしている。ヤコブソンとハレは、次のような三組の対をなす用語を用いてこの区別をあらわしている。すなわち近接性(contiguity)－類似性(similarity)、結合(combination)－選択(selection)、そして換喩(metonymy)－隠喩(metaphor)という三組である。パーソンズは、近接性、結合、換喩とよんでいる組織化の軸は、外的－内的軸と非常に類似しており、類似性、選択、隠喩という軸は、手段的－成就的という軸と対応しているとみなしている。

前者の「外的－内的軸」との対応関係は、上位のコード(内的)によって、具体的な語(外的)が結合され、組織化されるという意味にパーソンズは解釈している。後者の「手段的－成就的軸」との対応関係は、メッセージの目的(成就)に合わせて、その資源である類似の意味をもつ語(手段)が選択されるという意味にとることができる、パーソンズは解釈している。

このことはヤコブソンとハレが、語はそれが用いられている「文脈」によって、より正確な意味を引出すのであると述べていることに関係している(同前:51-52)。

パーソンズは、これまでに言語を文化システムの原型とみなして考察してきているが、その際に用いた枠組みによって、シンボルの概念を検討している。まずシンボルという用語は、客体として扱われたり、「意味」のカテゴリーとして扱われたりして、曖昧に用いられてきたという。ここでパーソンズは専門用語としてのシンボル概念を、客体のカテゴリーに限定して用い、志向型のカテゴリーを指すためには用いていない。シンボルは、文化システム内のその位置によって正確に識別されるところの、きわめて特殊な部類の客体として扱われるべきであるとされている。それは、シンボルを生み出す前提としての意味システム内で一般性の特定最小限レベルの意味をともなした客体であるとされている。シンボルの意味が一般化されているがために、シンボルが特殊な文脈に限定されることから免れているという。

この観点にてらすと、言語の形態素や語彙的要素は、シンボルのシステムを構成するが統語的要素や語法的要素はそうではない、とパーソンズは主張している。

ある意味で客体のシンボルとしての地位は、その意味が客体自体の属性に基づく固有の意味から分離しているかどうか、ということにかかっているという。デュルケームが述べているように、シンボルの意味は客体のもつ固有の意味にさらに付加されたものでなければならない、としている。たとえばシンボルとしての「父親」は、単に現実の父親と機能的に等価であるというのではなく、経験的な社会的範疇としての父子関係と比較して、その関係に特徴的でないものを表しているからこそ、一個のシンボルといえる。その相違点は、一般性の水準による違いである。行為理論の観点からすれば、現実の父子関係に見られる個別主義に対して、「父親像」のもつ意味は普遍主義的である。父親像は主体と個別的な関係にある必要はない。「父なる神」というシンボルは、「父親」という語をシンボルとして用いた原型的な事例である。神と現実親族関係をもつことは不可能であるが、この関係のシンボル化が必要になり、またそれが意味をもつようになるのであるとパーソンズはいう。

行為システムにおける言語の位置は、とくに文化と社会システムとの関係のうちにある。

ここで中心となる事柄は、言語は人間のコミュニケーションを媒介する最も一般化されたメカニズムである、ということである。文化システムは、社会システムに経験的知識を組織するためのより所となる文化的パターンをアウトプットし、社会成員の思考様式やコミュニケーション様式を社会システムからインプットする。言語は、この交換過程を媒介する基本的なメカニズムであるとしている。言語のもつパターン構造、つまり言語の志向的要素は主に文化的な働きであり、一方、言語シンボルの意味すなわち語彙的要素や音韻的要素は、主に社会的な働きであるとしている。

さらに社会—文化史の面で言語の果たす役割に、言語学習と子供の社会化との関係を上げている。

パーソンズは、言語を意味論と音韻論の面から分析的にとらえ、一般化されたシンボリックなものとして把握することができるかどうかを検討している。その結果意味論の面からの形態素としての要素、語彙的要素はシンボルのシステムを構成するが、統語的要素、語法的要素はシンボルのシステムを構成しない、としている。それは、前者二つはシンボルとしての意味を一般化することができるが、後者二つはシンボルとしての意味を一般化することができないと解釈することができる(表2)。

パーソンズの一般化されたシンボリック・メディアには、彼独自の考え方、基準があるように思われる。それは、シンボリック性(象徴性)をもつメディアが普遍性をもつか否か、すなわち一般性をもつか否かを問うていると考えられる。言語の場合、意味論の側面で必ずしも一般性をもつとは限らないと、パーソンズは判断したと思われる。なるほど、私たちの日常生活において、言語はコミュニケーションの手段であるが、時、場所、状況によってそのもつ意味は一義的とは限らない。音韻論の抑揚(イントネーション)の面からも、その時の状況によって言語のもつ意味は異なってくると思われる。

言語の自由度についても、自由度がある場合とない場合がある。それゆえ、パーソンズは言語を自由度と普遍性という点から、シンボリック・メディアには入れないで、シンボリック意味メディアのコードに位置づけたのは、妥当のように考えられる。

カッシーラー<sup>4)</sup>は、人間を理性的動物(animal rationale)と定義する代わりに、象徴的動物(animal symbolicum)と定義し、シンボル(象徴)を操るものとしている。人間は、ただ物理的宇宙ではなく、シンボルの宇宙に住んでいるとし、そのシンボルに言語、神話、芸術、宗教をあげている。言語については、しばしば理性または理性の源泉そのものと同一視されてきたが、この定義が全領域を覆いえるものではないと述べている。言語は全体の代りに部分を示しているとし、その理由として、概念的言語と並んで情動的言語があり、論理的または科学的言語と並んで、詩的想像の言語があることをあげている。そして一次的には、言語は思想または観念を表現せず、感情および愛情を表現するものであると述べている(Cassirer 1944, 宮城訳 1953, 1982:35-37)。

カッシーラーは、人間性を理解する鍵としてシンボル(象徴)をとらえ、上記のシンボルはそれぞれの網を織るさまざまな糸であり、人間経験のもつれた糸であるとしている。あらゆ

る人間の思想および経験の進歩は、これらのシンボルの網を洗練し強化すると延べ上記 4 つの他に、シンボル形式をとるものとして歴史、科学もあげている。

彼は神話、宗教の領域の検討から言語の領域に移り、言語さえも人間文化の最も固定的で保守的な力の 1 つであるとしている。しかし、この保守性がないならば、言語はその主要な任務であるコミュニケーションを完遂することはできないだろう、と述べている。言語的シンボルおよび言語形式は、言語を崩壊させ破壊させる時間的影響に抵抗するために、固定性と統一性を持たねばならない。それにもかかわらず、音声学的变化および意味論的变化は、言語の発達中に含まれた必然的条件であるとしている。この持続的变化の主な理由の一つに、言語が一世代から別の世代に伝達されねばならないという事実を、カッシーラーはあげている。そして言語獲得の過程は、つねに積極的で生産的な態度を含んでいるとしている(同前:325)。

カッシーラーは、シンボル形式をとるものとして言語、宗教、神話、芸術を同列にとらえており、言語の主要な役割にコミュニケーションをあげている。ここにおいて、言語はシンボル形式をとるものであり、人と人とのコミュニケーションの媒介をなしているという意味でメディアであるといえる。

パーソンズは、あくまでも行為理論の枠組みで言語をとらえ、言語が行為に与える影響、言語のもつ普遍性を問題にしている。言語をとらえる視点が、カッシーラーとはやや異なっているといえよう。パーソンズは、メディアに主軸をおいて言語をとらえ、カッシーラーは、シンボル形式に主軸をおいて言語をとらえているように思われる。そして、パーソンズの行為理論の中で、言語と宗教は同列ではなく、宗教の方が言語よりも上位に置かれている。そこには、パーソンズの生き方が深く反映されているといえる。

### (3) 認識的志向様式とフロイト

認識的志向様式は、文化的な現象科学としてその公式の地位を獲得した。それは、17 世紀、18 世紀の偉大な認識論すべてに典型的である。そして認識以外の志向様式は、非物理的な客体に関係して比較的により重要な役割を演じている。

認識的志向様式、認識以外の志向様式について、パーソンズはフロイトの説を支持しており、その中でもカセクシス(cathexis)を使用することが適当であると述べている。フロイトが『自我とイド』(1923)の中で「客体」(object)という言葉を用いていることが重要で、この文脈で客体は明らかに認識的意味から区別されたものとして、情緒(emotional)あるいは感情(affective)と関係しているとパーソンズは指摘している。フロイトは、人間の集合体や非人間的客体を除外してはいないけれども、心の中に人間個人を描いていた。

人間個人における主体—客体関係が、認識的な場合におけるのと同じ構造をもっていることが重要である、とパーソンズは述べている。すなわち主体—客体関係において、一方的で

はなく、二方向の関係があるというのがそれである。客体にカセクトする(心的エネルギーをふり向ける)時、人間行為者は客体から何かを受けとり、そして客体に何かを与えている。これらの構成要素の両方とも、行為という観点から言語学上の意味をもっている。行為者と客体は、認識的構成要素とカセクティックな構成要素の両方をもっている。すなわち、行為者は理性と感情を持っているということができる。

さらに、パーソンズは行為者のカセクティックな関係のなかには、有機体にある優先性があるという。フロイトの主張している「エネルギー」は、カセクシスを確立して維持し、その中で使用されているというのである。つまり「リビドー」<sup>5)</sup>(libido)は、有機体の中にその主要な源泉をもっており、とりわけ性感帯の中に有機体の確かな特徴をもっている、そして、カセクシスのために客体を構築するうえで、シンボリックな意味を獲得している、としている。認識と物理的なものとの関係に並行して、カセクシスと有機体との関係にシンボルに関して優先性がある、とパーソンズは主張している。すなわち、客体の構造の中にカセクシスをおこす主要な源泉をリビドーがもっているというのである。

ここで注意しなければならないのは、リビドーはフロイトの欲動<sup>6)</sup>論であって、本能論ではないということである。本能<sup>7)</sup>とは **Trieb**(欲動)の拙い訳である。パーソンズによれば、リビドーは本能というよりも、精神、パーソナリティにおける組み合わせ的な現象で複合体である。リビドーを有機体エネルギー形態ととらえるべきではなく、有機体からのエネルギーの一構成要素であるというのである。

ここにおいて、リビドーは性に関して人の心や感覚をつきうごかす内在的な力であるが生得的というだけではなく、学習によってある程度抑制できるものと理解することができる。

### 第3節 メタ理論の枠組み [II]

#### (1) テリック・システムに関する考察

テリック・システムに対する行為者の関係をカテゴリー化するという問題は、物理的-化学的システムや人間有機体システムに対する関係とは、何か異なった次元の秩序の問題であるとパーソンズは述べている。しかし行為システムから、これら3つのシステムへの関係の特徴として、第一にシンボリック・レベルで構成している意味の形をとるということあげている。シンボリック・レベルというのは、言語学上の用語であるが、それによって原則として定式化可能で伝達可能であるとしている。この意味でテリック・システムに存する「超越的な」実体は、たとえば神のようにシンボル化されるけれども、それは「自然の力」の人格化でもなく、そのような実体の「真実の」性質を示すものでもない。また、そのような主体-客体関係は、現実とシンボルを通じた世界という構造の二元性を維持し

ているとみなし、テリック・システムの場合には次元が逆転して、シンボルを通した世界が重視されるべきであるとパーソンズはみている。典型的な例として、カントの理解のカテゴリー<sup>8)</sup>をあげている。

カントは経験的な知識と比較して、それらの立場を特徴づけるために「超越的」(transcendental)という用語を使用している。カントのような哲学者は、そのようなカテゴリーの必要性和役割を理解するようになるが、しかし彼がカテゴリーを「決定する」というのではない。感覚データが「外部世界」から生じるのと並行した意味で、カテゴリーは「外側」から人間の知識に到達する。それゆえカントのような人間行為者は、感覚データ<sup>9)</sup>とカテゴリーを結ぶ一種の中間人であり、「結合者」であると、パーソンズは述べている(Parsons1978:370)。

ここでパーソンズは、認識論的な事例から他の事例へとカテゴリーを一般化することを試みている。一般的な命題は、人間の各々の志向<sup>10)</sup>様式にとって「条件」(condition)あるいは「仮説」(assumption)に関して、メタレベルがあるということを彼は主張している。ここで「条件」あるいは「仮説」は、志向にとって意味があり「感覚をなす」ために必要なものである。パーソンズは、このことをカントの『純粋理性<sup>11)</sup>批判』に続く『実践理性<sup>12)</sup>批判』『判断力<sup>13)</sup>批判』の二つの批判書の中に見出している。

感覚データ(感覚情報)が経験的認識の中にあるのと同様に、その他の2つの分野においても人間の経験が利用可能あるいは与えられていると仮定して、カントは他の各々にとっての超越論的な構成要素を明らかにしたり、定義することを追求した。

その2つの領域のなかで最もなじみのあるものは「実践理性」の領域であり、これは我々が通常、道徳と考えている領域であるとされている。この領域についてパーソンズは、自身のパラダイムの用語で人間行為者の間で意味のある関係の領域であるとし、換言すれば一般行為システムの一部であるとしている。

認識的領域における理解のカテゴリーの評価を、カントは彼の有名な定言的命法<sup>14)</sup>の中に見出している。これをパーソンズは、ある意味においてキリスト教の黄金律<sup>15)</sup>の現代化されたものと解釈することができるとしている。

カントの「実践理性」とは道徳的領域であるが、それについてパーソンズは、一般行為システムの文化領域の道徳評価的シンボル化(i)に該当すると見ている。そしてカントの道徳的命法の中に理解のカテゴリーがあるとみて、このことはキリスト教の黄金律に共通するものとパーソンズはとらえている。

パーソンズの一般行為システムの文化システムは、認識的シンボル化(a)、表現的シンボル化(g)、道徳評価的シンボル化(i)、構成的シンボル化(I)に分割されているが、それはカントの『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』の中で主張されていることと、うまくあてはまっている(図1,表3)。

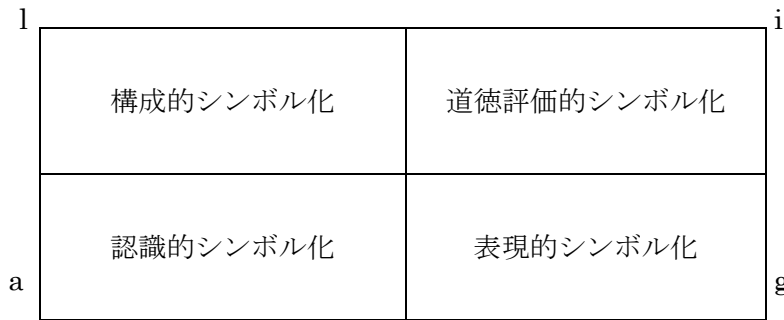


図 1 文化システム

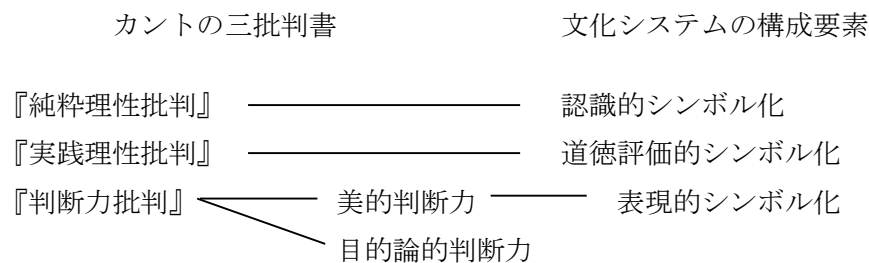


表 3 三批判書と文化システムの対応

カントの「実践理性」は道徳に関係する領域であるが、パーソンズはこれを一般行為システムのなかで中心的な重要性を持っているとし、人間的レベルにおいて社会秩序の最も基本的に横たわっている前提あるいは仮説の焦点になっていると述べている(同前:370)。

これは道徳問題のデータ(資料)としてではなく、そのようなデータを秩序づけている超越的規範的な条件として、明確に規定されるべきであるとしている。カントの道徳的要素についての哲学的立場は、近代社会の道徳的要素についてのデュルケームとウェーバー両方の扱いのなかに、明らかに横たわっているとしている。

つぎに『判断力批判』においてカントが美的判断の領域とよんだものを扱っているが、パーソンズはこの領域を文化システムの目標達成細胞(G)に関係づけている。それは人間の身体そのものを含む人間の志向に関して、とりわけ重要な位置を示している。『判断力批判』は、もう一方で「生と死」や「快樂」の多様さという目的論的な側面を含んでいる。パーソンズは、『判断力批判』にカントのいうように美的判断力と目的論的判断力を認めてはいるが、ここでの目的論的判断力は、あくまで(G)に位置づけ(L)には位置づけていない。

そして、パーソンズはカントが特別な批判を向けなかった領域として、超越的秩序という四番目の(L)領域をあげている。カントはこの領域に関して積極的に何かを言うという危険に身をさらすのではなく、神の存在の証明には否定的であるということに終始していた、

とパーソンズはみている。カントは、神は存在しないというのではなく、神の存在を証明することは不可能であることを主張している。カントは、後に『実践理性批判』のなかで実践の立場から神の存在を要請し、さらに『判断力批判』のなかで、自然の合目的性について、肯定的に論じている。すなわち、学問的には神の存在を証明することは不可能だが、もし神が存在しなければ、我々の正しい行動も秩序ある認識も根拠を失なう、だから神は存在するはずであるという立場をとっている。

パーソンズは、人間的条件のパラダイムにおいて、このL領域は潜在的な性質をもつ、すなわち超越的秩序の側面をもつとして、他の3つの領域とは明らかに異なるとしている。そしてデュルケームやウェーバーの研究、フロイトの研究は、人間の行為システムにおいて宗教の重要性を明示している、とパーソンズは指摘している(同前:371)。

パーソンズは、人間的条件のL領域にロバート・N・ベラーの提案を引用している。ベラーは宗教的シンボルが「何ものかを象徴している」すなわち、人間的条件のなかの経験的に知り得る客体である指示対象をもっているに違いない、と主張している 19世紀末の不可知論<sup>16)</sup>の考え方に異議をとなえた。この例として、神は「社会」をシンボル化しているというデュルケームの主張をあげている。ベラーは、ここで「シンボリック・リアリズム」(symbolic realism, 象徴的現実主義)という考えを提案している。ベラーによるシンボルの意味は、シンボルの外部で関係している客体のなかでその意味を見出されるというよりも、むしろシンボルそのもののなかに「内在している」として考えられるべきであると、パーソンズはいう。

シンボリック・リアリズムというベラーの考えは、シンボルの一つの構成要素、つまりカントの意味で超越的構成要素ではなく「特殊化された」構成要素に適用されるべきであるとしている。

パーソンズは、異なったレベルでシンボルに2つの構成要素があることを主張している。そして宗教的シンボルの「特殊化された」構成要素とよんでいるものは、カテゴリーに対してではなく、経験的知識の感覚データに比較することができるとしている(同前:372)。これは深層構造にではなく、言語発言の場合、音声に、遺伝子型にではなく、有機体の表現型に、そして人間社会の制度的パターンにではなく、利害構造に比較することができるとしている。

ここで、パーソンズは人間的条件システムのL体系、すなわちテリック・システムにおいてはベラーの宗教的シンボルの考えを援用し、その「特殊化された」構成要素は二つあり異なったレベルにあるとしている。それは、言語を発生する場合の音声部分に、有機体の表現型に関係するとしている。

## (2) 物理的—化学的システム、有機体システム、テリック・システムの3つの相互関係

次に人間的条件システムのうち、シンボリックな意味を含んでいない物理的—化学的システム、有機体システム、テリック・システムの3つの相互関係についてみていこう。パ

パーソンズは、人間中心の観点から行為システムにシンボリックな意味を与えているが、しかし客体(対象)に対して、このレベルで意味の理解とコミュニケーションをうけ負わそうとはしていない。彼は客体が何であるかを解釈しようとはしていないし、ウェーバーのよんだ「主体的観点」から解釈を試みているのでもない(同前:372)。

パーソンズの図式を考えると、行為システムのレベルまではシンボリック性は含まれていなかった。さらに大きな人間的条件のレベルになると、シンボリック性が出てきて、それが大きな意味をもつようになる。しかし、シンボルを通して客体の意味を解釈しようとしているのではない。ではシンボルをもち出すことによって、彼は何を言いたかったのであろうか。人間の身体と精神を繋いで行為へとかりたてるものとしてシンボルに思い至り、その志向は超越的なものへと向かっていく。パーソンズは、シンボルをあくまでも人間の行為の導き手として捉えているように考えられる。

#### [1] 物理的-化学的システム(A)と有機体システム(G)の関係

この二つのシステムの相互交換は、お互いに双方向的である。有機体は、物理的な環境との交換に関して「オープン」システムであると通常公式化されている。とくに高等な有機体は皮膚や肺を通して熱が連続的に産出され、これは内部での酸化によって均衡を保っている。酸素は空気から摂取され、二酸化炭素が環境に排出される。栄養物質が環境から摂取され、老廃物が環境にもどっていく。同様のことは植物についてもいえる(同前:373)。つまり植物は空気から二酸化炭素を摂取し、酸素を環境に排出している。このように動物、植物という生物にとって、酸素と二酸化炭素は循環している。

パーソンズは、物理的-化学的システム(A)と有機体システム(G)との相互関係において、A→Gではヘンダーソンの「環境への適合」をあてはめ、環境は生命システムの機能にとって、任意の仕方では単なる「条件」ではない、と主張している。生命有機体(living organism)の内部的な部分に、一組の物理的-化学的構成要素が存在している。パーソンズは生命を物理的世界の有機体の一様式としてとらえており、物理的構成要素のあらゆる組み合わせが、さまざまな生命有機体にひとしく好都合であるわけではないとしている。それゆえ、人間行為の観点から有機体と物理的関係には多様な意味があると彼は主張している(同前:373)。

パーソンズは人間を生命有機体ととらえており、そこには生命学の視点も入っている。人間の身体は、物理的-化学的には酸素(O)、窒素(N)、炭素(C)等の元素という自然界の構成物質から成っている。人間有機体システム(G)から物理的-化学的システム(A)に向かっては「適応能力」が、反対に(A)から(G)に向かってはヘンダーソンのいう「環境への適合」があてはめられている。ここにおいて人間有機体は、環境や環境問題と結びついていく。

#### [2] テリック・システム(L)と物理的-化学的システム(A)の関係

テリック・システム(L)と物理的-化学的システム(A)の二つは、行為システムの外側にあり、この二つの関係は、人間にとって“宇宙論的”問題としてしばしば語られるものの根



拠を含んでいる。例えば、物理学の分野においてはコペルニクス<sup>17)</sup>やニュートン<sup>18)</sup>のみた最も広い夢をこえて拡大されているものと現在理解されており、今日天文学についての知識の巨大な発展へとつながっている。他方、テリック分野においては、死の意味についての例をあげることができる。フロイトを含む様々な人々は、生命有機体の死を無生物(無機物)の状態、すなわち物理的な状態への同化—ある意味で「復帰」—として定義した。この現象から明らかに、人間の意味はある宇宙論的な問題と同じように、科学的な意味ばかりではなく、宗教的な意味をもっているとパーソンズは述べている(同前:373)。ここにおいて、有機体の生命物質基礎をなす物理的—化学的システムの領域は、宇宙の問題すなわち自然と結びつき、行為の意味の根拠をなすテリックの領域は、人間の死の問題と密接なつながりが生じ、宗教的な意味と結びついていることをパーソンズは主張しているといえる。

物理的—化学的システム(A)からテリック・システムへ向いた矢印には、「自然の秩序」が当てられ、(L)から(A)へ向いた矢印には「自然への理解」が当てられている。(A)から(L)へ、(L)から(A)への共通のキー・ワードは自然であり、人間の身体の粒子、精神の究極的なものは、人類を超越したもの、すなわち神によって創造されたものであることをパーソンズは示唆している。

### [3] テリック・システム(L)と人間有機体システム(G)の関係

行為を直接に含まない三番目に関係しているカテゴリーに、パーソンズはテリック・システム(L)と人間有機体システム(G)をあげている。ここには、ある意味で「生命についての諸事実」(facts of life)を含んでいる。つまり、有機体としての人間についての諸事実を含んでいるということであり、それらは生と死、人間の生殖、そして年齢や性による人間の相違等を含んでいることをさしている。生命に関するこれらの諸事実についての科学的知識は、行為システムの外側からの、すなわち「データ」(資料)や認識的カテゴリーの両方からのインプットに頼らなければならないとしている。

同様に生命の諸事実に関する宗教的な意味は、人間の経験や人間的条件やその成りゆきの宗教的意味がもつ本質的構造にもとづいているに違いない、とパーソンズは主張している。

ここにおける宗教的意味の最も重要なカテゴリーに、認識的意味や宗教的意味ではなく、理性に対する「感情」(feeling)として言及している志向の次元(dimension of orientation)をあげている。そして、このことは行為を引きおこす「感情」(affect)概念の利用をなすことにふさわしい地点であるとしている(同前:374)。

つまり、宗教的意味のカテゴリーはシステムとしての人間的条件の構造においてはL体系に位置し、行為をひきおこす感情と結びついていく。

さらにこのカテゴリーについて、「快樂」と「苦痛」に分けるよりも、より適切な二分法として「幸福感—不幸感」(euphoric-disphoric)を彼は提唱している。これは「判断」(judgment)に関するカントの戒律に関係した主要な分野であるとしている。「判断」という語について、

カントは後にフロイトによってもちいられた言葉—快楽(Lust)—をも使用しているけれども、「美的」(esthetic)という形容詞によって特徴づけようとした(同前:374)。

結局、宗教的意味のカテゴリーは具体的なものではなく、抽象的なものを含んで分析的であることをパーソンズは強調している。

#### 第4節 結び

以下の項目について、概要を述べて結びにかえたい。

<メタ理論の枠組み[ I ]について>

##### (1) 行為システムと他の3つのシステムとの関連

パーソンズは人間的条件システムにおいては、行為システムにだけシンボル性を認めている。パーソンズによれば、人間の志向(orientation)は人間行為者にとってシンボリックに理解することのできる意味をもつ実在性(entities)から構成されており、このような実在物を「客体」と呼ぶにふさわしいとなる。このような関係は、西洋思想史の中で通常「認識的」(cognitive)と呼ばれてきた。パーソンズは、認識について「理解のカテゴリーから感覚データを組み合わせているものとして考えねばならない」(『純粋理性批判』1781)と主張する、カントの学説を支持している。

##### (2) 言語についての考察

また、パーソンズは言語を一般化されたシンボリック・メディアとして捉えていない。パーソンズは言語をコミュニケーションや社会統合にとってもっとも一般的で基礎的なメカニズムであるとみている。言語の主要な機能に表現とコミュニケーションをあげ、コミュニケーションの機能の方が表現の機能より重要であるとしている。パーソンズは言語を自由度と普遍性という点から検討して、一般化されたシンボリック・メディアには入れないで、シンボリックな意味メディアのコードに位置づけている。

##### (3) 認識的志向様式とフロイト

認識的志向様式、認識以外の志向様式について、パーソンズはフロイトのカセクシス(cathexis)を使用することが適当であると述べている。行為において主体と客体の両方とも認識とカセクシスという両方の構成要素をもっている。パーソンズは、カセクシスと有機体との関係にシンボルに関して優位性があると主張している。すなわち、客体構造の中にカセクシスを起こす主要な源泉をリビドー(libido)がもっているというのである。パーソンズによれば、リビドーは本能というよりも精神、パーソナリティにおける組み合わせ的な現象で複合体であるという。リビドーは、有機体からのエネルギーの一構成要素であるというのである。

<メタ理論の枠組み[Ⅱ]について>

(1) テリック・システムとカント

パーソンズの一般行為システムの文化システムは、認識的シンボル化(a)、表現的シンボル化(g)、道徳評価的シンボル化(i)、構成的シンボル化(l)に分割されているが、それはカントの『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』の中で主張されていることに適合している。カントの『実践理性批判』は道徳に関する領域であるが、パーソンズは道徳を一般行為システムの中で中心的な重要性をもっているとして、人間のレベルにおいて社会秩序のもっとも基本的に横たわっている前提ないし仮説の焦点になっていると捉えている。そしてカントの道徳的要素についての哲学的立場は、デュルケームとウェーバーの道徳の捉えかたにも横たわっているとパーソンズは主張している。

パーソンズは『判断力批判』にはカントのいうように美的判断力と目的論的判断力を認めているが、人間的条件の文化システムでは表現的シンボル化に該当するものとしている。そしてパーソンズは、カントが批判を向けなかった領域にテリック・システム(L)の領域をあげ、ここには構成的シンボル化(constitutive symbolization)をあげている。超越的秩序という面をもつ L 領域に関して、カントは神の存在を証明することは不可能だが、もし神が存在しなければ正しい行動や秩序ある認識は根拠を失う、それゆえ神は存在するはずであると言う。パーソンズは、人間的条件のパラダイムにおいて L 領域は超越的秩序の側面をもち、他の 3 つの領域とは明らかに異なるとしている。そしてデュルケーム、ウェーバー、フロイトの研究は、人間の行為システムにおいて宗教の重要性を明示しているとパーソンズは主張している。

(2) 物理的—化学的システム、有機体システム、テリック・システムの 3 つの相互関係

物理的—化学的システム(A)と有機体システム(G)の関係について。パーソンズは人間を生命有機体と捉えており、そこには生命学の視点も入っている。人間の身体は酸素(O)窒素(N)水素(H)炭素(C)等の構成物質から成り立っている。人間有機体システム(G)から物理的—化学的システム(A)に向かっては「適応能力」が、反対に A から G に向かってはヘンダーソンのいう「環境への適合」があてはめられている。ここにおいて、人間有機体は環境や環境問題と結びついていく。

テリック・システム(L)と物理的—化学的システム(A)の関係について。物理的—化学的システム(A)からテリック・システム(L)へ向いた矢印には、「自然の秩序」があてられ、L から A への矢印には「自然への理解」があてられている。A と L の相互浸透の領域では、自然が重要な位置を占めている。人間の身体を構成している元素、精神の究極的なものは人類を超越したもの、神によって創造されたものであることをパーソンズは示唆している。

テリック・システム(L)と人間有機体システム(G)の関係について。テリック・システム(L)から人間有機体システム(G)には「審美的判断のカテゴリー」がおかれ、反対に G から L には「動機づけの有機的構成要素のパターン」がおかれている。人間有機体システム(G)は有

機体としての人間についての諸事実を含んでおり、それらは生と死、生殖、性や年齢による相違等を含んでいる。テリック・システム(L)には、宗教的意味のカテゴリーが位置し、そこでは行為をひきおこす感情(affect)と結びつく志向の次元が重要視されている。そしてこのカテゴリーについて、快樂と苦痛という分け方よりも、幸福と不幸という二分法をパーソンズは提唱している。ここにおいて、アリストテレスが「ニコマコス倫理学」の中で、人生の目的として幸福に生きることをあげていることとの共通点が見られる。

#### 注

- 1) パーソンズは、一般行為システムの A システムを『アメリカの大学』(1973)においては「行動有機体」としていたが、その後、リッツの提案をうけいれて『行為理論と人間的条件』(1978)の中では「行動システム」と訂正している。
- 2) René Descartes, 1596~1656。フランスの哲学者。近世哲学の祖、解析幾何学の創始者。あらゆる知識の絶対確実な基礎を求めて一切を方法的に疑ったのち、疑いえず確実な心理として「考える自己」を見だし、そこから神の存在を基礎づけ、外界の存在を証明し、「思惟する精神」と「延長する物体」とを相互に独立な実体とする二元論の哲学体系を樹立した。『方法序説』『第一哲学についての省察』など。
- 3) 経験論とは、認識の源泉をもっぱら経験に求める哲学説をいう。代表的なものは、17~18世紀のイギリス経験論(フランシス・ベーコン, ジョン・ロック, バークリー, ヒューム等)であり、一切の観念は感覚的経験から生ずるとして、生得観念を否定した。
- 4) Ernst Cassirer, 1874~1945。ドイツに生まれる。新カント学派の哲学者。ユダヤ人迫害のためアメリカに亡命(1941)。イェール大学教授(1941~)。コロンビア大学教授(1944~)。シンボルとしての記号を用いて意味を表現する人間のあり方に注目し、シンボルの哲学を打ち立てた。『シンボル形式の哲学』(1923~31)。『啓蒙主義の哲学』(1932)『国家の神話』(1946)など。
- 5) Libido はドイツ語であるが、本来はラテン語で欲望の意味。モル(Moll, Albert, 1862~1939)によってはじめて用いられ、フロイトが精神分析に導入したものである。性的衝動を発動させる力をいう。人間の成長・発展を可能にする心的エネルギー。源には性的エネルギー(エロス Eros)と破壊的エネルギー(タナトス Thanatos)が含まれ、厳密には前者をリビドー(libido)、後者をモルティドー(mortido)という。精神分析の理論においては、人間の行動はすべてエロスとタナトスの相互対立物、または結合的作用であると考えられている。
- 6) 人間を行動に駆り立てる内在的な力。食欲・性欲・睡眠・運動・排泄欲など。
- 7) 生まれつきもっていると考えられる行動の様式や能力。生得力。
- 8) 語源はギリシャ語のカテゴリア。述語の意。存在の基本的構造を表す。さらに認識の基本的構造を表す。範疇。

- 9) sense data を感覚データと訳したが、意味的には感覚情報と解釈すると理解しやすい。
- 10) 心が一定の目標に向かって働くこと。哲学的な意味では、意識が何ものかに向かっていることをいう。
- 11) 後天的感覚を除いたア・プリオリな認識能力の全体をいう。「純粹理性批判」は、広義の理性の作用に関する反省の書である。
- 12) ア・プリオリな道德原理によって意志を規定する理性。歴史的にはアリストテレスのプロネーシス(実践知)に由来する。
- 13) 哲学的には、特殊を普遍に包括されるものとして考える能力をいう。普遍的な法則(因果律)がありそれに特殊(咲いた花)が包括される場合(規定的判断力)と、特殊(花)がありそれを包括する普遍(美)が求められる場合(反省的判断力)とがあり、カントは後者を美的判断力と目的論的判断力とに分け、これらの能力を批判することによって美の問題と生命現象の問題を論じた。
- 14) カントの唱えた道德的命法。すなわち意志を無条件的に規定する道德法則。「幸福を目的とするならば、手段としてこの行為をせよ」と命ずる仮言的命法と異なり、行為そのものを価値ある目的として絶対的・無条件的に命令すること。例えば「汝殺すなかれ」。
- 15) Golden Rule。キリスト教論理の原理。マタイ福音書 7 章 12 節「人からして欲しいと思うことのすべてを人々にせよ」を指す。
- 16) 哲学的には、意識に与えられる感覚的経験の背後にある実在は論証的には認識できないという説をいう。
- 17) Nicolaus Copernicus,1473~1543。ポーランドの天文学者、聖職者。肉眼による天体の観測とギリシャ思想とに基づいて、太陽中心宇宙説を唱えた。地球その他の惑星はその周囲をめぐるという地動説を発表して、当時定説であった地球中心宇宙説に反対し、近世世界観の樹立に貢献した。主著『天体の回転について』(1543)。
- 18) Isaac Newton,1642~1727。イギリスの物理学者、天文学者、数学者。力学体系を建設し、万有引力の原理を導入した。また微積分法を発明し、光のスペクトル分析などの業績がある。主著『プリンキピア(自然哲学の数学的原理)』(1687)。

## 第11章 人間的条件のパラダイムについての検討—その3—

### 第1節 はじめに

パーソンズは、人間的条件システムの物理的—化学的システム(A)にギリシャ哲学者、ノーバート・ウィナー、L.J.ヘンダーソンの考えを援用している。本章ではウィーナーとヘンダーソンの学説の物理的—化学的システムへの適用、フロイトとパーソナリティ・システム、ウィーナー・カテゴリーの行為レベルへの適用について検討していきたい。

### 第2節 ウィーナーとヘンダーソンの学説の物理的—化学的システムへの適用

ウィーナーの著書『サイバネティックス』は1948年に出版され、ヘンダーソンの著書よりずっと後であった。生理学者ヘンダーソンの著書は、物理的—化学的システム(A)と有機体システム(G)の間の境界関係に関連しているが、ウィーナーの著書は物理学から行為の理論へ、そして生物学も非常に多くを含んで科学の範囲全体に適用できる。

ウィーナーの議論の大部分は、エネルギーと情報という2つの相互に補足的なカテゴリーとそれらの相互関係とに注意を制限している。パーソンズによれば中心的な命題は、適切に定義された条件のもとでエネルギーが高く情報が低いシステムは、逆のシステム、すなわちエネルギーが低く情報が高いというシステムに有効にコントロールされるというものである。

例えば、設定されたサーモスタット(温度自動調整器)が最小限の物理的エネルギーを利用するだけで、温度が設定された値からわずかでもずれる時、発熱装置を回したり切ったりすることによって、閉ざされた空間の温度をコントロールすることができる。この場合、サーモスタットは情報量が大きく、発熱装置はエネルギーが高い。

現代社会において、例えば自動ドア、リモコン、予約タイマーのついた電気製品等、サイバネティックスの原理を応用していると考えられるものが多数ある。

ウィーナーの最初の研究が有機体の分野に、とくに生理学の分野にあったので、高い情報の下位システムがそのようなシステムをコントロールする過程を、ヘンダーソンが扱った有機体の3つのカテゴリーの間の調節に含めることができるとしている。パーソンズは個人有機体にふさわしい調節に関して、3つの原則的なレベルがあるとしている。一つは酸素を通して細胞間レベルでの調節、二つ目は有機体全体のレベルで、血液の流れを通してホルモンやその他の構成要素の調節、三つ目は環境に関係して有機体の活動を調節するうえでの、神経システムを通しての調節をあげている(図1)。さらに調節に関して人間有機体の個体群や種のレベルで、遺伝子の情報コントロール過程を含んでいることに注目するべきであるとしている。

物理的—化学的システム

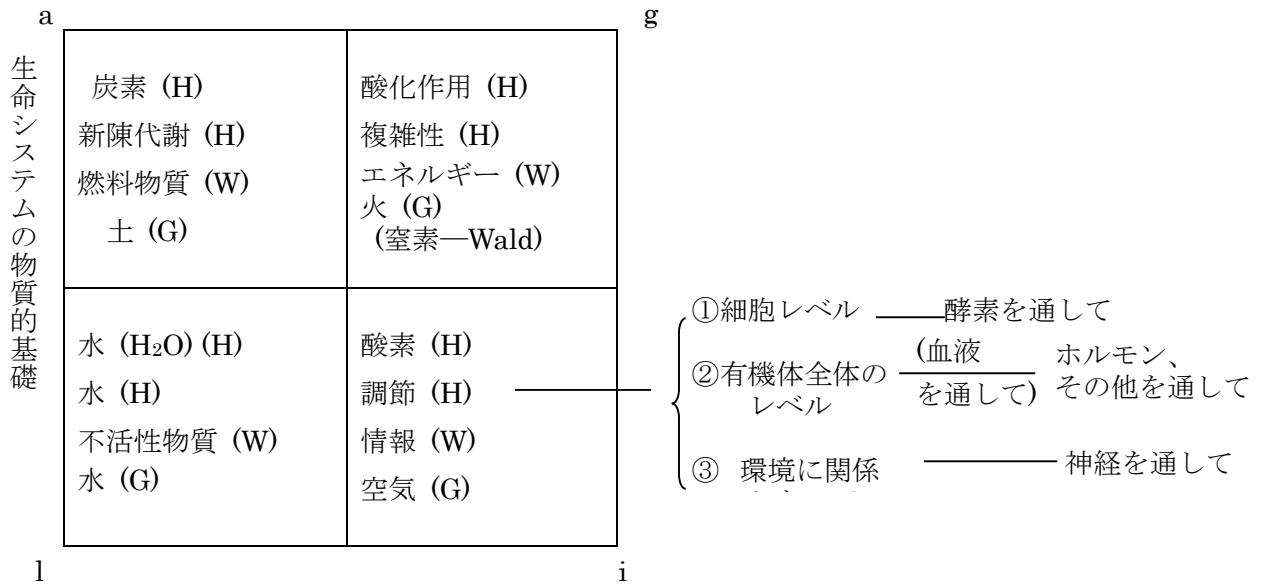


図1 調節のレベル

パーソンズは、物理的—化学的システムにおいてウィーナーとヘンダーソンの図式を採用しているが、両者の図式には共通して有機体領域内の諸関係、有機体と物理的領域との間の一連の諸関係に、秩序を含んでいることを主張している。

すなわち、人間の身体は生物学的・生理学的にさまざまな機能をもっているが、そこには物事の道理、すじみちがあるというのである。パーソンズは人間の身体に関して、自然の摂理が働いていることを見通していたといえる。

一つの生命有機体は、次の2点で独自の物理的—化学的システムであると彼はみなしていた。第一に、生命有機体は環境とは異なった内部秩序間のパターンによって特徴づけられ、特別に組織されているシステムであるということ。ヘンダーソンは内部秩序間のパターンについては、非常によく知っていた。第二にこのような相違は、有機体はその環境に対して境界をもっていることを含んでいる。それは、ヘンダーソンの用語では「調節」として特徴づけられ、ウィーナーの用語ではエネルギーを統制している情報を含む「メカニズム」によって維持されている。

ウィーナーとヘンダーソン、二人の分析の背景にはさらに問題がある。ウィーナーの用語で言えば、内部秩序を調節して境界を維持し、他のシステムから分化する能力を考察するのに、物理的な性質だけで十分なのかどうかという問題である。というのは、物理的な性質を生じるために、物質はある種の化学的ないしその他の過程を通してエネルギーを生み出す原因となるにちがいない、とパーソンズは考えたからである。そこでヘンダーソンの概念をとり入れている。

ヘンダーソンは、有機体生命にとって物質からエネルギーを生み出す過程が、酸化を通して行なわれていることを見出した。一般的に、炭素化合物(C)は酸素(O)と混ぜ合わされ二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を生み出している。炭素化合物はある意味で有機体エネルギーを生み出すために必要な燃料として考えられる。パーソンズはこの状態を、物理的-化学的システムの(i)に酸素を、(g)に酸化を、(a)に炭素を置いて対処している。

しかし、この問題には更に2つの側面があることをパーソンズは指摘している。第一に、もし有機体の特性がかなりの期間続くならば、はじめは有機体の境界内に存在していたこの意味での燃料供給は、十分でなくなるであろう。この燃料は、ヘンダーソンが「新陳代謝」とよんだ過程で使い果たされている。この状態が続くならば、燃料は環境からのインプットによって置き換えられなければならない。同時に二酸化炭素のような新陳代謝による潜在的な生産物は、処分されなければならない。以上のように物理的-化学的にみた場合、有機体はその環境とともに、連続的な相互交換に約束されたオープン・システムにちがいないとパーソンズは述べている(Parsons 1978:376)。

つまり、生命の物質的基礎をなしている人間の身体、有機体は酸素を吸って二酸化炭素をはき出すという環境(外界)との相互交換をたえず行なっており、その意味でオープン・システムであると理解できる。一般的に、人間以外の動物や生物についても上記のことはいえる。

第二に、有機体に有益なエネルギーを生み出している酸化過程は、統制された過程に違いないというものである。それは、燃料が有機体(人間の身体)に輸入された後に、特別に処理されなければならない、それが「燃やされる」条件は、細部にまで調節されているにちがいない。そして、より高等な有機体においてこのことは、ATP<sup>1</sup>複合体(アデノシン三リン酸複合体)を通して生じていると彼は述べている(ibid. 376)。

数学者であり物理学者であるウィーナーの図式が「複雑性」のカテゴリーと出会うのは、まさしくこの点においてである。生理学者ヘンダーソンは、別の観点から「複雑性」をとりあげているが、それは物理的-化学的システムの(g)に位置づけられている。

有機体世界において、物質がエネルギーに変換するのに必要な過程である酸化は、生命システムを特徴づけている化学物質の枝状にわかれた房および諸過程の中心的な焦点であり、炭素の性質がその中心を担っている。炭素は、物理的-化学的システムでは(a)に位置づけられている。酸化は他にも、蛋白質、酵素、ホルモン、RNA、DNA、そして多くの他の物質からなる生物化学の中で、ある役割を演じている。

ウィーナーが最初に生理学上の問題に関心をもった時、彼は有機体を「熱機関」(heat engine)と考えて生物化学問題に言及していた。しかし、彼が『サイバネティクス』を書いた時、問題は大きく変化し、生理学者たちの主要な傾向は、有機体を取りわけ情報処理システムと考えるようになっていた。これは大きな変化であり、確かに人は現在、知的な事業を計画するのに適している。

上記のことは、現代の高度に発達した情報化社会についても、人を中心にみた場合に言



えることである。

ウィーナーが高いエネルギー・システムと高い情報システムとの間に設定した関係の重要性は、行為レベルに明らかにあらわれているという。パーソンズは、例えば社会組織が文化的シンボルシステムによって統制される方法、そして個人的なレベルで動機的エネルギーが客体の内面化と外部環境から受け取る情報とから引き出される非エネルギー要因によって統制される方法を、上記のような観点に基礎づけている。

### 第3節 フロイトとパーソナリティ・システム

個人的なレベルにおける動機的エネルギーと情報という文脈で、パーソンズはフロイトの自我とイドの関係を取りあげている。フロイトは、これらの人間のパーソナリティの2つの構造的な下位システム間の関係を議論しているが、馬と人間の乗り手の隠喩を導入している。イド(id)は馬の役割をなすとみて、自我(ego)つまり人間の乗り手よりもはるかに強く、まともに競争すれば容易に勝つであろうと述べている。そして、イドのもつより大きな強さは「高エネルギー」と読むことができる。もし馬(イド)が調教されるならば(「社会化される」と読む)、そして乗り手が十分な技術をもっていれば、乗り手は馬の行動のある点で統制することができる—馬が乗り手をどこに連れて行くのか、どんな速度でいくのかなど—。

フロイトの書『自我とイド』は、ウィーナーの書『サイバネティックス』より27年前に書かれており、フロイトはウィーナーの著書を知らないが、もし知っていたならば、ウィーナーの意味で、人間の乗り手は馬よりも「高情報」であるということに賛成したであろう、とパーソンズは記している。そして、フロイトを本能還元論者と解釈する今日の共通傾向という文脈からすれば、フロイトがこのような比喩を用いていることは特に重要であるとパーソンズは述べている(ibid. 377)。

つまり、フロイトは夢の研究から意識の底に潜む無意識の発見、人間の行動を究極的に支配する要因に性的衝動を発動させる力としてリビドー(libido)を発見し、本能還元論者と見られがちであるが、パーソンズはこの点について注意を払うべきであるとしている。

フロイトは、パーソナリティを構成する心的機能を三領域—イド・自我・超自我(id, ego, super-ego)に分け、そのうちイドは心の最も深奥にあつて、原始的・本能的エネルギーの源泉をなす部分とされている。その働きは無意識的であり、無道徳的衝動としてひたすら快樂原理に従い、リビドーの直接的・即時的充足をめざすとされている。自我は、本能や衝動から表すイドから発して外界の影響によって分化し、理性や分別の役割を演ずるものとされた。超自我とは、個人が両親や大人たちの禁止的態度、懲罰的態度、叱責的態度および叱正的態度などと同一化してこれを内面化したもので、道徳的な良心とも言われ、自我を監視し禁圧する心的メカニズムである。

パーソンズは、一般的行為システムのパーソナリティ・システムにおいて、イドを(a)に、

自我を(g)に、超自我を(i)に位置づけ、(l)には自我の究極目標として、人格の確立をおいている(Parsons 1973:436) (図 2)。

フロイトによって、イドは馬にたとえられ、自我は人間の乗り手にたとえられている。ウィーナーの意味で、前者は高エネルギーを持ち、後者は高情報を処理できると解釈される。性的衝動であるリビドーをもつイドは、高エネルギーを持っているが、人間は本能のままに行動するのではなく、高情報を処理できる自我を鍛錬することによってイドを制御できる。フロイトはこのことを見通していたと、パーソンズは言いたかったのではあるまいか。人間には、感性的欲求に左右されず思慮的に行動する能力、理性がある。古来、理性は人間と動物を区別するものとされている。フロイトのいう自我の鍛錬と理性の強化には、共通しているものがあるといえる。

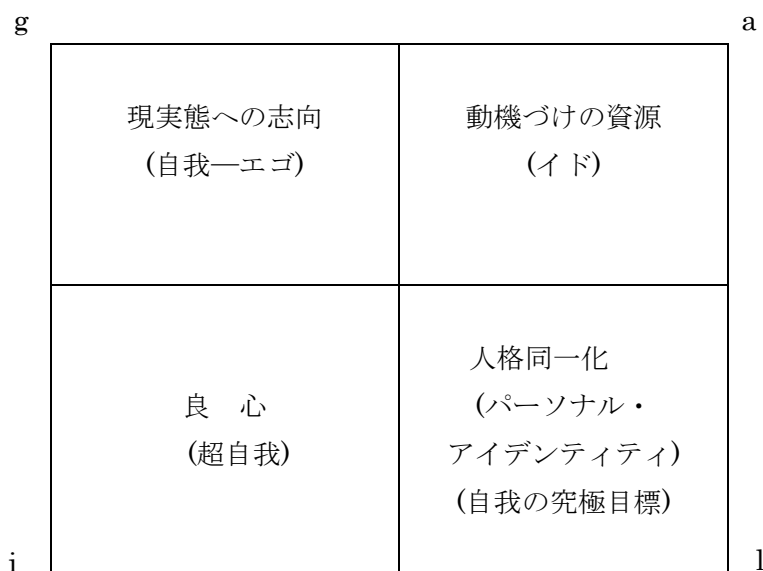


図 2 パーソナリティ・システム  
T. Parsons and G.E.Platt,  
The American University, 1973, p.436.

#### 第 4 節 ウィーナー・カテゴリーの行為レベルへの適用

パーソンズは、ウィーナーの諸カテゴリーを人間的条件のレベル、行為レベルにも適用可能なものと考えている。

最初に、エネルギーについてみてみよう。ウィーナーは、はじめ物理的な意味でのエネルギー(たとえば熱)について言及し、このモデルを有機体の現象に躊躇なく適用した。しかし、ヘンダーソンの著書において、ある意味で物質の変換を構成しているエネルギー生産の生理的あるいは物理的—化学的過程のなかで、生命システムにエネルギーを与えることは、一般的に物理的なエネルギー化ではなく、むしろその過程が生じうる特別な設定であるということが述べられている。その主だった事例として、パーソンズはA T P複合体(ア

デノシン三リン酸)をあげており、ウィーナーやヘンダーソンはそれについて言及していないし、知ることはできなかつたと述べている。

そこで彼は、有機体エネルギーが物理的エネルギーと同じものであるかどうかという疑問を持ち、検討した結果、答えは否であると主張している。関係している論理の中心点として、構造と過程のいかに機能的に重要な構成要素が、関連しているシステムのすぐ次の下のレベルの組織から引出される構成要素や諸要因の組み合わせによって生み出されているか、を考えなければならない点にあるとしている。この点は、ヘンダーソンによって非常に明らかにされているとし、物理的エネルギーは変化を経験して性質上、組合せを作っていくにちがいないとしている。その際、化学的要素の組合せから生じる化学化合物の発展が、このレベルでの原型であるだろうとパーソンズは述べている(Parsons 1978:378)。

つまり、有機体エネルギーは物理的エネルギーと同じものではない。物理的エネルギーが変化を経験して、有機体エネルギーになる。その時に、化学化合物の発展がこのレベルで作用しているであろうとし、具体的にはATP複合体(アデノシン三リン酸)などが働いているであろうと理解することができる。

そこで、有機体の領域内でいかにぼう大な分岐が生じるとしても、フロイトの著作から最も重要な結論のひとつが考えられる、とパーソンズは主張している。すなわち、フロイトの著作では有機体レベル(G)から物理的レベル(A)への変化が捉えられ、フロイト自身そのような「心的なもの」への転換において、他に変化したり組合せ的な変化を生じるというのである。もしこの解釈が妥当であるならば、その時、リビドー(libido)に関するフロイトの概念を本能その他の形態等いかなる形態においても、有機体エネルギーと解釈することは正当でありえないという。リビドーの構成要素の一つは、有機体からの「刺激の流れ」であるとフロイトは強調している。しかし、これは構成要素の一つにすぎない。そこでパーソンズは、その他の重要な要素の中で、人間レベルにおいてシンボリックな意味があることを提案している。あとでこのことを立証しようとしている。

リビドーは単なる有機体エネルギーではなく、パーソンズはそれを精神的・心理的要因と結合させて昇華し、人間的レベルでシンボリックな意味があることを提案している。それは行為の源となる「生きる力」と結びついていると解釈できる。

同じような関連を、行為システムとテリック・システムの間にも考察することができる。テリック問題については、ヘンダーソンやウィーナーの関心の外側に置かれていた。

物理学という学問の外では、物質は絶対的であると想定されてきたので、「物質」という概念に同様の相対化を適用する必要があると主張することは、非正当的である。このような方向で主張を定式化するための鍵は、一定の種の有機体のもつ内部環境によって何が意味されるかという問題を提起することであると、パーソンズは述べている。ヘンダーソンやキャンノンによって分析されたように、たとえば哺乳類の有機体は外部環境と共通する多くの化学的構成要素と物理的特徴とを含む、物理的—化学的システムである。しかし、明らかに同じ種や遺伝子をもつ他の有機体を除けば、外部環境とは異なった組織パターンを

もつ。

ウィーナーの「物質」概念の使用に関連して、このように組織された物理的—化学的システムは、生命システムの外側で認識することのできる化学要素表と関連する、新しい種類の物質を構成していると解釈することは、道理にあわないのであろうか。このことは、とくにエネルギー創出の条件を考えるとという観点からすれば真実であるだろうと、パーソンズは述べている。

もし物理的エネルギーから区別されるものとして、有機体エネルギーの概念がある意味をもつとすれば、その物質的基礎は、単に1つの化学的要素にではなく組織された生物システム全体に関係しているに違いないとされている。

つまり、物理的エネルギー(A)と有機体エネルギー(G)との関連は、単に物理的要素や化学的要素に関係しているのではなく、生命とも深くつながった生物システム全体と関係していると理解できる。

このような議論を、サイバネティック的連続体の次の主要な境界、すなわち有機体レベル(G)と行為レベル(I)の境界にパーソンズは拡張させている。彼が人間行為システムと呼んでいるものを、生命システムの進化において新しく生じたレベルとして扱うことが正しいとすれば、そのとき同じシステムの外部環境とは関係しているけれども区別されるべきであるとする内部環境も進化してきていると彼は主張している。はじめてそう述べたのは、デカルト的伝統のなかで思考していたデュルケームであるという。デュルケームは、この環境についての知識の経験的構成要素を事実とよび、知識が構成される実態を社会的環境と表示した。これについてパーソンズはそれが一般行為システムに対して内部環境という仮定を構成していると論じている。実際『アメリカの大学』の一般行為システムの構造の図においても、AシステムとLシステムの間内部環境が表示されている(同前:436)。

デュルケームの立場は、ウィーナーの立場と適合するかたちで、ウィーナーのいう物質の新しいレベルがここにあることを意味すると、パーソンズは解釈している。パーソンズは、有機体が物質的世界のカテゴリーであるが、人間行為の側面—彼はこれを主にシンボリックな意味から成るとしている—からも捉えようとする。ウィーナーの三つの基本的カテゴリー(物質、エネルギー、情報)が、物理的なレベルだけに限定されるのではなく、生物学的なレベルにも拡大できることを指摘している。この点についてウィーナー自身が、最初サイバネティックの理論を社会科学の領域に拡張することに否定的見解を示していた。しかし後に、制御の基本原理をなすネガティブ・フィードバックは、自動制御機械にのみ固有のものではなく、有機体、人間社会にも共通してみられる一般的な形態であるとの見解をもつにいたり、サイバネティックの社会現象への適用を積極的に評価するようになった。

パーソンズは、サイバネティックの理論を行為レベルにも適用できるにちがいないと考えた。そうでないとすれば、リビドーは熱や電気と同じように、単なる物理的エネルギーのための単なる用語になってしまう。彼は、フロイトが人間行為への理解に関して物理

学者なのであろうかという疑問を投げかけ、フロイトは精神分析医であることに思っていた。そして、パーソナリティの精神分析理論に関して物理学の一般法則から学ぶこともあると述べている。

ウィーナーは、物質とエネルギー連結を中心とする古典的機械論に対して、情報連結による制御の問題の重要性を強調した。マイクロ生物学(A)のレベルから人間有機体(G)のレベルを通り、人間行為システム(I)のレベルへの段階は、多くの標準によれば、むしろ長い道りである。パーソンズによれば、マイクロ遺伝学者たちは「言語の言語」を用いているという。つまり、彼らは遺伝子によって生体を読みとこうとしていると解釈できる。マイクロ生物学においては、DNA (デオキシリボ核酸) <sup>2)</sup>とその活動は遺伝的コードによって理解されるようになってきている。DNA 分子上の 3 つの隣接した遺伝子の連続体であるコドン(codon)は、言語にたとえると主語、動詞、述語として働く 3 つの項目をもった文章であるといえる。その時、コドンという文章の中に具体化された情報は、RNA(リボ核酸)の上に複写され、最終的には酵素の活動を通して行為は蛋白質の合成へと「翻訳」される(同前:380)。このように、パーソンズはマイクロ生物学における DNA と RNA の遺伝子によって蛋白質の合成が行なわれることに、人間行為においてコミュニケーションの働きをつかさどる言語モデルを映し出して、生命システムの物質的基礎と行為システムを結びつけようとしている。そこには、人間を総合的に捉えようとする視点がうかがえる。

パーソンズによれば、シンボリックな意味は人間のパーソナリティ構造と関連しており、パーソナリティは、脳の生化学的過程の現象に還元されない。そして、ウィーナーにとって「情報」概念の関連性は、有機体レベルでストップしているのではなく、科学の領域すべてをおおうものであったと述べている。

物質的システムにおけるサイバネティック・コントロールのメカニズムについて、ウィーナーの一番好きな例は、蒸気エンジンに装置された「調整器」であったという。このことは、とりわけ情報技術の分野に拡張している。とくに電話、ラジオ、テレビの分野へと拡張される。ここで、そうした技術の人間にとって重要な機能は、ウィーナーの専門用語の意味で情報の処理と伝達に関係がある。

すなわち、シンボリック・メディアからコミュニケーション・メディアという情報技術の流れにおいて、ウィーナーのいうサイバネティクス・コントロールが関係しており、電話、ラジオ、テレビ、そして現在では電子メディアといったマス・メディアの発達にも関係しているといえる。

情報処理と情報伝達の最も顕著な例として、パーソンズはコンピューターをあげている。最も重要な点として、コンピューターが厳密な意味で機械的に作用しているというよりも、むしろ電氣的に作用している物理的なシステムであるという点をあげている。コンピューターは人間の計画によって造られた人工的なものである。そして、人間の脳にたとえることができる。このことは通常の意味で物理的な現象ではなく、有機体システムの現象であるとパーソンズは捉えている。

ヘンダーソンによれば、有機体(organization)はシステム概念に密接に関連しており、物理的側面をふくんで、自然界一般の秩序の重要な特徴を持っているという。パーソンズはその意見を支持している。ウィーナーもこの見解を共有していたという。また自然界について最も理解できるアインシュタイン<sup>3)</sup>の有名な理論は、人間を理解することと自然を理解することはつながっていることに決着をつけるのにふさわしいかもしれない、とパーソンズは述べている。アインシュタインは、自然界の物理的な性質を考えていた。もし情報のカテゴリーが「自然の性質」(nature of nature)と何の関係もないとすれば、アインシュタインの声明は意味をもたなくなるのであろう、とパーソンズは述べている(ibid. 381)。

これは人間を理解するには自然界も理解しなくてはならない、人間の存在は自然界の一部であると解釈でき、超越的神の存在をパーソンズは暗示しているように思われる。メタ理論、すなわち理論の理論は結局、自然界の秩序と結びついていくと考えられる。

## 第5節 結び

以下、概要を述べて結びにかえたい。

パーソンズは物理的-化学的システムにウィーナーの考えを取り入れて、燃料物質(a)、エネルギー(g)、情報(i)、不活性物質(l)をおき、他方ヘンダーソンの考えを取り入れて、炭素(a)、酸化作用(g)、酸素(i)、水(H<sub>2</sub>O)(l)を、さらに新陳代謝(a)、複雑性(g)、調節(i)、水(l)をおいている。そしてウィーナー、ヘンダーソンともに有機体内部、有機体と物理的領域との間の関係に秩序があることを強調している。

またパーソンズは、一般行為システムのパーソナリティ・システムに動機づけの資源(a)、現実態への志向(g)、良心(i)をおいているが、その根拠にフロイトのイド(a)、自我(g)、超自我(i)をあげている。そして(l)に自我の究極目標として、人格の確立をおいている。

パーソンズは有機体エネルギーが物理的エネルギーと同じものであるかどうかという疑問をもち、検討した結果、答えは否であると主張している。

フロイトの著作では、有機体レベル(G)のエネルギーから物理的レベル(A)のエネルギーへの変化が捉えられ、フロイト自身がそのような「心的なもの」への転換において、他に変化したり組合せ的な変化を生じるという。パーソンズは、フロイトの著作からリビドーを本能にもとづく単なる有機体エネルギーと解釈することは正しくないという。フロイトは、リビドーの構成要素の一つは有機体からの「刺激の流れ」であることを強調しているが、パーソンズはその他の重要な要素として人間的なレベルで、シンボリックな意味があることを提案している。ここでフロイトの言うリビドーの構成要素の中に、パーソンズによるとシンボリックな意味が加えられていく。

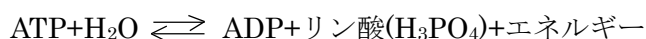
物理的エネルギー(A)と有機体エネルギー(G)との関連は、物理的要素や化学的要素に単に關係しているのではなく、生物システム全体と關係していることがわかる。このような議論を有機体レベル(G)と行為レベル(I)の相互交換にも、パーソンズは拡張させている。さら

に彼は、同様な関連を行為システム(I)とテリック・システム(L)の間にも考察している。テリックの問題にヘンダーソンとウィーナーは触れていないが、パーソンズは取り上げている。パーソンズは、人間の行為は主にシンボリックな意味から成るとしている。

そして、パーソンズはウィーナーの「サイバネティックス」の理論を行為レベルにも適用できるにちがいないと考えて、理論を展開している。

#### 注

- 1) Adenosine Tri-Phosphate の略。生体内のエネルギー代謝では、ATP(アデノシン三リン酸)がエネルギーの仲立ちをしており、ATP は全生物に共通なエネルギー物質である。ATPは、塩基アデニンと糖リボースが結合したアデノシンに、リン酸が 3 個結合したヌクレオチドの一種で、リン酸どうしの結合(高エネルギーリン酸結合)が切れて、ADP(アデノシン二リン酸)とリン酸に分解するとき、多量のエネルギーが放出される(1mol=507g 当たり 7~10kal)。このエネルギーがいろいろな生命活動に利用される。



- 2) DNA(deoxyribonucleic acid)デオキシリボ核酸デオキシリボースを含む核酸。細胞核内の染色体の重要成分。遺伝子の本体として遺伝情報の保存・複製に関与、リボ核酸と共に、生体の種や組織に固有の蛋白質合成を支酸する。

RNA(ribonucleic acid)リボ核酸。リボースを含む核酸。デオキシリボ核酸と共に、蛋白質合成に関与、また RNA ウィルスでは、遺伝情報の保存・複製を行なう。

- 3) Einstein, Albert, 1879~1955。理論物理学者。ユダヤ系ドイツ人。ナチスに追われて渡米。プリンストン高等研究所にあって、相対性理論の一般化を研究した。ノーベル賞受賞。相対性理論は、特殊相対性理論と一般相対性理論から成る。特殊相対性理論は 1905 年に提出され、光の媒質としてのエーテルの存在を否定、光速度がすべての観測者に対して同じ値をもつとし、また自然法則は互いに一様に運動する観測者に対して同じ形式を保つという原理をもとに組み立てられた。一般相対性理論は 1915 年に提出され、前者を一般化して、すべての観測者にとって法則が同形になるという要請から、万有引力現象を説明している。

## 終章 パーソンズ理論におけるメディアの重要性と問題点

### 第1節 本論文で明らかにした諸点

本論文では、パーソンズの晩期に展開されている一般化されたシンボリック・メディアに焦点をあて、社会システム、一般行為システムから生み出されたシンボリック・メディア、システムとしての人間的条件から生み出されたメディアの成り立ちや性質、相互交換過程と役割、そして人間的条件のパラダイム等を論究してきた。

最後に、これまでの第1部と第2部(11章)にわたる理論的研究から得られた知見をまとめて、パーソンズ理論における相互交換メディア、なかんずくシンボリック・メディアの重要性と問題点を考察する。そして、従来のパーソンズ研究に対する本論文の貢献と残された課題を検討する。

**第1部**では、社会システムにおける貨幣、権力、影響力、価値コミットメントについて特徴やマクロ的分析、それぞれのメディアの相互交換過程を調べて、各メディアの役割などを考察した。

**第1章**では、パーソンズのいうシンボリック・メディアの性質、メディアのインフレーション、デフレーションについて、またバウムのいうメディアのコンフレーション、「理想的な社会」のあり方について検討した。パーソンズは、シンボリック・メディアについて行為者間の相互行為を促進し規制するメカニズムに作用するものとしており、メディアの働きに、情報を伝え相互行為における生産物や生産要素の配合や結合を制御することをあげている。そしてシンボリック・メディアについて四つの性質があるとしている。(1)制度化(2)評価と相互交換の両方における意味と有効さの特質性(3)循環性(4)ゼロ・サム的性質だけでなく、信用創造によって付加価値が認められるである。これらの性質のもとで、社会システムのシンボリック・メディアの構成要素について、コードの種類、保障基盤、裁定の様式の点から特徴があげられている。

メディアのインフレーション、デフレーションは、経済学で用いられているインフレーション、デフレーションの概念を適用しているものである。メディアのインフレーションとは、人間の相互行為において、行為者同士の信用あるいは信頼が増すと行き交う情報量が増え、それが度を過ぎるとシステムの均衡がくずれる、その状態をいう。メディアのデフレーションとは、行為者相互間に信用あるいは信頼が減少すると情報量が減り、極端な場合には情報の交換がほとんど行われなくなる。するとシステムの機能を遂行する際に支障が生じる、その状態をいう。第1章ではレベル別にインフレ、デフレの生じる過程を調べた。

バウムはパーソンズのいうメディアのインフレ、デフレ論を発展させて、両方が混在している状態をコンフレーションと名づけた。メディアのコンフレーションとは、社会的行為の生産過程で価値、規範、役割、便益という生産要素間に弛みや引き締めが生じ、シス



テムが機能的に混乱する状態をいう。バウムは、A,G,I,Lの4機能パラダイムに社会的な時間と空間を取り入れて、社会的行為における機能の混乱を説明している。そしてバウムは機能の優先順位に基づいて「理想的な社会」の類型論を展開している。有機的アソシエーション(A欄)、団結的ゲゼルシャフト(G欄)、団結的ゲマインシャフト(I欄)、機械的ブント(L欄)がそれである。

パーソンズとバウムのシンボリック・メディア論を通して、シンボリック・メディアとは具体的にどのようなものであるかという問題が浮かび上がってくる。抽象的であり、具体的に把握することの難しさがある。二人とも定性的、つまり性質について述べており、定量的、つまり量的な検討については触れていない。

第2章では、貨幣メディアと権力メディアをマクロ的な側面から扱っている。グールドはシンボリック・メディアに経済学の金融モデルをあてはめて、理論的深化を試みた。グールドは、社会的下位システム間の相互交換における生産物と要素のインプット、アウトプットを、経済システムの場合に検討している。彼は経済的消費( $C_a$ )をLとA, 経済的投資( $I_a$ )をGとA, 経済的貯蓄をIとA体系の相互交換に位置づけて、全体の所得(アウトプット)の均衡水準は $C_a + I_a$ 線と $45^\circ$ 線との交点に決定されるとしている。それはまた、 $S_a$ と $I_a$ との交点線上にあるという具合に、総産出の均衡点を求めている。また、貨幣と生産市場の均衡点を、LM曲線とIS曲線の交点に求めている。

グールドはこれらの概念を政治システムにも適用している。政治システムの場合、仮定として論じられており実際に証明されていないので、実線でなく破線で図示されている。彼は権力メディアに焦点をあてて、インフレ・ギャップ、デフレ・ギャップについて調べている。インフレ・ギャップ、デフレ・ギャップというのは、総産出の均衡状態からどのくらい乖離しているかを示すものである。抽象的で実際に状況を把握することは難しい。権力メディアのインフレ・ギャップ、デフレ・ギャップについて、実態面から理解するには検討の余地が多いといえる。

貨幣がメディアとして成立するには、最も基本的な規則に貨幣の相互的受け入れ可能性がある。貨幣メディアの特徴に自由度が高いこと、特定時間にしばられないこと等があげられる。また貨幣所有者は交換条件を受け入れたり、拒否する自由を多く持っている。

財とサービスについてみると、経済学では「財とサービス」のように一括して扱っている。ひとくくりにしたこの場合、「財とサービス」は世帯へのアウトプットとして扱われる。世帯は信託システムに属するとされている。パーソンズはここで財とサービスを分けて、財は世帯へのアウトプットであるが、サービスは政治へのアウトプットであるとしている。サービスを仕事上の献身であるとして、それは政治へのアウトプットであるとしている。それゆえ財を価値コミットメント・メディアの範疇に、サービスを権力メディアの範疇に入れている。ここには、サービスに対してパーソンズ特有の捉え方がみられる。

シンボリック・メディアは、各システムに繋ぎとどまっている資源の流動を促進したり抑制して働いている。貨幣メディアの相互交換過程をみると、経済システム(A)と政治

システム(G)においては要素として A から G へ「生産の統制」をとるために、貨幣メディアが流れており、G から A へ「有効性の機会」を得るために、権力メディアが流れている。ここで生産力は貨幣要素であり、財やサービスと交換できる。しかし機会は雇用によって被雇用者に与えられるものであるため、権力メディアになっている。そして有効性は、集合的目標に対する有効性であり、サービスの効用をひきだすために有利になっているとされている。

生産物として、A から G へ「集合体へのサービスの委託」をするために権力メディアが流れ、G から A へサービスの提供者にその義務を遂行するために「物流的資産の配分」をするように貨幣メディアが流れる。

経済システム(A)と信託システム(L)の相互交換において、世帯は(L)に企業体は(A)に属すると考えられている。要素として世帯から企業体には価値コミットメント・メディアによって「労働能力」が提供され、企業体から世帯には報酬として「賃金所得」が貨幣メディアによって与えられる。生産物として、世帯から企業体には「財の需要」のために貨幣メディアが働き、企業体から世帯へは「財の生産に対する委託」が行われるために価値コミットメント・メディアが働いている。

貨幣メディアの役割には交換価値がある、効用という価値尺度がある、そして金融秩序を維持している等があげられる。

第3章では、権力メディアの特徴に関して、権力の概念、権力は強制か、合意かの問題、ゼロ・サム問題、委託の一般化について検討し、権力メディアの相互交換過程、役割について考察した。問題点として、カートライトとワーナーの議論を取り上げている。

権力メディアは、集合的または公共的な目標達成のために意思決定を行い、社会システムの動員可能な力を結集することによって、状況に働きかける一般的能力を意味している。その価値原理は有効性であり、調整基準は成功ないし統治権であり、制度的な基盤は権威(authority,権限)であるとされている。

パーソンズは状況的チャンネル(伝達経路)と否定的裁定に当てはまるとして、権力メディアを強制の一形態においている。しかし彼は権力メディアを強制か、合意かという問題に対して二社択一的に規定するのではなく、それを克服して総合的に捉えている。また権力メディアのゼロサム現象について、ある状況のもとでは成り立つが、すべての状況のもとでは成立しないとされている。

パーソンズは社会分析をする際に、構造的な準拠点を二点あげている。一点は社会を機能的にみた場合、経済、政治、統合のシステムに経験的に分けることができるということ、二点目はこれらの単位が具合よく働くためには、生産要素インプットと他の単位に寄与する生産物アウトプットが二重に相互交換していることがそれである。この二重の相互交換は、帰属的ではない、物々交換ではない、あるいは両者の結合によるものではないということが特徴とされている。ここにおいて、一般化されたシンボリック・メディアが生み出された。

次に、権力メディアの相互交換過程についてみてみよう。

政治システム(G)と統合的システム(I)との相互交換について。統合的システムに係留している影響力メディアには連帯性という価値原理が含まれており、権力メディアは影響力メディアに統制されている。要素の相互交換は、IからGに「個別利益要求」が行われ、GからIには「政策決定」がなされる。ここで個別利益要求は政治的意思決定に対して「状況を規定する」ことに注意を払うべきだとされている。また個別利益要求は、政治過程のなかで通常、変化していく。それゆえ政策決定は、集合的行為に対して利益当事者が期待できる委託をなすということから連帯性の一要素である、とされている。

生産物の相互交換は、IからGに「政治的支持」が行われ、GからIには「リーダーシップの責任」がとられる。ここでリーダーシップの責任は影響力メディアに属し、権力メディアではないとされていることに留意する必要がある。政策決定と政治的支持は権力メディアの範疇に、個別利益要求とリーダーシップの責任は影響力メディアの範疇に入っている。

政治システム(G)とパターン維持システム(L)との相互交換について。完結性の要素としてGからLに「執行責任」をとるという資源が流れている。これは集合体の有効性だけでなく、信託システムの完結性をも含めた価値原理の実現を成功させる責任であるとされている。LからGには「権威の正当化」が流れ、このような成功への責任を課している。生産物としてLからGに「職務権力の合法性」の資源が流れ、これはパターン整合性の基準を適用している。いろいろなレベルに関連して、行為は価値コミットメント・メディアに合わせて行われねばならない。このような行為をとらせる合法的権威づけと交換に、責任ある職務従事者は権力メディアの使用に対して道徳的責任を引き受けなければならないとされている。GからLには「集団の利益に対する道徳的責任」の資源が流れている。ここで、執行責任と職務権力の合法性は権力メディアに、権威の正当化と道徳的責任は価値コミットメント・メディアに属している。

権力メディアの役割についてみると、有効性の価値尺度になっているといえる。集合体の有効性を導くために成功についての評価を通して、権力メディアは資源配分の基準になり、このような機能を達成するために働いている。そして権力メディアは集合体の秩序を維持するために働いている。

カートライトとワーナーの議論をみてみよう。彼らは、権力メディアの問題点としてゼロサム問題、信頼、循環、委託の一般化について検討している。パーソンズとカートライト、ワーナーの意見はことごとく対立している。例えばゼロサム概念に関して、パーソンズは権力メディアに、ある場合にはあてはまるが、ある場合にはあてあまらないと主張している。これに対してカートライトとワーナーは、変化しやすい貨幣メディア、権力メディアの場合、それぞれの合計の特質をみるとゼロサム概念に本質的には依存していない、と主張している。信用に関して、パーソンズは自我が銀行にドルを預金し、政治的指導者の信頼に投票するという具合に、銀行業と選挙システムの特別な場合に信用の二つ

の型をみている。それに対してカートライトとワーナーは、権力メディアと貨幣メディアとの間に一般的な類似をいうことに、疑問を投げかけている。循環に関して、パーソンズは家計と企業間の交換パラダイムから、貨幣メディアの機能性を引き出し、権力メディアについても循環の性質をあげている。これに対してカートライトとワーナーは、貨幣メディアと同様に循環性をあげることに反対で、権力メディアが「貯蓄」されることは全く明らかではないとしている。このようにカートライトとワーナーは、パーソンズのいう権力メディアの特徴に厳しく対立している。

第4章では、影響力の概念として‘説得’が導かれる過程が明らかにし、その説得に本能的に関係するものとして価値コミットメント、集団のリーダーシップに対する政治的支持、そして流動的な諸資源を要求する順序があることを指摘した。説得には、情報が信用の基礎になることを明らかにした。

影響力メディアのインフレーション、デフレーションは、メディアの量に注目した分析で、ゼロサム概念と関係しており、影響力にも循環性が認められている。影響力のデフレーションとは、忠誠に対する疑問、狭い集団主義への疑問が増大して、評判が低下することによって信用が侵され影響力が低下する状態をいう。影響力のインフレーションとは、確認されえない情報であっても、評判が上昇することによって信用が増し、影響力が上昇する状態であると理解することができた。

影響力メディアとは、意図的な行為を通して他者の態度や意見に作用し決定する一般的なメカニズムであるとされている。それは説得の一つのやり方になっている。ここで説得に関連して、他者が自我を信用する基礎に、ゲマインシャフト型の連帯における共属関係をパーソンズはあげている。これこそが相互に影響しあう基礎であると、彼は強調している。

また影響力メディアが準拠している規範的原理に、評判があげられている。評判は威信に基づいていると考えられる。さらに影響力メディアの量的次元について、それは数的連続による量的把握ではなく、序数による順位づけによって把握できるとされている。

影響力メディアの相互交換過程をみてみよう。

統合システム(I)とパターン維持システム(L)の相互交換について。影響力メディアは説得と関係しており、説得するものは、その影響力を使うことによって他者のコミットメントを受け取って、そのうちにこれを用いることができる。

生産物アウトプットに、IからLに「共通価値へのコミットメント」として価値コミットメント・メディアが流れている。たとえば医療の場における医者と患者の関係で、患者の健康について共通の価値基盤を肯定するということである。医者は患者に対して治療の提案を受け入れるように、コミットメントを求める。患者は医者に対して自分の治療に最もよい方法で治療するように、コミットメントを求める。この相互のコミットメントは、両方の健康に対する評価へのより一般的なコミットメントによって、意味のあるものになっていくという。

LからIには「忠誠への価値を基礎とした要求」として影響力メディアが流れている。

例として、患者が胃の調子が悪くて病院へ行って、医者から胃カメラ等の検査を受けるよう治療の提案を受けたとする。患者がこの提案を受け入れる、すなわちコミットメントを行うとき、医者は患者の病気を治したいという気持ちを汲みとって、治療していく場合がそうである。

要素インプットに、LからIに「価値づけられたアソシエーションへの委託」として価値コミットメント・メディアが流れている。これは連帯性そのものよりも上位にあつて、連帯性を促進する要素であるとされている。IからLには「忠誠の配分に対する正当化」として影響力メディアが流れている。

統合システム(I)と経済システム(A)の相互交換について。要素インプットに、IからAに「資源の配分に対する基準」として影響力メディアが流れ、そこでは信用がとくに重要になる。AからLには「資源に対する要求の主張」として貨幣メディアが流れている。ここで要求とは、資源に対する統制力を要求することを意味している。

生産物アウトプットに、IからAに予算に対する「要求の順序」として貨幣メディアが流れ、AからIに「要求の正当化に対する根拠」を表すものとして影響力メディアが流れている。また予算折衝をする際に、その分野の専門家と配分を決める予算官との間で予算の折り合いがつかない場合がある。そのような時には、両者の示す予算のギャップを埋める必要があり、相互に影響力メディアが働く場合がある。

影響力メディアの機能についてみると、影響力メディアは社会構造を平等にしていくなために、エリートとそうでない人びととの均衡をはかるように働いている。そしてこの均衡を実際に実現する際に生じる緊張を処理するためのメカニズムとして働いている。これらはマクロ的にみた機能である。ミクロ的には、影響力メディアを使うことによる主な機能の一つに、自分の中の自我が他者を説得して自分がなそうとする行為を正当であると認められるようになっていくことがあげられる。

規範的観点からみると、現代のパターン維持の基礎は本質的に平等主義的であるといえ、このことは特に重要である。階層との繋がりにおいて、影響力メディアは不平等を機能的に必要な形に導き、正当化していくように働く。さらに、それは貨幣メディアとの交流を通して経済的資産へ、権力メディアとの交流を通して集会的効率性要因へ、価値コミットメント・メディアとの交流を通して文化的資産に接近していく。そして諸資源を役立てるように、あるいは諸資源を持っている人を説得するように、影響力メディアは働いている。

現代社会の文化的利害が優位を占めるパターン維持システムにおいて、分化する重心が高等教育システムにあるということをパーソンズは1970年代に強調したが、2010年代に入った現代においてもこのことは通じると考えられる。

第5章では、A,G,I,Lという四機能図式の相互交換過程から価値コミットメント・メディアが導かれる過程を検討した。価値コミットメント・メディアは、状況的一意図的チャンネルと肯定的一否定的裁定の枠組において、意図的チャンネルと否定的裁定の枠組に、価値コ

ミットメントを活性化するものとして位置づけられている。そこでは道徳的に拘束される一般化された義務があるとされ、価値の実行には道徳的責任が重要視されている。

価値コミットメント・メディアの相互交換過程をみてみよう。

信託システム(L)と政治システム(G)の相互交換について。財とサービスは経済学では一括して取り扱うが、パーソンズはこれらを分けている。つまり財は労働によって生み出されるもので、それは生産の一要素であるとしてコミットメント・メディアに範疇化され、サービスは生産過程のアウトプットとして政治的意味での権力メディアに範疇化されている。

生産物アウトプットとしてLからGへ「役目に関する権力の正当化」に権力メディアが流れ、GからLへ「集団の利益に対する道徳的責任性」にコミットメント・メディアが流れている。ここで「集団の利益に対する道徳的責任性」は、自我と他者に対する価値の共有と表と裏の関係であるとされている。要素インプットとしてLからGへ「権威の正当化」にコミットメント・メディアが流れ、GからLへ「作用している責任性」に権力メディアが流れている。

信託システム(L)と社会的共同体(I)の相互交換について。生産物アウトプットとしてLからIへ「忠誠への価値を基礎とした要求」に影響力メディアが流通し、IからLへ「共通価値に対するコミットメント」にコミットメント・メディアが流通している。要素インプットとしてLからIへ「価値づけられたアソシエーションへの委託」にコミットメント・メディアが流通しており、IからLへ「忠誠の配分に対する正当化」に影響力メディアが流通している。影響力メディアには、連帯的な結合が価値実現の成功にとって第一条件であるとされている。社会システムが高度に分化していくほど、どの単位の所属もますます多元化していく。価値コミットメント・メディアに関して、多元化する近代社会にとって忠誠が価値実現に重要であることが理解できた。

価値コミットメント・メディアの機能についてみてみよう。

価値コミットメント・メディアが一般化されたシンボリック・メディアとして機能するために、第一に必要な条件として物々交換ないし帰属性に限定するのではないことをあげている。すなわち普遍的に通用するメディアであるとしている。シンボリック・メディアはすべて、価値システムをもとにそれに適合するように行為システムを束縛しており、資源の組合せを促進・抑制して流動している。価値コミットメント・メディアはパターン維持システムに繋ぎとどまっているが、そこでの価値原理は完結性である。完結性とは、価値実現過程においてパターンへのコミットメントの完結性を維持するということである。ここで価値コミットメント・メディアの範囲は、序数による順位づけに従うとされている。

価値コミットメントは、自我と他者が共有する価値によって道徳的に拘束を与える義務を活性化する一般的メディアである。価値コミットメント・メディアは、その活性化のために働き、道徳的裁定を背景にして生じる。自我が他者のコミットメントを活性化することは、シンボリック・コミュニケーションを通して、自我が他者に対して、道徳的自由を他者が行使するために「状況を規定する」のを助けることを意味する。

価値コミットメント・メディアの制度的なコードに、道徳的権威がおかれている。この道徳的権威は、個人においても集合体においても、コミットメントの完結性に対する評判を通して得られる。またコードの調整基準に、型の一致性があげられている。型の一致性は、自由のバランスを維持して自分の道徳的判断が尊重されるところに成り立つとされている。価値コミットメント・メディアは最も上位の機能を果たすことになるが、そこでは道徳が重要とされていることが理解できる。

また高等教育をパターン維持下位システムのなかに位置づけ、社会と文化システムとの相互的に浸透する領域にあるとしている。パーソンズはその主要な価値原理を認知的合理性とよんでおり、それは経済的合理性や政治的合理性よりもサイバネティックな意味では上位におかれている。高等教育の大切さは、現代においても続いている。

**第2部**は、一般行為システムにおけるシンボリック・メディア、パーソンズによるパレート理論の把握、システムとしての人間的条件におけるメディアを検討した。

**第6章**では、一般行為システムである行動有機体、パーソナリティ・システム、社会システム、文化システムの相互交換過程から導き出される知性、遂行能力、感情、状況規定というシンボリック・メディアの性質について整理した。結びにおいて、筆者は状況規定メディアに替えて、試案として‘共感’をメディアとして置くことを提示している。

一般行為システムは行動システム、パーソナリティ・システム、社会システム、文化システムに四分割され、各システムに係留しているメディアとして知性、遂行能力、感情、状況規定が考えられている。ここでは知性メディアと感情メディアについてみていきたい。

知性メディアは知識(Lシステムに属する)、能力(Gシステムに属する)、合理性(Iシステムに属する)をつなぐ役割を果たすものとして、行動システム(Aシステム)から考え出されている。知性メディアとは、認知的な問題を解決するために必要な諸資源を動員するための個人である行為単位の能力であると定義されている。その特徴に知性メディアは遺伝的な影響も大きいけれども、それは社会化と学習過程を通して主に獲得されるということ、問題解決に使用することができることをあげている。そして使った知性メディアは回復することができるという。行為者は経験から学習して、その次の時には失敗をしないように前よりはうまくできるように経験を活かしていくことをあげている。このように、パーソンズは流動する資源として知性メディアを扱っている。

文化システムと社会システムは、「認知的合理性」という価値によってつながっている、そして認知的合理性は文化システムに属するとされている。知性メディアと社会構造との関係について、認知的複合体が制度化されている例として大学を取り上げている。大学という組織にふさわしい専門用語に「合議制的アソシエーション」を、パーソンズは提案している。それは‘寄り集まって相談して物事を決めていく結社’を意味している。合議制的アソシエーションは価値の信託という要素をもっており、より上位の行為システムやそれに関連した階層の型に組み入れられていることに対する責任を持っている。

大学が重要視されるのは富や権力の中心になってきたからではなくて、ある種の資源を

動員する際を中心になってきたからであるとしている。ここである種の資源とは、認識的合理性のことをいう。大学が認識的合理性を生み出して、それを動員する中心になってきたことを、パーソンズは主張している。近代社会の発展には、知識あるいは知恵がより重要になる。情報社会といわれる現代において、大学や大学院などの高等教育機関の役割は重要性を増している。

感情メディアとは、個人が行為している社会的環境の内部で生じるさまざまな変化に対して、社会システムの道徳的秩序からみて重要な安定した状態になるように調整されるメディアであると定義されている。感情メディアは、係留している社会システムが二重の役割をしていることから循環すると捉えられている。それは、一方において社会システムは個人が第一に適応している環境であるということであり、他方において社会システムは行為システムの一部であるからである。感情メディアは社会システムの内部だけではなく、文化システム、パーソナリティ・システム、行動システムのそれぞれの下位システムの間を循環している。すなわち行動システムのi機能にある感情能力は、社会システムのi機能にある社会的共同体につながっていて、社会システムの価値原理である連帯の要素に働きかける。連帯の要素は、パーソナリティ・システムから「社会的対象のカセクシス」として社会システムへ流動してくる遂行能力メディア、文化システムから「社会的秩序に対する道徳的基準」として社会システムへ流動してくる状況規定メディア、行動システムから「感情の配分に対する理性的根拠」として社会システムへ流動してくる知性メディアに依存している。このように行為システムと社会システムは連結している。

また感情メディアの属している社会システムでは、信託システムが最上位概念であり、そこでは道徳的秩序が重要とされている。道徳的秩序は、統合の価値になっている連帯の関係をなによりも規制する。行為をする際に連帯は重要な価値原理であるが、その上位に道徳的秩序がある。したがって、私たちは道徳的秩序を考慮に入れて連帯の価値を実現するように行為することが要請されているといえる。

**第7章**では、パーソンズがパレート社会学から受けた影響について論じた。まず社会システム、社会均衡、社会的効用という概念がそれである。つぎに方法論について見てみよう。パレートによる社会科学の方法論は、物理学や数学など自然科学における論理－実験的な方法を経済学や社会学に論理－実証的に適用しようというものである。それゆえ社会学研究の目的に、社会的斉一性(社会の法則)および社会的事実間の相互事実関係の探究をあげている。ここでの斉一性とは、近似的なものである。理論と実証は独立しているのではなく、相互に補完しあっている。事実はデータで表され、実証可能である。このようなパレートの考え方を、パーソンズは支持している。また晩期で主に展開される“シンボリック・メディア”という用語が、『社会的行為の構造』(1937)のパレートに関する章で初めて出ている。パーソンズの行為に関する考え方は、初期から晩期まで一貫したものがあつたと考えられる。

パーソンズは、行為における目的に対する手段の選択には、内在的合理性の基準とは別



に象徴的適合性の基準が含まれていると主張している。儀礼的行為の目的－手段関係を支配する規範的側面は、原因－結果の関係ではなく、シンボル－意味の関係であるという。非論理的行為の場合、シンボル－意味関係とは別の規範的要素を考えねばならないとして、行為の究極的目的という要素をパーソンズは提案している。これらは、デュルケームとウェーバーの研究に続いていく。さらにパーソンズは、究極的目的や儀礼的行為も他の現象と同じように、究極的価値態度を表しているものであると主張している。ここにおいて、パーソンズは、行為における価値という要素を見出している。たぶんパーソンズは、パレートの論理－実証主義の考え方を受け継いで、シンボルを媒体として実証化の方法を模索しはじめていたと考えられる。ただシンボリック・メディアの場合、量的次元はあるが、それは序数による順位づけによって把握できるものであると、パーソンズは研究が進むにつれて主張している。

**第8章**では、システムとしての人間的条件から導かれる経験的秩序、健康、シンボリックな意味、超越的秩序のメディアの性質について論じた。

シンボリック意味メディアについては、人間が行為する際に、シンボリックな意味をもつものは何かを考えてみると、信仰、すなわち宗教に結びつくと考えられる。パーソンズの場合、宗教においてプロテスタント派キリスト教を肯定している。またアメリカの価値体系について、パーソンズはプロテスタント派キリスト教の考えを使って分析を行なっている。抽象的であり現実とかけ離れているかのようであったシンボリック・メディアが、実践的なことと結びついてきたこと、つまりシンボリックな意味メディアが、生活上の基本的な価値委託の問題と結びつくことを理解することができた。

シンボリック意味メディアの志向のカテゴリーに「生成変形(Generativity)」がおかれている。これは言語学的にはチョムスキーの語法を借りたものである。そして、シンボリック意味メディアの評価基準には「解釈(Interpretation)」がおかれ、M・ウェーバーのいう「理解(Verstehen)」と密接な関わりがあるとされている。これは行為論の主体となる側面と客体となる側面との間の均衡を維持することの困難性というレベルに関するもので、ウェーバーの場合、相互行為という観点から接近して、行為している個人としての主体が理解の用語をとり扱うにちがいないとしたものである。パーソンズは、ウェーバーの考えをさらに発展させた。すなわち彼は行為をする際の評価の基準にシステムという考えをとり入れて、相互理解、言い換えれば行為をパターン別にとらえ、システムの相互に理解して解釈するという意味で、「解釈」という用語を用いたものと考えられる。

システムとしての人間的条件から経験的秩序メディア、健康メディア、シンボリックな意味メディア、超越的秩序メディアの四つが、‘一般化されたメディア’として導かれている。パーソンズはシステムとしての人間的条件のレベルにおいて、相互交換のメディアがつねにシンボリックでありえないという。その理由にシンボリックな現象と関係が、人間の行為レベルに閉じ込められている点をあげている。

具体的には、経験的秩序メディア、健康メディア、超越的秩序メディアにおいてはシン

ボリック性を認めていない。そして行為システムに属しているシンボリックな意味メディアにのみシンボリック性を認めている。シンボリックな現象と人間の関係は、行為においてだけみられるというのである。しかしパーソンズは、他の三つのメディアについて“一般性”“相互交換”“媒体であること”の性質は認めている。

第9章では、システムとしての人間的条件のパラダイムについて再検討を加えた。パーソンズは、人間的条件システムを機能的に物理的—化学的システム(A)、人間有機体システム(G)、行為システム(I)、テリック・システム(L)に四分割しており、それらの下位システムをさらに四分割している。人間有機体システムには生態学上の適応(a)、表現型としての有機体(g)、生殖個体群(i)、遺伝子の継承(I)がおかれており、テリック・システムには究極的行為主体(a)、究極的成就(g)、究極的秩序(i)、究極的根拠(I)がおかれている。ここで人間有機体システムのパターン維持機能に、遺伝子の継承をおいている点は生理学者ヘンダーソンや生物学者マイアが留意しなかったことであり、パーソンズ固有の考え方が反映されている。

パーソンズは、行為システムが他の三つのシステムの働きを統合する人間の心に関係するとして、シンボリックなものであると見なした。また人間だけがシンボリックな意味のレベルでの言葉や文化を持っており、生命システムの中で人間だけがテリック（究極的な目的）の問題を持っていることを強調している。

第10章では、人間的条件のメタ理論、つまり理論の理論を分析対象として検討した。パーソンズは、上記のように人間的条件のうち行為システムにだけシンボル性を認めておりが、それをシンボルが認識に関係していることをカントの説を用いて説明している。また、言語に関連する主要な機能に表現とコミュニケーションをあげ、コミュニケーションの機能の方が表現の機能より重要であると捉えた。パーソンズは言語を自由度と普遍性という点から検討して、一般化されたシンボリック・メディアには入れないで、シンボリックな意味メディアのコードに位置づけているのである。

一般行為システムにおける文化システムは、認識的シンボル化(a)、表現的シンボル化(g)、道徳評価的シンボル化(i)、構成的シンボル化(I)に分割されているが、それはカントの『純粹理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』の内容にあてはまる。『実践理性批判』は道徳について記述しているが、それは道徳評価的シンボル化に反映されている。カントの道徳についての考え方は、デュルケームやウェーバーの道徳観にも影響を与えているが、パーソンズにおいても道徳を社会秩序にとって最も基本にあるものとして重視されている。

『判断力批判』は、美的判断力と目的論的判断力について論じているが、パーソンズにおいては表現的シンボル化として反映されている。パーソンズは、カントが批判を向けなかった領域にテリック・システムをあげて、構成的シンボル化に反映した。構成的シンボル化には、超越的秩序があるからである。

次に、システムとしての人間的条件における物理的—化学的システム、人間有機体システム、テリック・システムの相互関係について整理する。物理的—化学的システム(A)と人

間有機体システム(G)の関係について:人間有機体システム(G)から物理的-化学的システム(A)に向かって「適応能力」が、反対にAからGに向かってはヘンダーソンのいう「環境への適合」があてはめられている。人間有機体は環境に適応する能力を持っているが、環境問題も考慮していかなければならないことが理解できる。

テリック・システム(L)と物理的-化学的システム(A)の関係について:物理的-化学的システム(A)からテリック・システム(L)へ向いた矢印には、「自然の秩序」があてられ、LからAへの矢印には「自然への理解」があてられている。AとLの相互浸透の領域では、自然を媒介にしている。人間の身体を構成している元素、精神の究極的なものは人類を超越したもの、神によって創造されたものであることをパーソンズは示唆している。

テリック・システム(L)と人間有機体システム(G)の関係について:テリック・システム(L)から人間有機体システム(G)には「審美的判断のカテゴリー」がおかれ、反対にGからLには「動機づけの有機的構成要素のパターン」がおかれている。人間有機体システム(G)は生と死、生殖、性や年齢による相違等を含んでいる。テリック・システム(L)には、宗教的意味のカテゴリーが位置し、そこでは行為をひきおこす感情(affect)と結びつく志向の次元が重要とされている。そしてこのカテゴリーについて、快樂と苦痛という分け方よりも、幸福と不幸という二分法をパーソンズは提唱している。これはアリストテレスが「ニコマコス倫理学」の中で、人生の目的として幸福に生きることをあげていることと共通している。

第11章では、パーソンズが物理的-化学的システムをウィーナーおよびヘンダーソンの説を取り入れて分析していることを跡づけている。またパーソナリティ・システムの分析がフロイトの説をもとにしていることを明らかにした。

システムとしての人間的条件の物理的-化学的システムには、ウィーナーの説を採用して、燃料物質(a)、エネルギー(g)、情報(i)、不活性物質(I)がおかれ、またヘンダーソンの説を採用して、炭素(a)、酸化作用(g)、酸素(i)、水(H<sub>2</sub>O)(l)を、さらに新陳代謝(a)、複雑性(g)、調節(i)、水(l)がおかれている。そしてウィーナー、ヘンダーソンともに有機体内部、有機体と物理的領域との間の関係に秩序があることを強調している。なお土(a)、火(g)、空気(i)、水(l)は、ギリシャ哲学者のアリストテレスとタレスの説を取り入れたものである。

また一般行為システムのパーソナリティ・システムに動機づけの資源(a)、現実態への志向(g)、良心(i)がいわれているが、それはフロイトのイド(a)、自我(g)、超自我(i)に影響をうけている。そして(l)に自我の究極目標として、人格の確立をおいている。

パーソンズは、有機体エネルギーと物理的エネルギーは同じものではなく、異なるものであると主張する。そしてフロイトのいうリビドーの構成要素に、シンボリックな意味のあることを提案している。

物理的エネルギー(A)と有機体エネルギー(G)との関連は、物理的要素や化学的要素に単に関係しているのではなく、生物システム全体と関係している。このような議論を有機体レベル(G)と行為レベル(I)の相互交換にも、パーソンズは拡張させている。さらに彼は、同様な関連を行為システム(I)とテリック・システム(L)の間にも考察している。テリックの問題

をヘンダーソンとウィーナーは取り上げていないが、パーソンズは言及している。パーソンズは、人間の行為は主にシンボリックな意味から成ると主張している。またウィーナーの「サイバネティックス」理論を行為理論の分析にも適用している。

以上が、第1部と第2部において明らかにした諸点である。

## 第2節 相互交換メディア、特にシンボリック・メディアの重要性

### 1. 社会構造分析とシンボリック・メディア

パーソンズの機能分析は、システムを拠り所に行っている。

パーソンズは「社会システム」と「文化システム」の区分を明確にすることを大切さを言い、この「システム準拠」をできるだけ明確にしなければ、大きな混乱に陥るとして、もっとも重大な命題とした。どのようなシステムが機能的問題を提起して、それに回答しようとするための準拠であるかが明瞭であることが重要であるとしたのである。そして、次のように主張する。

(1)機能分析の地位は、通常の意味でのいかなるイデオロギー的含意からもまったく独立している。特に、それは政治的保守主義とか現状の擁護とは何のかかわりもない。機能分析は本来、社会システムにおける統合の要素と闘争および解体の要素との規定的なバランスに関する意見とは、何の関係もない。

(2)「機能主義者」は社会変動を説明できないとの批判に対しては、パーソンズは次のように主張する。すなわち、機能主義者の理論類型は、本来的に「静態論的」偏向をもっていると言われるが、この主張もまたまったくの誤りである。もし社会学者としての能力をいささかでも請求する権利があるならば、われわれは積極的な統合と統合不全の問題があるように、安定と変動双方の問題があるということを十分に承知していなければならない。これらの問題に対して研究者がどちらの方向をむくかは、彼が賛同している一般理論の類型の問題なのではなく、彼のより経験的な関心と経験的な判断の問題なのである

(Parsons 1977, 田野崎監訳 1992:143)。

すなわち、パーソンズの機能分析はシステムに準拠し、この機能分析の地位はどのようなイデオロギーからも独立しているという。そして機能主義者の機能分析は静態論の傾向があると言われるが、このことに真っ向から反対して、パーソンズらの機能分析は動態論的であると強調している。

社会システムを機能分析することから、シンボリック・メディアは生まれた。そしてパーソンズは構造と機能が対概念となるのではなく、「構造」と「過程」を貫く概念が「機能」であると主張している(同前:135)。これらのことから、機能分析にとってシンボリック・メディアは重要であるばかりでなく、社会構造を分析する際にも意義があると考えられる。

パーソンズは最初の著作『社会的行為の構造』(1937)においてパレートを論じる際に、シ

ンボリック・メディアという用語と概念を見いだした。そして『社会システム』(1951)において、社会をシステムとして捉え、さらに社会システムを経済、政治、社会的共同体、信託システムに四分割した。この機能的に四分割された細胞(セル)の間に、生産物や要素が情報として相互交換されていくとして、「相互交換の一般化されたシンボリック・メディア」(interchanged generalized symbolic media)が考え出されていった。

最初は、経済領域における貨幣の発見であった。例えば経済領域(A)は政治領域(G)との間で資源動員システムが働き、要素として(A)から(G)へは貨幣メディアによって<生産の統制>が運ばれ、(G)から(A)には、権力メディアによって<有効性の機会>が運ばれている。また生産物として(A)から(G)には、権力メディアによって<集合体へのサービスの委託>が運ばれ、貨幣メディアによって<物流的資産の配分>が運ばれている〔58頁参照〕。このように、経済領域(A)と政治領域(G)の間では貨幣と権力のシンボリック・メディアが動員され流通している。

このようにパーソンズは貨幣、権力などのメディアを固定的なものとして捉えるのではなく、諸システム間で他のメディアと交流をはかり、動員、流動しているものと捉えた。ここではA,G,I,L間における縦、横、ななめの相互交換におけるメディアの流通が重要な意味をなしていると考えられる。

その上で彼は「一般化された相互交換のシンボリック・メディア」(シンボリック・メディアと略称)と証するものの行為過程における役割について論じていったのである。典型的な例は「貨幣」である。高度に発展し分化した経済システムにおいて、貨幣は極めて重要な役割を果たしている。貨幣は情報としては高次であり、エネルギーとしては低次の現象の一つの範式化された例である。古典派経済学者たちによって明らかにされていたように、貨幣は交換価値をもつが使用価値をもたないと定式化されていた。それは本質的に、シンボリックなコミュニケーション現象だからであると、パーソンズは主張する。

パーソンズが言おうとしたことの一つに、相互交換のメディア(貨幣、権力、影響力、価値コミットメント、知性、遂行能力、感情、状況規定)<sup>1)</sup>は、機能分析の中核的な部分であり、社会システムにとどまらず諸行為システムの動的分析の一層の進展を大いに期待させる、というのがある(同前:151)。理由は、つぎの二つである。第一に、メディアは本質的に社会システムや他の行為システムのさまざまな単位要素間での相互行為にかかわる交換の流れを調整する機構として作動するからである。第二に、メディアはサイバネティクスの準拋枠にきわめて明確に適合しているからである。メディアは一様にすぐれてエネルギーの交換ではなく、情報の交換のための機構であり、たとえば諸要素と生産物の配分と結合を制御する機能をもっているのである(同前:152)。

このようにパーソンズは、各メディアの間を流れる生産物と要素の交換は、エネルギーのやり取りではなく、情報のやり取りであると考え。すなわち、メディアの働きによる生産物と要素の交換は、エネルギーとして単に物理的に行きかっているのではなく、判断を下したり行動を起こしたりするために必要な知識が行きかっていると理解することがで

きる。各メディア間を生産物と要素が、単にモノとして行きかっているならば、それは意味をなさない。人と人之間をこれらのメディアが行きかうことによって、それは行為を動機づけたり正当化したり、あるいは抑制するという情報になる。

社会構造を機能的かつ動的に分析する際に、社会システムの貨幣メディア、権力メディア、影響力メディア、価値コミットメントメディアは有効であると考えられる。

## 2. 社会階層分析と影響力メディア、感情メディア

パーソンズは、1960年代のアメリカ社会を分析するためにシンボリック・メディアが重要な役目を果たすとし、その分析の一つに階層分析をあげている。本節では、階層分析に影響力メディアがどのような有効性をもつのか、階層分析における影響力メディアと感情メディアの関係について検討していきたい。

### <1> 階層分析と威信からみた階層の分類

社会システムのシンボリック・メディアの構成要素をみてみると、制度的なコードとして貨幣の場合には財産制度、権力の場合には権限(authority, 権威)、価値コミットメントの場合には道徳的権威となっており、影響力の場合には威信になっている〔19頁参照〕。

影響力メディアは意図的な行為を通して他者の態度や意見に作用していくもので、説得の一手段である。威信のある方が説得力がある。それゆえ、威信は影響力メディアの構成要素の一つである。影響力メディアの規範的原理に準拠しているものは評判であるとされ、評判は威信に基づいてなされると考えられる。

パーソンズは次のように述べる。

階層(stratification, 成層)<sup>2)</sup>という結束体(bundle)の場合、その主要な範囲を貫く軸は、より高い威信(prestige)水準のなかに何らかの地位を有するような、さまざまな広義の「社会的」類型に関わっている。概して階層への加入は、親族的な帰属によってではなく業績達成如何によって行われている(同前:299)。

つまり階層の主な範囲を貫く軸は、より高い威信のなかに地位を持っているような広い意味での社会の類型に関与しており、階層への加入は業績達成によってなされることが多いと理解できる。そしてパーソンズは、階層を威信という観点から分類する。威信とは威光と信望のことであるが、それは教育の機能の核でもある。

階層の分化については、次のように記されている。

階層について次の主要な次元は、われわれが水準と呼んできているもので、人間行為の諸システムの諸構成要素間のサイバネティック的階統をさしている。そして、その威信が主として文化的能力と業績達成とに基礎づけられるような集団の存在が、今世紀になって注目を集めるようになってきた(同前:302)。

階層が分かれていくことは、行為のサイバネティック的階統制によっている。その威信によって文化的能力と業績達成に基礎づけられる集団が、階層の中核となっていく。

階層は年齢、財産、職業、学歴、身分などが尺度となって社会経済的地位によって作られていくが、近代社会では主に職業が地位と収入に関係している。その意味で高等教育を受けることは、威信を身につけ高い地位に着くための最も重要な通路となっている。

かつて、実業家は「地域社会の当然の指揮者」であると言われてきた。パーソンズは、比較的高い威信をもつ人びとがさまざまな種類の「影響力をもつ人々」の複合体をなしているという。このことは、現代社会においてもいえる。

彼は階層集団の連続体の一方の端に、地位の文化的基盤——それは道徳的基盤へと移行していくが——に基づいた威信への正当な要求がなされている集団を置き、この連続体の第一の分野に次のような事例をあげている。(1)大学の研究者、それから学長などという最高管理者よりむしろ専門研究に従事する部類の人びと。(2)大学社会の内外にいる「知識人」と呼ばれる、どちらかといえば曖昧に定義された範疇に属する人びと。(3)さまざまな宗教の牧師。(4)文学界を代表する人びとを含む芸術家たち。(5)大学の研究者とは区別される伝統的な意味での「専門職の人びと」(同前:300)。

第二の分野には、政界と実業界のかなり上層部分に属する人びとを置いている。そして第三の分野に、より大きな階層システムのなかには十分には統合されていない様々な運動の指導者層が含まれるであろうとし、例として、市民権運動や女性の権利獲得運動の指導者たちをあげている(同前:301)。

以上のように、パーソンズは威信によって階層の分類をが試みた。彼は多人種からなるアメリカ社会の統合を願っていた。新しい階層に入っていくには、業績主義、専門性重視からなる大学教育を身につけることの重要性を訴えた。属性主義ではなく業績主義といわれる現代の階層は、主に職業を通してはかれる。高等教育は、職業上の高い地位へつづくための大きな機会となっているのである。

確かに教育ある人々の一団は、社会的共同体を構成する威信上、指導性という点でもっとも重要な要素になりつつあり、したがってその階層システムの中核になっていく。高等教育あるいは大学教育を受けることによって、威信が培われていく。それはよりよい社会の実現に働き、また秩序ある社会の形成にも役に立つのである。

## <2>階層分析における文化的能力の不平等と影響力メディア

パーソンズは、現代社会の特徴の一つに構造の多元性をあげており、現代は多元的社会システムに準拠しているという。そして階層もしくは地位不平等を制度化することは、本質的な不平等の正当化、つまり正当視することであり、それは社会システム内の秩序問題の解決に必ず役立つという(同前:450)。

パーソンズによれば、現代社会が多元的であるというのは、次の二つのことを意味している。一つに現代社会は、分化し連結し、地域共同体の単位から成る非常に複雑な合成物であるということ、もう一つは、職業が機能的に限定的な役割に関係していることがあげられる。これに関係して、現代社会の階層に関わる統合問題の本質を明らかにするために、

平等対不平等、生得主義対業績主義は独立変数として扱われるべきである、とパーソンズは主張する(同前:458)。ここに社会システムにおける4つの一般化されたメディアを活用することができる。

平等—不平等問題が起こる特殊な脈絡に、価値特殊化に関するものがあり、そのうちのひとつに特に重要な脈絡がある。それは信託複合体である。「信託」複合体の他の構成要素は、専門職の複合体である。専門家の能力は、一つあるいは一組の知的訓練から成る知識の優越に根拠をもつ。パーソンズが「能力の隔たり」(能力のギャップ, *competence gap*)と呼んできたものは、専門職複合体における不平等要素を必然的なものにする。たとえば医者と患者、弁護士と依頼人、教師と学生間の能力のギャップは、専門的知識という点で不平等要素がある(同前: 471)。

個人のもっている能力の不平等が、業績の不平等、収入の不平等に関係してくる。ここで経済の場合や政治の場合のように目に見える不平等ではなく、それらを導く文化的なことに関係している能力の不平等という潜在的なものに着目した点は、パーソンズの大きな特徴であると考えられる。

専門職複合体は、社会で機能を遂行するに際して手段的としての影響力のみならず、統合的機構の焦点としての潜在力を持っている。手段としての影響力と統合の焦点としての潜在力は、平等の型とともに、能力と権威に基礎づけられた必要な分化を均衡させる過程を通じて作用していく。

このように現代社会のパターン維持下位システムの分化していく重心が、専門職複合体など高等教育システムにあるなら、文化的能力に関して不平等の正当化ということが生じる。このことは、階層分析における影響力メディアの有効性の一つと考えられる。

### <3>影響力メディアと感情メディアの関係

社会システムにある影響力メディアと一般行為システムにある感情メディアは、それぞれのシステムにおいて統合の位置にあり関係している。

影響力メディアについて、パーソンズは次のように述べている。

階層化が特に目立つ領域では、相互交換の一般化されたシンボリック・メディアのうち影響力の機能が二重に統合的である点で決定的に重要である。社会システムが行為の一般枠組みにおいて「動機づけ」要素と文化的要素との統合の主要な焦点である。行為の脈絡において、文化的様相のなかでも規範的様相すなわち道徳的価値が優先する。行為の「動機づけ」要素のなかでも、個人間の統合的意味と同時に、より原生的な動機づけ要素である感情の範疇に優先権を与えている。ここで道徳的価値と感情の二つの側面は、社会システムの一般化されたメディアとしての価値コミットメント概念に含まれている。二つの側面は、また影響力メディアの作用条件でもある(同前:485)。

ここでは、社会システムが動機づけ要素を含むパーソナリティ・システムと文化的要素を含む文化システムを統合しているということ、文化的要素のなかでも道徳的価値が優先



するということ、道徳的価値と感情は社会システムの価値コミットメント・メディア概念に含まれ、これらは影響力メディアの働く条件になっていることを理解することができる。

感情メディアについては、以下のように記述されている。

感情メディアは行為の一般水準で作用しているが、主に文化的関連における状況規定メディアに平行している。しかし、感情メディアが社会システムの水準で作用的意味へ「変換する」ためには、それはまた「制度化され」あるいは「社会化され」ねばならない。このことは、二つの事柄を意味する。第一に、集合的システムに対する機能の観点から見た場合、われわれが連帯を意味しているものである社会そのものの成員の動機づけ「受容」の意味で、われわれが同一化と呼ぶものである。第二に、個人に対する多数の成員期待を構造化する、ある種の優先的システムの内面化である(同前:486)。

すなわち一般行為水準で働いている感情メディアが社会システムで働くためには、制度化され社会化されなければならない、それは次の二つのことを意味するという。感情メディアは、一つは集合的システムから見た場合、社会システムで連帯を表している成員の動機づけを受け入れるという意味で、同一化に深く関係している。もう一つは、感情メディアは個人に対する多くの期待を内面化するのに、深く関係しているというのである。

これらのことから、影響力は単位(個人)の利害(これに関しては、感情的な「かかわり」が最も重要な下位文化的要素である)と集合体の利害(これに関しては連帯が最も重要な規範的条件を提示している)との間を媒介する機構であると、パーソンズは捉えている(同前:487)。

換言すれば、影響力メディアは、一般行為システムの感情メディアが関係している個人の利害と、社会システムの価値原理となっている連帯が関係している集合体の利害とを仲立ちするメカニズムになっている。このことは、貨幣メディアと権力メディアが個人の利害から捉えられているのと大きな違いであるといえる。このように集団のレベルと個人のレベルという二重の意味で、影響力は階層化の目立つ領域で重要であると考えられる。

他方、感情メディアは、個人の動機づけという心的エネルギーを、ある文化や社会の道徳上の命令や人間のもつ欲求や期待とを結びつける重要な役割を果たしている。感情メディアによる動機づけによって、人はやる気を起し業績をつくる。また道徳的なことを学ぶ。個人に生じるこれらのことは、他者への連帯を呼び起こし影響力メディアによって集合体へと続く。すなわち感情メディアと影響力メディアは繋がっており、作用しあっている。そして社会システムの社会的共同体と一般行為システムの文化システムは繋がっているといえる。

### 3. メディアの重要性についての要点

以上論じてきたメディアの重要性について整理すると、次のようになる。

(1) シンボリック・メディアは、社会構造を機能的に分析する際の概念的枠組みを提示しており、それをレベル別に考察している。パーソンズによれば、人間の行為の領域は、複数

のシステム準拠を含まなければならない(同前:142)。つまり、人間の行為は幾段階かのシステムにもとづかなければならないと解釈できる。パーソンズの場合、それは社会システム、一般行為システムという段階であると考えられる。

(2) それまで「機能主義者」は、社会変動を説明できないと言われてきた。機能主義者の理論類型は、「静態論的」偏向をもっているというのである。しかし、パーソンズはこれらの主張が誤りであるとし、シンボリック・メディアを用いることによって各メディア間を生産物と要素が動員され流通しているの、動態論的にも分析できるという。シンボリック・メディアは、こうした社会変動を分析するのに有効であるということができる。

(3) 近代社会における社会階層を分析する際に、貨幣メディアや権力メディアだけではなく、社会の統合という観点から影響力メディアに着目したことは、パーソンズの大きな特徴である。

階層分析に影響力メディアが有効であるという点について、主に二つあげられる。一つは、影響力メディアに関係のある威信によって階層が分類できることである。実際にパーソンズは、大学で専門研究に従事する部類の人びとから様々な運動の指導者層まで、威信による階層の分類を試みている。二つ目に、影響力メディアによって文化的能力の不平等を正当化することがあげられる。それは専門職複合体における「能力のギャップ」という形で表れている。たとえば医療の場における医者と患者は、専門知識という点で大きな差がある。そこでは能力の不平等を正当視することが認められる。

影響力メディアと感情メディアとの関係を見てみよう。影響力メディアは、個人の利害と集合体の利害を媒介している。個人の利害では感情メディアが関係しており、動機づけを通して自我が作られて自己確認が行われる。集合体の利害では、連帯が関係している。影響力メディアは価値を実行する際に連帯のレベルで働き、それは個人の動機づけに関わって感情メディアを用いて同一化に作用していく。一般行為システムにある感情メディアが、社会システムで働くためには制度化され、社会化されていく。影響力メディアと感情メディアは作用しあっており、それは職業につく際の動機づけとなったり、新しい階層に入る際の力となっている。このように階層に関して影響力メディアと感情メディアは相互に関係しており、重要である<sup>3)</sup>。社会階層分析についてみると、情報化やグローバル化によって経済的格差、文化的格差が進みつつある現代社会において、1960年代にパーソンズの唱えた影響力メディア、感情メディアは今なお有効であると考えられる。

(4) 貨幣メディアは金融秩序を維持しており、権力メディアは集合体の秩序を維持している。影響力メディアはエリートと非エリートとの均衡をはかるために、それを実行する際に生じる緊張を処理するためのメカニズムとして働いている。そして社会構造を平等にしていく。価値コミットメント・メディアは、パターンへのコミットメントの完結性を維持して、価値実現をはかっていく。このように社会システムにおけるシンボリック・メディアは、それぞれの領域において秩序を維持するために働いている。そして領域間にメディアの交流があり、相互に影響し合っている。この秩序を維持する働きは非常に重要である。

パーソンズは、社会秩序はいかにして可能かという問題を「ホップズ問題」と名づけているが、そのホップズ問題を解決するためにシンボリック・メディアを見出して分析していったと考えられる。

### 第3節 シンボリック・メディアの問題点

問題点として、次の二点をあげたい。

第一は、一般行為システムにおけるシンボリック・メディアについてである。パーソンズは、一般行為システムから知性、遂行能力、感情、状況規定のシンボリック・メディアを導いているが、1978年関西学院大学に招待された講義で知性、自我の能力、集合感情、集合表象と改訂を提案している。しかし、彼は改訂した案にコード(規典)とメッセージ(伝達内容)を提示していない。

最初に示された各メディアの性質について、みてみよう。コードの種類は「意味の型」と「価値基準」に分けられている。知性メディア、遂行能力メディア、感情メディア、状況規定メディアの順に「価値基準」をみると、認識的合理性、目的合理性、同一性の調和、価値基準がおかれている。「意味の型」の意味とは、人間の行為志向と経験の規範的な秩序の両方に関わったものとして、人間性と結びつけて考えられている。各メディア順番に意味の型をみると、妥当性と意義の認識の基礎、パーソナリティに関連した意味の内面化、社会に関連した意味の制度化、人間的存在条件の意味の本質的基礎がおかれている。社会システムのシンボリック・メディアの場合、その性質を表すのにコードの種類に「価値原理」「調整基準」「制度的」の3種類がおかれ、他に保障基準、裁定の様式がおかれて、多方面から検討されている。一般行為システムの場合、そのシンボリック・メディアの性質を表すために、コードの基準に「意味の型」と「価値基準」をおいて検討している。しかし保障基盤、裁定の様式に替わるものについては、言及されていない。人間の心や精神を分析することは容易ではない。一般行為システムのシンボリック・メディアの性質について、理論的に未完成の部分が多い。

第二は、システムとしての人間的条件におけるメディアについてである。

パーソンズは、システムとして考えられている人間的条件の場合、相互交換のメディアがつねにシンボリックとはいえないという。その理由としてシンボリックな現象と関係が、人間の行為レベルに閉じ込められている点をあげている。つまり人間的条件のレベルにおいてメディアとよばれるものすべてが行為システムに内在しており、そのうちのシンボリックなメディアだけが相互交換において、人間行為システムから発出されているからであるという。

具体的には、行為システム(I)のシンボリックな意味メディアにだけシンボリック性を認めているが、物理的-化学的システム(A)の経験的秩序メディア、人間有機体システム(G)

の健康メディア、目的システム(L)の超越的秩序メディアにはシンボリック性を認めていない。パーソンズは、上記の 4 つのメディアについて“一般性”“相互交換”“媒体であること”の性質は認めている。

社会システム、一般行為システムにおけるメディアの場合、シンボル性は何ら問題とされず、これらのメディアにはシンボリック性を認めている。しかし、システムとしての人間的条件においては、行為システムにあるシンボリックな意味メディアにのみシンボリック性を認め、他の 3 つのメディアには認めていない。

パーソンズは、人間の行為においてのみシンボリックな現象との関係性を見る。「システムとしての人間的条件の構造」の図をみると、物理的-化学的システムは<生命システムの物質的基礎>とされ、人間有機体システムは<目的論的な基礎>とされ、テリック・システムは<行為の意味の根拠>と名称がつけられている。そして行為システムだけに<シンボリックな組織>となっている [149 頁参照]。

システムとしての人間的条件のメディアの性質をみてみよう。コードの種類には「志向のカテゴリー」と「評価の基準」がおかれている。「志向のカテゴリー」は、主にメディアが作用する機能的問題分野であり、「評価の基準」は、メディアを使用した結果の評価に関する基準であるとされている。経験的秩序メディア、健康メディア、シンボリックな意味メディア、超越的秩序メディアの性質について順にあげると、「志向のカテゴリー」には因果律、目的志向性、生成変形、超越性がおかれ、「評価の基準」には説明の適切性、診断、解釈、批判がおかれている [152 頁参照]。システムとしての人間的条件においても、社会システムの保障基盤、裁定の様式に替わるものについては触れられていない。システムとしての人間的条件のメディアの性質について、理論的に未完成であるといえる。

相互交換の「一般化されたシンボリック・メディア」とは、各システムの資源の流動によって生み出された、‘普遍的に通用するイデオロギー(思想)を取り除いた媒体’ということができる。パーソンズはコミュニケーションの道具という視点から、このメディアを取り扱っている。それゆえ、メディアは定性的に論じられている。メディアの機能については、メディアは間接的であるとし、もしシステムの中で利害関係から闘争が生じるなら回避したり調整して統合することができるかどうか、とくにシステムの部分間で調整された、または組織された内部関係の範囲を拡大することができるかどうか、がメディアとして重要な問題であるとされている。

パーソンズのシンボリック・メディアは、社会システムにおいては理解しやすい。ところが一般行為システムになると、様相が変わってくる。社会システムの場合は、社会で起きている現象を扱っているが、一般行為システムの場合は、人間の内面をシンボリック・メディアの対象にしているからである。さらに人間の存在に関係しているシステムとしての人間的条件になると、人間の身体を構成している元素から人間有機体、究極的な目的であるテリックまでを対象にしてメディアを考えているので、抽象度が高くなっている。そこに信仰の概念も加わり超越性が生じてくる。こうしてシンボリック・メディア、メディ

アの理論は、システムのレベルが変わるにつれて理解することが難しくなっている。システムのレベル毎に 4 機能に分割しているが、どこかで無理が生じている。またパーソンズは、システムとしての人間的条件から生命システム<sup>4)</sup>へと広げているが、生命システムの場合、4 機能には分割しきれないとしている。

パーソンズ理論は抽象的で観念的である。しかし彼は行為の上位概念に価値をおき、価値を制度的に支えたり、基準とするものに道徳を重要視している。また行為が最終的に信仰につながり、それが生きる目的につながっているという点で宗教を重要としている。すなわちパーソンズ理論の根底には道徳と宗教が脈打っているといえる。このことは、パーソンズの理論は難解であるが、何か人びとを引きつけている要因であると考えられる。

#### 第4節 従来のパーソンズ研究に対する本論文の貢献

(1) シンボリック・メディアについて論じた主な研究者のうち、高城は権力メディアについて、ゲルハルトは影響力メディアについて論述しているが、他のシンボリック・メディアについては触れていない。関連する諸研究論文においても、シュルツ・シェーファーは社会システムのメディアについて言及しているが、一般行為システムのメディアについては述べていない。チェルニコは、社会システムのシンボリック・メディアを基礎に、ルーマンやハーバーマスの理論を取り入れて実証への理論化を試みているが、一般行為システムのメディアについては触れていない。ホン ファイ チャンは、感情について独自の視点で論じているが、他のメディアについては述べていない。油井は健康メディアについて論じているが、他のメディアについては論じていない。

以上のように、パーソンズ理論におけるシンボリック・メディアを個々に扱った研究はあるが、シンボリック・メディアの全体像、さらには相互交換メディアの全体像を検討した研究は、筆者の乏しい知識においては見当たらなかった。

(2) 本論文は、社会システム、一般行為システムから生み出された 8 つのシンボリック・メディア、システムとしての人間的条件から考え出された 4 つの交換メディアについて、一つずつ可能な限り詳細に検討し、それぞれの性質や役割を、パーソンズの各レベルのシステム論との関連で論じてきた。パーソンズの相互交換メディア全般を扱った研究が見当たらないなかで、本論文は、シンボリック・メディアに主要な関心を置きながら、それぞれの相互交換メディアの成立過程、性質、相互交換過程、役割を詳細に解明したものである。

(3) 今までのパーソンズ研究において、シンボリック・メディアの意味、役割、また非シンボリックなメディアとの相違などが必ずしも明確ではなかった。本論文は、各シンボリック・メディアのシンボル性の意味または特性を整理し、他のメディアの意味や役割を明らかにしながら、それらの機能と関連性を明らかにした。

以上の諸点において、パーソンズのメディア論の全体像、それを通してパーソンズ理論

の全体像の理解や解明に、幾分なりとも貢献できたのではないかと自負している。また、相互交換メディアによる各システム間のインプットーアウトプット関係は、各システム内およびシステム自体の変動という動態論的分析の可能性を示しており、その点も明らかにできたと考える。

(4) 筆者は、パーソンズのシンボリック・メディアを研究していくなかで、パーソンズは単に、社会システムから一般行為システム、人間的条件システム、さらに生命システムと拡張壮大なパラダイムを提示しようとしていたのではないと考えている。

パーソンズの『社会体系論』(1951)を読んでいくと、パーソンズはパレートの考えを受け継いで、幸福を測る基本尺度を探究していたと考えられる。ただパーソンズは、数学よりも生物学的思考を重視したので、シンボリック・メディアについても定量的には表現されず、定性的に記すにとどまっている。経済学の領域についてみても、アルフレッド・マーシャルは効用(満足度)の基本尺度の重要性を主張しているが、マーシャルも数学よりも生物学的思考を重視し、それゆえ効用について量的ではなく、順序数で測られるべきだと述べている。後に新厚生経済学者たちによって、効用は量的に表現されるようになった。

社会学におけるパーソンズのシンボリック・メディアも、今後は定量的に表現される地平が開ければ、より実証的な研究に結びつけることができるのではないかと考えている。その可能性をパーソンズ自身も試みており、社会構造分析、階層分析の事例がそれであった。今後の更なる可能性を筆者も探究していきたいと考えている。

## 第5節 残された課題

残された課題として、次の二つをあげたい。

第一は、一般行為システムにおけるシンボリック・メディアの更なる検討である。パーソンズは、一般行為システムの知性、遂行能力、感情、状況規定のシンボリック・メディアに替えて、後にデュルケームの考えを取り入れて知性、自我の能力、集合感情、集合表象を提示している。しかし、詳しくは論じていない。筆者はパーソンズの最初の案に対して、状況規定の代わりに共感を試案として提案したが、これもコードとメッセージを検討してはいない。人間の内面を対象に行為を司るものを導くことは容易ではないが、再検討の余地が残されている。

第二は、システムとしての人間的条件におけるメディアの再検討である。システムとしての人間的条件からは、経験的秩序、健康、シンボリックな意味、超越的秩序のメディアが導かれている。パーソンズはシンボリックな意味メディアにのみ、シンボリック性を肯定している。人間の存在に関する条件が、果たして四機能に分割できるのかどうかも含めて検討の余地がある。

注

- 1) パーソンズは、これらの相互交換のシンボリック・メディアについて W.I.トーマス、フロイト、ピアジェに多くを負っている(Parsons,G.M.Platt, The American University, 1973 参照)。
- 2) 翻訳書では stratification を成層と訳しているが、本稿では階層と記すことにする。
- 3) 田野崎は 1981 年の論文「晩期パーソンズの理論的展開」において、パーソンズが A,G,I,L の中で統合の機能をもつ I を最も重視していることを指摘している。影響力メディアは社会システムの I に、感情メディアは一般行為システムの I に係留しており、このことは田野崎の指摘に合致する。
- 4) living systems, 生きているものは、すべて相互依存の関係にあることを意味している (Parsons,1977)。パーソンズは、生命システムをどのステージ(段階)にも連続しているシステム、すなわち社会システム、一般行為システム、システムとしての人間的条件というように、三つのシステムの背景につながっているシステムと捉えている。

<引用・参考文献>

I. タルコット・パーソンズの文献

- Parsons, Talcott, 1934, Some Reflections on “The Nature and Significance of Economics.”, *The Quarterly Journal of Economics*, vol.48, pp.511-545.
- , 1937, *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*, McGraw - Hill. (稲上毅・厚東洋輔・溝部明男訳, 1974-1989, 『社会的行為の構造』全五巻, 木鐸社)
- , 1951, *The Social System*, The Free Press. (佐藤勉訳, 1974, 『社会体系論』青木書店)
- and E.A. Shils, eds., 1951, *Toward a General Theory of Action*, Harvard University Press (永井道雄・作田啓一・橋本真訳, 1960, 『行為の総合理論をめざして』日本評論社).
- , 1953, “The Theory of Symbolism in relation to action.”, T. Parsons, R.F. Bales and E.A. Shils, *Working Papers in the Theory of Action*, The Free Press. pp.31-62.
- , 1953, The Marshall Lectures—The Integration of Economic and Sociological Theory, *Sociological Inquiry*, volume 61, pp.10-59. Winter 1991 所収.
- and R.E. Bales, et al., 1955, *Family, Socialization and Interaction Process*, The Free Press. (橋爪貞雄他訳, 1970, 1971, 『核家族と子供の社会化』上, 下 黎明書房; 橋爪貞雄他訳, 1981, 『家族』黎明書房 [1970, 1971 年版を改題合本])
- and N.J. Smelser, 1956. *Economy and Society*, Routledge & Kegan Paul Ltd. (富永健一訳 1958, 1959, 『経済と社会』I, II 岩波書店)
- , 1956, Boundary Relations Between Sociocultural and Personality Systems, in “*Toward a United Theory of Human Behavior*”, R. Grinker (ed.), Basic Books, Inc., pp.325-339.
- , 1960, *Structure and Process in Modern Societies*, The Free Press.
- and E.A. Shils, K.D. Naeyegele, J.R. Pitts, eds., 1961, *Theories of Society*, 2 vols, The Free Press. (抄訳: 倉田和四生訳, 1978, 『社会システム概論』晃洋書房; 丸山哲央訳, 1991, 『文化システム論』ミネルヴァ書房)
- , 1964, *Social Structure and Personality*, The Free Press. (武田良三監訳, 1973, 『社会構造とパーソナリティ』新泉社)
- , 1966, *Societies: Evolutionary and Comparative Perspectives*, Prentice Hall. (矢沢修次郎訳, 1971, 『社会類型—進化と比較』至誠堂)
- (ed.), 1968, *American Sociology: Perspectives, Problems, Methods*, Basic Books. (東北社会学会訳, 1969, 『現代のアメリカ社会学』誠信書房)



- , 1968, “Social Systems,” *International Encyclopedia of the Social Sciences*, vol.15. Macmillan and Free Press.
- , 1969, *Politics and Social Structure*, The Free Press.(新明正道監訳,1973, 1974, 『政治と社会構造』上,下 誠信書房)
- , 1970, Equality and Inequality in Modern Society, or Social Stratification Revisited. (*Social Systems and the Evolution of Action Theory* [1977] pp.321-380.所収)
- , 1971. *The System of Modern Societies*, Prentice-Hall.(井門富二夫訳,1977, 『近代社会の体系』至誠堂)
- and G.M. Platt,1973, *The American University*, Harvard University Press.
- , 1975, Social Structure and the Symbolic Media of Interchange, in *Approach to the Study of Social Structure*, ed. by Peter M. Blau, pp.94-120.
- , 1977, *Social Systems and the Evolution of Action Theory*, The Free Press.(田野崎昭夫監訳,1992, 『社会体系と行為理論の展開』誠信書房)
- , 1978, *Action Theory and Human Condition*, The Free Press.(抄訳:徳安彰・油井清光他訳, 2002, 『宗教の社会学—行為理論と人間の条件 第三部』勁草書房; 富永健一・高城和義他訳, 2002, 『人間の条件パラダイム—行為理論と人間の条件 第四部』勁草書房)
- , 1979, The Symbolic Environment of Modern Economies, *Social Research* 46(3), pp.436-453. [Originally written for a Japanese journal whose English title is *Contemporary Economics*.1977]] (パーソンズ/今田高俊訳,1977, 「近代経済のシンボリックな環境」季刊 現代経済 26, pp.100-113.日本経済新聞社)
- , 1979, Religious and Economic Symbolism in the Western World, *Sociological Inquiry*, volume49, pp.1-48.
- , 1979, On the Relation of the Theory of Action to Max Weber’s “Verstehende Soziologie”, in Wolfgang Schluchter hrsg., *Verhalten, Handeln und System*, pp.150-162. パーソンズ/倉田和四生編訳,1984, 『社会システムの構造と変化』創文社(関西学院大学社会学部大学院集中講義録 [1978] )
- パーソンズ/油井清光監訳,土屋淳二・杉本昌昭訳,2003, 『知識社会学と思想史』学文社 (The Sociology of Knowledge and History of Ideas.未公刊草稿 [1970-1975] )

## II. タルコット・パーソンズ以外の文献

<欧文>

- Alexander, Jeffrey C., 1983, *Theological Logic in Sociology, vol.4, The Modern Reconstruction of Classical Thought :Talcott Parsons*, University of California Press.
- , 1985, *Neofunctionalism*, Sage Publications.
- , 1998, *Neofunctionalism and after*, Blackwell Publishers.

- Alexander, Jeffrey, C. et al.edt.,1987, *The Micro-macro link*, University of California Press.(石井幸夫他訳,1998,『ミクロ - マクロ・リンクの社会理論』新泉社.)
- Baum, Rainer C., 1976,“On Societal Media Dynamics”, J.J.Loubser,R.C.Baum,A.Effrat, V.M.Lidz eds.,*Explorations in General Theory Social Science: Essays in Honor of Talcott Parsons*,vol.2, pp.579-608.
- Bernard, Claude,1865,Introduction a l’etude de la medicine experimentale.(三浦岱栄訳, 1938,『実験医学序説』岩波書店.)
- Cannon, Walter B.,1932,*The Wisdom of the Body*, Kegan Paul,Trench,Truber&Co.,Ltd. (館鄰,館澄江訳,1969,『からだの知恵』世界教養全集 33 平凡社)
- Cartwright,Bliss C.and R.S.Warner,1976, “The medium is not the message”,J.J.Loubser et al.*Expioration in General Theory in Social Science*,vol.2,pp.639-660.
- Cassirer, Ernst, 1907, *Das Erkenntnis Problem: in der Philosophie und Wissenschaft der neueren Zeit,Zweiter Band*, 3rd edition 1922,Verlag Bruno Cassirer.(須田朗・宮武昭・村岡晋一訳 2001,2003,『認識問題－近代の哲学と科学における－』2-1,2-2 みすず書房)
- ,1910,*Substanzbegriff und Functionsbegriff*, Verlag von Bruno Cassirer. (山本義隆訳,1979,『実体概念と関数概念』みすず書房)
- ,1921,*Zur Einstein’schen Relativitätsthorie; erkenntnis theoretische betrachtungen*, Bruno Cassirer Verlag.(山本義隆訳,1981,『アインシュタインの相対性理論』河出書房新社)
- ,1923,1925,1929,*Die Philosophie der symbolischen Formen*, Bd.III. I . Sprache, Bd. II .Das mythische Denken,Bd.III.Phänomenologie der Erkenntnis.(木田元訳,1989-1997,『シンボル形式の哲学』一,二,三,四 岩波書店)
- ,1944, *An Essay on Man, an introduction to a philosophy of human culture*, Yale University.(宮城音弥訳,1997,『人間－シンボルを繰るもの－』岩波書店)
- Chen, Hon-Fai,2004, “Self-reference,Mutual Identification and Affect”, *Journal of Classical Sociology*, vol.4 (3) , pp.259-288.
- Chernilo, Daniel, 2002, “The theorization of social co-ordinations in differentiated societies: the theory of generalized symbolic media in Parsons, Luhmann and Habermas”, *The British Journal of Sociology*,vol.53(3),pp431-449.
- Colomy. Paul, ed., 1990, *Neofunctionalist Sociology*, Edward Elgar Publishing Limited.
- ダンカン、H.D./ 中野秀一郎,柏岡富英訳,1983,『シンボルと社会』木鐸社.
- Darwin, Charles,1859, *On the origin of species: by means of natural selection or the preservation of favoured races in the struggle for life*.(ダーウィン/八杉龍一訳,1990,『種の起源』上,下 岩波書店)
- Durkheim, Émile, 1893, *De la division du travail social*, Press Universitaires de France.

- (井伊玄太郎訳,1989,『社会分業論』上,下 講談社; 田原音和訳,1971,『社会分業論』青木書店)
- , 1895, *Le Régles de la méthode sociologique*, Press Universitaires de France.  
(佐々木交賢訳,1979,『社会学的方法の基準』学文社)
- , 1912, *Les formes élémentaires de la vie religieuse: le système totémique en Australia*, Press Universitaires de France.(古野清人訳,1941,1942,『宗教生活の原初形態』上,下 岩波書店)
- Emerson, Alfred E., 1950, *Ecology and Evolution*, W.B.Saunders Company.(伊藤嘉昭訳,1955,『生態と進化』みすず書房)
- , 1956, “Homeostasis and Comparison of Systems”, Grinker,Roy R.ed.,
- Evans, Mary Alice, and Evans, Howard Ensign,1970, *William Morton Wheeler,biologist.*, Harvard University Press.
- Fish, Jonathan S.,2004, “The Neglected Element of Human Emotion in Talcott parsons’ The Structure of Social Action”, *Journal of Classical Sociology*, 4 (1), pp.115-133.
- Fox, Renee C.,V.M.Lidz, H.J. Bershady, ed.,2005, *After Parsons—a theory of social action for the twenty-first century*, Russell Sage Foundation.
- Freund, Julien, 1974, *Pareto,la théorie de l'équilibre*, Editions Seghers.(小口信吉,板倉達文訳,1991,『パレート - 均衡理論』文化書房博文社).
- Gerhardt, Uta, 2002, *Talcott Parsons: An Intellectual Biography*, Cambridge University Press.
- Gould, Mark, 1976, “System Analysis,Macrosociology,and the Generalized Media of Social Action”, J.J. Loubser et al., *Explorations in General Theory in Social Science*, vol.2, pp.470-506.
- Gouldner, Alvin W., 1970, *The Coming Crisis of Western Sociology*, Basic Books.(矢沢修次郎・矢沢澄子訳,1975,『社会学の再生を求めて』(2), [三分冊] 新曜社.
- Habermas, Jürgen,1981,*Theorie des kommunikativen Handelns*, Suhrkamp Verlag.(河上倫逸他訳,1985-1987,『コミュニケーション的行為の理論』上,中,下 未来社)
- Hamilton, Peter,1983, *Talcott Parsons*, E.Horwood.
- Henderson, Lawrence J.,1913,*The Fitness of the Environment - An Inquiry into the Biological Significance of the Properties of Matter*,Macmillan.(梶原三郎訳,1953,『生命と物質—環境の適合性—』創元社)
- ,1935,*Pareto's General Sociology:A Physiologist's Interpretation*, Harvard Univ. Press.(組織行動研究会訳,1975,『組織行動論の基礎—パレートの一般社会学—』東洋書店.
- Hobbes, Thomas, 1651, *Leviathan*.(水田洋訳,1992,『リヴァイアサン (一)』[改訳] [全4冊] 岩波書店.
- , 1651, *Leviathan*.(水田洋訳,1982,『リヴァイアサン (三)』[全4冊] 岩波書店)

- Hume, David, 1739-1740, *A treatise of human nature*; reprinted from the original edition in three volumes and edited by L.A.Selby-Bigge,1896. Clarendon Press.
- Keynes, J.M., 1936, *The General Theory of Employment, Interest and Money*, Macmillan. (塩野谷九十九訳,1941,『雇用・利子および貨幣の一般理論』東洋経済新報社)
- Kunts, Paul G., 1984,*Alfred North Whitehead*, G.K.Hall & Company. (一ノ瀬正訳,1991.『ホワイトヘッド』紀伊國屋書店.
- Künzler ,Jan,1983,*Medien und Gesellschaft: die Medienkonzepte von Talcott Parsons, Jürgen Habermas und Niklas Luhmann*, Stuttgart:F.Enke.
- Lids, Victor M.,2005,“ ‘Social evolution’ in the light of the human-condition paradigm.”, Fox, Renee C. et al.ed.,*After Parsons*,Russell Sage Foundation, pp.308-333.
- Luhmann, Niklas, 2002, *Einführung in die System Theorie*, Dirk Baecker,ed.,Carl-Auer Systeme Verlag.(ディルク・ベッカー編/土方透監訳,2007,『システム理論入門ーニクラス・ルーマン講義録 [1]』新泉社)
- Mayr, Ernst,1988,*Toward a New Philosophy of Biology - Observation of an Evolutionist*,. Harvard University Press.(八杉貞雄・新妻昭夫訳,1994,『進化論と生物哲学ー進化学者の思索』東京化学同人.
- Mcluhan, Marshall, 1964, *Understanding Media - The Extensions of Man*, McGraw-Hill. (マクルーハン/ 栗原裕,河本仲聖訳,1987,『メディア論: 人間の拡張の諸相』みすず書房)
- Mead, George Herbert,1934, *Mind, Self and Society: from the standpoint of a social behaviorist*, Morris, Charles W., The University of Chicago Press.(稲葉三千男他訳,1973,『精神・自我・社会』青木書店)
- Merton, Robert K., 1949, *Social Theory and Social Structure - Toward the Condition of Theory and Research*, The Free Press.(森東吾他訳,1961,『社会理論と社会構造』みすず書房)
- Mills,C.Wright,1959,*The Sociology Imagination*, Oxford University Press.(鈴木広訳, 1965/2005 [新装版] )『社会学的想像力』紀伊國屋書店.
- Pareto, Virfredo, 1900, Un' applicazione di teorie sociologiche, in “*Rivista Italiana di Sociologica*.” (川崎嘉元訳,1975,『エリートの周流ー社会学の理論と応用ー』垣内出版. ———, 1916, *Trattato di sociologia generale*,2vols;2ed.3vols.1923.(抄訳:井伊玄訳,1939,『社会学大綱』白揚社;北川隆吉・廣田明・板倉達文訳,1987,『社会学大綱』青木書店) ———,1920,*Compendio di sociologia generale*; per cura di Giulio Farina, Firenze.(姫岡勤訳/板倉達文校訂,1996,『一般社会学提要』名古屋大学出版会)
- Robbins, Lionel,1932, *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*, Macmillan and Co.,Ltd.(中山伊知郎監修,辻兵衛訳,1957,『経済学の本質と意義』東洋経済新報社)
- Robertson, Roland,& Turner, Bryan S.,eds.1991,*Talcott Parsons: Theorist of Modernity*,

- Sage Publications. (中久郎・清野正義・進藤雄三訳,1995,『近代性の理論:パーソンズの射程』 恒星社厚生閣)
- Rocher, Guy, 1972, *Talcott Parsons et la sociologie americaine*, Presses universitaires de France. [S.Mennell and B.Mennell,trans.,1974, *Talcott Parsons and American Sociology*, Nelson.(倉橋重史・藤山昭英訳,1986,『タルコット・パーソンズとアメリカ社会学』 晃洋書房)
- Schulz-Schaeffer, Ingo, 2005, “From Conditional Commitments to Generalized Media: On Means of Coordination between Self-governed Entities”, Klaus Fischer/ Michael Florian (Hrsg.), *Socionics: Its Contributions to the Scalability of Complex Social Systems*, Berlin u.a.: Springer, S.218-241.
- Sen, Amartya, 1982, *Choice, Welfare and Measurement*, Basil Blackwell.(抄訳:大庭健・川本隆史訳,1989,『合理的な愚か者—経済学=倫理学探求』 勁草書房.
- , 1985, *Commodities and Capabilities*, North-Holland.(鈴木興太郎訳,1988,『福祉の経済学—財と潜在能力』 岩波書店)
- Smith,Adam,1759, *The Theory of Moral Sentiment*,Printed for A.Millar in the Strand, Printed for A.Millar. (水田洋訳,2003,『道徳感情論』上,下 岩波書店)
- ,1776, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by Edwin Cannan, Methuen & Co Ltd. (水田洋監訳,杉山忠平訳,2000,2001,『国富論』一,二,三,四 岩波書店; 山岡洋一訳,2007,『国富論—国の豊かさの本質と原因についての研究—』上,下 日本経済新聞社)
- Staubmann, Helmut, 2005, “Culture as a subsystem of action: autonomous and heteronomous functions,” Fox, Renee C. et al. ed., *After Parsons*, Russell Sage Foundation, pp.169-178.
- Turner, Bryan S., 1999, *Talcott Parsons Reader*, Blackwell.
- Wheeler, William Morton,1928, “The Ant Colony as an Organism,” *Foibles of Insects and Men*, Alfred A.Knopf, pp.129-143.
- Whitehead, Alfred North, 1925, *Science and Modern World*, Lowell Lectures.(上田泰治・村上至孝訳,1981,『科学と近代社会』 松籟社)
- , 1933, *Adventures of Ideas*, (種山恭子訳「観念の冒険」山元一郎編集『ラッセル,ウイトゲンシュタイン,ホワイトヘッド』 中央公論社 所収)
- Wiener, Norbert, 1948, *Cybernetics, or control and communication in the animal and the Machine*, The M.I.T. Press.(池原止戈夫他訳,1962,『サイバネティックス—動物と機械における制御と通信—』 第2版 岩波書店)
- , 1956, *I am a mathematician*, Doubleday & Company, Inc.(鎮目恭夫, 1956/1983 [新装]『サイバネティックスはいかにして生まれたか』 みすず書房)
- Worster, Donald, 1977, *Nature's economy: the roots of ecology*, Sierra Club Books.(中山

茂,成定薫,吉田忠訳,1989,『ネイチャーズ・エコノミー: エコロジー思想史』リプロポーター)

Yui, Kiyomitsu, 2004, "Health as a Symbolic Media interchanging between Body and Social System", CDAMS(「市場化社会の法動態学」研究センター)ディスカッションペーパー, 04/24E: Kobe University Repository: Kernel, pp.1-8.

<邦文>

青井和夫編,1974,『社会学講座 1 理論社会学』東京大学出版会.

青井和夫監修,宮島喬編集,1986,『社会学の歴史的展開』サイエンス社.

赤坂真人,1993,「社会システム論の系譜 (I) -L.J.ヘンダーソン-」関西学院大学社会学部紀要 第 68 号,pp.107-120.

———,1994 a,「社会システム論の系譜 (II) -社会学者としての L.J.ヘンダーソン-」関西学院大学社会学部紀要 第 69 号,pp.173-190.

———,1994 b,「社会システム論の系譜 (III) -ヘンダーソンとパーソンズ;科学方法論をめぐって-」関西学院大学社会学部紀要 第 71 号,pp.119-134.

———,1995,「社会システム論の系譜 (IV) -ヘンダーソンとパーソンズ;パレートの方法論をめぐって-」関西学院大学社会学部紀要 第 72 号,pp.179-192.

———,1996,「パレート行為理論再考-非論理的行為の概念を手がかりとして-」関西学院大学社会学部紀要 第 74 号,pp.135-149.

———,2001,「パレート行為理論再考 (II) -残基と派生-」吉備国際大学社会学研究紀要 第 11 号,pp.127-136.

———,2009,『社会システム理論生成史』関西学院大学出版会.

赤城国臣,1976,「自由主義とパレートの社会」『経済科学』X XIV - I 名古屋大学経済学部, pp.26-37.

秋元律郎,1980,『権力の構造-現代を支配するもの』有斐閣.

麻生誠・原田彰・宮島喬著,1978,『デュルケム 道徳教育論入門』有斐閣.

新睦人・中野秀一郎,1982,『社会システムの考え方』有斐閣.

新睦人,1995,『現代社会の理論構造』恒星社厚生閣.

アレグザンダー/ 鈴木健之編訳,1996,『ネオ機能主義と市民社会』恒星社厚生閣.

井上俊他編集,1997,『現代社会学の理論と方法』岩波書店.

今田高俊,1986,『自己組織性-社会理論の復活』創文社.

ウェーバー/ 尾高邦雄訳,1936,『職業としての学問』岩波書店.

ヴェーバー/ 清水幾太郎訳,1972,『社会学の根本概念』岩波書店.

ヴェーバー/ 大塚久雄訳,1989,『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』[改訳] 岩波書店.

宇野重規,2007,『トクヴィル 平等と不平等の理論家』講談社.

- 江川直子,1985,「社会的メディアの性質—パーソンズバウムの説を中心に—」中央大学大学院『研究年報』第14号, pp.155-166.
- ,1987,「象徴的メディアのマクロ社会学的分析—貨幣メディア,権力メディアについて—」中央大学大学院『研究年報』第16号, pp.143-154.
- ,1988a,「権力メディアについての検討—その特徴と問題点—」中央大学大学院『論究』第20号, pp.71-84.
- ,1988b,「影響力メディアについての検討—その概念とマクロ的分析—」中央大学大学院『研究年報』第17号, pp.53-64.
- ,1989a,「価値 - 委託メディアについての検討—その性質と動態分析—」中央大学大学院『研究年報』第18号, pp.63-72.
- ,1989b,「象徴的メディアと人間的状態—パーソンズの観点から—」年報社会学論集第2号, 関東社会学会. pp.15-24.
- ,1990,「人間的状態のメディアに関する—考察」中央大学大学院『研究年報』第19号, pp.129-138.
- ,1991,「ルーマンとパーソンズのメディア論について」中央大学大学院『研究年報』第20号, pp.151-160.
- ,1992,「パーソンズのメディア論と宗教」『中央大学文学部紀要』社会学科 第2号, pp.77-97.
- ,2003,「シンボリック・メディア理論と Well-Being (善き生)」松本和良他編『システムとメディアの社会学』恒星社厚生閣,第6章.
- 江川直子,2004a,「パーソンズとパレートにおけるシンボル論」松本和良他編『シンボルとコミュニケーションの社会学』恒星社厚生閣,第4章.
- ,2004b,「パーソンズの社会の概念についての一考察」『新明社会学研究』第9号 新明社会学研究会, pp.129-140.
- ,2005,「新明正道著『社会学的機能主義』にみる機能」『新明社会学研究』第10号 新明社会学研究会, pp.76-81.
- ,2007,「パーソンズの“生命システム”に関する—考察」『人間関係学研究 8』大妻女子大学 人間関係学部紀要, pp.123-133.
- ,2008,「ヘンダーソンによるパレート社会学の解釈に関する—考察」『人間関係学研究 9』大妻女子大学 人間関係学部紀要, pp.23-34.
- ,2009,「ウィーナーの“サイバネティックス”に関する—考察」『人間関係学研究 10』大妻女子大学 人間関係学部紀要, pp.171-180.
- 大野道邦・油井清光・竹中克久編,2005,『身体社会学—フロンティアと応用』世界思想社.
- 大橋照枝,2005,『「満足社会」をデザインする第3のモノサシ』ダイヤモンド社.
- 大黒正伸,2003,「パーソンズ理論における貨幣と言語—シンボリック・メディア理論の再検討—」松本和良他編『システムとメディアの社会学』恒星社厚生閣, 第2章.

- ,2009,「パーソンズ社会理論の方法的構想力ー一般理論から“媒介”の理論へー」(博士論文,社会学) 創価大学, 乙第 19 号.
- 小川英司,1997,『G.H.ミードの社会学』いなほ書房.
- カッシーラー/ 森淑仁編訳,1996,『カッシーラー ゲーテ論集』知泉書館.
- カント/ 篠田英雄訳,1961,1962,『純粹理性批判』上,中,下 岩波書店.
- 北川隆吉・宮島喬編,1996,『20 世紀社会学理論の検証』有信堂.
- 近代経済学研究会 佐藤武男編,1972,『近代経済学』富士書店.
- 近代経済学研究会編,1974,『世界十五大経済学』富士書店.
- 熊谷一乗,2005,「パーソンズ“人間の条件パラダイム”とフロムの性格理論ー生命系教育理論に向けてー」教育学部論集 第 56 号,創価大学教育学部. pp.1-20.
- 厚東洋輔,1991,『社会認識と想像力』ハーベスト社.
- 小関藤一郎,1978,『デュルケームと近代社会』法政大学出版会.
- ,1993,「デュルケーム研究において見過ごされた領域ー道徳研究についてー」『関西学院大学社会学部紀要』第 67 号, pp.13-24.
- 小室直樹,1969,「機能分析の理論と方法」『社会学評論』77 第 20 巻第 1 号, pp.6-22.
- ,1974,「構造-機能分析の論理と方法」青井和夫編『理論社会学』東京大学出版会, 第 2 章.
- ,1974,「総合化の理論的方法論的基礎研究と予備的実証的研究」『東京都社会指標の研究開発』東京都総務局統計部, pp.127-349.
- 小林月子,1983,「T.パーソンズにおける宗教的シンボリズム」『岐阜大学教育学部研究報告』第 31 巻 pp.71-85.
- 佐々木交賢,1978,『デュルケーム社会学研究』恒星社厚生閣.
- 佐藤成基,1990,「秩序問題と再生産論」『社会学評論』163 (41 巻 3 号) pp.45-58.
- 佐藤茂行,1990,「パレートのデュルケーム批判」『経済学研究』第 39 巻 第 4 号,北海道大学経済学部,pp.11-22.
- ,1993,『イデオロギーと神話ーパレートの社会科学論ー』木鐸社.
- 佐藤勉,1971,『社会学的機能主義の研究』恒星社厚生閣.
- 佐藤勉編,1997,『コミュニケーションと社会システム』恒星社厚生閣.
- 佐藤勉・細谷昂・村中知子編,1997,『社会学思想』東京大学出版会.
- 塩野谷祐一,1984,『価値理念の構造』東洋経済新報社.
- 新開陽一・新飯田宏・根岸隆,1972,『近代経済学』[新版] 有斐閣.
- 新明正道,1967,『社会学的機能主義』誠信書房.
- ,1974,『社会学における行為理論』恒星社厚生閣.
- ,1982,『タルコット・パーソンズ』恒星社厚生閣.
- 新明正道編著,2009,『社会学辞典』<復刻・増補版>, 復刻版刊行会編, 時潮社.
- 進藤雄三,2006,『近代性論再考ーパーソンズ理論の射程』世界思想社.



- 杉本栄一,1953,『近代経済学史』岩波書店.
- 菅野(すげの)盾樹,1999,『人間学とは何か』産業図書.
- 鈴木健之,1997,『社会学者のアメリカ機能主義からネオ機能主義へ』恒星社厚生閣.
- 鈴木宗徳,伊藤美登里編,2011,『リスク化する日本社会:ウルリッヒ・ベックとの対話』岩波書店.
- 鈴木興太郎・後藤玲子,2001,『アマルティア・セナー経済学と倫理学』実教出版.
- 盛山和夫,1995,『制度論の構図』創文社.
- 高桑純夫,1956,『人間の自由について』岩波書店.
- 高島善哉,1968,『アダム・スミス』岩波書店.
- 高城和義,1986,『パーソンズの理論体系』日本評論社.
- ,1988,『現代アメリカ社会とパーソンズ』日本評論社.
- ,1992,『パーソンズとアメリカ知識社会』岩波書店.
- 高田熱美,2004,「アダム・スミサー共感の成立」『福岡大学人文論叢』35(4), pp.1-23.
- 谷口文章,1979,「アダム・スミスの共感について—『道徳感情論』をめぐって」『待兼山論叢』第13号 哲学編,大坂大学文学部, pp.5-21.
- 田野崎昭夫編,1975,『パーソンズの社会理論』誠信書房.
- 田野崎昭夫,1981,「晩期パーソンズの理論的展開」社会学研究 40. 東北社会学研究会, pp.93-119.
- ,1984,「後期パーソンズの理論について」『社会学評論』137, 第35巻 第1号, pp.29-39.
- 田村周一,2005,「メディアとしての健康—パーソンズの医療社会学」大野道邦他編『身体社会学』世界思想社,第11章.
- 徳永恂編,1979,『マックス・ウェーバー:著作と思想』有斐閣.
- 徳川直人,2006,『G.H.ミードの社会理論』東北大学出版会.
- 富永健一,1986,『社会学原理』岩波書店.
- ,1990,『日本の近代化と社会変動—テュービンゲン講義』講談社.
- ,1995,『行為と社会システムの理論』東京大学出版会.
- 富永健一・徳安彰編,2004,『パーソンズ・ルネッサンスへの招待』勁草書房.
- 友枝敏雄,1998,『モダンの終焉と秩序形成』有斐閣.
- 戸田武雄,1958,「ブスケ教授によるパレート経済学概説」『産業と科学』第3号 静岡大学法経学会, pp.1-26.
- ,1966,「パレート経済学の方法論」『研究論集』第8号 駒沢大学商経学会,pp.1-15.
- E.A.ティリアキアン/高沢淳夫訳,1978,『デュルケムの社会学』アカデミア出版.
- デュルケム/小関藤一郎編訳,1983,『デュルケム宗教社会学論集』行路社.
- 土場学,1993,「愛というメディア—社会変動のゼマンティック」『社会学評論』175,第44巻 第3号,pp.314-329.

- 内藤莞爾,1985,『フランス社会学断章』恒星社厚生閣.
- 直井優,1984,「構造 - 機能主義による説明とテスト可能性」『社会学評論』137,第 35 卷第 1 号,pp.19-28.
- 中久郎,1979,『デュルケムの社会理論』創文社.
- 中久郎編,1986,『機能主義の社会理論—パーソンズ理論とその展開—』世界思想社.
- 中久郎,1999,『社会学原論』世界思想社.
- 中野秀一郎,1999,『タルコット・パーソンズ—最後の近代主義者』東信堂
- 西垣通,1999,『こころの情報学』筑摩書房.
- 根岸隆,2001,『経済学史入門』放送大学教育振興会.
- 野沢敏治,1972,「アダム・スミス『道徳感情の理論』における“共感”の構造」『経済科学』19 (3), 名古屋大学経済学部, pp.115-131.
- 橋爪大三郎・志田基与師・恒松直幸,1984,「危機に立つ構造 - 機能理論—わが国における展開とその問題点」『社会学評論』137, 第 35 卷 第 1 号, pp.2-18.
- 馬場靖雄,2001,『ルーマンの社会理論』勁草書房.
- 日向寺純雄,1977,「パレート社会学とイタリア財政社会学」青山経済論集 第 34 卷 第 3 号, 青山学院大学経済学会,pp.1-23.
- 船津衛,1997,『G.H.ミードの世界』恒星社厚生閣.
- ,1999,『アメリカ社会学の展開』恒星社厚生閣.
- 星野勉他,1988,「“共感”の倫理—アダム・スミスの『道徳感情論』をめぐって」明治学院大学一般教育部附属研究所『紀要』第 12 号, pp.58-70.
- マキアヴェッリ/河島英昭,1998,『君主論』岩波書店.
- 正村俊之,1995,「近代の自己認識としての社会学」『近代学史研究』第 17 号,いなほ書房.
- 松岡雅裕,1998,『パーソンズの社会進化論』恒星社厚生閣.
- 松嶋敦茂,1985,『経済から社会へ—パレートの生涯と思想—』みすず書房.
- 松本和良,1981,『組織体系の理論』学文社.
- ,1989,『パーソンズの行為システム』恒星社厚生閣.
- ,1993,『組織体系の社会学』学文社.
- ,1997,『パーソンズの社会学理論』恒星社厚生閣.
- 松本和良・江川直子・大黒正伸編,2003,『システムとメディアの社会学』恒星社厚生閣.
- 松本和良・田村穰生・江川直子・大黒正伸編,2004,『シンボルとコミュニケーションの社会学』恒星社厚生閣.
- 宮島喬,1987,『デュルケム社会理論と現代』東京大学出版会.
- 溝部明男,2001,「パーソンズ研究における二つのスタイル—J.C.アレグザンダーと C.カミック」『金沢大学文学部論集 行動科学・哲学編』(21), pp.45-96.
- 森元孝,1987,「システムと生活世界—ルーマンとハーバーマス」藤原保信他編『ハーバーマスと現代』新評論,第 5 章.

- 八杉龍一他編纂,1996,『生物学辞典』第4版,岩波書店.
- 油井清光,1995,『主意主義的行為理論』恒星社厚生閣.
- ,2002,『パーソンズと社会学理論の現在—T.P と呼ばれた知の領域について—』世界思想社.
- ,2005,「パーソンズから“身体社会学”へ」大野道邦他編『身体社会学』世界思想社,序章.
- 吉川英治,2001,「アマルテア・センにおける環境と価値」『経済科学通信』No.97,pp.33-36.
- 吉原正彦,1996 a,「経営思想の源流を求めて—L.J.ヘンダーソンのパレート社会学との出会い—」『青森公立大学経営経済学研究』第1巻 第1号, pp.36-51.
- ,1996b,「科学のもつ一般性の追及—ヘンダーソンのパレート・セミナー開設と『一般社会学概論』の英語訳版—」『青森公立大学経営経済学研究』第1巻 第1号, pp.52-66.
- 吉田民人,1962,「A.G.I.L 修正理論—パーソンズ教授への提言—(その1)」関西大学文学論集,vol.11-No.6.
- ,1990,『情報と自己組織性の理論』東京大学出版会.
- 渡辺信夫,1968,『カルヴァン』清水書院.